

Oracle(R) Enterprise Performance Management
Workspace, Fusion Edition

リリース 11.1.1.3

管理者ガイド

ORACLE
ENTERPRISE PERFORMANCE
MANAGEMENT SYSTEM

EPM Workspace 管理者ガイド, 11.1.1.3

Copyright © 1989, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アSEMBル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。U.S. GOVERNMENT RIGHTS: Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用した場合に起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章 Reporting and Analysis のアーキテクチャと概要	11
Enterprise Performance Management(エンタープライズ・パフォーマンス管理)	11
EPM Workspace について	11
Reporting and Analysis アーキテクチャ	12
クライアント・レイヤー	13
アプリケーション・レイヤー	15
データベース・レイヤー	21
第 2 章 管理ツールとタスク	23
Oracle ホームおよび Install Home について	23
EPM Workspace を使用した Microsoft レポートの統合の設定	24
管理ツール	25
EPM Workspace 構成情報	25
管理モジュール	27
Interactive Reporting サービス・マネージャ	27
インパクト・マネージャ・モジュール	28
ジョブ・ユーティリティのカレンダー・マネージャ	28
サービス・コンフィグレータ	28
サービスの開始と停止	29
サービスを開始する前に	29
Reporting and Analysis サービスの開始	30
サービスのサブセットの開始	31
Interactive Reporting サービス・マネージャの開始	32
サービスの停止	32
サービス始動従属関係	33
サービス・ポートの割当ての変更	33
EPM Workspace サブレットの開始	33
Interactive Reporting サービス・マネージャの構成	34
Interactive Reporting サービス・マネージャ・イベントのしきい値	34
Interactive Reporting サービスの構成	36
EPM Workspace 本番環境の保護	37
EPM System ライフサイクル管理	37

「ヘルプ」メニューのカスタマイズ	38
共通管理タスクのクイック・ガイド	40
第3章 管理モジュール	43
概要	43
全般プロパティの設定	44
全般プロパティ	44
ユーザー・インタフェースのプロパティ	45
ユーザーホスト認証の認証	45
ユーザー管理	46
Reporting and Analysis デフォルト・プリファレンスの割当て	46
注積の探索と管理	47
注積の検索	48
注積と関連付けられたレポートの表示	50
注積への返答	50
注積の削除	51
注積に対するソースの変更	51
コンテキスト要素の変更	51
権限の変更	52
物理リソースの管理	53
物理リソースの表示	53
物理リソースのアクセス権	53
物理リソースの追加	53
物理リソースの変更	54
物理リソースの削除	54
プリンタのプロパティ	54
出力ディレクトリ・プロパティ	55
MIME タイプの管理	55
MIME タイプの定義	56
MIME タイプの変更	56
MIME タイプの非アクティブ化または再アクティブ化	56
MIME タイプの削除	57
通知の管理	57
サブスクリプションと通知	57
通知プロパティの変更	59
スマート・カットの管理	60
行レベル・セキュリティの管理	61
システム使用追跡	62
使用追跡の管理	62

イベントおよびドキュメントの追跡	63
サンプルの使用追跡レポート	64
異なるデータベース・スキーマを使用した使用追跡	64
すべてのオブジェクトの所有権の変更	65
BI Presentation Services	66
第 4 章 検索サービスと外部アプリケーションの統合	67
検索サービスについて	67
Oracle Secure Enterprise Search における Hyperion System 9 コネクタおよび ID プラグインの構成	67
プラグイン jar ファイルの配置	68
ID プラグインの構成	68
コネクタ・プラグインの構成	68
検索	70
System 9 検索サービス・データをその結果で使用するための Google OneBox の構成	70
操作概要	70
System 9 OneBox モジュールを呼び出すための Google 検索アプライアンスの構成	70
System 9 OneBox モジュールの構成	72
第 5 章 インパクト・マネージャ・サービスの使用方法	75
はじめに	75
インパクト・マネージャ・サービスについて	76
インパクト・マネージャ評価サービス	76
インパクト・マネージャのメタデータについて	76
インパクト・マネージャ更新サービス	77
データ・モデルの更新変換	77
データ・モデルとクエリーのリンク	77
データ・モデルの更新ワークフロー	78
JavaScript の更新ワークフロー	78
カスタム更新ワークフロー	79
インパクト・マネージャ・モジュールのサイズおよび時間に関するガイドライン	79
Update Services の実行	80
スクリプト・ロギング・レベル	80
インパクト・マネージャ・サービスへのアクセス	81
メタデータの同期機能	81
「今すぐ実行」オプションの使用方法	82
「スケジュール」オプションの使用方法	82
データ・モデルの更新機能	83

データ・モデルの指定	84
更新対象のデータ・モデルの表示	85
スケジュール・オプションの使用方法	86
確認のダイアログ・ボックスの検証	87
JavaScript の更新機能	87
JavaScript の更新の使用方法	88
パラメータの選択	89
スケジュール・オプションの使用方法	89
更新された JavaScript の確認	91
カスタム更新機能	91
SortDataModelTopics スクリプトの使用方法	91
カスタム更新の実行	92
パラメータの選択	93
スケジュール・オプションの使用方法	93
カスタム更新の確認	95
高度なスクリプト	95
EPM Workspace のカスタム・スクリプト環境	95
スクリプト・パラメータ	96
スクリプト環境	97
Document Object Model のツリー構造	98
プロパティへのアクセス	103
ファイル・システムへのアクセス	104
スクリプト内の一般的な Java コード	104
バッチ入力ファイルの使用方法	104
一覧	105
対話型レポートへの接続	109
手順 1 - Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービスの構成	109
手順 2 - Interactive Reporting データベース接続の作成	110
手順 3 - EPM Workspace への Interactive Reporting データベース接続のインポート	110
手順 4 - Interactive Reporting データベース接続と対話型レポートの関連付け	111
「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの使用方法	111
UTC オフセット・オプション	113
タスクの管理	113
元に戻す機能の使用方法	114
タスクのアクションの表示の使用方法	114
「変更の影響の表示」対話型レポートの使用方法	117
パラメータ・ファイルの生成	118

新規データ・モデルの作成	119
テーブルまたは列の名前変更	119
正規化されたデータ・モデルと非正規化されたデータ・モデルの使用方 法	122
列の削除	122
列のデータ型の変更	124
互換性のある置換データ・モデルとドキュメント文字セット	125
Interactive Reporting ドキュメントのユーザー名とパスワードの変更	126
サービス構成パラメータ	126
ポーリング間隔	127
要求ログの最大時間	127
変更の影響レポートの使用方法	127
第 6 章 活動の自動化	129
カレンダーの管理	129
カレンダー・マネージャの表示	129
カレンダーの作成	130
カレンダーの削除	130
カレンダーの変更	130
カレンダー・マネージャのプロパティ	131
ジョブ・ログの表示	132
ジョブ・ログ・エントリの削除	133
タイム・イベントの管理	133
パブリック反復タイム・イベントの管理	133
外部でトリガーされるイベントの作成	134
外部でトリガーされるイベントのトリガー	134
パブリック・ジョブ・パラメータの管理	135
Interactive Reporting データベース接続の管理	135
ジョブと Interactive Reporting ドキュメントのパススルーの管理	135
ジョブ・キューの管理	136
スケジュール済のジョブ	136
バックグラウンド・ジョブ	137
フォアグラウンド・ジョブ	137
ジョブ・サービスの無効化	137
ジョブの限度	137
ジョブの取得	138
ジョブ専用のインテリジェンス・サービス	138
Interactive Reporting Service の可用性とジョブ	139
ジョブの並列実行	139

第 7 章 コンテンツの管理	141
ユーザー・インタフェースのカスタマイズ	141
デフォルト言語の選択の変更	141
ログオン・パネル・イメージの置換え	142
Java クライアント・インストーラへのアクセスの削除	142
ユーザー・ログオフ後の URL のリダイレクト	143
アイテムとフォルダの編成	143
共有 Workspace ページ・フォルダの保守	143
提供済コンテンツの管理	144
個人用ページの管理	144
作成した個人用ページの構成	144
ブロードキャスト・メッセージの概要	146
任意の個人用ページ・コンテンツのユーザーへの提供	147
ファイル・コンテンツ・ウィンドウとしての HTML ファイルの表示	148
ブックマーク用のグラフィックの構成	148
例外の構成	148
個人用ページの表示	149
個人用ページの発行	149
個人用ページのその他のプロパティの構成	149
第 8 章 RSC サービスの構成	151
RSC について	151
RSC の開始	151
RSC へのログオン	152
RSC の使用方法	152
サービスの管理	153
RSC サービスの ping	153
RSC サービス・プロパティの変更	153
共通の RSC プロパティ	154
リポジトリ・サービスの動的プロパティ	155
ジョブ・サービスのプロパティ	155
ジョブ・サービスのアプリケーション・プロパティ	157
ジョブ・サービスのアプリケーションの追加	158
ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ	160
ホストの管理	160
ホストの追加	160
ホストの変更	161
ホストの削除	161
Production Reporting データベース・サーバーの管理	162

データベース・サーバーの定義	162
ジョブの管理	164
エンタープライズ・レポーティング・アプリケーションのパフォーマンス の最適化	165
ジョブ・サービスの追加からジョブの実行へ	165
第 9 章 CMC を使用したサービスの構成	167
CMC について	167
CMC の開始	168
CMC の使用方法	169
CMC ビュー	170
サービス構成ビュー	170
Web アプリケーション構成ビュー	171
エージェント構成ビュー	172
CMC のプロパティの変更	172
サービス構成プロパティの変更	173
Web アプリケーション構成プロパティの変更	179
エージェント構成プロパティの変更	192
第 10 章 トラブルシューティング	193
概要	193
ロギング・アーキテクチャ	193
Log4j	194
ロギング・サービス	194
ログ管理ヘルパー	194
サーバーの同期	195
ログ・ファイルの基礎	195
ログ・ファイルの場所	195
Hyperion Interactive Reporting サービスおよび Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのローカル・ログ・ファイル	195
ログ・ファイルの命名規則	196
ログ・メッセージのファイル・フォーマット	197
構成ログ	198
トラブルシューティングのためのログ・プロパティの構成	198
構成ファイル	198
ロギング・レベルの構成	199
アペンダの構成	201
ログのローテーションの構成	202
ログ・ファイルの分析	204
ログ・ファイルの表示	204

標準のコンソール・ログ・ファイル	204
一般のコンテンツのインポートのためのログ	204
Interactive Reporting コンテンツをインポートするログ	205
ジョブ実行のためのログ	205
ログオンおよびログオフのエラーのログ	206
アクセス・コントロール用のログ	206
構成用のログ	207
カスタマ・サポートに必要な情報	207
第 11 章 Ghostscript カスタム・パラメータ	209
実装の概要	209
Ghostscript ドキュメント	209
デフォルトの動作	210
Postscript から PDF への変換	210
Postscript から JPEG への変換	211
カスタム・パラメータの指定	211
Postscript から PDF への変換のカスタム・パラメータ	212
Postscript から JPEG への変換のカスタム・パラメータ	212
必須パラメータ	213
一般的なガイドライン	213
カスタム・パラメータをオフにする	214
例	214
付録 A. EPM Workspace アイテムへのアクセス権の確認	217
概要	217
アイテムのアクセス権チェック	217
サービスのアクセス権チェック	218
アクセスの拒否	219
追加のアクセス権チェックの例	220
用語集	223
索引	251

1

Reporting and Analysisのアーキテクチャと概要

この章の内容

Enterprise Performance Management(エンタープライズ・パフォーマンス管理).....	11
EPM Workspace について	11
Reporting and Analysis アーキテクチャ	12

Enterprise Performance Management(エンタープライズ・パフォーマンス管理)

Oracle には次の製品から構成される包括的な Enterprise Performance Management (EPM)システムが用意されています。

- **Oracle Hyperion Reporting and Analysis** - クエリーや分析などの管理レポート機能を1つの環境に統合
- **Oracle の Hyperion アプリケーション** - 統合されたプランニング、集計、スコアカード・アプリケーション、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition および Oracle Business Intelligence Publisher。
- **Oracle Hyperion(R) Foundation Services** - インストールおよび構成を簡易化するために使用します。また、メタデータ管理機能があり、共通の Microsoft Office インタフェースをサポートします。

EPM Workspace について

Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition はモジュール式のビジネス・インテリジェンス・プラットフォームで、1つの統合環境で多種多様なデータ・ソースを対象とした管理レポート、クエリー、分析などの機能を実行できます。EPM Workspace は、スペースを必要としないクライアントでもあります。Reporting and Analysis Authoring Studios、財務アプリケーションおよび Oracle Business Intelligence 製品を使用して作成されたコンテンツを表示および操作するためのユーザー・インタフェースを備えています。

EPM Workspace では、次のコンテンツにアクセスできます。

- **Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition** - Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition、Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition、Profitability and Cost Management、Oracle BI Answers、Oracle BI Dashboards、Oracle BI Delivers、BI Publisher などのほとんどすべてのデータ・ソースから、

フォーマットされた財務レポートや運用レポートをオンデマンドまたはスケジュールに従って作成できます。

- Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting - 任意の ODBC データ・ソースに対して、アド・ホック・リレーショナル・クエリー、セルフサービス・レポートおよびダッシュボードを作成できます。

Interactive Reporting データ・モデルを置き換えるには、Oracle Hyperion(R) インパクト・マネージャ・サービスモジュールを使用します。

- Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting - 大量の企業全体のプロダクション・レポートを作成できます。
- Oracle Hyperion(R) Web Analysis - 対話式アド・ホック分析、プレゼンテーションおよび、多次元データのレポートを作成できます。
- Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition - Web ベースのソリューションで、組織は目標を設定したり、スコアカードを使用してビジネス・パフォーマンスの測定や監視を行ったりできます。
- Financial Management および Planning - アプリケーションタスクの統合およびプランニングに使用します。
- Profitability and Cost Management - 部門の収益性の計算に必要な原価と収益の配分を管理できます。
- Oracle BI Answers - 純粋な Web アーキテクチャにおける真のアド・ホック機能をエンド・ユーザーに提供します。
- Oracle BI Dashboards - 操作可能な情報や個人の役割や ID に基づいて動的にカスタマイズされた情報に直感的かつ対話的にアクセスできます。
- Oracle BI Delivers - ビジネス・アクティビティに関する監視機能および電子メール、ダッシュボード、モバイル・デバイスなどの複数のチャネルを使用してユーザーに通知できるアラート機能を提供します。
- BI Publisher - BI Publisher(旧 XML Publisher)は、複雑な分散環境に効率的でスケーラブルなレポート作成ソリューションを提供します

Reporting and Analysis と Oracle Essbase を含む EPM Workspace は、このビジネス・インテリジェンス・プラットフォームを Oracle の Hyperion 財務アプリケーション、Performance Scorecard、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition、Oracle BI EE および Oracle Business Intelligence Publisher 製品と統合する、包括的な EPM システムの一部です。

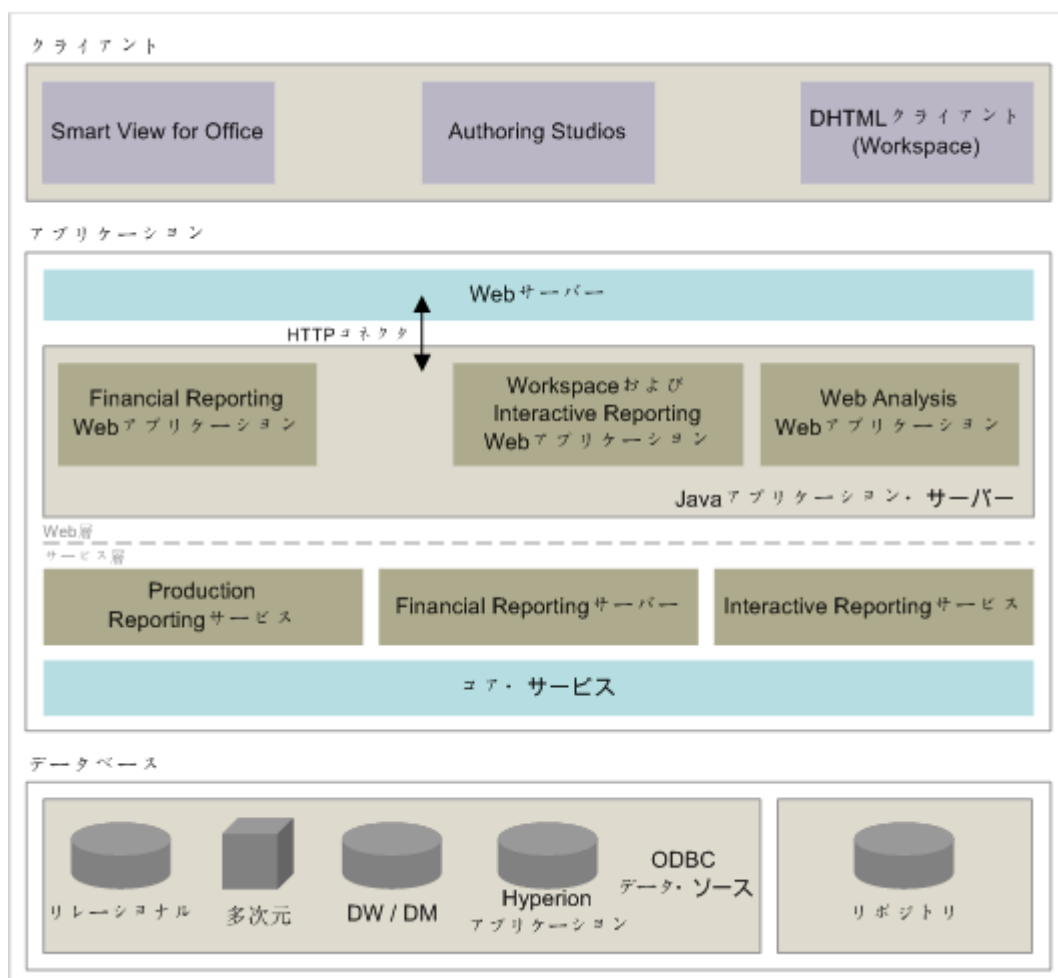
注： Studio は、機能豊富なオーサリング環境を持つ Java または Windows コンポーネントを指します。EPM Workspace は、製品のユーザー・シン・クライアント(UTC)または共通ユーザー・インタフェースを指します。

Reporting and Analysis アーキテクチャ

Reporting and Analysis 環境は次の 3 つのレイヤーに整理されます。

- 13 ページの「クライアント・レイヤー」
- 15 ページの「アプリケーション・レイヤー」

- 21 ページの「データベース・レイヤー」



クライアント・レイヤー

クライアント・レイヤーは、様々なコンテンツやサードパーティ製のクライアント(たとえば Microsoft Office など)を作成、モデリング、分析、表示、レポート、および配布するために使用するローカル・インタフェースです。

- **EPM Workspace - Authoring Studios** で作成されたコンテンツを表示し、相互に通信するためのユーザー・インタフェースを提供し、ユーザーがリレーショナル・データ・ソースおよび多次元データソースに対してクエリーを作成できる、Web ベースの DHTML ゼロフットプリント・クライアント。
 - **Essbase** - パフォーマンスがよい多次元のモデリング、分析およびレポート
 - **Financial Reporting** - 高度にフォーマットされた財務レポート
 - **Interactive Reporting** - アド・ホック・クエリー、分析、およびダッシュボードなどのレポート
 - **Production Reporting** - 大量の企業生産レポート
 - **Web Analysis** - 多次元データソースに対しての詳細な対話型アドホック分析、プレゼンテーション、およびレポート
- **Authoring Studios**

- **Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting Studio** - データ検索および意思決定のための直感性の高い簡単にナビゲート可能な環境。一貫した設計の実例および堅固なフォーマット・ツールで、ユーザーは、組織全体で大規模に発行する、フリーフォームでプレゼンテーション可能な上質なレポートを簡単に構築できます。
- **Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting Web Client** - Interactive Reporting ドキュメントを表示する読取り専用の Web プラグイン。
- **Oracle Hyperion Financial Reporting Studio, Fusion Edition** - 多次元データソースから高度にフォーマットされた財務レポートを作成するための Windows クライアント。簡単なドラッグ・アンド・ドロップ機能、HTML、PDF、およびハード・コピーの出力を構築および配布するための再利用可能なコンポーネントを備えています。
- **Oracle Hyperion(R) Web Analysis Studio** - 多次元コンテンツを作成、分析、表示およびレポートできるようにする Java アプレット。studio では、情報消費者のダッシュボードを含む、コンテンツを作成するデザイナーに設定された完全な Web Analysis 機能が提供されます。
- **Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting Studio** - 多種多様なデータソースからレポートを作成するための設計環境を提供する Windows クライアント。レポートは、1つのパスで処理され、多種多様なピクセルが完全な出力を作成します。プロセスは、スケジュールして独立して自動化できるか、または動的なユーザー入力を促すメッセージが表示されるフォームのテンプレートを使用するように設計できます。
- **Oracle Hyperion(R) Dashboard Development Services** - ダッシュボードの作成を次のように使用可能にします。
 - **Dashboard Studio** - 拡張およびカスタマイズが可能なテンプレートを使用して、対話型の分析ダッシュボードを作成する Windows クライアント。プログラミング論理をコーディングする必要はありません。
 - **Dashboard Architect** - プログラマが Dashboard Studio で使用されるコンポーネントのコーディング、テストおよびデバッグを迅速に行える Windows ベースの統合開発環境。
 - **Performance Scorecard** - 認識されているスコアカードの方法論を使用した、目標を設定してビジネス・パフォーマンスをモニタリングするための Web ベースのソリューション。ユーザーがオリジナルの戦略および責任の構造を形成してコミュニケーションできるようにするツールを提供します。
 - **主要パフォーマンス・インディケータ(KPI)** - 主要な目標の達成に向けて、タスクおよびその進行状況を示す達成度の評価指標を作成します
 - **パフォーマンス・インディケータ** - 責任チームと従業員のパフォーマンスを「良好」、「許容範囲内」、「悪い」の3種類に分類して示します
 - **戦略マップ** - 高レベルのミッションおよびビジョン・ステートメントを、低レベルの実践的な戦略要素に関連付けます
 - **責任マップ** - 即実施可能な目的の責任者を特定します

- **因果関係マップ** - 戦略要素の相互関係を示し、戦略やパフォーマンスの変化による影響を測定します
- **Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition** - ユーザーが、Essbase、Financial Management および Planning を含む、Oracle データソースをクエリーできる Oracle 専用の Microsoft アドインおよびツールバー。ユーザーは、この環境を使用して、データ入力用に Financial Management および Planning フォームと情報をやりとりし、Reporting and Analysis リポジトリおよびオフィス環境に埋め込まれたドキュメントを参照できます。ドキュメントはユーザーの要求によって更新されます。

アプリケーション・レイヤー

アプリケーション・レイヤー - 必要な情報を取得し、セキュリティ、通信、統合を管理する中間層で、次の2つの要素が含まれます。

- [15 ページの「アプリケーション・レイヤーの Web 層」](#)
- [15 ページの「アプリケーション・レイヤーのサービス層」](#)

ビジネス・インテリジェンスのプラットフォームはモジュールであるため、多数の方法で構成されている、コンポーネントの様々な組合せから構成される場合があります。最終的に、実装およびビジネスのニーズを提供する包括的かつ柔軟なアーキテクチャとなります。

アプリケーション・レイヤーの Web 層

アプリケーション・レイヤーは、J2EE アプリケーション・サーバーおよび Web サーバーに依存し、Web クライアントからコンテンツを送受信します。HTTP コネクタは、Web サーバーおよびアプリケーション・サーバーにリンクするために必要となります。

Web 層は、EPM Workspace、Interactive Reporting、Financial Reporting および Web Analysis Web アプリケーションをホストします。

サポートされている Web 層のハードウェアおよびソフトウェアの詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックスでシステム要件を確認してください。これは <http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html> にあります。また、リリースの互換性、前提条件、デフォルト・ポートおよび正常なインストールのプランに必要なその他の情報については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を確認してください。

アプリケーション・レイヤーのサービス層

アプリケーション・レイヤーのサービス層には、様々な Web アプリケーションとクライアントの機能をコントロールするサービスとサーバーが含まれています。

- [16 ページの「コア・サービス」](#)
- [18 ページの「Interactive Reporting サービス」](#)
- [18 ページの「Financial Reporting サーバー」](#)

- 19 ページの「SQR Production Reporting サービス」
- 19 ページの「EPM System 補助サービス」

ほとんどのサービスは、サービス・プロパティの構成に使用されるツールによって、2つの主なグループに分類されます。

- **ローカル・サービス** - 構成および管理コンソールを使用して構成されるローカルの Install Home のサービス。第9章「CMCを使用したサービスの構成」を参照してください。
- **リモート・サービス** - リモート・サービス・コンフィグレータ(RSC)を使用して構成されるローカルまたはリモート・ホスト上のサービス。RSC サービスと呼ばれます。

これらのサービスのほとんどは複製可能なため、サービスの複数のインスタンスがシステムに存在する場合があります。

コア・サービス

Core Services は、認可、セッション管理、ドキュメントの発行に必須のサービスです。

- **リポジトリ・サービス** - 集合的にリポジトリとして知られる、サポートされているリレーショナル・データベース・テーブルの Oracle システム・データを保管します。リポジトリ・サービスは、複製可能であり、複製された場合は、パブリッシャ・サービスと一緒に複製され、同一場所に配置される必要があります。
- **パブリッシャ・サービス** - その他の CMC サービスおよび一部の Web アプリケーションの要求のためにリポジトリの通信を処理します。また、リポジトリの要求をリポジトリ・サービスに転送し、応答を最初のサービスに戻します。パブリッシャ・サービスは、複製可能であり、複製された場合は、リポジトリ・サービスと一緒に複製され、同一場所に配置される必要があります。
- **グローバル・サービス・マネージャ(GSM)** - システム構成情報を追跡し、システムに登録されたサービスを監視します。システムには複数の GSM を含められます。すべての GSM がシステムに登録されたサービスに関する同じ総合情報を持つように、GSM を複製できます。
- **ローカル・サービス・マネージャ(LSM)** - GSM を含む、CMC または RSC サービスのすべてのインスタンスのために作成されます。システム・サーバーが開始した場合、GSM を使用してサービスおよび構成情報を登録します。GSM は、その他のすべての登録されたサービスへの参照を提供および保持します。
- **認証サービス** - ログオン時のユーザーの登録をチェックし、ユーザーが接続できるかどうかを決定します。また、ユーザーが表示して変更できるコンテンツおよびその他のシステム・アーチファクト(リソース)に影響を与えるグループ・メンバーシップを、役割と共に決定します。認証サービスは、複製可能ですが、その他のサービスと同一場所に配置される必要はありません。
- **認可サービス** - リソースおよびアクション・レベルでセキュリティを提供します。役割を管理し、操作、ユーザー、グループおよびその他の役割との関連を管理します。システムは、少なくとも1つの認可サービスを持っている必要があります。

- **セッション・マネージャ・サービス** - 同時システム・ユーザーの数をモニターして保持します。すべての現行セッションをモニターし、指定した期間を超えてアイドル状態であるセッションを終了します。セッション・マネージャは複製可能ですが、各インスタンスは、セッション一式を独立して管理します。
- **サービス・ブローカ** - クライアントの要求を送り、RSC サービスの負荷分散を管理することで、GSM および LSM をサポートします。システムは、複数のサービス・ブローカを持つことができます。
- **管理サービス** - トラブルシューティングおよび使用状況の分析に関するシステム・メッセージおよびイベントを収集して配布するコア・サービス。
 - **ロギング・サービス** - システム・メッセージをログ・ファイルに記録する集中型のサービス。システムは、ロギング・サービスを1つのみ持つことができます。
 - **使用追跡サービス** - システム全体で処理されたプロセスの数と種類を記録します。リポジトリでの汎用ファイルの実行、Production Reporting ジョブ、データベース・ログインおよびイベントの変更を追跡できます。管理者は、ログオン数、最も使用されたファイル、最も選択された MIME タイプ、システム出力で発生したことなどの使用統計を確認できます。システムは複数の使用追跡サービスを持つことができます。
- **機能サービス**は、各種の機能モジュールに固有のコア・サービス。
 - **ジョブ・サービス** - 権限を持つユーザーまたはイベント・サービスによってメッセージが表示できる、レポートを作成するスクリプトを実行します。レポートの出力は、最初のユーザーに戻され、リポジトリに発行されます。ジョブ・サービスは、すべての実行可能ファイルに対して作成および構成できます。
 - **イベント・サービス** - システム・リソースへの登録を管理します。ユーザー登録、ジョブ・パラメータ、イベントおよび例外を追跡し、スケジュールされているジョブを実行するようジョブ・サービスを促します。イベント・サービスは、電子メールおよびFTP サイトを介してコンテンツを配布し、登録ユーザーにリソース変更について通知するように構成されます。イベント・サービスを複製すると、システムで複数のイベント・サービスを持つことができます。
- **インパクト・マネージャ・サービス** - 旧 Interactive Reporting リポジトリ・リソースから新 Interactive Reporting コンテンツを取得、更新および発行できるようにするコア・サービス。これらのサービスは、Interactive Reporting サービスと併せて使用される必要があります。双方のサービスとも、複数のインスタンスが実行中に、自動負荷分散およびデフォルトの許容差を実行します。
 - **評価(ハーベスタ)サービス** - 発行済 Interactive Reporting リポジトリ・ドキュメントからメタデータを取得します。
 - **更新(トランスフォーマ)サービス** - 発行済および取得済の Interactive Reporting ドキュメントを更新するか、または新規のバージョンをリポジトリに発行します。

Interactive Reporting サービス

Interactive Reporting サービスは、データ・ソースとの通信、RSC サービスの開始および Interactive Reporting クライアント・コンテンツの配信によって Interactive Reporting の機能をサポートするコア・サービスです。

- **Hyperion Interactive Reporting サービス - Interactive Reporting ジョブ**を実行し、Interactive Reporting ファイルの対話型 HTML コンテンツを配信します。Interactive Reporting ドキュメントにかかわるアクションが要求されると、Hyperion Interactive Reporting サービスは、ドキュメントを取得して処理し、表示する HTML を配信することで要求を満たします。
- **Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービス - リレーショナル・データベースや多次元データベースへのアクセスを可能にし、プラグイン、Hyperion Interactive Reporting サービスおよび Interactive Reporting ジョブのデータベース・クエリー**を実行します。各 Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスは、1つ以上の Interactive Reporting データベース接続ファイル内の接続情報を使用して、複数のデータ・ソースへの接続をサポートします。そのため、1つの Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスで、複数のデータ・ソースを必要とするセクションを含むドキュメントを処理できます。Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスは、データベース接続用の接続プールを保持します。
- **Hyperion Interactive Reporting サービスの拡張アクセス** - ユーザーはドキュメント内の多次元ソースやリレーショナル・ソースを協力して分析できます。Reporting and Analysis リポジトリ内の Web Analysis ドキュメント、Production Reporting ジョブ出力または Financial Reporting バッチ・レポートからフラット化された結果 OLAP 結果を取得し、Interactive Reporting ドキュメント(.bcy)に結果セクションとしてデータをインポートします。

Financial Reporting サーバー

Financial Reporting サーバーは、バッチ要求の処理、出力の生成および Financial Reporting クライアント・コンテンツの配信により Financial Reporting の機能をサポートします。

- **Oracle Financial Reporting サーバー - 動的レポートやブックの結果(指定された計算など)を生成し、フォーマット**します。Oracle Financial Reporting サーバーは、複数のクライアントからの多数のレポート実行同時要求を処理できます。これが可能なのは、各要求が独自の実行スレッドで実行されるからです。Oracle Financial Reporting サーバーはデータ・ソース接続をキャッシュに格納するため、同じユーザーからの複数の要求を処理するのに再接続が不要です。Financial Reporting サーバーは複製できます。必要な数は、クライアントからレポートを同時に実行する同時ユーザーの数によって異なります。複数の Financial Reporting サーバーを、1つのリポジトリに対してレポートを作成するように構成できます。
- **Oracle Financial Reporting 通信サーバー** - 他の Financial Reporting サーバーのバインド先となる Java RMI レジストリを提供します。
- **Oracle Financial Reporting 印刷サーバー** - Financial Reporting のコンテンツを PDF 出力としてコンパイルできます。サポートされている Windows プラットフォー

ムでのみ実行されますが、複製可能で、PDF 生成のための拡張性を備えています。

- **Oracle Financial Reporting スケジューラ・サーバー** - Financial Reporting のスケジュールされたバッチ要求に応答します。Oracle Financial Reporting スケジューラ・サーバーは、指定された時間に他の Financial Reporting サーバーに要求の処理を求めるメッセージを表示します。

注： リリース 9.5 以降、スケジューラ・サーバーはデータを保管するのに、ローカル・ファイル・システムを使用するのではなく、Foundation Services リポジトリにアクセスする必要があります。スケジューラ・サーバーで使用されるユーザー・アカウントは、`fr_scheduler.properties` ファイルの `SchedulerServerUser=` entry で指定されます。スケジューラ・サーバーは、起動時に、Oracle Hyperion(R) Foundation Services リポジトリへの適切なアクセスをスケジューラ・サーバーに提供する HIT レジストリから認証トークンを取得します。`fr_scheduler.properties` で指定されるユーザー ID は、Reporting and Analysis リポジトリ用にプロビジョニングされた管理者である必要があります。デフォルトの `SchedulerServerUser` の値は、HSS デフォルト・ユーザーである `admin` です。ただし、このデフォルト値は、`fr_scheduler.properties` で、Reporting and Analysis 用にプロビジョニングされた、管理者権限を持つ任意のユーザーに変更できます。

SQR Production Reporting サービス

SQR Production Reporting Service は、ジョブ・サービスからのスケジュールされた要求とオンデマンド要求に応答して、ジョブの実行、データの処理およびレポートの生成を行います。ネイティブ・ドライバの使用、大きなデータ・セットの配列処理およびカーソル管理により、大量のレポートの作成用に最適化されています。データ・ソースのワン・パスで時間節約のデータ操作を処理し、オンライン・フォーマットと印刷フォーマットの大量のレポートを生成します。SQR Production Reporting Service は複製可能なサービスです。

EPM System 補助サービス

- **Performance Scorecard Services - Reporting and Analysis** と組み合わせて使用される Performance Scorecard のクライアント機能をサポートします。
- **Oracle Hyperion(R) Shared Services** - すべての Oracle 製品の認証とユーザー・プロビジョニングをサポートします。詳細は、Shared Services のドキュメント・セットを参照してください。
- **Smart View Services** - Oracle 製品用の共通の Microsoft Office インタフェースを提供します。詳細は、Smart View のドキュメント・セットを参照してください。

サービス層の要約

CMC サービスまたは RSC サービス	タイプ	名前	インスタンス
CMC	コア	認証サービス	複数
	コア	認可サービス	複数
	コア	グローバル・サービス・マネージャ	複数
	コア	ローカル・サービス・マネージャ	複数
	コア	パブリッシャ・サービス	複数
	コア	セッション・マネージャ	複数
	インパクト・マネージャ	評価(ハーベスタ)サービス	複数
	インパクト・マネージャ	更新(トランスフォーマ)サービス	複数
	Interactive Reporting	Hyperion Interactive Reporting サービスの拡張アクセス	複数
	Interactive Reporting	Hyperion Interactive Reporting ジョブ・サービス	複数
	Interactive Reporting	Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービス	複数
	Interactive Reporting	Hyperion Interactive Reporting サービス	複数
	管理	ロギング・サービス	システムにつき 1 つ
	管理	使用追跡サービス	複数
RSC	コア	名前サービス	システムにつき 1 つ
	コア	リポジトリ・サービス	複数
	コア	サービス・ブローカ	複数
	機能	イベント・サービス	複数
	機能	ジョブ・サービス	複数
Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 補助サービス	共通管理サービス	Shared Services	システムにつき 1 つ
	Financial Reporting サーバー	Financial Reporting 通信サーバー	
	Financial Reporting サーバー	Financial Reporting 印刷サーバー	複数

CMC サービスまたは RSC サービス	タイプ	名前	インスタンス
	Financial Reporting サーバー	Financial Reporting スケジューラ・サーバー	
	Financial Reporting サーバー	Financial Reporting サーバー	複数
	Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition サービス	スコアカード・モジュール・サービス	
	SQR Production Reporting サービス	Production Reporting サービス	複数
	Smart View サービス	Smart View サービス	複数

データベース・レイヤー

アーキテクチャ上は、データベースは 2 つの基本グループに分けられます。それは、Oracle システム・データが格納されるリポジトリと、分析、プレゼンテーションおよびレポート作成の対象となるデータ・ソースです。

情報を格納するための重要なリポジトリは次の 2 つです。

- **共通リポジトリ** - サポートされているリレーショナル・データベース・テーブル内にある Oracle システム・データ
- **Shared Services** - Oracle 製品で使用できるユーザー、セキュリティおよびプロジェクト・データ

データ・ソース:

- リレーショナル・データ・ソース(例: Oracle、IBM DB2、Microsoft SQL Server)
- 多次元データ・ソース(例: Oracle Essbase)
- Oracle の Oracle アプリケーション(例: Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition、Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition)
- データ・ウェアハウス
- ODBC データ・ソース

サポートされているデータ・ソースの詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックスでシステム要件を確認してください。これは <http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html> にあります。また、リリースの互換性、前提条件、デフォルト・ポートおよび正常なインストールのプランに必要なその他の情報については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を確認してください。

2

管理ツールとタスク

この章の内容

Oracle ホームおよび Install Home について.....	23
EPM Workspace を使用した Microsoft レポートの統合の設定	24
管理ツール.....	25
サービスの開始と停止.....	29
サービス・ポートの割当ての変更.....	33
EPM Workspace サブレットの開始.....	33
Interactive Reporting サービス・マネージャの構成.....	34
EPM Workspace 本番環境の保護.....	37
EPM System ライフサイクル管理.....	37
「ヘルプ」メニューのカスタマイズ	38
共通管理タスクのクイック・ガイド.....	40

Oracle ホームおよび Install Home について

複数の Oracle 製品を同じコンピュータにインストールすると、共通の内部コンポーネントやサードパーティ製コンポーネントが Oracle ホームという、中央の場所にインストールされます。

Windows プラットフォームでは、Oracle ホームの場所は、HYPERION_HOME というシステム環境の変数で定義され、そのデフォルトの場所は C:¥Hyperion になっています。

UNIX プラットフォーム上では、Oracle ホームの値は、そのホーム・ディレクトリの .hyperion.<ホスト名>に保管され、そのデフォルト場所は \$HOME/Hyperion になっています。

Hyperion ホームの場所の変更の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

Oracle ホームには ¥common ディレクトリがあります。EPM Workspace のインストールでは、¥products¥Foundation¥workspace ディレクトリが Oracle ホームに追加されます。この Oracle ホームは、デフォルトのインストール場所であるか、または EPM Workspace の Install Home です (Windows では C:¥HYPERION_HOME ¥products¥Foundation¥workspace、または UNIX では \$HOME/Hyperion/products/Foundation/Workspace)。

1 つの物理ホストで複数の Install Home を持つことが可能です。Install Home のすべての Java サービスは 1 つのプロセス・スペースで実行し、GSM を共有します

(必ずしも 1 つのホスト上ではありません)。1 つのホストに複数の Install Home がある場合、各 Install Home には独自に分かれたサービス・プロセス・スペースが必要であり、独自の GSM によって管理されます。1 つの Install Home のサービスは、Install Home として集合的に参照されます。

EPM Workspace を使用した Microsoft レポートの統合の設定

Microsoft レポートを EPM Workspace にインポートするには、次の手順に従う必要があります。

- シングル・サインオンを確立するには、次の前提条件を参照してください。
- Workspace サーバーのインストールおよび構成
- Microsoft レポート・サーバーのインストールまたは既存のインストールの使用
- Microsoft レポート Web サービスをホストするインターネット情報サービス (IIS) の構成

前提条件

EPM Workspace が Microsoft レポート・サーバーと通信できるようにするには、シングル・サインオンが確立されている必要があります。シングル・サインオンを完成するには、次の手順に従います。

- Microsoft レポート・サービスを設定して、Windows 統合認証を使用する必要があります。これにより、Microsoft Internet Explorer で、ユーザーが Windows デスクトップへのログオンに使用した Windows ドメインのログイン情報を使用して、ユーザーの認証ができるようになります。
- Microsoft Internet Explorer が実行中のマシン、および Microsoft レポート Web サービスをホストする IIS サーバーは、Internet 環境に類似した同様の Windows ドメイン内にある必要があります。

EPM Workspace は、Microsoft レポート・サーバー・リポジトリのコンテンツをリストするのに、Microsoft Internet Explorer ブラウザから直接 Microsoft レポート・サーバーによって提供される Web サービスを使用します。また、レポートを提供するために、Microsoft レポート・サーバーによって提供される URL API も使用します。

注： EPM Workspace を起動した元のサーバーは、統合が機能するように、Microsoft レポート Web サービスをホストするのと同じ IIS サーバーによってプロキシされる必要があります。この統合は、Firefox ブラウザではサポートされません。

- ▶ EPM Workspace との Microsoft レポート統合を設定するには、次のステップを実行します。

- 1 Workspace サーバーをインストールして構成します。

- 2 Microsoft レポート・サーバーをインストールするか、または既存のインストールを使用します。
- 3 Microsoft レポート・Web サービスをホストする IIS サーバーで、EPM Workspace へのアクセスのために適切な IIS プロキシ・プラグイン(EPM Workspace が配置されるアプリケーション・サーバーに依存する)を構成します。

注： 前述のステップの詳しい説明は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』にあります。

- 4 前述のステップを実行後は、EPM Workspace は、URL: <http://iisserver/workspace> 経由でアクセスできる必要があります。この URL は、IIS Server が、Microsoft レポート Web サービスをホストする IIS が実行中のサーバーです。
- 5 CMC モジュール(<http://workspaceserver:55000/cmc>)にログオンします。
- 6 「ユーザー・インタフェース」タブの EPM Workspace Web アプリケーションの「プロパティ」ダイアログから、Microsoft レポート統合の使用可能チェックボックスを選択します。
- 7 URL: <http://iisserver/workspace> 経由で EPM Workspace にアクセスします。コンテンツ・パブリッシャの役割のある EPM Workspace ユーザーに、「エクスプローラ」モジュールのフォルダのコンテキスト・メニューから、インポート、次に Microsoft レポートオプションを表示できる必要があります。すべてのユーザーは、Microsoft レポートへのリンクを含むリポジトリで URL オブジェクトをダブルクリックし、EPM Workspace のタブ内にこれを表示できる必要があります。Microsoft レポートのインポートの詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

管理ツール

次のトピックで、EPM Workspace および Reporting and Analysis 管理ツールについて説明します。

- 25 ページの「EPM Workspace 構成情報」
- 27 ページの「管理モジュール」
- 27 ページの「Interactive Reporting サービス・マネージャ」
- インパクト・マネージャ・サービス: 28 ページの「インパクト・マネージャ・モジュール」
- 28 ページの「ジョブ・ユーティリティのカレンダー・マネージャ」
- 28 ページの「サービス・コンフィグレータ」

EPM Workspace 構成情報

EPM Workspace インストールについての構成情報は、GSM および Shared Services を含め、次の URL で使用可能です。

<http://hostname:port/workspace/browse/configInfo>

ここで hostname は、EPM Workspace サーバーの名前、port は、HTTP またはアプリケーション・サーバーがリスニングする TCP ポートです。Apache Tomcat を使用している場合、EPM Workspace のデフォルトのポートは 19000 です。19000 は、HTTP サーバー(たとえば Apache HTTP サーバー)がリスニングするデフォルトの TCP ポートです。このポート番号は、使用しているアプリケーション・サーバーまたはサブレット・コンテナ(Apache Tomcat など)に依存しません。

EPM Workspace タイムアウトの設定:

- **アプリケーション・サーバー・セッションのタイムアウト** - 要求をそのセッションで受け取らない場合の、アプリケーション・サーバーがセッションのタイムアウトを行うまでの時間(分)。

- 配置フォルダの名前 WEB-INF/web.xml:

```
<session-config>
<session-timeout>60 </session-timeout>
</session-config>
```

- デフォルトは 60 分です。

注: Reporting and AnalysisWeb アプリケーション・セッションのタイムアウトはすべて 10 分より長い必要があります。

EPM Workspace のタイムアウト

EPM Workspace では、2つのメカニズムを使用してユーザーのアクティブ・セッションを管理します。まず、EPM Workspace は、ユーザーの現在のセッションで使用されているすべてのアプリケーション・サーバー(自身のアプリケーション・サーバーも含む)に継続活動要求を送信します。この継続活動は、アプリケーション・サーバーがセッションを無効にしないように、ブラウザとアプリケーション・サーバー間のセッションを維持します。たとえば、1度 Financial Reporting レポートが開いたら、EPM Workspace は、Financial Reporting サーバーに継続活動要求を送信するために、ユーザーは Financial Reporting アプリケーション・サーバーでセッションを再び開く必要なく、より多くの Financial Reporting レポートを開くことができます。これらの要求を送信する間隔は、KeepAliveInterval プロパティによって構成されます。このプロパティは、EPM Workspace によって使用されるアプリケーション・サーバーのタイムアウトの値より低く設定される必要があります。より高く値が設定されている場合、ユーザーは、アプリケーション・サーバーのタイムアウトにより、エラー・メッセージが表示される場合があります。2つ目のメカニズムは、ユーザーが EPM Workspace の使用を停止してもブラウザを閉じていない場合に、ユーザー・セッションを閉じるために設計されています。SessionTimeout プロパティごとに EPM Workspace にアクティビティがない場合、ユーザーはセッションが間もなく終了する警告を受けます。ユーザーが 5 分以内に対処しない場合、そのユーザーはログアウトされます。

- 値を変更するには、全般 Workspace Web アプリケーション・プロパティの CMC で変更します。詳細は、[187 ページの「全般 Workspace Web アプリケーション・プロパティ」](#)を参照してください。
- 単位は分です。前述のとおりデフォルトは、KeepAliveInterval は 10 分で、SessionTimeout は 30 分です。

URL の構成を無効にする詳細は、[37 ページの「EPM Workspace 本番環境の保護」](#)を参照してください。

管理モジュール

管理モジュールを使用して管理されたプロパティ(ナビゲートを使用したアクセス):

- 全般プロパティ
- 認証
- Shared Services コンソール - Oracle Hyperion(R) Shared Services Console を介したユーザー、グループおよび役割の追加および変更を含む組織。
- 構成コンソール
- 注釈
- プリンタや出力ディレクトリを含む物理的なリソース
- MIME タイプ
- 通知
- スマート・カット
- 行レベルのセキュリティ
- 使用追跡
- イベント追跡
- 所有権の変更
- BI Presentation Services

これらのアイテムの管理の詳細は、[43 ページの「管理モジュール」](#)を参照してください。

Interactive Reporting サービス・マネージャ

Interactive Reporting サービス・マネージャでは、これらの Interactive Reporting サービスおよびプロセスのプロセスをモニターする機能が強化されます。

- Hyperion Interactive Reporting サービス
- Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービス
- Hyperion Interactive Reporting ジョブ・サービス
- Hyperion Interactive Reporting サービス・ヘルパー・プロセス - すべての Interactive Reporting サービスのログインおよび使用追跡を管理します

Interactive Reporting サービス・マネージャでは、複数の Interactive Reporting サービスを管理するために、別々のプロセス・モニターを使用する必要がなくなります。

[34 ページの「Interactive Reporting サービス・マネージャの構成」](#)を参照してください。

インパクト・マネージャ・モジュール

インパクト・マネージャ・モジュールでは、ユーザーは Interactive Reporting データ・モジュールを置き換えることができます。データ・モデルを変更すると、データ・ソースを参照するすべてのドキュメントを個別に編集することなく、すべての Interactive Reporting に対してグローバルに変更できます。

75 ページの「[インパクト・マネージャ・サービスの使用方法](#)」を参照してください。

ジョブ・ユーティリティのカレンダー・マネージャ

ジョブ・ユーティリティのカレンダー・マネージャを使用して、カレンダーを作成、変更および削除します。ジョブをスケジュールするのに、会計またはその他内部、あるいは組織のカレンダーに基づき、カレンダーを作成できます。

129 ページの「[カレンダー・マネージャの表示](#)」を参照してください。

サービス・コンフィグレータ

すべての Reporting and Analysis サービスには、構成および管理コンソール(CMC) またはリモート・サービス・コンフィグレータ(RSC)を使用して変更する、構成可能なプロパティがあります。CMC および RSC は様々なサービスを行います。

RSC

RSC は、コード(またはリモート)サービスとも呼ばれる Reporting and Analysis サービス・タイプのサブセットを管理するためのグラフィック・インタフェースを提供します。RSC を使用して、次のシステムのすべてのホストでサービスを構成します:

- RSC サービス・プロパティの変更または表示
- サービスの ping
- Production Reporting ジョブ・ファクトリのホストの追加、変更または削除
- システムにおけるデータベース・サーバーの追加、変更、または削除
- サービスの削除

151 ページの「[RSC サービスの構成](#)」を参照してください。

CMC

CMC により、CMC(またはローカル)サービスと言われる、ローカル・ホスト上の Reporting and Analysis サービスのサブセットを管理できます。

- CMC サービスのプロパティの表示または変更
- ローカルの Install Home のプロパティの表示または変更
- パススルー設定の構成

サービスの開始と停止

EPM Workspace を開始するには、各 Install Home のサービスを開始し、EPM Workspace サブレットの各インストールを開始します(通常 Web サーバー上で)。

この項では、Install Home のサービスの開始方法について重点的に説明します。ただし、最後の部分では、例外的に Install Home の各種サービスおよび分散システムのホストの開始について説明します。

Install Home から、インストールされているすべてのサービス、それらのサブセット、または個々のサービスを開始できます。Interactive Reporting サービス・マネージャとは必ず別々に開始してください。

サービスを開始する方法はオペレーティング・システム、Reporting and Analysis システム構成、および目的によって異なります。サービスを停止する方法は、これらを開始した方法に基づきます。

次のトピックでは、サービスを開始および停止するための前提条件およびメソッドについて説明します。

- [29 ページの「サービスを開始する前に」](#)
- [30 ページの「Reporting and Analysis サービスの開始」](#)
- [31 ページの「サービスのサブセットの開始」](#)
- [32 ページの「サービスの停止」](#)
- [33 ページの「サービス始動従属関係」](#)

サービスを開始する前に

サービスを開始する前に、すべての必要なネットワーク・リソースがサービスで利用可能であるようにしてください。たとえば、Interactive Reporting サービスは、サービスが実行中である場所ではなく、ネットワーク・ホストに属するプリンタまたはファイル・ディレクトリでジョブの出力を作成する必要がある場合があります。これらの接続を確立してから、Interactive Reporting サービスを開始できるようにする必要があります。

Windows では、ネットワークの共有リソースへの接続を確立するには、ローカル・システム・アカウントとしてではなく、ユーザー・アカウントとしてログオンする必要があります。ODBC データ・ソースは、ユーザー・データ・ソースではなく、システム・データ・ソースとして構成される必要があります。環境を正確に構成するには、当該サイトのネットワーク管理者にお問い合わせください。

UNIX プラットフォームでは、すべての必要な環境の設定は、サービス開始前に行っている必要があります。必要なソフトウェア構成を作成するには、当該サイトのネットワーク管理者にお問い合わせください。

Reporting and Analysis サービスを開始するメソッドのいかんを問わず、まずリポジトリのデータベースを開始する必要があります。

Reporting and Analysis サービスの開始

Install Home 一式のすべてのサービス、一部のサービス、または1つのサービスのいずれをインストールしたかどうにかかわらず、次のトピックで説明するメソッドを使用して、任意の Install Home の Reporting and Analysis サービスを開始できます。

- 30 ページの「Windows サービスの方法(Windows のみ)」
- 30 ページの「エージェントの開始方法」
- 30 ページの「startCommonServices メソッド」

使用可能なシステムでは、すべてのコア・サービスを開始する必要があります(16 ページの「コア・サービス」を参照)。

注： Interactive Reporting サービス・マネージャは、別々に開始される必要があります(32 ページの「Interactive Reporting サービス・マネージャの開始」を参照)。オラクル社は、Reporting and Analysis サービスを再起動した後に、Web サーバーを再起動することをお奨めします。Web サーバーを再起動しない場合、ユーザーがログオンする前に、数分の遅れが生じます。

Windows サービスの方法(Windows のみ)

Windows では、エージェントまたは「スタート」メニューからコア・サービスを開始する方法を使用してください。

- ▶ コア・サービスを開始するには、次のどちらかの方法を使用します:
 - 「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「Workspace」、「Workspace エージェント・サービスの開始」の順に選択します。
 - 管理ツールから、サービスを選択し、Hyperion S9 BI+ x.x コア・サービス n を選択して、開始をクリックします。

エージェントの開始方法

Reporting and Analysis サービス(コア・サービス、Interactive Reporting サービス、Financial Reporting サービス)および Web アプリケーション(EPM Workspace、Financial Reporting および Web Analysis)をすべて開始するには、startAgent.bat スクリプトを `hyperion\home\common\workspacert\9.5.0.0\bin` で実行します:

- UNIX - start_Agent.sh
- Windows - startAgent.bat

startCommonServices メソッド

コア・サービスのみを開始するには、`\BIPlus\bin` で startCommonServices スクリプトを実行します。

- UNIX - startCommonServices.sh

- Windows - startCommonServices.bat

startCommonServices は、非アクティブなものを除き、Install Home で Java サービスを開始します。サービスの非アクティブ化は[31 ページの「サービスのサブセットの開始」](#)で説明します。

startCommonServices フラグ	説明
-Ddisable_htmlmail	電子メールのフォーマット(HTML またはテキスト・ファイル)。デフォルトは HTML フォーマットです。
-DPerformance.MaxSTWorkers	ジョブ・ワーカー・スレッドの数。ジョブが構築され、ジョブ・サービスに送信される速度を判別します。ジョブ・サービス、スケジュールおよびイベントの数、およびリポジトリの接続プールのサイズに基づいて構成します。デフォルトは 2 です。
-DPerformance.SchedulerBatchSize	スケジューラ・ワーカー・スレッドが一度にプロセスするスケジュールの数。デフォルトは 15 です。
-DPerformance.SchedulerDelay	ジョブ・サービスがビジーのときにジョブの実行が表示される秒数。デフォルトは 300 です。
-Djob_limit	各ジョブ・サービスごとの接続ジョブの数。デフォルト制限はありません。
-DMCL.JDBFetchMaxRowSize	リストのために戻されるアーチファクトの数、Interactive Reporting データベース接続ファイルの数、検索から戻されるアイテムの数、および個人用ページでリストされるアーチファクトの数。デフォルトは 100 です。

サービスのサブセットの開始

CMC サービスおよび RSC サービスのサブセットは、開始しないサービスを非アクティブにして開始できます。

- ▶ Reporting and Analysis サービスのサブセットを開始するには、次の手順に従います。
 - 1 開始しないサービスを非アクティブにします。
 - Interactive Reporting サービス - [第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」](#) を参照してください。
 - CMC サービス - CMC を使用して、各サービスで**実行タイプ**を**保持**に設定します。
 - RSC サービス - [第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」](#) を参照してください。
 - 2 start_CommonServices スクリプトを実行するか、またはコア・サービスを開始します。

[30 ページの「Reporting and Analysis サービスの開始」](#)を参照してください。

Interactive Reporting サービス・マネージャの開始

Interactive Reporting サービス・マネージャは個別に開始する必要があります。これは、サービスが、Reporting and Analysis サービスのある Install Home にインストールされているように、自身の Install Home に単独でインストールされているようにする必要があります。

注： コンピュータに接続して Windows で Interactive Reporting サービス・マネージャを開始する場合、その表示の色プロパティの設定は、確実に 16 ビット以上にしてください。色プロパティの設定が 16 ビット未満である場合、ユーザーは、EPM Workspace の Interactive Reporting ドキュメントのチャート・セクションを開くときに、応答時間が極端に長くなる場合があります。このサービスをリモートで(たとえば、VNC、端末サービス、リモート管理者または Timbuktu などを使用しながら)開始する場合は特に、これが重要な前提条件となります。これは、多くのリモート管理クライアントが、デフォルトでほんの 8 ビットの色に接続しているためです。

- ▶ Interactive Reporting サービス・マネージャを開始するには、次の手順に従います。
- 1 CMC では、Interactive Reporting サービス・マネージャの実行タイプが開始に設定されていることを確認します。
- 2 コア・サービスを開始します。
- 3 Interactive Reporting サービス・マネージャを開始します。

サービスの停止

Reporting and Analysis サービス、およびこれらのプロセスを停止して個別に開始したサービスを、すべて停止します。各サービスのホスト・コンピュータで停止します。すべての場合で、サービスの停止は、ハード・シャットダウンとなり、サービスが即停止されます。ハード・シャットダウンの場合、進行中のすべての操作が停止します。

サービスを停止するメソッドは、サービスを開始した方法と一致する必要があります。

- **開始スクリプトで開始するサービス** - この停止スクリプトを実行します。

注意 サービスがその開始スクリプトで開始された場合のみ停止スクリプトを使用します。停止スクリプトは、複合サービスのプロセス内の 1 つのサービスを終了するためには使用できません。停止スクリプトは、そのプロセスで実行中のすべてのサービスを停止します。

注： Windows システムの Interactive Reporting サービス・マネージャでは、Interactive Reporting サービス・マネージャ・コンソールで shutdown とタイプして、Interactive Reporting サービスを停止します。

- **コンソール・ウィンドウで実行中のプロセス** - Windows では、shutdown または [Ctrl]+[C] などのシャットダウン・コマンドを使用します。オペレーション

グ・システムの kill コマンド(UNIX の kill など)を使用して Reporting and Analysis サービスを停止しても、システムに損害を与えませんが、kill -9 は使用しないでください。

- Windows サービス - サービス・ツールで停止コマンドを使用します。

複数のサービスを異なるサーバーで(つまり別々のプロセスとして)実行している場合は、リポジトリ・サービスを最後に停止する必要があります。

サービス始動従属関係

コア・サービスは Windows サービスを使用して起動すると、2 分間起動を試みます。一方、通常の起動では、コア・サービスは次の順序でその他の EPM System コンポーネントに依存します。

- データベース
- Shared Services

この順序に従属関係があり、Windows ではサービスの開始に最大 2 分の制限時間があるため、リポジトリ・データベースがコア・サービスと同じコンピュータ上で実行する場合、システムがシャットダウンしないようにサービスの開始を検証したくない場合があります。

¥BIPlus¥common¥config¥RMSservice8.properties ファイルで

CHECK_SERVICE_STARTUP プロパティを設定して、サービスの開始を検証するかどうか選択します。デフォルトは TRUE です。

コア・サービスが開始しない場合、使用不可の従属関係オブジェクトを識別できる情報について、¥BIPlus¥logs で stdout_console.log を確認します。

サービス・ポートの割当ての変更

システム要件については、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックスを確認してください。これは <http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html> にあります。また、リリースの互換性、前提条件、デフォルト・ポートおよび正常なインストールのプランに必要なその他の情報は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を確認してください。

EPM Workspace サーブレットの開始

Web サーバー・ドキュメンテーションの指示に応じて、EPM Workspace サーブレットを開始します。URL をシステムのエンドユーザーに対して使用可能にします。

EPM Workspace では、次の URL を入力します。

`http://hostname:port/workspace`

ここで hostname は、EPM Workspace サーバーの名前、port は、アプリケーション・サーバーがリスニングする TCP ポートです。Apache Tomcat を使用している場合、EPM Workspace のデフォルトのポートは 19000 です。19000 は、HTTP サー

バー(たとえば Apache HTTP サーバー)がリスニングするデフォルトの TCP ポートです。このポート番号は、使用しているアプリケーション・サーバーまたはサーバーレット・コンテナ(Apache Tomcat など)に依存しません。

Interactive Reporting サービス・マネージャの構成

¥BIPlus¥common¥config¥server.xml で Interactive Reporting サービス・マネージャ・プロパティを構成します。Interactive Reporting サービス・マネージャは最大 n 個の Interactive Reporting サービスを管理します。

- 34 ページの「Interactive Reporting サービス・マネージャ・イベントのしきい値」
- 36 ページの「Interactive Reporting サービスの構成」

Interactive Reporting サービス・マネージャ・イベントのしきい値

しきい値イベントを Interactive Reporting サービス・マネージャのトリガーに設定して、サービスを停止および再起動します。しきい値イベントは、BQ_EVENT_MONITOR_PROPERTY_LIST で呼び出されるプロパティ・リストの server.xml にあります。最初のプロパティである EVENT_MONITORING をオンに設定して、しきい値イベントを使用できるようにします。使用されていないしきい値はコメント・アウトするか、削除します。

プロパティおよびイベント	説明
EVENT_MONITORING	次のイベントを使用する場合にオンに設定します
MAXIMUM_DOCUMENTS_THRESHOLD	取得される Interactive Reporting ドキュメントの数
MAXIMUM_JOBS_THRESHOLD	Interactive Reporting ジョブ実行の数
MAXIMUM_UP_TIME_THRESHOLD	サービスの最初の要求から実行しているサービスの合計時間
SPECIFIC_SHUTDOWN_THRESHOLD	午前 0 時以降サービスが使用可能でない時刻(分)。たとえば、150 は午前 2:30 を意味します。
猶予期間	プロセスを遠まわしにシャット・ダウンする時刻。デフォルトは午前 0 時です

注： 管理者は server.xml ファイルを手動で変更しないでください。このような設定は CMC UI を使用して変更する必要があります。

server.xml にあるサンプルの Interactive Reporting サービス・マネージャ情報

```
<SERVICES app="irj">
  <LSM>
    <fedName>
      <instanceid>00000113ba19c09e-0000-0f7e-ac1b19a8</instanceid>
      <typeid>0ad72298-0000-0ccc-000000e750e616d5</typeid>
      <versionid>00000000-0000-0000-0000000000000000</versionid>
      <pathname>LSM_BI1_bi-win18.hyperion.com</pathname>
      <servicedesc>Generated service name for BI LSM</servicedesc>
    </fedName>
    <dbconfig>
      <username>biwin18</username>
      <password>9003f5bc66e8c9fbc16692ef880caadd</password>
      <dburl>jdbc:hyperion:oracle://bi-win6.hyperion.com:
1521;SID=six1020</dburl>
      <dbdriver>hyperion.jdbc.oracle.OracleDriver</dbdriver>
    </dbconfig>
    <login>
      <username>Server1 on host bi-win18.hyperion.com</username>
      <password>768d2c1965b5f5345ed8b20ceead7922</password>
    </login>
    <properties>
      <property name="directory">C:\barnes232\BIPlus\</property>
      <property defid="0" name="GsmSyncTime">30</property>
      <property defid="0" name="ServiceTestInterval">15</property>
      <property defid="0" name="ServiceRegistrationInterval">15</
property>
    </properties>
  </LSM>
  <service type="IRJob">
    <runtype>start</runtype>
    <fedName>
      <instanceid>00000113ba19c0bc-0000-0f7e-ac1b19a8</instanceid>
      <typeid>00000107dd55157a-0000-12ba-ac1b10af</typeid>
      <versionid>00000000-0000-0000-0000000000000000</versionid>
      <pathname>BI1_bi-win18.hyperion.com</pathname>
      <servicedesc>BI1_bi-win18.hyperion.com</servicedesc>
    </fedName>
    <classInfo>

<infotype>com.brio.one.services.brioquery.info.BrioQueryServiceInfo</
infotype>
    </classInfo>
    <properties>
      <!-- The following property list defines the events that will
be tracked by BI service
           in the evergreen mode. The first property enables event
monitoring. If this property is
           ON, then even if no values are specified for the events,
the BI service will start a
           graceful shutdown at midnight by default. To start the
graceful shutdown process at a different
           time of day, refer to the comments on how to set the
time -->
      <propertylist defid="0ad70321-0002-08aa-000000e738090110"
```

```

name="BQ_EVENT_MONITOR_PROPERTY_LIST">
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="EVENT_MONITORING">OFF</property>
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="MAXIMUM_DOCUMENTS_THRESHOLD">10000</property>
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="MAXIMUM_JOBS_THRESHOLD">10000</property>
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="MAXIMUM_UP_TIME_THRESHOLD">180</property>
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="SPECIFIC_SHUTDOWN_TIME">1290</property>
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="GRACE_TIME">3</property>
  </propertylist>
  <!-- Max Concurrent IR Jobs To Run -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="MAX_CONCURRENT_JOB_REQUESTS">5</property>
  <!-- Directory name where the service temporary files go -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="CACHE_LOCATION">C:\barnes232\BIPlus\data\cache</property>
  <!-- Maximum number of concurrent requests this service
supports. All other requests will be blocked -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="MAX_CONCURRENT_REQUESTS">5000</property>
  <!-- Minimum available disk space (Mb) required to service new
request -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="MIN_DISK_SPACE">10</property>
  <!-- Inactive time (seconds), after which document can be
unloaded from memory to conserve resources -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="DOCUMENT_UNLOAD_TIMEOUT">900</property>
  <!-- Document unloading mechanism gets activated when number
of open documents exceed this number -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="DOCUMENT_UNLOAD_THRESHOLD">15</property>
  <!-- Time (seconds) the polling thread sleeps between two
polls -->
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="POLLING_INTERVAL">180</property>
  <property defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110"
name="configurationURL">file:C:\barnes232\BIPlus\common\config\log4j
\remoteServiceLog4jConfig.xml</property>
  </properties>
</service>
</SERVICES>

```

Interactive Reporting サービスの構成

CMC でサービス・タイプ、イベントおよびイベントしきい値の情報を構成します。第9章「CMC を使用したサービスの構成」を参照してください。

EPM Workspace 本番環境の保護

セキュリティ保護のため、次の EPM Workspace パラメータ(構成 URL、EPM Workspace テスト・モジュール、クライアント側デバッグ・モード)は使用不可になり、デフォルトでは使用できません。これらのパラメータを使用可能にするには、CMC で「クライアント・デバッグの使用可能」パラメータを「はい」に設定します。これらは主にテストおよびデバッグの目的に使用されます。CMC でのこれらのパラメータ設定の詳細は、[第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」](#)を参照してください。

- **構成 URL** - `http://hostname:19000/workspace/browse/configInfo` ([25 ページの「EPM Workspace 構成情報」](#)を参照)は、アクセスへの管理ログイン情報を必要とするシステム構成の詳細を示します。
- **EPM Workspace テスト・モジュール** - `cds.test` は、テスト・ケースおよびデバッグ・ユーティリティを含んでおり、EPM Workspace がデバッグ・モードで実行中にアクセスできます。
- **クライアント側デバッグ・モード** - デバッグに使用されます。

次のパラメータは、トラブルシューティングに使用されます:

- **トラブルシューティング・コード** - EPM Workspace は、トラブルシューティングの目的で高速処理されない JavaScript コードで出荷します。このコードにアクセスできないように除去するには、`workspace_static` ディレクトリでディレクトリ `/js/com` をバックアップします。次に、`/js/com` の各サブディレクトリについて、ファイル `<directory-name>.js` を除く各 JS ファイルを除去します。

たとえば、`/js/com/hyperion/bpm/web/common/Common.js` を除く `/js/com/hyperion/bpm/web/common` ですべてのファイルを除去します。

EPM System ライフサイクル管理

EPM System ライフサイクル管理では、EPM System 製品が、製品環境およびオペレーティング・システム全体で、アプリケーション、リポジトリまたは個々のアーチファクトを移行する一貫した方法が提供されます。一般に、Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースは、ライフサイクル管理をサポートするすべての EPM System 製品について一貫しています。ただし、EPM System 製品では、ライフサイクル管理インタフェースで、様々なアーチファクトのリストおよびエクスポートとインポートのオプションが表示されます。

ライフサイクル管理機能:

- アプリケーションおよびフォルダの表示
- アーチファクトの検索
- アプリケーションおよびフォルダの比較
- あるアプリケーションから別のアプリケーションへの直接の移行
- ファイル・システム間の移行
- 移行定義ファイルの保存およびロード

- 選択済アーチファクトの表示
- 移行の監査
- 移行のステータスの表示
- ファイル・システムにおけるクイック変更のための個々のアーチファクトのインポートおよびエクスポート

Shared Services Console におけるライフサイクル管理インタフェースの提供に加え、ソースから宛先にアーチファクトを移行する代替の方法を提供する、ライフサイクル管理ユーティリティと呼ばれるコマンドライン・ユーティリティがあります。ライフサイクル管理ユーティリティは、Windows Task Scheduler または Oracle Enterprise Manager などの第三者のスケジューリング・サービスと一緒に使用できます。

最後に、ユーザーがライフサイクル管理機能をカスタマイズして拡張できる、ライフサイクル管理アプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)があります。

ライフサイクル管理の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。

「ヘルプ」メニューのカスタマイズ

「ヘルプ」メニューにあるメニュー・テキストを更新する、および Oracle サポートまたは Oracle Technology Network のリンクのリダイレクトまたは非表示を行います。

- ▶ Oracle サポートまたは Oracle Technology Network のリンクをリダイレクトするには、次の手順に従います。

- 1 ファイル<workspace>/conf/CDSSConfig.jsp をバックアップします。
- 2 ファイル<workspace>/conf/CDSSConfig.jsp を編集します。
- 3 cds.mode に設定された ID を使用してモジュール・タグを検索します。
- 4 参照する新規 URL の下にある属性を次のように変更します。
 - helpTechSupportUri="http://www.oracle.com/support/index.html"
 - "helpNetworkUri="http://www.oracle.com/technology/index.html"
- 5 cds.logon に設定された ID を使用してモジュール・タグを検索します。
- 6 参照する新規 URL の下にある属性を次のように変更します。
 - helpTechSupportUri="http://www.oracle.com/support/index.html"
 - "helpNetworkUri="http://www.oracle.com/technology/index.html"
- 7 変更を保存して、Workspace アプリケーション・サーバーを再起動します。

注： HelpTechSupportUri は、メニュー・アイテムのヘルプ、すなわち Oracle サポートで呼び出す URL です。HelpNetworkUri は、メニュー・アイテムのヘルプ、すなわち Oracle Technology Network で呼び出す URL です。

- ▶ Oracle サポートまたは Oracle Technology Network へのリンクのメニュー・テキストを更新するには、workspace web app ディレクトリと、静的ページを提供する Web サーバー上の 2 つの場所で bpm_en.js を変更する必要があります。次の手順に従います。

- 1 ファイル<workspace>/resources/bpm_en.js をバックアップします。
- 2 ファイル<workspace>/resources/bpm_en.js を編集します。
- 3 キー MItemHelpTechSupport を検索します。
- 4 テキスト Oracle Support¥ns を編集します。

注： ¥ns は、メニューのニーモニックの s を表します。省略したり、自分用に作成できます。

- 5 キー MItemHelpNetwork を検索します。
- 6 テキスト Oracle Technology Network¥nn を編集します。

注： ¥nn は、メニューのニーモニックの n を表します。省略したり、自分用に作成できます。

- 7 変更を保存します。
- 8 次の場所の bpm_en.js をバックアップします。

```
<Hyperion Home>/products/Foundation/workspace/AppServer/  
InstalledApps/workspace_static/resources
```
- 9 bpm_en.js を編集します。
- 10 手順 3 から手順 7 まで繰り返します。
- 11 Workspace アプリケーション・サーバーを再起動する必要はありません。ブラウザのキャッシュを消去するだけです。

- ▶ Oracle サポートまたは Oracle Technology Network のリンクを非表示するには、次の手順に従います。

- 1 ファイル<workspace>/modules/com/hyperion/bpm/web/desktop/Handler.js をバックアップします。
- 2 ファイル<workspace>/modules/com/hyperion/bpm/web/desktop/Handler.js を編集します。
- 3 bpm.common.Constants.MENUITEM_ID_HELPTECH_SUPPORT を検索します。
- 4 次の行の後に:

```
obpm_mnit_HelpTechSupport.setId(bpm.common.Constants.MENUITEM_ID_HELPTECH_SUPPORT);
```

次の行を追加します。

```
obpm_mnit_HelpTechSupport.setVisible(false);。
```

- 5 bpm.common.Constants.MENUITEM_ID_HELPNETWORK を検索します。
- 6 次の行の後に:

```
obpm_mnit_HelpNetwork.setId(bpm.common.Constants.MENUITEM_ID_HELPNET  
WORK);
```

次の行を追加します。

```
obpm_mnit_HelpNetwork.setVisible(false);。
```

7 変更を保存します。

8 Workspace アプリケーション・サーバーを再起動します。

共通管理タスクのクイック・ガイド

このセクションを使用して、一部の共通管理タスクの手順を素早く検索します。[表 1](#) では、システムの最初の構成およびデータ入力に関連するタスク、および各タスクに使用されるシステム・コンポーネントがリストされます。[表 2](#) は、システムの保持に関係のあるタスクにこの情報を与えます。これらのテーブルは、このガイドに含まれるすべてのタスクを含んでいるわけではありません。

表 1 システム構成タスク

タスク	コンポーネント	リファレンス
サーバーを開始または停止する		29 ページの「サービスの開始と停止」 32 ページの「サービスの停止」
ユーザー、グループ、役割を指定する	Shared Services Console	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』
作成した個人用ページを構成する	エクスプローラ・モジュール	144 ページの「作成した個人用ページの構成」
ブロードキャスト・メッセージを構成する	エクスプローラ・モジュール	146 ページの「ブロードキャスト・メッセージの概要」
オプションの個人用ページ・コンテンツを提供する	エクスプローラ・モジュール	147 ページの「任意の個人用ページ・コンテンツのユーザーへの提供」
ブックマーク用のグラフィックを指定する	エクスプローラ・モジュール	148 ページの「ブックマーク用のグラフィックの構成」
ジョブをスケジュールするためのカスタム・カレンダーを作成する	カレンダー・マネージャ	130 ページの「カレンダーの作成」
パブリック・ジョブ・パラメータを作成する	スケジュール・モジュール	135 ページの「パブリック・ジョブ・パラメータの管理」
ジョブの出力用のプリンタまたはディレクトリを作成または変更する	管理モジュール	53 ページの「物理リソースの管理」
データベース・サーバーを定義する	RSC	162 ページの「データベース・サーバーの追加」
サービスを構成する	RSC、CMC	第 8 章「RSC サービスの構成」

タスク	コンポーネント	リファレンス
		第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」
システムのプロパティを設定する	管理モジュール	44 ページの「全般プロパティの設定」

表 2 システム保守タスク

タスク	コンポーネント	リファレンス
サーバーで実行するサービスを変更する		
サービスを変更する	RSC、CMC	第 8 章「RSC サービスの構成」、第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」
ジョブ・サービスを変更する	RSC	164 ページの「ジョブの管理」
システムのプロパティを変更する	管理モジュール	44 ページの「全般プロパティの設定」
サービスの削除	RSC または インストール・プログラム	第 8 章「RSC サービスの構成」 または 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』
ユーザー、グループ、役割を変更する	Shared Services Console	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』
古いユーザーを非アクティブにする	Shared Services Console	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』
MIME タイプを作成する	管理モジュール	56 ページの「MIME タイプの定義」
MIME タイプを変更する	管理モジュール	56 ページの「MIME タイプの変更」
古い MIME タイプを非アクティブにする	管理モジュール	56 ページの「MIME タイプの非アクティブ化または再アクティブ化」
ホストを追加する	RSC	160 ページの「ホストの追加」
サービスを追加する	インストール・プログラム	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』
共通のメタデータ・サービスを構成する	管理モジュール	第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」

3

管理モジュール

この章の内容

概要	43
全般プロパティの設定	44
ユーザーホスト認証の認証	45
ユーザー管理	46
Reporting and Analysis デフォルト・プリファレンスの割当て	46
注釈の探索と管理	47
物理リソースの管理	53
MIME タイプの管理	55
通知の管理	57
スマート・カットの管理	60
行レベル・セキュリティの管理	61
システム使用追跡	62
すべてのオブジェクトの所有権の変更	65
BI Presentation Services	66

概要

EPM Workspace 「ナビゲート」メニューから利用可能な管理モジュールにより、EPM Workspace プロパティ、パフォーマンス、およびユーザーの対話を管理できます。「ツールバー」ボタンは、管理メニュー・アイテムを表します。

ナビゲート、次に管理メニュー・アイテム	操作
全般。44 ページの「全般プロパティ」を参照してください	システム全般とユーザー・インタフェースのプロパティを指定します。
認証	ジョブおよび Interactive Reporting ドキュメントに適用する、信頼できるパスワードおよびパススルー構成値の使用に関連付けます。
Shared Services Console	ユーザー、グループ、役割を指定する
構成コンソール	配置したコンソールの構成およびモニタリング(CMC)サービス、Web アプリケーションおよびエージェントのプロパティをモニタリングおよび構成して、サービス・インスタンスを追加または除去します。

ナビゲート、次に管理メニュー・アイテム	操作
注釈	環境全体で注釈を検索および管理し、メタデータを含むプロパティを変更して、注釈を除去します。
物理リソース	ジョブの出力用のプリンタと出力ディレクトリを指定します。
MIME タイプ	EPM Workspace MIME タイプを作成、変更および削除します
通知	メール・サーバーのプロパティを定義して、エンド・ユーザーがジョブについての電子メール通知を受け取る方法を指定します。
スマートカット	電子メール通知に含まれるスマートカット(EPM Workspace でインポートしたドキュメントへのショートカット)の構築方法を指定します
行レベルのセキュリティ	Interactive Reporting ドキュメントで使用するデータソースの行レベル・セキュリティを管理します
使用追跡	システムの使用を追跡して、関連するプロパティを定義します。
イベント追跡	選択した MIME タイプのドキュメントを開く、ドキュメントを閉じる、ジョブの実行など、イベントを追跡します。
所有権の変更	すべてのオブジェクトの所有権を変更します
BI Presentation Services	現在のインストールおよびアクティビティの情報を含みます。アクティビティ・セクションでは、管理機能へのリンクが提供されます。

注： 様々なメソッドを使用して、ほとんどの管理モジュール・タスクを実行できます。EPM Workspace ツールバー、メニュー、およびショートカット・メニューの完全なリストで、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

全般プロパティの設定

- ▶ 全般プロパティおよびユーザー・インタフェースのプロパティを設定するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「全般」を選択します。
 - 2 プロパティを変更します。
 - 3 プロパティの保存をクリックします。

全般プロパティ

- システム名 - 現在のインストールとその他の Reporting and Analysis インストールを区別します(インストールは、1つの GSM で提供されるシステムとして定義されます。)
- ブロードキャスト・メッセージ - ブロードキャスト・メッセージを保管するフォルダを指定します。

- ユーザーがサブスクリプションと通知を使用できるようにする - インポート・イベント・ロギングをアクティブにします。これで、イベント・サービスがサブスクリプションの一致を識別し、サブスクリプションのアイテムの変更をユーザーに通知します(有効日 - ロギング開始時)
- 優先度 - エクスプローラ・モジュールにインポートされたアイテムに、ユーザーが優先度を設定できるようにします。
- ハーベスティングの使用可能 - ハーベスタ・サービスをアクティブにします。これによりユーザーはインパクト・マネージャを使用して Interactive Reporting メタデータをリレーショナル・データ・ソースに抽出および保存して、他のフォーマットで使用できます(第5章「インパクト・マネージャ・サービスの使用方法」を参照)
- Interactive Reporting のデフォルトで開くフォーマット - EPM Workspace (HTML) または Interactive Reporting Web Client で、Interactive Reporting ドキュメントがデフォルトで開くかどうかを指定します

ユーザー・インタフェースのプロパティ

- システム上のすべてのユーザー/グループ/役割を表示 - エンド・ユーザーがリポジトリ・アイテムへのアクセス権を設定する場合、すべての使用可能なユーザー、グループおよび役割をリストします。このオプションを選択すると、システム・パフォーマンスに影響する場合があります。
- 「最大 nn 個のユーザー/グループ/役割を表示」 - エンド・ユーザーがリポジトリ・アイテムへのアクセス権を設定する場合のユーザー、グループまたは役割の数。デフォルトは 100 です。指定する数が小さすぎる場合、エンド・ユーザーが、アクセス先であるすべてのユーザー、グループおよび役割を表示できない場合があります。

ユーザーホスト認証の認証

ホスト認証プロパティは、信頼できるパスワードおよびパススルー構成値を使用することと関連しており、これらの値はジョブおよび Interactive Reporting ドキュメントに適用されます。パススルーの設定の詳細は、[135 ページの「ジョブと Interactive Reporting ドキュメントのパススルーの管理」](#)を参照してください。次に、管理モジュールからの認証オプションの、信頼できるパスワードおよびパススルー構成の設定について説明します。

- 「信頼できるパスワードの使用可能」 - 信頼できるパスワードの使用を使用可能にします。
- 「パススルーにユーザーのログイン情報を使用」 - 「パスワード」および「パスワードの確認」フィールドを含むユーザーのログオン情報を使用したパススルーを使用可能にします。
- 「ユーザーがパススルーにログイン情報を指定できるようにする」 - ユーザーがプリファレンスで指定する資格証明を使用したパススルーを使用可能にします。

ログオン情報がプリファレンスで指定されない場合、ユーザーが Interactive Reporting ドキュメントを開いたり、ジョブを実行しようとするたびに、エラー・メッセージが表示されます。

注： 認証の変更では、サービスとアプリケーション・サーバー(UI)の双方の再起動が必要であり、ユーザーは必要に応じて通知されます。

ユーザー管理

ユーザー、グループおよび役割の管理の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

Reporting and Analysis デフォルト・プリファレンスの割当て

Oracle Hyperion(R) Shared Services Console では、プロビジョニング・マネージャおよびエクスプローラの役割を持つユーザーは、デフォルト・フォルダ、新規ドキュメント・フォルダ、および開始ページ・アプリケーションのプリファレンスをユーザーおよびグループに設定できます。個人およびグループのプリファレンスは、デフォルトのプリファレンスより優先されます。

デフォルト・プリファレンスで正常に動作できるためには、指定されたフォルダおよびインタフェース要素にアクセスするために必要な役割および権限がユーザーおよびグループに必要です。

プロビジョニング・マネージャは、ユーザーおよびグループにアプリケーションを設定できる Shared Services の役割を持っています。さらに、Reporting and Analysis におけるデフォルトのユーザー・プリファレンスの設定にも必要になります。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

▶ Reporting and Analysis にデフォルトのプリファレンスを割り当てるには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」 > 「管理」 > 「Shared Services Console」を選択します。
- 2 アプリケーション・グループノードを、Reporting and Analysis アプリケーションが表示されるまで拡大します。
- 3 アプリケーション名を右クリックし、プリファレンスの割当てを選択します。
プロセス・バーに、3つの手順からなるウィザードが表示されます。
- 4 このウィザードの手順 1 ユーザーの選択で、使用可能なユーザーまたは使用可能グループ」を選択します。
- 5 左側のパネルでユーザー名またはグループ名を選択して、右矢印をクリックします。

連続した名前を選択するには、名を選択し、[Shift]を押したまま保持して、姓を選択します。不連続の名前を選択するには、[Ctrl]を押したまま保持して、各アイテムを選択します。「すべて追加」を使用して、すべての名前を選択します。

- 6 手順5と6を繰り返して、ユーザーとグループの組合せを選択します。
- 7 すべてのユーザー名とグループ名が選択したユーザーとグループに表示されたら、次へをクリックします。
- 8 このウィザードの手順2 プリファレンスの管理では、選択されたユーザーとグループのデフォルト・プリファレンスを指定します。
 - デフォルト・フォルダ - デフォルト・フォルダのリポジトリの場所。
 - 新規ドキュメント・フォルダ - 有効なデータ・ソース、すなわち Web Analysis データベース接続ファイルおよび Interactive Reporting ドキュメントを検索する新規ドキュメント・ウィザードのデフォルト・フォルダ。
 - 開始ページ - ログオン後に表示される Reporting and Analysis のインタフェース。「何も選択しない」、「エクスプローラ」、「ドキュメント」または「スコアカード」が開始ページです。

開始ページで「エクスプローラ」または「文書」を選択した場合は、リポジトリの場所を指定する必要があります。
- 9 「アクセス・モードの使用可能」から、次の手順に従います。
 - 「スクリーン・リーダー・サポートの使用可能」を選択します。
 - 「テーマの選択」から「コントラスト(高)」を選択します。
- 10 すべてのプリファレンスを指定したら、次へをクリックします。
- 11 このウィザードの手順3 終了では、次の3つのタスクのどれか1つを選択します。
 - 別のアプリケーションのオプションを構成する場合は、ビュー・ペインからアプリケーションを選択します。
 - 現在選択されているユーザーおよびグループのプリファレンスを変更する場合は、「戻る」をクリックします。
 - 別のユーザーおよびグループ一式を指定して、それらのプリファレンスを設定するには、「続行」をクリックします。

注釈の探索と管理

管理者は注釈サーバー上のすべての注釈にアクセスできます。

実行可能なタスク

- 注釈を検索します。48 ページの「注釈の検索」を参照してください。
- 注釈に関連付けられたレポートを表示します。50 ページの「注釈と関連付けられたレポートの表示」を参照してください。
- 注釈に返答します。50 ページの「注釈への返答」を参照してください。
- 注釈を削除します。51 ページの「注釈の削除」を参照してください。
- ソースを変更してください。51 ページの「注釈に対するソースの変更」を参照してください。
- コンテキスト要素を変更します。51 ページの「コンテキスト要素の変更」を参照してください。

- 権限を変更します。52 ページの「権限の変更」を参照してください。

注： fr_global.properties で、設計者は、レポートが自動的にクエリーを行い、任意のレポートに対し、セル・テキスト、プランニング・ユニットの注釈、またはドキュメントの添付ファイル、あるいはそのすべてを注釈として戻すかどうかをコントロールできます。詳細は、『Oracle Hyperion Financial Reporting Studio ユーザー・ガイド』の、セル・テキストの表示、プランニング・ユニットの注釈、および注釈の Financial Reporting のドキュメントのトピックを参照してください。

注釈の検索

検索オプションは、指定した基準に基づいて注釈のリストを戻します。

▶ 注釈を検索するには、次の手順に従います。

1. EPM Workspace から、ナビゲート」>「管理」>「注釈を選択します。デフォルトとして、注釈マネージャには表示される注釈はありません。
2. 「検索」ドロップダウンから検索メソッドを選択します。
 - すべて - タイトル、作成者、カテゴリ、説明、またはコンテキストをベースにした検索。大文字小文字を区別しないテキスト、後端アスタリスク、およびワイルドカード文字列を使用できます。
 - タイトル - タイトル内のテキストをベースにした検索。大文字小文字を区別しないテキスト、後端アスタリスク、およびワイルドカード文字列を使用できます。
 - 作成者 - 作成者内のテキストをベースにした検索。
 - カテゴリ - カテゴリの検索。検索をクリックしてカテゴリを選択します。
 - 説明 - 説明内のテキストをベースにした検索。大文字小文字を区別しないテキスト、後端アスタリスク、およびワイルドカード文字列を使用できます。
 - コンテキスト - コンテキストの検索。検索には、「コンテキスト検索」ダイアログ・ボックスが表示されます。ここでは、データ・ソース、要素名、およびオプションで、要素値に基づいて検索を定義できます。49 ページの「コンテキスト検索」を参照してください。
 - 詳細検索 - 検索には、「詳細検索」ダイアログ・ボックスが表示されます。ここでは、タイトル、作成者、説明、転記済日付範囲、カテゴリまたはコンテキストの組合せに基づいた検索を定義できます。49 ページの「詳細検索」を参照してください。
3. 注釈コンテンツを表示するには、注釈をクリックします。コンテンツは、画面の下位にある注釈パネルに表示されます。

注： 以前に削除済の注釈を持つレポートは、警告(!)アイコンと一緒に表示されます。

コンテキスト検索

検索は、データ・ソース、要素名、および要素値をベースに絞りこむことができます。

▶ コンテキスト検索で検索を定義するには、次の手順に従います。

1. データ・ソースドロップダウンで、データ・ソースを選択します。

注： データ・ソースは、既存の注釈について表示されます。「fr:」のデータ・ソースは、注釈がオブジェクトに設定されている場合表示されます。データ・ソースの前に付く「fr:」は、特定のレポートに設定された注釈を示します。

2. 要素名ドロップダウンで、要素を選択します。

注： 選択した要素はリストから除去され、再選択できません。

3. 要素値で、その値を指定します。複数の値を指定するには、カンマ(,)で各値を分けます。

注： 複数の値の1つのみが満たされている必要があります。

4. さらに検索条件を追加するには、手順2と3を繰り返します。

注： 複数の要素名を指定する場合、各要素名の値が満たされている必要があります。

詳細検索

基準の組合せに基づいて、次のように注釈の検索を詳細に限定できます。

▶ 詳細検索を使用するには、次の手順に従います。

1. 検索ドロップダウンから詳細検索を選択します。

2. 詳細検索 ダイアログ・ボックスに検索条件を入力します。

- タイトル - 注釈タイトル。
- 作成者 - 注釈作成者。
- 説明 - 注釈説明。
- 転記済日付範囲 - 注釈の開始日と終了日。「開始」および「終了」ドロップダウンでカレンダー検索選択ができます。
- カテゴリ - 注釈に関連するトピックまたは件名。「カテゴリ」ドロップダウンからカテゴリを選択します。
- コンテキスト - 「コンテキスト検索」を使用して、データ・ソース、要素名および要素値を選択します。「検索」アイコンをクリックして、「コンテキスト検索」ダイアログ・ボックスを表示します。49 ページの「コンテキスト検索」を参照してください。

注釈と関連付けられたレポートの表示

レポートおよび添付ファイルを注釈に関連付けて表示できます。注釈の要約行は、レポートの各注釈に表示されます。

注： レポートを表示しようとする際にエラーが発生し、レポートのデータ・ソースが変更した可能性がある場合、注釈に対してデータ・ソースを一致させる必要もあります。51 ページの「注釈に対するソースの変更」を参照してください。

注： レポート名が「名前変更」メニュー・オプションを介して EPM Workspace で変更した場合、どのオブジェクトレベルの注釈も名前変更済のレポートに関連付けられたままになります。ただし、その名前が Financial Reporting Studio 内の「名前を付けて保存...」で変更された場合は、複製されたレポートおよびオリジナルのレポートのどのオブジェクトレベルの注釈も、新しい名前を持つレポートにコピーされません。

▶ レポートを表示するには、次の手順に従います。

1. 「注釈マネージャ」を開き、注釈を検索します。48 ページの「注釈の検索」を参照してください。
2. 注釈を右クリックして、「レポート/ドキュメントの表示」を選択します。

注： エラーが発生した場合、レポートのデータ・ソースが変更したかどうかチェックします。

3. レポートが表示されます。レポートの「注釈」アイコンは、注釈の参照の場所を示します。

注： 目のアイコンは、読取り専用のレポート/ドキュメントと関連付けられて注釈に対して表示されます。

注釈への返答

管理者は、権限の設定にかかわらず、すべての注釈に返答できます。

▶ 注釈に返答するには、次の手順に従います。

1. 「注釈マネージャ」を開き、注釈を検索します。48 ページの「注釈の検索」を参照してください。
2. 次のオプションのうち1つを実行します。
 - 注釈を右クリックして、「返答」を選択します。
 - 注釈をダブルクリックします。
 - 注釈を強調表示して、「返答」アイコンをクリックします。
3. 注釈の返答ダイアログ・ボックスが表示されます。

注釈の削除

管理者は、権限の設定にかかわらず、注釈を削除できます。

- ▶ 注釈を削除するには、次の手順に従います。
 1. 「注釈マネージャ」を開き、注釈を検索します。48 ページの「注釈の検索」を参照してください。
 2. 次のオプションのうち1つを実行します。
 - 注釈を右クリックして、「削除」を選択します。
 - 注釈を強調表示して、「削除」アイコンをクリックします。
 3. はいをクリックして確認します。

注釈に対するソースの変更

注釈に関連付けられたソース要素をオプションで変更できます。データ・ソース要素は、タイプ、サーバー、アプリケーションおよびデータベースから構成されています。データ・ソースは、選択した注釈、またはオリジナルのデータ・ソースの基準を満たすすべての注釈に適用できます。

- ▶ 注釈に対するソースを変更するには、次の手順に従います。
 1. 「注釈マネージャ」を開き、注釈を検索します。48 ページの「注釈の検索」を参照してください。
 2. 注釈を右クリックして、「ソースの変更」を選択します。「ソースの変更」ダイアログ・ボックスで、現在のデータ・ソースが表示されます。
 3. データ・ソース・オプションを入力します。すべてのフィールドがオプションです。
 - 「データ・ソース」ドロップダウンで、新規データ・ソースを選択します。任意のデータ・ソース要素を引き続き変更します。
 - 「タイプの置換」で新規データ・ソース・タイプを入力します。
 - 「サーバーの置換」で新規サーバーを入力します。
 - 「アプリケーションの置換」で新規アプリケーションを入力します。
 - 「データベースの置換」で新規データベースを入力します。
 4. すべての注釈に適用で、オリジナルのデータ・ソース条件を満たすすべての注釈にソースの変更を適用するには、チェック・ボックスを選択します。強調表示した注釈にソース変更を適用するには、チェック・ボックスを選択解除します。
 5. 「OK」をクリックします。確認メッセージで変更済ドキュメントの数が表示されます。変更済のドキュメントはリストで強調表示されます。

コンテキスト要素の変更

特定のデータ・ソースに関連付けられた注釈に対して次元または次元メンバーの値を変更します。

- ▶ 注釈に対するコンテキスト要素を変更するには、次の手順に従います。
1. 「注釈マネージャ」を開き、注釈を検索します。48 ページの「注釈の検索」を参照してください。
 2. 注釈を右クリックし、要素の変更を選択します。要素の変更ダイアログ・ボックスは、現在のデータ・ソースで表示されます。
 3. オプションです。データ・ソースドロップダウンで、データ・ソースを選択します。
 4. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - **要素の変更。** このオプションを選択して、次元を変更します。次に、「置換」で、ドロップダウンから次元を選択し、「置換後の文字列」で新規次元を入力します。
 - **要素値の変更対象:** このオプションを選択して、次元およびメンバーを変更します。次に、ドロップダウン・リストから置き換える対象の次元を選択します。「置換」で新規次元を選択し、「置換後の文字列」でメンバーを入力します。
 5. すべての注釈に適用を選択して、要素変更をデータ・ソース条件を満たすすべての注釈に適用します。また、すべての注釈に適用を選択解除して、要素変更を強調表示した注釈にのみ適用します。
 6. OK をクリックします。確認メッセージで新規要素に変更された注釈の数が表示されます。変更済のドキュメントはリストで強調表示されます。

権限の変更

注釈権限は、ユーザー、グループまたは役割に基づいてアクセス・レベルを定義します。次の権限は、注釈リスト・パネルで設定される場合があります。

- アクセスなし - ユーザーは注釈を参照できません。
- 表示 - ユーザーは注釈を表示できます。
- 変更 - ユーザーは注釈に返答できますが、削除できません。
- フル・コントロール - ユーザーは、注釈への権限を表示、返答、削除および設定できます。

- ▶ 権限ダイアログにアクセスするには、次の手順に従います。
1. 注釈を右クリックして、権限を選択します。
 2. 「権限」ダイアログ・ボックスで、権限を適用するユーザー、グループまたは役割を強調表示して、右向き矢印をクリックし、「選択したユーザー、グループ、役割」パネルに移動します。
 3. アクセสดロップダウンから権限をクリックして、OK をクリックします。権限設定の詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace 開発者ガイド』を参照してください。

物理リソースの管理

プリンタおよびディレクトリなどの物理リソースは、Interactive Reporting および Production Reporting ジョブの出力の宛先として使用されます。物理リソースは、Hyperion Interactive Reporting サービスを実行する各サーバーにアクセスできる必要があります。

アクセス権を割り当て、使用する物理リソースについてエンド・ユーザーに通知する必要があります。ユーザーには、使用できる物理リソースのみが表示される必要があります。

物理リソースの表示

- ▶ EPM Workspace に定義されている物理リソースを表示するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「物理リソース」を選択します。
 - 2 「表示」ドロップダウンから、リソースとしてすべて、プリンタのみまたは出力ディレクトリのみを選択し、リストの更新をクリックします。
- ▶ 物理リソースのプロパティの設定を表示するには、リソース名をクリックします。「プロパティ」ダイアログの詳細については、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

物理リソースのアクセス権

Reporting and Analysis 物理リソースには、アクセスなし、表示およびフル・コントロールの3つのアクセス・レベルがあります。

役割、グループまたはユーザーを追加して、その他のアーチファクトに行うようにアクセス権を設定します。アクセス権の設定の指示は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

物理リソースの追加

- ▶ 物理リソースを追加するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「物理リソース」を選択します。
 - 2 「コンテンツ」ペインで、プリンタの追加」または出力ディレクトリの追加の横にある実行をクリックします。
 - 3 必須プロパティとオプションのプロパティを指定します。

54 ページの「プリンタのプロパティ」および55 ページの「出力ディレクトリ・プロパティ」を参照してください。

注： 物理リソースは、Hyperion Interactive Reporting サービスが実行する各サーバーにアクセスできる必要があります。

- 4 「次へ」をクリックしてアクセス権を設定します。

このリソースのアクセス権を設定します(53 ページの「物理リソースのアクセス権」を参照)。

- 5 終了をクリックします。

物理リソースの変更

- ▶ 物理リソースを変更するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」>「管理」>「物理リソース」を選択します。
- 2 リソース名の横にある変更をクリックするか、リソース名を選択します。
- 3 必要な変更を加え、OK をクリックします。

53 ページの「物理リソースのアクセス権」、54 ページの「プリンタのプロパティ」および55 ページの「出力ディレクトリ・プロパティ」を参照してください。

物理リソースの削除

- ▶ 物理リソースを削除するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」>「管理」>「物理リソース」を選択します。
- 2 リソース名の横にある削除をクリックします。
- 3 確認のメッセージが表示されたら、削除を確認します。

プリンタのプロパティ

プリンタは、Interactive Reporting ジョブの出力のために使用されます。

- ▶ プリンタを作成するには、次の手順に従います。

- 1 次の内容を完了します。
 - **タイプ** - 読取り専用プロパティ。プリンタとして設定されています。
 - **名前** - プリンタ名。エンド・ユーザーに表示されます。
 - **「説明」** - 管理者およびエンド・ユーザーがプリンタを識別できるようにします。
 - **プリンタ・アドレス** - プリンタのネットワーク・アドレス(たとえば、`¥¥f3prt ¥techpubs`)。エンド・ユーザーには表示されません。
 - **所有権** - 「所有者の変更」ボタンを選択して所有権を変更できます。
- 2 「次へ」を選択して権限を割り当てます。詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。
- 3 「終了」を選択します。

出力ディレクトリ・プロパティ

出力ディレクトリは、Interactive Reporting および Production Reporting ジョブの出力のために使用されます。これらはローカルまたはネットワーク上にあり、FTP ディレクトリにある場合があります。

▶ 出力ディレクトリを作成するには、次の手順に従います。

1 全般プロパティについて次の内容を完了します。

- **タイプ** - 読取り専用プロパティ。出力ディレクトリとして設定されています
- **名前** - 出力ディレクトリ名。エンド・ユーザーに表示されます
- **説明** - 管理者およびエンド・ユーザーがディレクトリを識別できるようにします
- **パス** - ディレクトリの完全なネットワーク・パス(たとえば、¥¥apollo¥¥Inventory_Reports)
- **所有権** - 「所有者の変更」ボタンを選択して所有権を変更できます。

2 FTP のプロパティ:

- **FTP サーバー上のディレクトリ** - 出力ディレクトリが FTP サーバー上にある場合に使用可能にして、次のオプションを設定します。
- **FTP サーバーのアドレス** - 出力ディレクトリがある FTP サーバーのアドレス(たとえば、ftp2.hyperion.com)
- **FTP ユーザー名** - FTP 出力ディレクトリにアクセスするユーザー名
- **FTP パスワード** - FTP ユーザー名のパスワード
- **パスワードの確認** - FTP パスワードに入力したパスワードをもう一度入力します

3 「次へ」を選択して権限を割り当てます。詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

4 「終了」を選択します。

MIME タイプの管理


アイテムをリポジトリにインポートする前に、MIME タイプは EPM Workspace に定義される必要があります。EPM Workspace には多くの組込み MIME タイプがありますが、その他の MIME タイプを定義する必要がある場合があります。

MIME タイプを複数のファイル拡張子と関連付けることができます。たとえば、拡張子の .txt、.bat および .dat をテキストの MIME タイプに関連付けることができます。

複数の MIME タイプは、1 つの拡張子を使用できます。たとえば、組織で多数のバージョンのプログラムを使用している場合、各バージョンに対して MIME タイプを定義できますが、すべてのバージョンのファイル名は、同じ拡張子を使用します。ユーザーが、複数の MIME タイプに属する拡張子を持つファイルを開く場合、実行可能プログラムを選択するためのメッセージが表示されます。


MIME タイプ・リストでは、トラフィック・ライト・アイコンで、アクティブ(緑)または非アクティブ(赤)と示されます。56 ページの「MIME タイプの非アクティブ化または再アクティブ化」を参照してください。

MIME タイプの定義

- ▶ MIME タイプを定義するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「MIME タイプ」を選択します。
 - 2 コンテンツ・ペインの下部で、実行をクリックします MIME タイプの追加」の右側)。
 - 3 名前と説明を入力します。
 - 4 ファイル拡張子のボックスに拡張子を入力し、をクリックします。
拡張子を入力するときは、拡張子の文字のみを入力します。ピリオド(.)は含めないでください。
 - 5 「アクティブ」を選択して、選択可能にします。
 - 6 オプション: 詳細設定オプションでアイコンの変更をクリックして、利用可能な画像から選択するか、または参照してリポジトリに画像を追加してから、OK をクリックします。
 - 7 終了をクリックします。

注: 新しく定義された MIME タイプは、デフォルトでアクティブになります。

MIME タイプの変更

- ▶ MIME タイプを変更するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「MIME タイプ」を選択します。
 - 2 MIME タイプのリストで変更をクリックします。
 - 3 プロパティを変更します。
ファイル拡張子を除去するには、<拡張子>リストで拡張子を選択し、をクリックします。
 - 4 OK をクリックします。

MIME タイプの非アクティブ化または再アクティブ化

アイテムがリポジトリにインポートされないようにするには、MIME タイプを非アクティブにします。非アクティブ MIME タイプを持つリポジトリ・アイテムは尚もアクセスできますが、エンド・ユーザーはこれらを開く際に使用するプログラムを指定する必要があります。

MIME タイプは随時インアクティブまたは再アクティブにできます。

- ▶ MIME タイプを非アクティブまたは再アクティブにするには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「MIME タイプ」を選択します。
 - 2 MIME タイプのリストでプロパティの変更をクリックします。
 - 3 アクティブ設定を変更します。
 - MIME タイプを非アクティブにするには、「アクティブ」を選択解除して、「OK」をクリックします。トラフィック・ライト・アイコンが赤に変わります。
 - MIME タイプを再アクティブにするには、「アクティブ」を選択して、「OK」をクリックします。トラフィック・ライト・アイコンが緑に変わります。

MIME タイプの削除

MIME タイプの非アクティブ化とは異なり、削除は恒久的であり、関連付けられたアイテムに影響します。削除済の MIME タイプに関連付けられた拡張子を持つファイルをインポートできません。

削除済 MIME タイプに関連付けられたアイテムでは、テキストの不明ファイル・タイプが、MIME タイプ・アイコンのかわりに表示されます。ユーザーがこれらのアイテムを開く場合、実行可能なプログラムを選択するようメッセージが表示されます。

定義する MIME タイプは削除できますが、組込みの EPM WorkspaceMIME タイプは削除できません。

- ▶ MIME タイプを削除するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」>「管理」>「MIME タイプ」を選択します。
 - 2 MIME タイプの横にある削除をクリックします。

通知の管理

通知プロパティは、サブスクライブしているジョブおよびドキュメントの通知をユーザーが受け取る方法をコントロールします。

- [57 ページの「サブスクリプションと通知」](#)
- [59 ページの「通知プロパティの変更」](#)

サブスクリプションと通知

サブスクリプションと通知は、イベント・サービスが処理します。

次のトピックでは、イベント・サービスがサブスクリプションおよび通知を処理する方法について説明します。

- [58 ページの「サブスクリプションのタイプ」](#)
- [58 ページの「イベント・サービスが情報を取得する方法」](#)
- [58 ページの「通知のメカニズム」](#)

サブスクリプションのタイプ

ユーザーがサブスクライブして通知を受け取ることのできるサブスクリプションのタイプは、次の通りです。

- 「アイテムの新規バージョンまたは更新されたバージョン」
- 「フォルダ内の変更されたコンテンツ」
- 「ジョブの完了」
- 「ジョブの例外」

サブスクリプションとは関係なく、イベント・サービスは次のユーザーに通知を送信します。

- スケジュールされたジョブの所有者(ジョブの実行の終了時)
- バックグラウンド・ジョブを実行しているユーザー(ジョブの実行の終了時)

イベント・サービスが情報を取得する方法

ユーザーがアイテムまたはフォルダをサブスクライブすると、EPM Workspace は LSM を介してイベント・サーバーにサブスクリプション情報を送信し、イベント・サーバーは登録リストにサブスクリプションを追加します。

リポジトリ・サービスは、インポートおよび更新されたアーチファクトのリストを保持します。このリストには、すべてのインポートされたアイテム、フォルダおよびジョブの出力、変更されたアイテム・プロパティ、更新されたバージョン、およびアーチファクトのメタデータが含まれます。

リポジトリ・サービスのリストには、インポートまたは変更されたアイテムやフォルダ、およびそれらを含むフォルダの両方が含まれます。

60 秒ごとに、イベント・サービスは新規アイテムおよび変更されたアイテムのリポジトリ・サービスのリストを取得し、これらを登録リストと比較します。そこで、イベント・サービスは通知を登録ユーザーに送信します。

リポジトリ・サービスは、リストをイベント・サービスに渡した後で破棄します。イベント・サービスは、サブスクライブしたユーザーに変更を通知した後でリストを破棄します。

その他のサービスは、成功したジョブの実行など、サブスクリプションをトリガーする場合のあるアクションと比較するときに、イベント・サービスに通知します。イベント・サービスは、これらのイベントを登録リストに対してチェックして、登録者に通知を送信します。

通知のメカニズム

イベント・サーバーがユーザーに通知する方法は次の通りです。

- スマート・カットを埋め込んだ電子メールを送信して、アイテムやフォルダの変更、新規レポート出力、ジョブの完了、例外の発生についてユーザーに通知します。

ユーザーが「サブスクライブ」 ページで選択した通知方法に基づいて、イベント・サービスが添付ファイルを送信する場合があります(オプション)。

- スケジュール・モジュールでスケジュールされたジョブやバックグラウンド・ジョブの完了の通知を表示します。
- フォアグラウンドでジョブを実行後に、ジョブの完了の通知を表示します。
- `output.properties` が例外の発生を示す場合、「例外ダッシュボード」に赤いアイコンが表示されます。

例外が発生したら、ファイルのインポータは例外の発生を示し、例外メッセージを指定するプロパティを設定します。インポータは通常はジョブ・サービスであり、ファイルは通常はジョブの出力です。

例外には、次のいずれかのメソッドでフラグを付けることができます。

- Production Reporting コード
- ファイルまたはジョブの出力をインポートするユーザーによる手動設定
- ファイルまたは出力の例外プロパティを設定する API

Hyperion Interactive Reporting サービスは、例外をサポートしませんが、API または手動のメソッドを使用して、Interactive Reporting ドキュメントに例外を設定できます。

ユーザーは、個人用ページに例外ダッシュボードを含めるかどうか、および例外ダッシュボードに表示するジョブを選択します。

通知プロパティの変更

▶ 通知プロパティを変更するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」>「管理」>「通知」を選択します。
- 2 通知プロパティおよびメール・サーバーのオプションを変更します。

注：「電子メール添付の使用可能」または「添付ファイルの最大サイズ」プロパティを変更する場合、コア・サービスを再起動して設定を反映させる必要があります。サービスの開始は、[30 ページの「Reporting and Analysis サービスの開始」](#)を参照してください。

- 通知
 - **電子メール添付の使用可能** - エンド・ユーザーは、電子メールの通知と一緒に添付ファイルを送信できます。ジョブが1つの出力ファイルのみを生成する場合、そのファイルは電子メールに添付されます。ジョブがPDF ファイルを含む複数の出力ファイルを生成する場合、PDF ファイルが電子メールに添付されますが、PDF を含んで生成しない場合は、ファイルは添付されません。

- **添付ファイルの最大サイズ** - 添付できるファイルの最大サイズ(バイト単位)。
- **通知ログに記録を残しておく期間** - イベントが通知ログから除去され、エクスプローラ・モジュールに表示されなくなるまでの期間(分)。スケジュールされたジョブおよびバックグラウンド・ジョブの有効期限。

3 プロパティの保存をクリックします。

注： メール・サーバーを変更するには、管理者は構成ツールを使用する必要があります。

スマート・カットの管理

スマート・カットは、EPM Workspace でインポートされたドキュメントへの URL 形式のショートカットです。スマート・カット・プロパティを使用して、電子メール通知に含まれるスマート・カットを構築します。

スマート・カットの URL は次のようになります。

```
http://hostname:port/workspace/browse/get/Smartcut
```

次に例を示します。

```
http://pasts402:19000/workspace/browse/get/Patty/Avalanche_CUI_Style_Guidelines.pdf/
```

(または、スマート・カットは、http のかわりにhttps で始まる場合があります。)

▶ スマート・カットのプロパティを変更するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」>「管理」>「スマート・カット」を選択します。
- 2 「スマート・カット」プロパティを次の手順で変更します。

注： 「スマート・カット」プロパティを変更した場合、EPM Workspace サーバーおよびジョブ・サービスを再起動してこれらの設定を反映させる必要があります。

- 名前 - スマート・カットの Web コンポーネント
- 説明 - EPM Workspace の説明
- ホスト - UI サービスがあるホスト
- IP ポート - EPM Workspace が実行するポート番号
- ルート - Web サーバー・ソフトウェアの設定どおりの、EPM Workspace における Web アプリケーションの配置名

一般に、この名前はワークスペース/ブラウザです。後のセグメント(ブラウザ)は、インストール中に指定したサブレット名に一致する必要があります。

- 電子メールでの通知用スマート・カットのプロトコル - HTTP または HTTPS

3 プロパティの保存をクリックします。

行レベル・セキュリティの管理

行レベルのセキュリティにより、ユーザーは、どんな検索条件であっても、セキュリティ・プロファイルに一致するこれらのレコードのみを表示できます。また、管理者は、データベースの行レベルでデータにタグを付け、情報への読取りアクセス権のある人物をコントロールできます。行レベルのセキュリティは、従業員の給与、売上の歩合、または顧客情報など機密データを表示するアプリケーションにとって重要です。行レベルのセキュリティがない場合、インターネットやイントラネットを使用してユーザー・コミュニティに情報を配布する組織は、大きな損害を被ることがあります。

Reporting and Analysis で行レベルのセキュリティを実装する場合、次の点に注意してください。

- 少なくとも 1 つの Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのインスタンスを構成して、自分の行レベルのセキュリティ情報を保管するデータ・ソースにアクセスする必要があります。
- データベース・クライアント・ライブラリは、Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスが実行中のコンピュータ上にインストールされている必要があります。
- 行レベルのセキュリティ・テーブル情報を持つ Reporting and Analysis リポジトリにデータ・ソースを構成する必要があります。
- セキュリティ上の理由から、このデータソースにアクセスするユーザー名とパスワードは、Reporting and Analysis ユーザー・アカウントで使用するものとは別にしてください。

Interactive Reporting ドキュメントにおける行レベルのセキュリティ実装の詳細は、『Hyperion Interactive Reporting Studio ユーザー・ガイド』を参照してください。

行レベルのセキュリティのプロパティはリポジトリに保管されます。ただし、データへのアクセス権を付与する方法に関するルールは、データソースに保管されます。

▶ 行レベルのセキュリティのプロパティを変更するには、次の手順に従います。

1 「ナビゲート」>「管理」>「行レベルのセキュリティ」を選択します。

2 行レベル・セキュリティのプロパティを変更します。

- 「行レベルのセキュリティの使用可能」 - 行レベルのセキュリティは、デフォルトで使用不可になっています。
- 接続 - レポートのソース・データに関するデータベース接続情報。
- データベース・タイプ - 使用中のデータベースのタイプ。利用可能なデータベース・タイプは接続の選択によって異なります。
- データ・ソース名 - データ・ソースのデータベースのホスト。
- ユーザー名 - このデータ・サーバーで Production Reporting ジョブを実行中のジョブ・サービスによって使用されるデフォルトのデータベース・ユーザー

名であり、データベース・ユーザー名およびパスワードが指定されずにインポートされたジョブに対して使用されます。

- パスワード - ユーザー名に対して有効なパスワード。
- パスワードの**確認** - パスワードを再入力します。

3 プロパティの保存をクリックします。

システム使用追跡

使用追跡は、発生時に EPM Workspace のアクティビティに関する情報を記録し、システムの使用状況の履歴を表示します。この情報で次のような質問の回答が得られます。

- 昨日、誰がログインしたか?
- どの EPM Workspace レポートが最も頻繁にアクセスされているか?

複数のアクティビティを追跡するようにシステムを構成できます。たとえば、Interactive Reporting ドキュメントを開く、閉じる、および処理することの追跡、または Interactive Reporting ドキュメントを開くことのみを追跡できます。

アクティビティはリポジトリ・データベースにイベントとして記録されます。イベントは、相互にこれらを区別する妥当な詳細および情報と一緒に記録されます。イベントの時刻は GMT に保管されます。イベントは、構成可能な時間枠でデータベースから削除されます。

使用追跡サービスは、ユーザー・インタフェースに設定されたイベントを追跡するために実行中である必要があります。使用追跡サービスは複製可能であり、すべての使用追跡サービスが 1 つのデータベースにアクセスします。

使用追跡情報にアクセスするユーザー名およびパスワードは、EPM Workspace で使用されるものとは異なる場合があります。Oracle は、使用追跡は、リポジトリ・データベースの独自のスキーマを使用することを推奨します。ただし、代替のスキーマは必要ありません。使用追跡スキーマの構成の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

次のトピックでは、使用追跡およびイベント追跡について詳しく説明します。

- [62 ページの「使用追跡の管理」](#)
- [63 ページの「イベントおよびドキュメントの追跡」](#)
- [64 ページの「サンプルの使用追跡レポート」](#)

使用追跡の管理

使用追跡は管理モジュールおよび CMC を介して管理されます。構成可能プロパティはすべて、実行タイプを除き、管理モジュールで管理されます。実行タイプを変更するには、[172 ページの「CMC のプロパティの変更」](#)を参照してください。

▶ 使用追跡を管理するには、次の手順に従います。

1 「ナビゲート」>「管理」>「使用追跡」を選択します。

2 プロパティを変更します。

- 全般プリファレンス

- 使用追跡をアクティブにする - 使用追跡をオンにする場合に選択します。
- レコードを維持する期間_日 - この日数の経過後に、ガーベッジ・コレクション・ユーティリティで使用追跡イベントに削除マークを付けます。デフォルトは30です。
- レコードを削除する間隔_日 - この日数の経過後に、ガーベッジ・コレクション・ユーティリティを実行します。デフォルトは7です。

- 接続のプリファレンス - ユーザー名およびパスワードは使用追跡データベースから移入されます。これらは、データベースを移動する場合にのみ変更してください。

3 適用を選択します。

イベントおよびドキュメントの追跡

使用追跡サービスは、Reporting and Analysis で処理される、選択した MIME タイプ、ジョブ実行、ジョブの出力表示およびクエリーにおける、ログオン・インスタンス、ドキュメントを開く、ドキュメントを閉じる操作についての記録を保持します。使用追跡サービスは、イベントの追跡のためには実行中である必要があります。デフォルトでは、イベントは追跡されません。

▶ イベントを追跡するには、次の手順に従います。

1 「ナビゲート」>「管理」>「イベント追跡」を選択します。

2 追跡するイベントを選択します。

- 「システムへのログオン」
- 「データベースへのログオン」
- 「時間指定したクエリー・イベント」
- Interactive Reporting ドキュメントを開く
- Interactive Reporting ドキュメントの処理
- Interactive Reporting ドキュメントを閉じる
- Interactive Reporting ジョブの実行
- Interactive Reporting ジョブの出力の表示
- Production Reporting ジョブの実行
- Production Reporting ジョブの出力の表示
- 「汎用ジョブの実行」
- 「汎用ジョブの出力の表示」
- 「所有権の変更イベント」
- 「コピー・イベント」

- 3 ドキュメントを追跡するには、1 つ以上の使用可能な MIME タイプを選択した MIME タイプリストに移動します。

選択されている MIME タイプのドキュメントが開くたびに追跡が行われます。

- 4 適用をクリックします。

サンプルの使用追跡レポート

サンプルの使用追跡レポートでは、標準の EPM Workspace 使用レポートに即時アクセスできます。標準レポートを変更する、または独自のレポートを作成できます。

使用追跡レポートを生成する、Interactive Reporting ドキュメントである `sample_usage_tracking.bqy` は、エクスプローラの `¥Root¥Administration` `¥Usage Tracking` フォルダにあります。

- ▶ 「管理」フォルダを表示するには、「エクスプローラ」から「表示」>「再表示」を選択します。

注意 データと共に使用された場合、サンプル・レポートには機密の企業情報が含まれる場合があります。レポートをインポートする場合アクセス権を使用して、目的の人物のみがアクセスできるようにします。

異なるデータベース・スキーマを使用した使用追跡

一般に、使用追跡テーブルおよびビューは、Reporting and Analysis リポジトリ・テーブルと同じデータベース・スキーマにあります。ただし、使用追跡テーブルは、異なる場所に構成することもできます。インストール・パッケージから `CreateUT.sql`、`CreateUTViews.sql` および `populateUsageEventData.sql` スクリプトを使用して、新規のスキーマおよびビューについて基本の使用追跡テーブルを作成します。

- ▶ 異なる場所の新規のデータベース・スキーマに使用追跡テーブルを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 インストール・パッケージから `CreateUT.sql`、`CreateUTViews.sql` および `populateUsageEventData.sql` スクリプトを使用して、新規のスキーマに基本テーブルをインストールします。
 - 2 基本スキーマ・テーブルでは、新規ユーザーにアクセス権を割り当てます。

注： これは、次の手順に必須です。

- 3 次の例を使用した、使用追跡メカニズムに必要な追加的なデータ・ビューを用意しています。

注： この例は、ソース・スキーマのユーザーにデータ・アクセスを提供する1つのソリューションです。データベース管理者は、テーブルに別名を作成するなど、独自のソリューションを使用することもできます。

1. CREATE view V8_RESOURCE_BUNDLE AS SELECT * from source_schema.V8_RESOURCE_BUNDLE.
2. CREATE view V8_PROP_TYPE AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_TYPE
3. CREATE view V8_PROP_VALIDATOR AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_VALIDATOR
4. CREATE view V8_PROP_ENUM_VALUE AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_ENUM_VALUE
5. CREATE view V8_PROP_DEFN AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_DEFN
6. CREATE view V8_PROP_DEFN_CHILD AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_DEFN_CHILD
7. CREATE view V8_PROP_DEFN_ATTR AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_DEFN_ATTR
8. CREATE view V8_PROP_INTERNAL AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_INTERNAL
9. CREATE view V8_PROP_VALUE AS SELECT * from source_schema.V8_PROP_VALUE
10. CREATE view V8_AUTHEN_CONFIG AS SELECT * from source_schema.V8_AUTHEN_CONFIG
11. CREATE view V8_CSS_USER AS SELECT * from source_schema.V8_CSS_USER

ここで、source_schema はインストール済のアプリケーションで使用されるスキーマです。

このスクリプトは、基本スキーマ・テーブルのデータにアクセスできる多くの方法の一例に過ぎません。使用追跡メカニズムは、"V8_RESOURCE_BUNDLE"の別名および新規接続を使用して V8_RESOURCE_BUNDLE テーブル・データに接続します。

- 4 「ナビゲート」> 「管理」> 「使用追跡」を選択して、管理モジュールに新規のスキーマ接続を設定します。

すべてのオブジェクトの所有権の変更

所有者の変更により、管理者は、あるユーザー間ですべてのオブジェクトの所有者を変更できます。たとえば、あるユーザーが退職した場合、この機能を使用すると、このユーザーに以前割り当てられていたすべてのオブジェクトの所有権を新規ユーザーに再割り当てできます。オブジェクトには、ファイル、フォルダ、

ジョブ、ジョブの出力、スケジュール、イベントおよび物理リソースが含まれません。

- ▶ すべてのオブジェクトの所有権を変更するには、以下の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」 > 「管理者」 > 「所有権の変更」を選択します。
 - 2 「ユーザーの選択」を選択して、現在の所有者の名前を選択します。
 - 3 「所有者の変更」ダイアログからユーザーを選択して、「OK」を選択します。
 - 4 「ユーザーの選択」を選択して、新規所有者の名前を選択します。前の手順を繰り返します。
 - 5 「OK」を選択して変更を適用します。

BI Presentation Services

Oracle BI Presentation Services Administration 画面では、インストール済の Oracle BI EE 製品、およびインストール済の製品で実行可能な管理アクティビティに関する情報を提供します。製品情報およびアクティビティは、Oracle BI Presentation Services Administration 画面の 2 つの別々の領域に用意されています。製品情報には、使用中の製品のバージョン、現在のプレゼンテーション・カタログへのパス、および組織にライセンス供与されている機能リストへのリンクなど、現在のインストールが含まれます。追加情報は、利用可能なページング・メモリーおよび利用可能な仮想アドレス・スペースなど、Windows に対しても提供されます。アクティビティのセクションでは、管理機能へのリンクも提供されます。

追加情報は、Oracle BI Presentation Services の管理ガイドおよび Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 新機能ガイドを参照してください。

4

検索サービスと外部アプリケーションの統合

この章の内容

検索サービスについて	67
Oracle Secure Enterprise Search における Hyperion System 9 コネクタおよび ID プラグインの構成	67
System 9 検索サービス・データをその結果で使用するための Google OneBox の構成	70

検索サービスについて

検索サービスでは、ユーザーは EPM Workspace の任意のリポジトリからドキュメント、レポートおよびダッシュボードの検索および取得を行えます。検索の操作は、たとえば、ドキュメント名、作成日または作成者(Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition の Word または PDF ドキュメントのみ)など、ドキュメント固有のメタデータにおけるユーザーのキーワードの検索に基づいた結果、およびドキュメントからのコンテンツベースの情報の抽出に基づいた結果のリストを戻します。

検索サービスは、外部のアプリケーションおよびサービスと統合できます。コネクタは、Oracle Secure Enterprise Search および Google OneBox で利用可能です。

検索サービスの使用に関する詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』の"検索サービスの使用方法"を参照してください。

Oracle Secure Enterprise Search における Hyperion System 9 コネクタおよび ID プラグインの構成

このセクションでは、次のトピックについて説明します。

68 ページの「プラグイン jar ファイルの配置」

68 ページの「ID プラグインの構成」

68 ページの「コネクタ・プラグインの構成」

70 ページの「検索」

プラグイン jar ファイルの配置

- ▶ Oracle Secure Enterprise Search でプラグイン.jar ファイルを配置するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle Secure Enterprise Search のデフォルトのインストールを行います。
- 2 次のディレクトリを作成します。

ORACLE_HOME/search/lib/plugins/System9

- 3 HYPERION_HOME/common/Search/9.5.0.0/lib/SES から、前に作成したディレクトリにすべてのファイルをコピーします。

ID プラグインの構成

- ▶ ID プラグインを構成するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle Secure Enterprise Search Administration ページにログインします。
- 2 「グローバル設定」を選択します。
- 3 「アイデンティティ管理設定」を選択します。
- 4 「新規 ID プラグインの登録」を選択します。
- 5 次の詳細を入力します。

クラス名 -

com.hyperion.wsearch.ses.identity.WorkspaceIdentityPluginManager

jar ファイル名 - ../System9/workspace-identity.jar

- 6 「終了」をクリックします。

WorkspaceIdentityPluginManager がリストに表示されます。

- 7 **WorkspaceIdentityPluginManager** を選択して、「アクティブにする」をクリックします。

- 8 次の詳細を入力して、「終了」をクリックします。

接続プロトコル - http または https

ワークスペース・ホスト - EPM Workspace を実行中のマシンのホスト名または IP アドレス

ワークスペース・ポート - EPM Workspace のポート

コネクタ・プラグインの構成

- ▶ コネクタ・プラグインを構成するには、次の手順に従います。

- 1 Oracle Secure Enterprise Search Administration ページにログインします。
- 2 「グローバル設定」を選択します。
- 3 「ソース・タイプ」を選択します。
- 4 「作成」をクリックして、次の詳細を入力します。

名前 - EPM Workspace

説明 - EPM Workspace クローラ・プラグイン

クラス名 -

`com.hyperion.wsearch.ses.crawler.WorkspaceCrawlerPluginManager`

jar 名 - `System9/workspace-connector.jar`

5 「次へ」をクリックしてから、「終了」をクリックします。

6 「ホーム」をクリックしてから、「ソース」をクリックします。

7 **EPM Workspace** を選択し、「作成」をクリックして、次の詳細を入力します。

ソース名 - このインスタンスの名前

すぐにクロール開始 - このオプションを「選択解除」します。

GSM ユーザー名 - EPM Workspace のグローバル管理者権限を持つユーザー名

GSM パスワード - このユーザーのパスワード

ワークスペース・ホスト - EPM Workspace を実行中のマシンのホスト名または IP アドレス

ワークスペース・ポート - EPM Workspace のポート

8 「作成およびカスタマイズ」をクリックします。

9 「認可」を選択します。

10 「ソース別にコントロールされる ACL」をチェックします。

11 「認可マネージャ」で、次の詳細を入力します。

クラス名 -

`com.hyperion.wsearch.ses.crawler.filter.WorkspaceAuthorizationManager`

jar ファイル - `System9/workspace-connector.jar`

12 「パラメータの取得」を選択して、次の詳細を入力します。

ワークスペース・ホスト - ワークスペースを実行中のマシンのホスト名または IP アドレス

ワークスペース・ポート - EPM Workspace のポート

13 「適用」をクリックします。

14 「クローラ・パラメータ」を選択して、次の詳細を変更します。

クローラ・スレッド数 - 1

クローラのタイムアウトしきい値(秒) - 300

15 「適用」をクリックします。

EPM Workspace SES コネクタが設定されました。「スケジュール」タブのスケジュールを変更し、SES コネクタを使用して、手動でクローラを起動できます。

16 「開始」をクリックして、スケジュールされたクローラでドキュメントがインデックス付きであることが確認された後に、利用可能なログ・ファイルをレビューします。

検索

- ▶ 検索を行うには、次の手順に従います。
- 1 インストール後に与えられた検索アドレスに進みます。
- 2 EPM Workspace ユーザー名およびパスワードを使用してログインします。
- 3 希望する情報を検索します。

System 9 検索サービス・データをその結果で使用する ための Google OneBox の構成

System 9 OneBox モジュールにより、Google 検索アプライアンスは System 9 検索サービスで収集されたデータから検索結果を戻すことができます。System 9 OneBox モジュールは、EPM Workspace Web アプリケーションの一部として実行するサーバーレットから構成されています。

操作概要

System 9 OneBox モジュールは、Google 検索アプライアンスの外部モジュールとして構成されます。ユーザーが、安全かつ公開されたコンテンツを要求して、Google 検索アプライアンスに検索要求を発行した場合、Google 検索アプライアンスは、必要に応じて認証情報を要求し、各構成された外部のモジュールを呼び出します。各モジュールは、任意の情報およびクエリーの値に基づいて独自の検索を実行し、名前、および検索結果を表示可能な URL を含む、Google 検索アプライアンスに標準のフォーマットで結果を戻します。

System 9 OneBox モジュールが検索要求を受け取ったら、その要求を送信中のユーザーを認証して、そのユーザーがすでに System 9 で開いたセッションがあるかどうかをチェックします。ない場合は、セッションを作成します。OneBox モジュールは次に、その検索結果を System 9 検索サービスに検索要求を送信し、その結果を Google 検索アプライアンスに標準のフォーマットで送信します。このモジュールには、ユーザーの System 9 シングルサインオン・トークンが含まれるため、その結果で戻されたドキュメントは、System 9 に再びログインする必要なく、検索結果から開くことができます。

System 9 OneBox モジュールを呼び出すための Google 検索アプライアンスの構成

OneBox モジュールは、既存または新規のフロント・エンドに作成および追加される必要があります。この処理の詳細は、Google 検索アプライアンスの管理ページのオンライン・ヘルプを参照してください。

- ▶ System 9 OneBox モジュールを呼び出すように、Google 検索アプライアンスを構成するには、次の手順に従います。

- 1 Google 検索アプライアンス管理インターフェースにログインします。

`http:<gsa host>:8000/EnterpriseController`

- 2 ページの左側のメニューから、「提供」を選択してから、「OneBox モジュール」を選択します。

- 3 「OneBox 名」で、OneBox モジュールの名前を入力し、「モジュール定義の作成」をクリックします。

新規のページが、モジュール情報の残りを入力できる場所に表示されます。

- 4 「プロバイダ」で、「外部プロバイダ」をクリックし、次の手順で System 9 OneBox モジュールの URL を入力します。

`https:/<ワークスペース・ホスト>:<保護されたワークスペース・ポート>/workspace/onebox`

- 5 尚も「プロバイダ」で、「検索ユーザー・アクセス・コントロール」に進み、「基本」を選択します。

- 6 「OneBox 定義の保存」をクリックします。

- 7 モジュールのリストで System 9 OneBox モジュールを見つけて、「編集」をクリックします。

- 8 OneBox スタイルシート・テンプレートで、「XSL の編集」をクリックし、「インポート」をクリックして、`System9-onebox.xsl` をインポートします。

このファイルは、System 9 の一部としてインストールされ、`$HYPERION_HOME/Common/Search/9.5.0.0/lib/OneBox` で見つけることができます。

- 9 「XSLT スタイルシートの保存」をクリックします。

System 9 OneBox モジュールを既存のフロント・エンドに追加するか、または新規のフロント・エンドを作成するかどうかをここで決定する必要があります。

- ▶ 新規のフロント・エンドを作成するには、次の手順に従います。

- 1 ページの左のメニューから、「フロント・エンド」を選択します。

- 2 「フロント・エンド名」で、新規のフロント・エンドの名前を入力し、「新規のフロント・エンドの作成」をクリックします。

- 3 新規のフロント・エンドの右で、「編集」をクリックします。

新規のページが、フロント・エンド情報の残りを入力できる場所に表示されます。

- 4 「OneBox モジュール」をクリックします。

- 5 「使用可能なモジュール」で、System 9 OneBox モジュールを選択し、これを「選択済モジュール」に転送します。

- 6 「設定の保存」をクリックします。

- ▶ モジュールを既存のフロント・エンドに追加するには、前述の手順に従います。手順3では、希望するフロント・エンドの横にある「編集」を選択します。

注： フォーマット、KeyMatch、関連クエリー、フィルタ、および URL の削除のための構成アイテムは、これらの指示のスコープ外になります。System 9 OneBox モジュールを使用するために、Google 検索アプライアンスでこれらを変更する必要はありません。これらのアイテムの詳細は、Google 検索アプライアンスのドキュメントを参照してください。

System 9 OneBox モジュールの構成

System 9 OneBox モジュールはインストールされているとおりに機能しますが、特定のインストールで必要な場合は、調整される場合があります。これらのパラメータは、次のすべてのサーブレット初期化パラメータです。

```
$HYPERION_HOME/deployments/<AppServer>/Workspace/webapps/workspace/WEB-INF/web.xml
```

パラメータは、OneBoxServlet の定義にすべて含まれます。

表 3 System 9 OneBox モジュール・パラメータ

パラメータ	説明
MaxResults	Google 検索アプライアンスに戻された最大の検索結果の数。 数字は、System 9 OneBox が結果を取得する時間がなくなるまで増加します。
ResultChunk	Google 検索アプライアンスのハード限定タイムアウト内に戻されたチャンクのサイズ。 少なくとも一部の結果が、確実に Google 検索アプライアンスのハード限定タイムアウト内に戻されるようにするため、その結果は、MaxResults パラメータの設定に関係なく、より小さいチャンクの検索サービスから取得されます。 たとえば、MaxResults=150 および ResultChunk=10 である場合、System 9 OneBox モジュールは、結果 1-10、11-20、...、141-150 を徐々に要求します。これで、すべて 150 になるまで戻す結果が常にいくらかあることとなります。
ResponseTimeout	System 9 OneBox モジュールが、現在の呼出しを検索サービスまで終了し、取得した結果をフォーマットして、これらを Google 検索アプライアンスに戻すための時間。 Google 検索アプライアンスでは、各外部モジュールは最大 3 秒でその結果を戻すことができ、その後、実績なしと仮定します。System 9 OneBox モジュールは、すべての使用可能な結果が取得される、構成済の結果の最大数が取得される、または、Google 検索アプライアンスが、System 9 OneBox モジュールが処理時間が長すぎて結果を無視していると想定される危険性がある、のいずれかの時まで、結果の小さいチャンクを取得することにより機能します。 遅いまたはビジーなネットワークは ResponseTimeout への調整が必要である場合があります。 ResponseTimeout の値は、1000 分の 1 秒(ミリ秒)内です。

パラメータ	説明
SessionTimeout	<p>タイムアウトおよび終了になるまでに自動的に作成されるセッションがアイドル状態になりうる期間。</p> <p>System 9 OneBox モジュールは、検索要求を送信する各ユーザーに対して System 9 セッションを作成するため、任意の戻されたドキュメントは、再びログインせずに開くことができます。</p> <p>SessionTimeout の値は、1000 分の 1 秒(ミリ秒)内です。</p>

5

インパクト・マネージャ・サービスの使用方法

この章の内容

はじめに.....	75
インパクト・マネージャ・サービスについて.....	76
インパクト・マネージャ評価サービス.....	76
インパクト・マネージャ更新サービス.....	77
インパクト・マネージャ・モジュールのサイズおよび時間に関するガイドライン.....	79
Update Services の実行.....	80
インパクト・マネージャ・サービスへのアクセス.....	81
メタデータの同期機能.....	81
データ・モデルの更新機能.....	83
JavaScript の更新機能.....	87
カスタム更新機能.....	91
SortDataModelTopics スクリプトの使用方法.....	91
高度なスクリプト.....	95
対話型レポートへの接続.....	109
「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの使用方法.....	111
タスクの管理.....	113
「変更の影響の表示」対話型レポートの使用方法.....	117
新規データ・モデルの作成.....	119
列のデータ型の変更.....	124
互換性のある置換データ・モデルとドキュメント文字セット.....	125
Interactive Reporting ドキュメントのユーザー名とパスワードの変更.....	126
サービス構成パラメータ.....	126
変更の影響レポートの使用方法.....	127

はじめに

インパクト・マネージャ・モジュールと一緒に紹介されたインパクト・マネージャ・サービスでは、メタデータ上で収集およびレポートが可能となり、インポートされたドキュメントを使用するデータ・モジュールを更新することができます。インパクト・マネージャ評価サービスおよびインパクト・マネージャ更新サービスは、これらのタスクを実行します。タスクの結果は、「タスク・ステータスの表示」、および「変更の影響の表示」対話型レポートで表示され、「タスク・リストの管理」対話型レポートで管理されます。

インパクト・マネージャ・サービスについて

インパクト・マネージャ・モジュールは、インパクト・マネージャ評価サービスおよびインパクト・マネージャ更新サービスの2つのサービスから構成されています。さらに、「タスク・ステータスの表示」、「タスク・リストの管理」および「変更のインパクトの表示」の3つの対話型レポートも提供します。

インパクト・マネージャ・サービスは、フォールト・トレラントです。たとえば、予定外のシステム・シャットダウンの後、未完になったタスクを検出して終了します。

インパクト・マネージャ・サービスの配置は柔軟です。たとえば、その機能は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System クラスタのコンピュータ上、またはクラスタに最近追加されたコンピュータ上でインストールできます。

インパクト・マネージャ・サービスは、拡張可能です。たとえば、1つのコンピュータ上、または複数のコンピュータ上で実行して、パフォーマンス要件の拡大を受け入れます。

インパクト・マネージャ評価サービス

インパクト・マネージャ評価サービスは、インポートしたドキュメントを解析し、メタデータを抽出および保管します。メタデータには、ドキュメントにあるセクション、各データ・モデル、クエリーおよび結果セクションによって使用されるテーブルおよび列、およびセクションの従属関係が含まれます(たとえば、結果 A はデータ・モデル C に依存するクエリー B に依存する)。

インパクト・マネージャのメタデータについて

インパクト・マネージャで管理されるメタデータは、ドキュメント構造に関する情報です。その例として、ドキュメントのクエリー、これらのクエリーで使用されるテーブルおよび列などが挙げられます。このメタデータは、インパクト・マネージャ・ハーベスタによって収集され、System 9 リポジトリ・テーブルと平行してテーブル形式に保管されます。

インパクト・マネージャ・ハーベスタは、自動的に、または管理者がスケジュールする場合にのみ実行するよう設定できます。デフォルトでは、管理者がスケジュールする場合にのみ実行するよう設定されています。インパクト・マネージャ・ハーベスタが自動的に実行するよう設定するには、管理者モジュールの「全般プロパティの管理」で「ハーベスティングの使用可能」の設定を変更します。

自動ハーベスティングが使用可能である場合、インパクト・マネージャ・ハーベスタは、手動で対話することなく、バックグラウンドで新規および変更済ファイルを調査します。これらのドキュメントメタデータは、ドキュメントが発行または変更されてから記録されます。

自動ハーベスティングが使用可能でない場合は、ハーベスタが実行された最終回以降の発行済または変更済ファイルからのメタデータは、インパクト・マネージャ・ハーベスタが再び実行するまで、記録されません。インパクト・マネージャ・ハーベスタを手動で実行する方法の指示は、「メタデータ機能の同期」の xx ページを参照してください。

注： リリース 9.5 では、Interactive Reporting ドキュメントおよび Web 分析レポートのみが取得されます。

注： これらのデフォルトのハーベスタの設定は、構成と監視コンソール(CMC): 使用可能済、要求ログの最大時間、スレッド・プール・サイズ、ポーリング間隔、およびキューの最大時間で定義されます。これらの設定の詳細は、[第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」](#) を参照してください。

インパクト・マネージャ更新サービス

インパクト・マネージャ更新サービスは、変換と言われる事前に記述された指示に応じて、インポートされたドキュメントを更新する責任があります。

注： リリース 9.5 では、Interactive Reporting ドキュメントのみが更新されます。

データ・モデルの更新変換

データ・モデルの更新変換を使用して、1つ以上のデータ・モデル・セクションを別なデータ・モデルと置き換えます。変換が最も有益なのは、データベースを使用しているドキュメントの破損の原因となるような、データベースが変更する場です。変換は、使用している明確に異なるデータ・モデルの数を減らし、将来のアップグレードへの適応が可能です。

データ・モデルとクエリーのリンク

データ・モデル・セクションは、クエリー・セクションによってのみ参照されます。したがって、新規データ・モデルがクエリー・セクションに正しく添付できている限り、ドキュメントの残りは引き続き期待通りに機能します。

クエリー・セクションとデータ・モデル・セクション間の連結は、データ・モデル・セクションで公開されるテーブルおよび列の名前に基づいて、記号による参照を経由します。フィルタに関するより複雑な従属関係が少し存在しますが、連結は基本的に名前に依存します。2つのデータ・モデルがクエリーによって必須である名前、たとえば、要求およびフィルタ行で使用されるこれらの名前を公開する場合は、いずれかのデータ・モデルがそのクエリーをサポートできます。データ・モデル A がデータ・モデル B と同等かそれより多くの名前を公開する場合、A は B の有効な置換になります。

論理名のコンセプトは極めて重要です。データ・モデル・セクションは、データベース・テーブルおよび列の名前を論理名に換算します。生成された名前は、アンダースコアを置き換えるスペースを持つデータベースの名前です。各言葉の最初の文字は、デフォルトで大文字になっていますが、論理名はユーザーが変更できます。テーブルがデータ・モデルで 2 度使用されている場合、2 番目のインスタンスに生成された論理名は数字を追加します。したがって、Dept テーブルがデータ・モデルで 2 度表示される場合、2 番目のインスタンスは Dept2 と呼ばれます。クエリーで参照される名前は、常にデータ・モデルの論理名です。

データ・モデルの更新変換は、タスクを実行するデータベース名とは独立してた論理名を使用することで、記号による連結を活用します。

データ・モデルの更新ワークフロー

1. 元のドキュメントがインポートされます。
2. ドキュメントはインポートの一部として、または同期操作を介して取得されます。
3. ドキュメントは、データベースの必要条件が変更されるまで、毎日のタスクの実行で使用されます。
4. 「変更の影響」レポートを使用して、変更の影響を受けるドキュメントを特定します。
5. データ・モデルを作成して、影響を受けるインポートされたドキュメントを更新します。
6. ドキュメントと置換データ・モデルは、インポートの一部として、または同期操作を介して取得されます。
7. 変換パラメータが指定されます。
 1. データベースの変更の影響を受ける、データ・モデルを含むサンプル・ドキュメントを選択します。
 2. 置換データ・モデルを選択します。
 3. インパクト・マネージャ・モジュールは、手順 7a で選択したドキュメントと同様のデータ・モデルを含むすべての **Interactive Reporting** ドキュメントを表示します。これが変換対象のドキュメントになります。
 4. ドキュメントのサブセットが選択され、変換待ちのキューに格納されるタスクが構成されます。
8. 変換は、インパクト・マネージャ・タスクのすべてのドキュメントに適用されます。
 1. ドキュメントがリポジトリから取得されます。
 2. 変換が実行されます。
 3. 変換されたドキュメントは、元のドキュメントの新規バージョンとして再インポートされます。
9. ドキュメントは新規データベース定義で使用可能です。

JavaScript の更新ワークフロー

1. 更新するドキュメントを作成します。
2. `newsections.bqy` や構成ファイルなどのドキュメントをリポジトリにインポートします(これらの2つのファイルが用意されているデフォルト・ファイルより新規バージョンの場合)。
3. 更新対象として、`newsections.bqy` や構成ファイルなどのインポートしたドキュメントを選択します。

4. ドキュメントを更新します。ドキュメントが更新されると、元のドキュメントの新規バージョンが作成され、元のフォルダに保存されます。

カスタム更新ワークフロー

カスタム更新では、更新プロセスをカスタマイズできます。そのため、ワークフローは、選択したスクリプトやパラメータによって異なる場合があります。

1. ドキュメントとカスタマイズしたスクリプト(該当する場合)をインポートします。
2. スクリプトを指定します。カスタム更新の残りの部分は、スクリプトに必要なパラメータで決まります。
3. パラメータを選択し、定義します。
4. パラメータが関連付けられているスクリプトの実行を監視します。
5. ドキュメントが更新されます。更新に成功したドキュメントごとに、バージョンまたは新規ドキュメントが追加されます。

インパクト・マネージャ・モジュールのサイズおよび時間に関するガイドライン

インパクト・マネージャ・モジュールは、共通リポジトリにインポートされた Interactive Reporting ドキュメントからメタデータ情報を取得できる場合にのみデータ・モデルの更新を実行できます。情報はドキュメントのインポート時または管理者による同期操作の要求時に取得できます。取得したメタデータは、"V8_H_"で始まる 28 個のテーブルに格納されます。

同期操作を行うと、[メタデータの同期機能](#)によって、インポートしたすべてのドキュメントが調べられます。ドキュメントのメタデータが V8_H_テーブルに存在しない場合またはドキュメントが V8_H_テーブル内のメタデータより新しい場合は、メタデータを取得する必要があります。

Interactive Reporting ドキュメントの取得に必要な時間と情報の保管に必要な領域は、Interactive Reporting ドキュメントの構造の複雑さによって異なります。取得処理ではデータを調べないため、単純で大きな Interactive Reporting ドキュメント(たとえば、クエリー・セクションと結果セクションのみ含むドキュメント)の取得に必要な時間と領域は、多数のクエリー、結果、ピボット、チャート、レポートおよびダッシュボード・セクションを含む小さな Interactive Reporting ドキュメントに必要な時間と領域の数分の一です。

様々なドキュメントを取得して観察された結果を次に示します。

約 800 個のドキュメントのランダムな集合:

- ドキュメントの取得の平均所要時間 - 15 秒
- ドキュメントの平均サイズ - 30 KB

複雑なドキュメントの集合:

- ドキュメントの取得の平均所要時間 - 60 秒

- ドキュメントの平均サイズ - 150 KB

領域不足の問題が発生しないようにするために、インポートするドキュメント当たり 100 KB の領域を割り当てることをお勧めします。各バージョンはドキュメントであるため、サイズを割り当てる際にこれらを考慮することを忘れないでください。

1,000 個のドキュメントを格納したリポジトリの同期処理は、完了までに 4 時間以上かかる場合があります。

Update Services の実行

ユーザー・インタフェースでは、タスクがインパクト・マネージャ・サービスに送信されます。受信されたタスクは、一元管理された場所にあるキューに格納され、実行中のサービス・インスタンスの優先度に従って送信されます。タスクを元に戻す処理は、他のすべてのタスクよりも優先度が高いため、確実に最初に実行されます。詳細は、[114 ページの「元に戻す機能の使用法」](#)を参照してください。

タスクが送信されると、インパクト・マネージャ・サービスは割り当てられているタスク番号が表示される確認ダイアログ・ボックスで受信を確認します。

送信と実行はバックグラウンドで行われ、「タスク・ステータスの表示」を使用して監視できます。

アクション数の多い(変換するドキュメント数の多い)タスクは、サービスの使用可能なすべてのインスタンスに送信される個々のアクションと並行して実行されます。

インパクト・マネージャ・サービスは、変換される各ドキュメントのログ・データを保管します。ログはサーバー・ログ・ファイルおよびユーザー・インタフェース(「タスク・ステータスの表示」)で使用可能です。ログ内のメッセージ数は、サーバー・ログの場合は Log4J 構成ファイルによってコントロールされ、ユーザー・ログの場合はタスクの送信中にコントロールされます。詳細は、[スクリプト・ロギング・レベル](#)を参照してください。

注：ハーベスタ・サービスとトランスフォーマ・サービスのサーバー・ログ(server_messages_HarvesterService.log ファイルと server_messages_TransformerService.log ファイル)のメッセージの数とフォーマットは、Log4J 構成ファイルでコントロールします。一方、EPM Workspace でダブルクリックしてアクセスできるユーザー・ログのフォーマットは固定されています。ただし、ユーザーはメッセージの数を変更できます。

スクリプト・ロギング・レベル

スクリプトは、ログ・メッセージを使用してユーザーとやり取りします。EPM Workspace では、「タスク・ステータスの表示」リストからログにアクセスします。デスクトップ上では、ユーザーは Interactive Reporting Studio で dds.log を表示します。

多数のロギング・レベルが定義されています。その例を次に示します。

5-debug = 多数のメッセージ

0-Always = 少数のメッセージ

表 4 に各レベルの説明を示します。

表 4 ロギング・レベル

レベル	説明
デバッグ	スクリプトの開発中に発生したことを確認するか、問題を特定するために使用します
Warn	修正を必要とする、回復可能な問題を警告します
エラー	要求された処理を正しく実行できないことを示します
致命的	スクリプトが続行できないことを示します
常時	常に表示されるメッセージです

これらの各レベルのメッセージは、env メソッドを使用してロギングできます。たとえば、env.logInfo()、env.logDebug()などがあります。

スクリプトの実行に関連付けられたデフォルトロギング・レベルもあります。env.log()メソッドは、そのレベルのメッセージをロギングします。デフォルト・レベルは、最初はデバッグですが、env.setLogLevel()を使用して変更できます。

メソッドによって戻される値は JavaScript と Java オブジェクトの組合せであるため、env.logClassName()メソッドはオブジェクトのタイプに関する情報を提供しません。

インパクト・マネージャ・サービスへのアクセス

インパクト・マネージャ・サービスにアクセスできるのは、BI+管理者の役割と適切なライセンスを持つユーザーのみです。

EPM Workspace に初めてログオンした場合は、「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択してオプションを選択します。

メタデータの同期機能

メタデータの同期機能を使用すると、リポジトリに保管されている Interactive Reporting ドキュメントのメタデータが最新の状態に保持されます。相違のあるドキュメントのみ再取得されます。管理モジュールの「全般プロパティの管理」で「ハーベスティングの使用可能」が選択されている場合は、同期アクションは必要ありません。このオプションを選択するには、「ナビゲート」の「管理」を選択し、「全般」を選択して「ハーベスティングの使用可能」を選択します。

同期機能で使用可能な唯一のオプションは、同期を実行するタイミングです。同期を今すぐ実行するか、操作を後で行うようにスケジュールします。詳細は、82 ページの「[「今すぐ実行」オプションの使用方法](#)」および82 ページの「[「スケジュール」オプションの使用方法](#)」を参照してください。

注： 過去の日時を指定して同期操作をスケジュールすることは、今すぐ同期操作を実行するように要求することと同じです。

「今すぐ実行」オプションの使用方法

このオプションを選択すると、要求時に同期を処理できます。

▶ メタデータの同期を今すぐ実行するには、次の手順に従います。

1 EPM Workspace で、次のいずれかのアクションを行います。

- ファイルを EPM Workspace にインポートして、メタデータを取得します
- すでに EPM Workspace にインポートされているファイルにアクセスします

2 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「メタデータの同期化」を選択します。

「メタデータの同期化」が表示されます。

3 今すぐ実行を選択します。

4 送信をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

5 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

6 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

タスク要求番号のステータスを確認して、同期が正常に行われたかどうかを確認します。

7 オプション: タスク要求番号のステータスを確認するには、フィルタを設定します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してハーベスタを選択します。
2. プロセスをクリックします。

「タスク・ステータスの表示」にタスクが表示されます。

1. 待機していますと表示された場合は、リフレッシュをクリックします。
「待機しています」からタスクを更新すると、時間がかかる場合があります。
2. 成功と表示された場合は、「ファイル」の「閉じる」を選択し、「現在」を選択します。
3. 失敗と表示された場合は、タスクをダブルクリックしてログを確認します。

「スケジュール」オプションの使用方法

このオプションを選択すると、指定した日時に同期をプロセスできます。

▶ メタデータの同期をスケジュールするには、次の手順に従います。

1 EPM Workspace で、次のいずれかのアクションを行います。

- ファイルを EPM Workspace にインポートして、メタデータを取得します
 - すでに EPM Workspace にインポートされているファイルにアクセスします
- 2 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「メタデータの同期化」を選択します。

「メタデータの同期化」が表示されます。
 - 3 スケジュールを選択します。

日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。
 - 4 日付を選択します。

カレンダー・コントロールが表示されます。
 - 5 時間を選択します。
 - 6 送信をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。
 - 7 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。
 - 8 タスク要求のステータスを監視するには、「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。
 - 9 オプション: 監視プロセスを調整するには、フィルタを設定します。
 1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してハーベスタを選択します。
 2. プロセスをクリックして、同期操作のステータスを監視します。

メタデータを今すぐ実行する場合も後で実行するようにスケジュールする場合も、「送信」をクリックすると、[インパクト・マネージャ評価サービス](#)は要求を受信し、数値の要求識別子を戻します。識別子は、インパクト・マネージャ評価サービスのタスク・ログのフィルタに使用されます。詳細は、[111 ページの「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの使用法](#)を参照してください。

インパクト・マネージャ評価サービスがメタデータを同期すると、最後の同期後に変更されたドキュメントまたはメタデータを含まないドキュメントのみが取得されます。

データ・モデルの更新機能

データ・モデルの更新機能では、ドキュメント内のデータ・モデルを更新して、基になるデータベースの変更を反映できます。更新するデータ・モデルを選択し、元のデータ・モデルと置き換える新規データ・モデルを指定する必要があります。データ・モデルは2つの方法で更新できます。

最初のオプション「データ・モデルとすべて一致する」は限定的で、元のデータ・モデルに含まれているすべてのテーブルとそれ以上のテーブルが置換データ・モデルに含まれている必要があります。これは完全なデータ・モデル一致です。

2つ目のオプション「クエリー要求のみと一致する」のほうが柔軟性があります。置換データ・モデルに必要なのは、元のデータ・モデルに関連付けられているクエリーを満たすことのみです。そのため、置換データ・モデルには、クエリー要求ラインで参照されるテーブルと列、クエリー・フィルタおよびソート列のみ含まれている必要があります。元のデータ・モデルがマスター・データ・モデルの

場合、置換データ・モデルは、マスター・データ・モデルに関連付けられているすべてのクエリーの要求ライン、フィルタおよびソート列を満たしている必要があります。これは、「データ・モデルとすべて一致する」よりは要件が厳しくありません。

データ・モデルの指定

この手順では、元のドキュメント・データ・モデルと置換ドキュメント・データ・モデルを指定します。インパクト・マネージャ・モジュールの画面を使用して対話的に指定するか、事前に生成されたリストから指定できます。

注： 両方のデータ・モデルを含むドキュメントを取得しておく必要があります。選択したドキュメントが取得されていない場合は、エラーが表示されます。詳細は、[81 ページの「メタデータの同期機能」](#)を参照してください。

▶ ドキュメントとデータ・モデルを指定するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「データ・モデルの更新」を選択します。

「データ・モデルの指定」が表示されます。

- 2 「タスク・ステータスの表示」でタスクを識別できるように、タスクの説明を入力します。

デフォルトの説明が用意されています。

- 3 次のいずれかのアクションを行います。

1. 対話型でドキュメントとデータ・モデルを指定するを選択し、オプションを選択します。

1. データ・モデルとすべて一致するを選択します。

- 「元のデータ・モデルを含むファイルを選択してください」の横にある「参照」をクリックし、ファイルがインポートおよび同期済 Interactive Reporting ドキュメントであることを確認します。
- ドロップダウン・リストから元のデータ・モデルを選択します(データ・モデル・セクションは、クエリー・セクションの作成時に作成されます。データ・モデル・セクションは一意的なセクションとして表示できないため、ユーザーはデータ・モデルが個別のセクションにデフォルト名で存在することに気付かない場合があります。「マスター・データ・モデルにレベルを上げる」を使用してデータ・モデル・セクションを表示し、データ・モデルを新規クエリーで再利用できるようにします。更新するデータ・モデルを簡単に指定できるように、ドロップダウン・リストのデータ・モデルの後にクエリー名が表示されます。詳細は、[77 ページの「データ・モデルとクエリーのリンク」](#)を参照してください)。
- 「置換データ・モデルを含むファイルを選択してください」の横にある「参照」をクリックし、ファイルがインポートおよび同期済 Interactive Reporting ドキュメントであることを確認します。

- リストから置換データ・モデルを選択します(たとえば、「スーパーセット・データ・モデル(スーパーセット・クエリー)」を選択します)。
 - 「次へ」をクリックして「候補」に移動します。
2. クエリー要求のみと一致するを選択します。
 - 「置換データ・モデルを含むファイルを選択してください」の横にある「参照」をクリックし、ファイルがインポートおよび同期済 Interactive Reporting ドキュメントであることを確認します。
 - リストから置換データ・モデルを選択します(たとえば、「サブセット・データ・モデル(サブセット・クエリー)」または「スーパーセット・データ・モデル(スーパーセット・クエリー)」を選択します)。
 - 「次へ」をクリックして「候補」に移動します。
 2. ドキュメントとデータ・モデルの事前に生成されたリストを使用するを選択します。
 1. 「タスク定義ファイルの選択」の横にある参照をクリックします。

タスク定義ファイルは、変換するドキュメント当たり 1 行のテキストを含むテキスト・ファイルです。したがって、10 個のドキュメントを更新する場合、ファイルには 10 行含まれます。各行には、`parameter1="value1", parameter2="value2"`のように、スクリプトの実行に必要なパラメータをカンマで区切って記述します。値は変換の UUID とデータ・モデルです。ほとんどのファイルには 1 行当たり多数のパラメータが必要です。バッチ更新を実行するユーザーは、Interactive Reporting ドキュメントを使用してドキュメントのリストをコンパイルし、パラメータ・ファイルを生成します。詳細は、[118 ページの「パラメータ・ファイルの生成」](#)を参照してください。
 2. 次へをクリックして「スケジュール」に移動します。

更新対象のデータ・モデルの表示

この手順では、変換対象のドキュメントとデータ・モデルを表示します。これは、指定した元のデータ・モデルと同じデータ・モデル(「データ・モデルとすべて一致する」を選択した場合)または置換データ・モデルと互換性のある、クエリーをサポートするデータ・モデル(「クエリー要求のみと一致する」を選択した場合)です。

注： 便宜上、データ・モデルの更新サービスでは、互換性のあるすべてのデータ・モデルが検索されます。それらのデータ・モデルの一部またはすべてを同時に更新できます。

- ▶ 更新対象のデータ・モデルのリストから更新用のデータ・モデルを選択するには、次の手順に従います。

1 更新するドキュメントをリストから選択します。

更新用のデータ・モデルは、次の方法で選択することもできます。

- すべての更新対象のデータ・モデルを更新するには、「すべて選択」をクリックします
- [Ctrl]キーを押しながらクリックするか、[Shift]キーを押しながらクリックして、リスト内の個々またはすべてのドキュメントをハイライトして選択します

「次へ」をクリックする前に、少なくとも1つのデータ・モデルを選択する必要があります。

- 2 オプション: 更新対象のデータ・モデルのリストでソート機能をアクティブにするには、列ヘッダーをクリックします。

たとえば、「ドキュメント」をクリックすると、更新対象のデータ・モデルがドキュメント・タイトルでソートされます。ソート機能は、選択された更新対象のデータ・モデルの順序を変更します。

- 3 次へをクリックして「スケジュール」に移動します。
- 4 オプション: 終了をクリックして、更新を完了します。

スケジュール・オプションの使用法

この手順では、データ・モデルを更新するタイミングを選択できます。更新を今すぐ実行するか、後で実行するようにスケジュールできます。スケジュール・プロセスは、メタデータの同期と同じように行われます。

▶ 今すぐ更新するには、次の手順に従います。

- 1 今すぐ実行を選択します。
- 2 スクリプト・ロギング・レベルを選択します。

たとえば、すべてのスクリプト・ログを受け取るには、「デバッグ」を選択します。詳細は、[80 ページの「スクリプト・ロギング・レベル」](#)を参照してください。

- 3 終了をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

- 4 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

- 5 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

タスク要求番号のステータスを確認して、更新が正常に行われたかどうかを確認します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してトランスフォーマを選択します。
2. プロセスをクリックします。

「タスク・ステータスの表示」にタスクが表示されます。

1. 待機していますと表示された場合は、リフレッシュをクリックします。
「待機しています」からタスクを更新すると、時間がかかる場合があります。

2. 成功と表示された場合は、「ファイル」の「閉じる」を選択し、「現在」を選択します。
3. 失敗と表示された場合は、タスクをダブルクリックしてログを確認します。

▶ 更新をスケジュールするには、次の手順に従います。

1 スケジュールを選択します。

日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。

2 日付を選択します。

カレンダー・コントロールが表示されます。

3 時間を選択します。

4 スクリプト・ロギング・レベルを選択します。

たとえば、すべてのスクリプト・ログを受け取るには、「デバッグ」を選択します。詳細は、[80 ページの「スクリプト・ロギング・レベル」](#)を参照してください。

5 終了をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

6 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

7 タスク要求のステータスを監視するには、「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

8 オプション: 監視プロセスを調整するには、フィルタを設定します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してトランスフォーマーを選択します。
2. プロセスをクリックして、更新のステータスを監視します。

確認のダイアログ・ボックスの検証

確認のダイアログ・ボックスには、インパクト・マネージャ更新サービスのタスク・ログのフィルタに使用できる数値の要求識別子またはタスク要求番号が表示されます。詳細は、[111 ページの「「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの使用方法」](#)を参照してください。

確認のダイアログ・ボックスを閉じるには、「OK」をクリックします。

JavaScript の更新機能

インパクト・マネージャ・モジュールの JavaScript の更新機能は、クライアント上のダッシュボード開発サービスの更新ユーティリティと同じです。JavaScript の更新を実行すると、ドキュメントを最初から作りなおすことなく最新のダッシュボード機能を使用できるようになります。

インパクト・マネージャ・モジュールには、テキスト・ラベル、ドロップダウン・リスト、リストの値など、更新、追加、除去またはターゲット・ファイルへの転

送の対象となるセクションやコントロールを指定するための構成ファイルが含まれています。

最新バージョンのダッシュボード・インフラストラクチャを含む、`newsections.bqy` という Interactive Reporting ドキュメントが使用可能です。JavaScript の更新機能を使用すると、指定したターゲット・ドキュメントが開き、セクションが `newsections.bqy` および更新する Interactive Reporting ドキュメントに存在するかどうかを調べることでセクション名の比較が実行されます。セクションが両方に存在する場合は、ターゲット・ドキュメント内のセクションが除去され、`newsections.bqy` のセクションに置き換えられます。

JavaScript の更新の使用方法

JavaScript の更新は、次の 2 つの方法で実行できます。

1. パラメータを対話的に指定します。
2. 事前に生成された定義ファイルを使用します。

▶ JavaScript の更新を実行するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「JavaScript の更新」を選択します。

「制御モード」が表示されます。

- 2 「タスク・ステータスの表示」でタスクを識別できるように、タスクの説明を入力します。

デフォルトの説明が用意されています。

- 3 次のいずれかのオプションを選択します。

1. 対話型でパラメータを指定するを選択し、次へをクリックして「パラメータ」に移動します。
2. 定義ファイルを使用するを選択します。

1. 「タスク定義ファイルの選択」の横にある参照をクリックします。

タスク定義ファイルは、変換するドキュメント当たり 1 行のテキストを含むテキスト・ファイルです。したがって、10 個のドキュメントを更新する場合、ファイルには 10 行含まれます。各行には、

`parameter1="value1", parameter2="value2"` のように、スクリプトの実行に必要なパラメータをカンマで区切って記述します。値は変換の UUID とデータ・モデルです。ほとんどのファイルには 1 行当たり多数のパラメータが必要です。バッチ更新を実行するユーザーは、Interactive Reporting ドキュメントを使用してドキュメントのリストをコンパイルし、パラメータ・ファイルを生成します。


2. 次へをクリックして「スケジュール」に移動します。

パラメータの選択


「制御モード」で「対話型でパラメータを指定する」を選択した場合は、「パラメータ」で JavaScript の更新に使用するパラメータを選択できます。


▶ パラメータを選択するには、次の手順に従います。

1 パラメータで、次のいずれかのアクションを行います。

- 「JavaScript 構成ファイル」パラメータと「新規セクション・ファイル」パラメータに値が入力されている場合:
 - 更新するドキュメントの横にある参照をクリックします。
 - 複数ファイル・ピッカーから、更新するドキュメントを選択します。次に、をクリックして選択アイテムに移動し、OK をクリックします。
- パラメータに値が入力されていない場合またはパラメータを変更する場合:
 - 「JavaScript 構成ファイル」の横にある参照をクリックし、JavaScriptUpdateConfig_dds.js を探して選択します。

このスクリプトは、Administration¥Impact Manager¥Script リポジトリにあります。

オプション: 非表示のスクリプト・ファイルを表示するには、「選択」で  をクリックします。
 - 「新規セクション・ファイル」の横にある参照をクリックし、newsections.bqy を探して選択します。

このファイルは、Administration¥Impact Manager¥Script リポジトリにあります。
 - 更新するドキュメントの横にある参照をクリックします。
 - 複数ファイル・ピッカーから、更新するドキュメントを選択します。次に、をクリックして選択アイテムに移動し、OK をクリックします。

2 次へをクリックして「スケジュール」に移動します。

スケジュール・オプションの使用法

この手順では、JavaScript を更新するタイミングを選択できます。更新を今すぐ実行するか、後で実行するようにスケジュールできます。スケジュール・プロセスは、メタデータの同期と同じように行われます。

▶ 今すぐ更新するには、次の手順に従います。

1 今すぐ実行を選択します。

2 スクリプト・ロギング・レベルを選択します。

たとえば、すべてのスクリプト・ログを受け取るには、「デバッグ」を選択します。詳細は、[80 ページの「スクリプト・ロギング・レベル」](#)を参照してください。

3 終了をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

4 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

5 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

タスク要求番号のステータスを確認して、更新が正常に行われたかどうかを確認します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してトランスフォーマーを選択します。
2. プロセスをクリックします。

「タスク・ステータスの表示」にタスクが表示されます。

1. 待機していますと表示された場合は、リフレッシュをクリックします。
「待機しています」からタスクを更新すると、時間がかかる場合があります。
2. 成功と表示された場合は、「ファイル」の「閉じる」を選択し、「現在」を選択します。
3. 失敗と表示された場合は、タスクをダブルクリックしてログを確認します。

▶ 更新をスケジュールするには、次の手順に従います。

1 スケジュールを選択します。

日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。

2 日付を選択します。

カレンダー・コントロールが表示されます。

3 時間を選択します。

4 スクリプト・ロギング・レベルを選択します。

たとえば、すべてのスクリプト・ログを受け取るには、「デバッグ」を選択します。詳細は、[80 ページの「スクリプト・ロギング・レベル」](#)を参照してください。

5 終了をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

6 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

7 タスク要求のステータスを監視するには、「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

8 オプション: 監視プロセスを調整するには、フィルタを設定します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してトランスフォーマーを選択します。
2. プロセスをクリックして、更新のステータスを監視します。

更新された JavaScript の確認

JavaScript の更新のステータスが「成功」の場合、手順が完了していることを確認します。

▶ 更新が完了していることを確認するには、次の手順に従います。

- 1 単一のドキュメントまたはドキュメントのバッチを更新した場合は、1つのドキュメントを開きます。

たとえば、エクスプローラ・モジュールで、更新された Interactive Reporting ドキュメントをダブルクリックします。

- 2 上部のパネルで  をクリックします。

ドキュメント・リリース番号が更新され、新規セクション・ファイルで指定したリリースが反映されます。

- 3 保存せずにドキュメントを閉じます。

カスタム更新機能

カスタム更新機能を使用すると、用意されている更新スクリプトに応じて汎用の変換を実行できます。パラメータは、スクリプトの要件によって異なります。SortDataModelTopics.js がサンプルとして含まれています。このスクリプトは、2つの標準のインパクト・マネージャ・サービススクリプト(UpdateDataModels.js と JavaScriptUpdate.js)とともに Administration¥Impact Manager¥Script リポジトリにあります。

SortDataModelTopics スクリプトの使用法

SortDataModelTopics スクリプトを使用すると、データ・モデル内のトピックが EPM Workspace にユーザー定義の順序またはアルファベット順に表示されるようにドキュメントを更新できます。

Interactive Reporting を EPM Workspace で開いてクエリーを表示すると、トピックのリストがカタログ・ペインの「テーブル」の下に表示されます。トピックは、Interactive Reporting ドキュメントに追加された順に表示されるため、リストに多数のトピックがある場合はトピックを探すのが困難です。

SortDataModelTopics スクリプトを使用すると、3つのパラメータを使用して、これらのリストに表示されるトピックの順序を指定できます。

ソート順は、次の2つの方法で指定できます。

1. 最初のパラメータを使用して、ユーザーが指定した順序のトピック名のリストを含むファイルを選択します。
2. 2番目のパラメータ(TRUE または FALSE)を使用して、ソート済ファイルに含まれていないトピックをアルファベット順に表示するかどうかを指定します。

ソート済ファイルに含まれていないトピックは、含まれているトピックの後に配置され、2番目のパラメータに従った順序で表示されます。したがって、空のファ

イルを指定して 2 番目のパラメータが TRUE の場合、すべてのトピックはアルファベット順に表示されるため、リストでトピックを探しやすくなります。

注： 空のファイルには空白行を含める必要があります。

3 番目のパラメータを使用すると、複数ファイル・ピッカーを使用して、一連のファイルから更新するファイルを選択できます。

更新に成功したファイルごとにバージョンが追加されます。したがって、EPM Workspace でファイルをダブルクリックすると、更新されたコンテンツが表示されます。

カスタム更新の実行

▶ カスタム更新機能を使用してドキュメントをユーザー定義の順序またはアルファベット順にソートするには、次の手順に従います。

1 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「カスタム更新」を選択します。


「スクリプトの選択」が表示されます。

2 「タスク・ステータスの表示」でタスクを識別できるように、タスクの説明を入力します。

デフォルトの説明が用意されています。

3 「スクリプトの選択」の横にある参照をクリックし、SortDataModelTopics.js を選択します。

スクリプト・ファイルは、/Administration/Impact Manager/Script Repository/またはサブフォルダから選択する必要があります。

4 オプション: 非表示のファイルのスクリプト・リポジトリに表示するには、 をクリックします。

5 次のいずれかのオプションを選択します。

1. 対話型でパラメータを指定するを選択し、次へをクリックして「パラメータ」に移動します。

2. 定義ファイルを使用するを選択します。

1. 「タスク定義ファイルの選択」の横にある参照をクリックします。

タスク定義ファイルはテキスト・ファイルです。各行に 3 つのパラメータ値をカンマで区切って記述する必要があります。3 つのパラメータとは、orderings(ソート順のリストを含むファイルの UUID)、sortUnknownTopics(TRUE または FALSE)および document(変換するドキュメントの UUID)です。

たとえば、

orderings="/order.txt",sortUnknownTopics="true",document="/some.bqy"のように記述します。

バッチ更新を実行するユーザーは、Interactive Reporting ドキュメントを使用してドキュメントのリストをコンパイルし、パラメータ・ファイルを生成します。

2. 次へをクリックして「スケジュール」に移動します。

パラメータの選択

「スクリプトの選択」で「対話型でパラメータを指定する」を選択した場合は、「パラメータ」で更新に使用するパラメータを選択できます。

- ▶ パラメータを選択するには、次の手順に従います。

1 パラメータで、スクリプトのパラメータ値を入力します。

1. 目的の順序のトピックのリストを含むファイルの横にある参照をクリックします。

たとえば、パラメータ・ファイルを選択します。詳細は、93 ページの「[パラメータ・テキスト・ファイルの作成](#)」を参照してください。

複数ファイル・ピッカーが表示されます。更新するドキュメントを選択し、



をクリックして、選択したアイテムに移動します。次に「OK」をクリックします。

2. 未指定のトピック名をアルファベット順にソートで、TRUE または FALSE を選択します。
3. セクションの配置を変更するドキュメントの横にある参照をクリックします。

たとえば、Interactive Reporting ドキュメントを選択します。

2 次へをクリックして「スケジュール」に移動します。

パラメータ・テキスト・ファイルの作成

- ▶ パラメータ・テキスト・ファイルをメモ帳で作成するには、次の手順に従います。

1 メモ帳でファイルを作成します。

たとえば、SortDataModelTopics スクリプトを使用する場合は、トピック名をソートする順序でリストします。このリストでは、最初に表示するトピックの名前のみ判別する必要があります。

- 2 テキスト・ファイルを保存します。
- 3 ファイルを EPM Workspace にインポートします。

スケジュール・オプションの使用方法

この手順では、カスタム更新を実行するタイミングを選択できます。更新を今すぐ実行するか、後で実行するようにスケジュールできます。スケジュール・プロセスは、メタデータの同期と同じように行われます。

▶ 今すぐ更新するには、次の手順に従います。

1 今すぐ実行を選択します。

2 スクリプト・ロギング・レベルを選択します。

たとえば、すべてのスクリプト・ログを受け取るには、「デバッグ」を選択します。詳細は、80 ページの「スクリプト・ロギング・レベル」を参照してください。

3 終了をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

4 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

5 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

タスク要求番号のステータスを確認して、更新が正常に行われたかどうかを確認します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してトランスフォーマーを選択します。

2. プロセスをクリックします。

「タスク・ステータスの表示」にタスクが表示されます。

1. 待機していますと表示された場合は、リフレッシュをクリックします。「待機しています」からタスクを更新すると、時間がかかる場合があります。

2. 成功と表示された場合は、「ファイル」の「閉じる」を選択し、「現在」を選択します。

3. 失敗と表示された場合は、タスクをダブルクリックしてログを確認します。

▶ 更新をスケジュールするには、次の手順に従います。

1 スケジュールを選択します。

日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。

2 日付を選択します。

カレンダー・コントロールが表示されます。

3 時間を選択します。

4 スクリプト・ロギング・レベルを選択します。

たとえば、すべてのスクリプト・ログを受け取るには、「デバッグ」を選択します。詳細は、80 ページの「スクリプト・ロギング・レベル」を参照してください。

5 終了をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

6 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。


7 タスク要求のステータスを監視するには、「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。

8 オプション: 監視プロセスを調整するには、フィルタを設定します。

1. タスク番号を選択し、タスク要求番号を入力してトランスフォーマを選択します。
2. プロセスをクリックして、更新のステータスを監視します。

カスタム更新の確認

更新のステータスが「成功」の場合、手順が完了していることを確認します。

ソート順が変更されていることを確認するには、ファイルの場所に移動し、 をクリックします。1つのドキュメントを更新した場合、Interactive Reporting ドキュメントの重複バージョンは情報が付加されて表示されます。たとえば、Custom_Updated_File(topics reordered).bqy のように表示されます。ドキュメントをダブルクリックして開き、クエリーを選択します。カタログ・ペインで「テーブル」を展開し、トピックの順序を確認します。保存しないでドキュメントを閉じます。

ドキュメントのバッチを更新した場合は、Interactive Reporting ドキュメントの重複バージョンが表示されます。ドキュメントをダブルクリックして開き、クエリーを選択します。カタログ・ペインでトピックの順序を表示します。保存しないでドキュメントを閉じます。

高度なスクリプト

このトピックでは、スクリプトをカスタマイズして、EPM Workspace 内または Interactive Reporting Studio のデスクトップ上のドキュメントを更新する方法を説明します。

EPM Workspace のカスタム・スクリプト環境

インパクト・マネージャ・サービスのカスタム・スクリプト環境には、Document Object Model(DOM)と JavaScript を使用して Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツや構造を操作するためのメカニズムが用意されています。この環境は Interactive Reporting Studio のスクリプト環境に似ていますが、いくつかの違いがあります。たとえば、インパクト・マネージャ・サービスのカスタム・スクリプト環境には、次のような特徴があります。

- アクティブな Interactive Reporting ドキュメントのコンテキストでは動作しません
- ドキュメント内のすべてのプロパティにアクセスできます
- 論理的なシステムレベルの整合性チェックを実行しません
- Interactive Reporting ドキュメント内には含まれません
- 複数のドキュメントに対してスクリプトを実行します

カスタム・スクリプト環境は、1つ以上のドキュメントに対して任意の共通変換を実行します。このメカニズムは、インパクト・マネージャ・サービスのデータ・モデルの更新機能と JavaScript の更新機能の実装に使用されます。

スクリプトを EPM Workspace にインポートし、インパクト・マネージャ・サービスのカスタム更新機能を使用して実行して、他のインポートされたドキュメントを変更できます。これらのスクリプトは、ダッシュボード開発サービスの更新ユーティリティを使用してデスクトップ上でも実行できます。デスクトップ上で実行する場合は、デスクトップから見えるディスク上のファイルにのみ変更を加えることができます。デスクトップは、通常は開発およびテスト環境です。

EPM Workspace 内のスクリプトは、インパクト・マネージャ・サービスのコントロールのもとで実行されるため、元に戻す機能を使用できます。スクリプトによって加えられた変更が不要な場合は、そのスクリプトを使用したタスクを元に戻して、ドキュメントをスクリプト実行前の状態に戻すことができます。

スクリプト・パラメータ

スクリプトに必要なパラメータは、ヘッダーのコメントを使用して指定します。これらのコメントのフォーマットは、Java のドキュメントに使用される JavaDoc コメントに似ています。

注： リリース 9.3 以降では、これらのパラメータは EPM Workspace でのみ使用可能です。

パラメータを定義するために最低限指定できるのは名前です。たとえば、`@param sourceLanguage` とします。

これは、入力が単純な文字列であることを前提とし、UI にテキスト・ボックス(最初は空)を表示します。

オプション: `@inputType` 行を使用すると、より具体的なデータ入力メソッドを指定できます。

- `file_picker_single_value` - リポジトリから 1 つのファイルを選択します
- `file_picker_multi_values` - リポジトリから、1 つの値で構成される複数のファイルを選択します
- `file_picker_multi_values_parallel_execution` - リポジトリから、スクリプトの別々のインスタンスによって並列処理できる複数のファイルを選択します
- `dropdown` - 事前に定義された一連の固定値から選択します

入力タイプには、`@defaultValue` を使用してデフォルト値を指定できます。ファイル・ピッカー入力タイプの場合、デフォルト値はリポジトリ内のファイルの UUID である必要があります。

ドロップダウン・リストには、選択肢をカンマで区切って指定した個別の `@comboValues` 行が必要です。

注： カスタム・スクリプトでは、パラメータ値は送信時ではなくスクリプトの実行時にのみ検証されます。たとえば、スクリプトに受け入れられない値

が指定された場合、ユーザーはタスクの送信時に通知を受け取りません。スクリプトが無効なデータから回復できない場合は、メッセージがログインされ、例外がスローされます。これにより、「タスク・ステータスの表示」にステータスが「失敗」(赤色)と表示され、ユーザーに問題が警告されます。

スクリプト環境

各スクリプトには、`env` というグローバル変数があります。この変数を使用すると、スクリプトの実行環境にアクセスできます。

よく使用される `env` メソッドを次に示します。

- `getParameterValue()` - 指定された名前を持つ単一値のパラメータの値を取得します
- `getParameterValues()` - 指定された名前を持つ複数値のパラメータのすべての値を配列として取得します
- `isDesktopMode()` - スクリプトがデスクトップ上で実行されている場合は `TRUE` を返します
- `isServerMode()` - スクリプトが EPM Workspace で実行されている場合は `TRUE` を返します
- `createTempFile()` - スクリプトの終了時に除去される一時ファイルを作成します
- `getBqyDocument()` - 指定された UUID のドキュメントをリポジトリから取得します
- `getFileLines()` - 指定された UUID のファイルのコンテンツをリポジトリから文字列の配列として取得します
- `writeBqyDom()` - リポジトリにインポートするドキュメントを、ドキュメントの新規バージョンまたは新規ドキュメントとしてディスクに書き込みます

`getParameterValue()` と `getParameterValues()` によって、ユーザーがパラメータに指定した値をスクリプトで取得する方法が決まります。

`env.isDesktopMode()` メソッドと `env.isServerMode()` メソッドは、スクリプトが実行されている環境(たとえば、EPM Workspace 内やデスクトップ上)に関する情報をスクリプトに提供します。

ほとんどのスクリプトは、リポジトリ内に保管されているドキュメントにアクセスする必要があります。同じメソッドを提供し、擬似 UUID としてファイル・システム・パスを使用するデスクトップには、擬似リポジトリが実装されています。

`env.getRepository()` メソッドは、リポジトリへのアクセスを可能にするオブジェクトを返します。戻されたオブジェクトによって提供されるメソッドを次に示します。

- `retrieveFile()` - 指定された UUID のファイルをリポジトリから取得します(これにより、コンテンツを含む一時ファイルを指す Java ファイル・オブジェクトが返されます。一時ファイルは、スクリプトの実行完了時に削除されます)
- `retrieveVersionedDocument()` - リポジトリに保管されているドキュメントのプロパティを取得します

- `addVersion()` - 指定されたドキュメントのバージョンをリポジトリに追加します
 - `publishBqyFile()` - 新規ドキュメントをリポジトリにインポートします
 - `remapOCEs()` - ドキュメントの Interactive Reporting データベース接続(OCE 拡張子)マッピングを設定します
- ▶ ドキュメントを変更するには、次の手順に従います。
- 1 `repository.retrieveFile()`を使用してドキュメントを取得します。
ドキュメントは一時ファイルに書き込まれ、そのドキュメントを指す Java ファイル・オブジェクトが戻されます。
 - 2 ファイル参照を渡して `env.getBqyDocument()`を使用します。
ドキュメントのコンテンツを表す DOM が戻されます。
 - 3 DOM を変更します。
 - 4 DOM をディスクに書き戻すには、`env.writeBqyDocument()`を使用します。
 - 5 オプション: EPM Workspace で実行するには、さらに次の手順が必要になります。
 1. 特定バージョンのドキュメントのプロパティにアクセスするには、`retrieveVersionedDocument()`を使用します。
 2. `versionedDocument.sectionOCEPairInfos()`を使用します。
 3. ドキュメントを含む親フォルダの UUID を取得するには、`versionedDocument.getParentIdentity()`を呼び出します。
 4. セクションの OCE を取得するには、バージョン化されたドキュメントに対して `getSectionOCERMapping()`を使用します。
 5. オプション: データ・モデルに関連付けられた OCE を更新するには、`remapOCEs()`を使用します。
 6. `addVersion()`を使用して元のドキュメントの新規バージョンを作成するか、`publishBqyFile()`を使用してドキュメントを新規ドキュメントとして保管することで、変更したドキュメントをリポジトリにアップロードします。
例については、91 ページの「[SortDataModelTopics スクリプトの使用方法](#)」を参照してください。

Document Object Model のツリー構造

スクリプトで操作する各ドキュメントは、ノードのツリーで表される Document Object Model(DOM)形式で保管されます。各ノードには、関連付けられている一連のプロパティが含まれています。

ドキュメントの DOM は、ファイルの取得とコンテンツのロードによって取得されます。その例を次に示します。

```
var uuid = env.getParameterValue( "document" );
var file = repository.retrieveFile(uuid);
```

```
var dom = env.getBqyDocument(file, bqReadWriteDom,
bqDashboardReportStrategy)
```

最初の行では、ドキュメントの UUID を含むパラメータを取得します。2 行目では、ファイルをリポジトリから一時ファイルにコピーします。この一時ファイルはスクリプトの終了時に削除されます。3 行目では、DOM を表す `BqyDocument` オブジェクトを指定して、ファイルのコンテンツをロードします。

注： 2 番目のパラメータ `bqReadWriteDom` は、ドキュメントを書き直すように指定します。ドキュメントを書き直さない場合は、`bqReadOnlyDom` を指定して、DOM に必要なメモリーの量を減らします。3 番目のパラメータ `bqDashboardReportStrategy` は、ドキュメント変換方式です。スクリプトからアクセスできるドキュメント構造部分を指定します。

さまざまな方式を使用して、スクリプトに必要なメモリーの量を減らすことができ、ドキュメントのロードにかかる時間も短縮できます。

ドキュメント変換方式

ドキュメントをロードするときに、特定のスクリプトに必要な DOM の一部のみのロードすると、メモリーを節約できます。たとえば、ドキュメント内のセクション名のリストのみをロギングする場合、セクションの下にあるノードのツリー全体をロードする必要はありません。

次の方式が用意されています。

- `bqDatamodelUpgradeStrategy` - すべてのデータ・モデルとクエリー・セクション
- `bqJavascriptUpdateStrategy` - ダッシュボード・セクション
- `bqToolbarUpgradeStrategy` - イメージ・リソースとすべてのダッシュボード・セクション
- `bqDashboardReportStrategy` - すべてのダッシュボード・セクションとレポート・セクションおよび他のセクションの `DocCompMoniker.Depend`
- `bqTopLevelSectionsStrategy` - すべてのセクションとそのユーザー値ノード
- `bqIndexingStrategy` - クエリー、ピボット、チャート、レポートおよびダッシュボードの下にあるノードの大きなサブセット

ドキュメント全体をロードするには、このパラメータに `null` を使用します。

Document Object Model の走査

DOM のノードのコンテンツを操作するには、ノードを探す必要があります。

ドキュメントのセクションを表す最上位のノードには、セクション・コレクションを使用して直接アクセスできます。ダッシュボード内の形状には、形状コレクションからアクセスできます。ただし、ノードの子に使用できるコレクションはありません。

ノードの子にアクセスするための、次のメソッドが用意されています。

- `getChildren()` - ノードの子の完全なリストを返します
- `getChildrenOfType()` - 特定のタイプを持つノードの子のリストを返します
- `addChild()` - ノードの子のリストの最後に新しい子を追加します
- `removeChild()` - 指定されたノードをノードの子のリストから除去します
- `setChildren()` - ノードの子のリストを別のリストに置き換えます
- `dump()` - デバッグ用に、指定されたノードの位置から DOM ツリーをダンプします

指定されたノードのすべてのサブノードを反復処理するには、`getChildren()`を使用して、サブノードを含むリストを取得します。この処理を特定のタイプの子に限定するには、`getChildrenOfType()`を使用します。たとえば、`Root.MyDocument` ノードに、ドキュメント内の各セクションの `Rpt.DocComp` ノードが含まれている場合、`Rpt.DocComp` ノードを探すには次の行を使用します。

```
var sections = root.getChildrenOfType( "Rpt.DocComp" );
```

`addChild()`を使用すると、ノードは別のノードの子として追加されます。ノードを DOM(または別のドキュメントの DOM)のある部分から別の場所にコピーするには、このメソッドを使用します。

子ノードを除去するには、`removeChild()`を使用します。

注： `getChildren()`と `getChildrenOfType()`によって戻される子のリストは読取り専用です。エントリに新規値を割り当ててリストを更新しても、ノードには変更が反映されません。ただし、ノードの現在のリストは、`setChildren()`を使用して置き換えることができます。

ドキュメントのサブツリーのコンテンツは、`dump()`を使用してログに書き込めます。デフォルトでは、これによってツリーは標準出力にダンプされますが、パラメータを指定すると、任意の印刷ストリームに書き込めます。

XPath スタイルの検索

子ノードのリストを取得すると DOM 全体にアクセスできますが、その一方で一連の条件を満たすノードを検索できます。

たとえば、次のコードを使用すると、ドキュメント内のすべての形状の名前をロギングできます。

```
for (var i = 0; i < dom.Sections.length; i++) {
    var section = dom.Sections[i];

    if (section.Type == bqDashboard) {
        env.log( "Dashboard " + section.AnnotName + " has
shapes" );

        var shapes = section.Shapes;

        for (var j = 0; j < shapes.length; j++)
```

```

        env.log(shapes[j].Name);
    }
}

```

DOM には、ドキュメント内のセクションとダッシュボード内の形状の両方に使用できるわかりやすいコレクション名が用意されています。ただし、複雑な検索、たとえば、すべての `ThreshFmt.ThreshFmt` ノード内、すべての `ColColl.Item` ノード内およびすべてのテーブル・セクション内のすべての `DataThreshold.DataThreshold` ノードを検索すると、複数のネストされたループが生成されます。

インパクト・マネージャ・サービスのスクリプトは、XPath スタイルの検索を使用した別の方法を提供します。たとえば、複雑な検索には次のコードを使用します。

```

var items = dom.findNodesByPattern( "/BQY/Root.MyDocument/Rpt.DocComp"
    + "/ColColl.Item/ThreshFmt.ThreshFmt"
    + "/DataThreshold.Threshold" );

```

この単一の文は、必要なノードを含む配列を戻します。戻されるノードを限定するには、プロパティ一致条件を追加できます。

たとえば、結果を `Rankings` というテーブル内の `Drawn` という列のノードに限定するには、次のコードを使用します。

```

var items =
dom.findNodesByPattern( "/BQY/Root.MyDocument"
    + "/Rpt.DocComp[AnnotName=' Rankings' ]"
    + "/ColColl.Item[Label=' Drawn' ]/ThreshFmt.ThreshFmt"
    + "/DataThreshold.Threshold" );

```

検索を DOM のルートから開始する必要はありません。セクション・ノードを含む変数を検索する場合は、次の例に示すように、相対パスを使用して、そのセクションの下にある他のノードを検索します。

```

var table = dom.findNodesByPattern( "/BQY/Root.MyDocument"
    + "/Rpt.DocComp[AnnotName=' Rankings' ]" );

var items = table.findNodesByPattern( "ColColl.Item[Label=' Drawn' ]"
    + "/ThreshFmt.ThreshFmt/DataThreshold.Threshold" );

```

ノードが存在しない可能性がある場合(つまり、スクリプトを使用して処理するドキュメントにこのノードが含まれていない可能性がある場合)またはこれらのノードが多数存在する可能性がある場合は、`getNodeByPattern()`を使用します。このような場合は、戻される配列の長さを使用して状況を判断します。

ただし、パターンに一致するノードが 1 つ存在することがわかっている場合は、配列ではなく 1 つのオブジェクトを戻す `getNodeByPattern()`を使用します。

検索メカニズムには、2 つのワイルドカードが用意されています。ノード名の代わりに使用するアスタリスク(*)は、任意のタイプのノードを表します。スラッシュのペア(//)は、任意の数の介在ノードを表します。

たとえば、ドキュメント、ダッシュボードまたはレポート(本文、ヘッダー、フッター、セクション・ヘッダーまたはセクション・フッター内)のすべてのイメージを検索するには、次のコード例を使用します。

```
var pattern = "//Box.Item[RuntimeClassName='PictField']";  
var pictures = dom.findNodesByPattern(pattern);
```

インパクト・マネージャ・サービスと Interactive Reporting Studio の Document Object Model の相違

インパクト・マネージャ・サービスのスクリプトで使用可能な DOM は、Interactive Reporting Studio のスクリプトでイベント・ハンドラに渡される DOM とは次の点で異なります。

- すべてのコレクション・インデックスは、1ではなく0(ゼロ)から始まります
- ノード名とプロパティは、リポジトリに表示される、基になるドキュメントに保管されているノード名やプロパティに一致します。わかりやすい名前はありません
- セクションと形状のイベント・ハンドラを呼び出して、ドキュメントに変更を反映することはできません

たとえば、すべてのクエリー内のすべての要求ライン・アイテムに関連付けられている SQL を表示するには、次のコードを使用します。

```
var pattern = "//BQY/Qry.MyQry/QryCol.MyQryCol";  
var nodes = dom.findNodesByPattern(pattern);  
  
for (var i = 0; i < nodes.length; i++)  
    env.log(nodes[i].SQL);
```

注： 両方のループ・インデックスは0(ゼロ)から始まり、セクション名へのアクセスには、Name ではなく AnnotName を使用します。

インパクト・マネージャ・サービスの DOM 構造の詳細

Interactive Reporting Studio に同梱されている Dashboard Studio インспекタ・ユーティリティは、DOM のエクスプローラ・スタイルのビューを提供します。詳細は、『Hyperion Interactive Reporting オブジェクト・モデルおよびダッシュボード開発サービス開発者ガイド Vol.5: Dashboard Studio』の"Dashboard Studio インспекタ・ユーティリティ"を参照してください。

左ペインには、ドキュメント内のノードがツリーとして表示されます。右ペインには、選択したノードのすべてのプロパティ名、その現在の値と関連付けられているデータ型が表示されます。

インспекタ・ユーティリティは、スクリプトを作成するときに使用します。ユーザーは、目的の変更を行うために操作する必要があるデータの DOM 内の場所を確認できます。

プロパティへのアクセス

インパクト・マネージャ・サービスでは、Interactive Reporting Studio の場合と同じようにプロパティにアクセスします。唯一の違いは、Interactive Reporting Studio によってエクスポートされた DOM では、よく使用されるプロパティにわかりやすい名前が使用されている点です。

DOM 内のノードに関連付けられているプロパティの名前を調べるには、Dashboard Studio インスペクタ・ユーティリティを使用します。詳細は、『Hyperion Interactive Reporting オブジェクト・モデルおよびダッシュボード開発サービス開発者ガイド Vol.5: Dashboard Studio』の"Dashboard Studio インスペクタ・ユーティリティ"を参照してください。

たとえば、次のコードは、ダッシュボードの IsHidden プロパティにアクセスして、非表示のセクションを表示します。

```
var dashboard = dom.Sections[ "Dashboard" ];

if (dashboard.IsHidden) {
    env.log( "Making section " + dashboard.Name + " visible" );

    dashboard.IsHidden = false;
}
```

コレクション

Interactive Reporting Studio スクリプト DOM とインパクト・マネージャ・サービス DOM の大きな違いは、すべてのコレクションが 1 ではなく 0 から始まるという点です。たとえば、次のようにコード化されたループがあるとします。

```
for (var i = 1; i <= collection.Count; i++)
    // some processing on collection[i]
```

これは、現在では次のように記述します。

```
for (var i = 0; i < collection.length; i++)
    // some processing on collection[i]
```

プロパティ・タイプ

DOM ノードのすべてのプロパティは、次のいずれかのデータ型です。

- バイト
- ダブル・ワード
- 長整数
- 文字列
- 構造体
- ワード

ファイル・システムへのアクセス

実行のたびにに変更されない大量の構成情報が必要になる場合など、スクリプト内から基礎となるファイル・システムにアクセスするには、次のメソッドを使用します。

- `env.getFileSystem()` - 基礎となるファイル・システムへのアクセスを提供するオブジェクトを取得します。
- `env.createTempFile()` - スクリプトの完了時に削除される一時ファイルを作成します。
- `fs.getFile():` - EPM Workspace 内の指定されたパスのファイルを参照する Java ファイル・オブジェクトを取得します。
- `fs.writeBytesToStream()` - バイト配列のコンテンツをファイルに書き込みます。

スクリプト内の一般的な Java コード

Java オブジェクトをスクリプト処理の一部として構築することが必要になる場合があります。たとえば、`RevertImageResources` は、次の呼出しを使用して `FileOutputStream` を作成します。

```
var fos = new Packages.java.io.FileOutputStream(imageFile);
```

呼出しの形式は次のとおりです。

```
var object = new Packages.java.some.package.ClassName(necessary,  
parameters);
```

バッチ入力ファイルの使用方法

変換スクリプトのすべてのパラメータは、ユーザー・インタフェースを使用して対話形式で入力できます。または、多くのパラメータ・セットをバッチ入力ファイルとして指定することで、それらのパラメータを要求できます。

バッチ入力ファイルの各行には、`name="value"`の形式のすべてのパラメータをカンマで区切って指定したリストを記述します。

たとえば、`/order.txt`内のトピック順序を使用し、未指定のトピック名をアルファベット順に並べ替えて`/some.bqy`、`/some/other.bqy`および`/yet/another/example.bqy`の3つのドキュメントを変換する `SortDataModelTopics` スクリプトを使用するには、次の入力ファイルを使用します。

```
orderings="/order.txt",sortUnknownTopics="true",document="/some.bqy"  
orderings="/order.txt",sortUnknownTopics="true",document="/some/  
other.bqy"  
orderings="/order.txt",sortUnknownTopics="true",document="/yet/another/  
example.bqy"
```

注： 値が変わらない場合でも、各パラメータ値を引用符で囲み、それらの値をすべて1行に入力する必要があります。

EPM Workspace では、ファイルを表すすべてのパラメータの値を UUID にする必要があります。サンプル・スクリプトは、次のようなコードを使用して必要に応じて UUID に変換することで、バッチ・ファイルでファイル・パスを指定できるように明示的にコーディングされています。

```
var document = env.getParameterValue( "document" );  
  
if ( document.substring(0, 1) == "/" )  
    document = repository.getFileUuid(document);
```

バッチ入力ファイルの注釈を使用可能にするには、空行と#で始まる行を無視します。

注： ファイルの UUID がファイル・システム・パスと同じであるため、コードはデスクトップでも動作します。

一覧

ここでは、メソッドとプロパティの一覧表を示します。

env メソッドの一覧

メソッド	説明
createTempFile()	スクリプトの完了時に削除される一時ファイルを作成する
expandRequestAction()	値のセットごとに新規サブタスクを追加する
getBqyDocument()	Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツから DOM を構築する
getDescription()	スクリプトに関連付けられた説明を取得する
getFileLines()	ファイルの行を読み取り、行ごとに 1 つの文字列を含む配列を構築する
getLogLevel()	log() の呼出し時に使用される、現在のデフォルト・ログ・レベルを取得する
getMimeTypeUuid()	指定した MIME タイプの UUID を取得する
getNullUuid()	NULL の UUID 定数を取得する
getParameterValue()	指定したスクリプト・パラメータの値を取得する
getParameterValues()	複数值スクリプト・パラメータに割り当てられている値をすべて取得する
getRepository()	リポジトリのコンテンツへのアクセスに使用できるオブジェクトを取得する
isDesktopMode()	スクリプトがデスクトップで実行されているかどうかを判断する
isServerMode()	スクリプトが EPM Workspace で実行されているかどうかを判断する

メソッド	説明
loadScript()	別のスクリプトのコンテンツをこのスクリプト環境にロードする
log()	現在のデフォルト・ロギング・レベルのメッセージを送信する
logAlways()	常にログに書き込まれるメッセージを送信する
logClassName()	オブジェクトの指定した Java クラス名を含むメッセージを送信する
logDebug()	デバッグ用にメッセージを送信する
logError()	検出されたエラー条件に関連付けられたメッセージを送信する
logFatal()	検出されたエラー条件に関連付けられたメッセージを送信する
logInfo()	情報メッセージを送信する
logWarn()	警告メッセージを送信する
md5Hash()	指定した文字列から MD5 ハッシュを生成する
setLogLevel()	ロギングを実行するデフォルト・レベルを設定する
setProgress()	スクリプトの進行状況を更新する
updateDescription()	このスクリプト呼出しの新規説明を設定する
writeBqyDom()	指定した DOM をファイルに書き出す

リポジトリ・メソッドの一覧

メソッド	説明
addVersion()	ドキュメントのバージョンを追加する
convertBqyFileToUnicode()	指定したドキュメントをコード・ページから Unicode に変換する
findFiles()	すべてのファイルを検索する
getFileUuid()	EPM Workspace 内の指定したパスを持つファイルの UUID を取得する
getFolderUuid()	EPM Workspace 内の指定したパスを持つフォルダの UUID を取得する
isFile()	指定した UUID がファイルを表すかどうかを判断する
isFolder()	指定した UUID がフォルダを表すかどうかを判断する
publishBqyFile()	ファイルを指定したコンテンツでリポジトリにインポートする
remapOCES()	指定したドキュメントの OCE を指定したセットに再マッピングする
retrieveFile()	指定した UUID を持つドキュメントを一時ファイルとして取得する

メソッド	説明
retrieveVersionedDocument()	指定した UUID に関連付けられた、バージョン化されたドキュメントを取得する

EPM Workspace 固有のリポジトリ・メソッド

メソッド	説明
changeToFolder()	EPM Workspace 内の論理位置を指定したフォルダ・パスに変更する
folderExists()	指定したパスのフォルダが EPM Workspace に存在するかどうかを判断する
getCurrentFolder()	このスクリプトが配置されている EPM Workspace 内の現在のフォルダへのパスを取得する
getFolderContentsFor()	フォルダ内のすべてのファイルの UUID を取得する
getPathForUuid()	指定した UUID で表された EPM Workspace 内のパスを取得する
getSubfolderPathsFor()	フォルダのすべてのサブフォルダの UUID を取得する
makeFolder()	指定した名前のサブフォルダを作成する

ノード・メソッドの一覧

メソッド	説明
addChild()	このノードに子を追加する
addProperty()	指定したプロパティをこのノードに追加する
dump()	ノードのコンテンツとノードの子を標準出力にダンプする
findNodeByPattern()	指定したパターンに一致する 1 つのノードを検索する
findNodesByPattern()	指定したパターンに一致するすべてのノードを検索する
getChildren()	このノードのすべての子のリストを取得する
getChildrenOfType()	指定したノード・タイプを持つ、このノードのすべての子のリストを取得する
getContextualName()	このノードの論理名を取得する
getNodeType()	このノードのタイプを取得する
getPathWithContext()	パスを一意に示すコンテキスト情報など、ドキュメント内のこのノードの場所を表す文字列を取得する
getProperties()	このノードのプロパティのリストを取得する
getProperty()	指定した名前を持つ、このノードのプロパティを取得する
getRoot()	このノードが保管されている DOM のルート・ノードを取得する

メソッド	説明
hasProperty()	指定した名前のプロパティがこのノードにあるかどうかを判断する
newNode()	ノードを構築する
removeChild()	指定した子ノードを除去する
removeProperties()	プロパティの指定したリストをこのノードから除去する
replaceChildNode()	指定した子ノードを指定したノードに置換する
setChildren()	このノードの子のリストを指定したリストに置換する

ドキュメントの一覧

env.getBqyDocument()を使用して取得したドキュメントには、次のプロパティが含まれています。

プロパティ	説明
DesignPassword	デザイン・モードに切り替えるために必要なパスワード
DocumentPassword	ドキュメントを開くために必要なパスワード
EncryptedScripts	ドキュメント内のスクリプトが暗号化されているかどうかを判断する
EventScripts	ドキュメントレベルのスクリプト
Name	ドキュメント名
Path	ドキュメントへのパス
Root_MyDocument	Root.MyDocument ノード
Root_MyResources	Root.MyResources ノード(または、ドキュメントにリソース・マネージャ・データが含まれていない場合は NULL)
Sections	ドキュメントに含まれているすべてのセクション
Type	ランタイム・クラス名を取得する
Unicode	ドキュメント文字列のコンテンツが Unicode であるかコード・ページ・フォーマットであるかを判断する

同じドキュメントには次のメソッドも含まれています。

メソッド	説明
copy()	指定したセクションをドキュメントにコピーし、必要に応じてそのセクションの名前を変更して名前が重複しないようにする
getChartSections()	すべてのチャート・セクションのリストを取得する
getChildrenWithRuntimeClass()	指定した RuntimeClassName を持つすべての子ノードを取得する
getCodePage()	ドキュメントで使用されているコード・ページを取得する

メソッド	説明
getDashboardSections()	すべてのダッシュボード・セクションのリストを取得する
getInitialTCSection()	ホーム・セクションの識別子を取得する
getPivotSections()	すべてのピボット・セクションのリストを取得する
getQuerySections()	すべてのクエリー・セクションのリストを取得する
getResultsSections()	すべての結果セクションのリストを取得する
getSource()	このドキュメントがロードされた Interactive Reporting ドキュメントへのパスを取得する
getTableSections()	すべてのテーブル・セクションのリストを取得する
isBQYPasswordProtected()	ドキュメントにパスワードが設定されているかどうかを判断する
isBQYProcessable()	ドキュメントに少なくとも 1 つの処理可能なセクションがあるかどうかを判断する
load()	ディスクの Interactive Reporting ドキュメントからドキュメントをロードする
optimizeImages()	すべてのリソース・マネージャ・イメージを最適化して重複をなくす
save()	ディスクの Interactive Reporting ドキュメントにドキュメントを保存する
sectionOCEPairInfos()	ドキュメントのすべての OCE マッピングのリストを取得する
setCodePage()	ドキュメントのコード・ページを設定する
setEndianness()	ドキュメントをビッグエンディアンとして保管するか、またはスモールエンディアンとして保管するかを設定する
setHeader()	ドキュメント・ヘッダーを設定する
setSource()	このドキュメントがロードされたソースへのパスを設定する

対話型レポートへの接続

インパクト・マネージャ・サービスには、変更の影響をレポートするための対話型レポート・ダッシュボードが組み込まれています。ダッシュボードは Reporting and Analysis プラットフォームのデータベース・テーブルにクエリーを実行し、リポジトリに関するレポートを作成する前に正しく構成する必要があります。

手順 1 - Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービスの構成

構成と監視コンソール(CMC)を使用して、Reporting and Analysis リポジトリ・テーブルが格納されたデータベース・システムをサービスが参照するように Hyperion

Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービスを構成します。ビジネス・レポート・データ・ソースの構成方法と同じように構成する必要があります。

たとえば、MS SQL Server を使用してリポジトリが実装されている場合、Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービスの構成は「データ・ソースを DAS に追加」画面に次のパラメータで表示されます。

接続タイプ: ODBC

データベースのタイプ: MS SQL Server

データ・ソースの名前を選択してください: metadata

注: データ・ソース名は ODBC 構成で作成された「metadata」で、MS SQL Server のデータベース・インスタンスを参照します。

手順 2 - Interactive Reporting データベース接続の作成

Interactive Reporting Studio を使用して、Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービスの構成で選択した一致するデータ・ソース名(たとえば「metadata」)を使用してリポジトリ・テーブルを参照する Interactive Reporting データベース接続(OCE 拡張)を作成します。

手順 3 - EPM Workspace への Interactive Reporting データベース接続のインポート

手順 2 で作成した Interactive Reporting データベース接続をインポートします。


- ▶ Interactive Reporting データベース接続を EPM Workspace にインポートするには、次の手順に従います。
 - 1 EPM Workspace にログインします。
 - 2 エクスプローラ・モジュールで、ルート・フォルダを表示します。
 - 3 オプション: 「表示」の「再表示」を選択して、管理フォルダを表示します。
 - 4 管理を展開します。
 - 5 インパクト・マネージャを展開します。
 - 6 手順 2 「Interactive Reporting データベース接続の作成」で作成した Interactive Reporting データベース接続をインポートします。
 - 7 インポートしたファイルに名前を付けます。

たとえば、ファイルに metadata.oce という名前を付けます。
 - 8 デフォルト・ユーザー ID と名前を指定して、レポートをリポジトリ・テーブルに接続します。

ユーザー ID は、リポジトリ・テーブルへのアクセスを選択するために必要です。

手順 4 - Interactive Reporting データベース接続と対話型レポートの関連付け

手順 3 でインポートした Interactive Reporting データベース接続を関連付けます。

- ▶ Interactive Reporting データベース接続を関連付けるには、次の手順に従います。
 - 1 エクスプローラ・モジュールで、「管理」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、変更の影響の表示という名前のドキュメントを選択します。
 - 2 右クリックし、プロパティを選択します。
「プロパティ」が表示されます。
 - 3  を選択します。
 - 4 各クエリーまたはデータモデル名について、接続から metadata.oce を選択します。
 - 5 オプションのデフォルトのユーザー名とパスワードを使用を選択します。
 - 6 OK をクリックします。
 - 7 タスク・ステータスの表示という名前のドキュメントについて、手順 1 から 6 までを繰り返します。

これで Interactive Reporting ドキュメントは出力の準備が整いました。

「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの使用 方法

タスク・ステータスの表示はインパクト・マネージャ・モジュール・オプションで、インパクト・マネージャ・サービスによって実行されたタスクのステータスを表示します。対話型レポートはロギング・テーブルに基づいています。ロギング・テーブルは、インパクト・マネージャ・サービス内で処理されたかまたは現在処理中のインパクト・マネージャ評価サービス・タスクとインパクト・マネージャ更新サービス・タスクのログのリストを示します。

- ▶ タスク・ステータスの表示を使用するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・ステータスの表示」を選択します。
「タスク・ステータスの表示」が表示されます。
 - 2 「タスクのステータス」で、タイム・ゾーンから次のいずれかのオプションを選択します。
 - ブラウザ - ユーザー・ブラウザのタイム・ゾーンを表示します。
 - UTC - 協定世界時として設定されたタイム・ゾーンを表示します([113 ページ](#)の「UTC オフセット・オプション」を参照)。
 - 3 フィルタを適用するには、次のいずれかのアクションを行います。
 1. 開始時刻を選択して、開始時間フィルタを設定します。
日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。

1. カレンダ・コントロールから日付を選択します。
2. 時間を選択します。
2. 終了時刻を選択して、終了時間フィルタを設定します。
日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。
 1. カレンダ・コントロールから日付を選択します。
 2. 時間を選択します。
3. 所有者を選択し、要求者名を選択します。
4. タスク番号を選択して、確認ダイアログ・ボックスに表示されたタスク要求番号でフィルタを行います。
 1. タスク番号を入力します。
 2. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - トランスフォーマ - タスク要求を更新します。
 - ハーベスタ - タスク要求を同期します。
- 4 プロセスをクリックします。
- 5 オプション: 処理が完了したら、リフレッシュをクリックして、「タスクのステータス」テーブル内のフィルタされたデータを更新します。
- 6 オプション: タスクを選択してダブルクリックするか右クリックして、タスク・ログを表示します。
タスクがテーブルに表示されます。

表 5 「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの列の説明

列名	説明
ステータス	色分けされたステータス: 緑 - 成功 グレー - 待機中 赤 - 失敗 ピンク - 取消し オレンジ - 部分的に成功
送信時刻	タスクのローカル送信日時
説明	タスクの説明
タスク	タスクの参照番号
アクション	プロセスの番号順
所有者	要求者名
完了時刻	タスクのローカル完了日時
継続時間	要求を完了するまでの時間(秒単位)
サービス ID	プロセッサ名

UTC オフセット・オプション

協定世界時は、アプリケーション・サーバーのタイム・ゾーンに基づいています。UTC オフセットは、時間文字列からタイム・ゾーン・オフセットを抽出する計算結果アイテムです。「送信時刻」列と「完了時刻」列の表示をローカル時間に変換するために使用されます。サーバーとクライアントでタイム・ゾーンを共有することが前提となっています。共有しない場合は、サーバーとクライアント間のタイム・ゾーンの違いを反映するように計算結果アイテムを編集できます。

「タスク・ステータスの表示」対話型レポートに、UTC オフセット・オプションが追加されました。このオプションを使用すると、シン・クライアント・アプリケーション・サーバーとは別の場所にいるユーザーが手動でタイム・ゾーンを選択できます。

注： アプリケーション・サーバーと同じタイム・ゾーンにいるユーザーは、この設定値を変更する必要はありません。

タスクの管理

タスク・リストの管理は、タスク要求を管理するためのインパクト・マネージャ・モジュール・オプションです。対話型レポートはロギング・テーブルに基づいており、実行された要求を元に戻す機能を備えています。

- ▶ タスク・リストの管理を使用するには、次の手順に従います。
- 1 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「タスク・リストの管理」を選択します。

「タスク・リストの管理」が表示されます。
- 2 「タスク・リスト」で、タイム・ゾーンから次のいずれかのオプションを選択します。
 - ブラウザ - ユーザー・ブラウザのタイム・ゾーンを表示します。
 - UTC - 協定世界時として設定されたタイム・ゾーンを表示します([113 ページの「UTC オフセット・オプション」](#)を参照)。
- 3 フィルタを適用するには、次のいずれかのアクションを行います。
 1. 開始時刻を選択して、開始時間フィルタを設定します。

日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。

 1. カレンダー・コントロールから日付を選択します。
 2. 時間を選択します。
 2. 終了時刻を選択して、終了時間フィルタを設定します。

日付と時間のドロップダウン・リストが表示されます。

 1. カレンダー・コントロールから日付を選択します。
 2. 時間を選択します。
 3. 所有者を選択し、要求者名を選択します。
- 4 プロセスをクリックします。

- 5 オプション: 処理が完了したら、リフレッシュをクリックして、「タスク・リスト」テーブル内のフィルタされたデータを更新します。

表 6 「タスク・リストの管理」の列の説明

列名	説明
送信時刻	タスクのローカル送信日時
説明	タスクの説明
タスク	タスクの参照番号
所有者	要求者名
正常終了	成功したタスク
失敗	失敗したタスク
待機しています	保留中のタスク
取消し済	取り消されたタスク

元に戻す機能の使用方法

元に戻す機能は、「タスク・リストの管理」対話型レポートに用意されており、スクリプトの実行要求をユーザーが取得できるようにします。スクリプトが実行されると、変更されたすべてのドキュメントは新規バージョンとして保存され、タスク・ログでその経過が追跡されます。ユーザーがタスクを元に戻す要求を行うと、タスクによって変更されたすべてのドキュメントを特定するためにログが使用されます。それらのドキュメントの最新バージョンが除去され、元のドキュメントが表示されます。

元に戻す機能を使用した場合、元に戻す対象のタスクに関連付けられたファイルのバージョンにのみ戻ります。この機能によって、ファイルの最新バージョンが作成されたバージョンと異なることが検出された場合は、元に戻すプロセスのその部分がスキップされ、メッセージが表示されます。元に戻すプロセスは、ログ内の他のドキュメントの処理を続行します。

元に戻す機能を使用するには、タスクのアクションを表示する必要があります。

- ▶ タスクのアクションを表示するには、次の手順に従います。
 - 1 タスク・リストの管理で、タスク・リストからタスクを選択します。
 - 2 ダブルクリックしてタスク・アクションを表示します。

「タスクのアクションの表示」が表示されます。

タスクのアクションの表示の使用方法

「タスクのアクションの表示」には、「タスク・リストの管理」から選択したタスクに関する情報が表示されます。一番上のテーブルには、タスクの要約が表示されます。そのタスクを選択して「元に戻す」をクリックすると、ロール・バック・プロセスが実行されます。他のテーブルには、タスクに適用できるオプションが

あります。このテーブルを使用して、タスク要求を元に戻したり、タスクのアクション・ログを表示したりできます。

元に戻すタスクの例として、「JavaScript の更新」変換によって更新された Interactive Reporting ドキュメントを元に戻す操作があります。たとえば、「JavaScript の更新」を実行すると、JavaScript を含む Interactive Reporting ドキュメントの古いセクションが新規セクションに置換されます。古いセクションのプロパティ設定は新規セクションに転送されるため、新規コードは古いプロパティで動作できます。JavaScriptUpdate スクリプトでは、ユーザーがドキュメントを最初から作成しなおすことなく最新のダッシュボード機能を使用できるようにしています。

タスク情報は、「タスクのアクションの表示」に表示されます。「指定」を選択すると、更新する元の Interactive Reporting ドキュメントが格納されているフォルダに関する情報が表示されます。「フォルダの展開」を選択すると、これらのドキュメントが表示されます。その結果の出力は「変更したファイル」に表示され、選択すると新規セクションを含む更新されたドキュメントが表示されます。「元に戻す」をクリックすると、更新されたドキュメントが除去され、初期ドキュメントが表示されます。

テーブルの列は、選択したアクションに応じて変わります。

表 7 「指定」と「フォルダの展開」の列

列名	説明
ステータス	色分けされたステータス: 緑 - 成功 グレー - 待機中 赤 - 失敗 ピンク - 取消し オレンジ - 部分的に成功
送信時刻	タスクのローカル送信日時
説明	タスクの説明
アクション	プロセスの番号順
完了時刻	タスクのローカル完了日時
継続時間	要求を完了するまでの時間(秒単位)
サービス ID	プロセッサ名

表 8 「変更したファイル」の列

列名	説明
元に戻すステータス	色分けされたステータス: グレー - 該当なし(元に戻すプロセスの実行前)または待機中 緑 - 成功 赤 - 失敗
説明	タスクの説明

列名	説明
アクション	プロセスの番号順
コマンド	タスクの説明(「バージョンの追加」など)
ファイル(バージョン)	タスクで使用したファイルおよびバージョン番号
元に戻す説明	元に戻すプロセスの説明(「バージョンが正常に除去された」など)

注： テーブルで選択したタスクを右クリックして「アクションのログの表示」を選択します。ログ・ファイルが表示されます。

➤ 元に戻す機能を使用するには、次の手順に従います。

1 オプション: タイム・ゾーンから次のいずれかのオプションを選択します。

- ブラウザ - ユーザー・ブラウザのタイム・ゾーンを表示します。
- UTC - 協定世界時として設定されたタイム・ゾーンを表示します(113 ページの「UTC オフセット・オプション」を参照)。

2 アクションから次のいずれかのオプションを選択します。

- 指定 - タスク入力の概要(フォルダの表示など)を表示します。
- フォルダの展開 - 「指定」入力のコンテンツ(フォルダ内のファイルなど)を表示します。
- 変更したファイル - タスク要求の出力(「JavaScript の更新」により更新されたファイルのリストなど)を表示します。

3 タスクを選択し、元に戻すをクリックします。

表示されるダイアログ・ボックスで、元に戻すタスク番号 nn および関連付けられたアクションを確認します。

4 OK をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが開き、タスク要求番号が表示されます。

5 OK をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

6 タスク・ステータスの表示に移動して、元に戻すプロセスを監視します。

7 タスク・ステータスの表示で、タスク番号を選択します。

8 タスク要求番号を入力し、トランスフォーマーを選択します。

9 プロセスをクリックします。

「タスク・ステータスの表示」にタスクが表示されます。タスクの説明には、タスク nn を元に戻すことを示す記述が表示されます。タスク要求番号が付加されています。

注： 元に戻すプロセスが実行されたタスクを選択した場合は、タスク番号 nn について元に戻すアクションがないことを示すメッセージがダイアログ・ボックスに表示されます。この場合、タスクは送信されません。

「変更の影響の表示」対話型レポートの使用方法

変更の影響の表示はインパクト・マネージャ・モジュール・オプションで、ドキュメントで使用されているテーブル、列および結合をクエリー・パネルに表示します。値を選択すると、選択したアイテムへの変更がドキュメントに与える影響が表示されます。

注： 例では、Microsoft Access データベース・ソフトウェアとサンプル・データベースを使用しています。Interactive Reporting データベース接続を構成する必要があります。詳細は、109 ページの「対話型レポートへの接続」を参照してください。


▶ 変更の影響の表示を使用するには、次の手順に従います。

- 1 「ナビゲート」を選択し、「インパクト・マネージャ」を選択します。次に、「変更の影響の表示」を選択します。

「変更の影響の表示」対話型レポートのクエリー・パネルが表示されます。

- 2 リストからアイテムを選択し、 をクリックして選択を適用します。

たとえば、MSAccess とサンプル・データベースが使用されている場合、Rdbms テーブル名から PCW_CUSTOMERS と PCW_SALES を選択します。選択内容は「現在選択しているクエリー制約条件」に表示されます。

- 3  をクリックしてクエリーを処理します。

クエリー・パネルで選択したアイテムが表示されます。たとえば、「RDBMS テーブルが選択されたドキュメント」のテーブル・タブに PCW_CUSTOMERS と PCW_SALES が表示されます。

「変更の影響の表示」対話型レポートには、スキーマが変更された場合に行う処理を特定するための情報が含まれています。

- RDBMS テーブルが選択されたドキュメント - 選択されたテーブルと列を使用する、影響を受けるドキュメント
- RDBMS/トピックの列のマッピング - Interactive Reporting ドキュメントのトピックまたはアイテムから RDBMS テーブルまたは列へのマップ
- トピック/RDBMS の列のマッピング - RDBMS テーブルまたは列から Interactive Reporting ドキュメントのトピックまたはアイテムへのリバース・マップ
- トピックを含む共通データ・モデル - 影響を受けるテーブルまたは列が使用されている、共通のデータ・モデル(たとえば、1つの置換データ・モデルで更新される Interactive Reporting ドキュメントの数)
- RDBMS テーブルの使用の詳細 - テーブルおよび列が使用されるドキュメントとセクション
- カスタム要求アイテム - 「データ・モデルの更新」、「JavaScript の更新」または「カスタム更新」の影響を受ける可能性がある、要求アイテムのカスタム SQL

- **カスタム・クエリ制約条件** - 「データ・モデルの更新」、「JavaScript の更新」または「カスタム更新」の影響を受ける可能性がある、フィルタ・アイテムのカスタム SQL


パラメータ・ファイルの生成

データ・モデルを更新するためのパラメータ・ファイルは、「変更の影響の表示」対話型レポートなどで簡単に作成できます。パラメータ・ファイルを生成するには、

ダッシュボードの一番上のパネルにある  をクリックします。

「変更の影響の表示」対話型レポートの実行環境に応じて、2つのパラメータ・ファイル作成シナリオがあります。

- ▶ EPM Workspace でパラメータ・ファイルを生成するには、次の手順に従います。

- 1 「変更の影響の表示」で、一番上のパネルにある  をクリックします。

EPM Workspace の「エクスポート」が表示されます。

- 2 セクション名から `IM_DMU_PARAM_FILE` を選択します。
- 3 ファイル・フォーマットから「テキスト(タブ区切り)」を選択します。
- 4 エクスポートをクリックします。

別の Web ブラウザ・ウィンドウがアクティブになり、タブ区切りのパラメータ・ファイルが表示されます。

- 5 「ファイル」を選択し、「名前を付けて保存」を選択します。

「Web ページの保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 6 パラメータ・ファイルに `IM_DMU_PARAM_FILE.txt` という名前を付けて保存をクリックします。

- ▶ デスクトップまたは Web プラグインでパラメータ・ファイルを生成するには、次の手順に従います。


- 1 「変更の影響の表示」で、一番上のパネルにある  をクリックします。

ドロップダウン・リストが表示されます。

- 2 インパクト・マネージャ・パラメータ・ファイルとしてエクスポートを選択します。「セクションのエクスポート」が表示されます。

- 3 ファイル名に「`IM_DMU_PARAM_FILE.txt`」と入力します。

- 4 ファイルの種類:から「テキスト(タブ区切り)(*.txt)」を選択し、保存をクリックします。

- 5  をもう一度クリックして、ドロップダウン・リストを非表示にします。

生成されたパラメータ・ファイルの各行には、編集する必要がある次の3つのエントリ(全部で6つ)があります。これらのエントリを必要に応じて置換します。

- `replacementDmName='RDN' - RDN`を、古いデータ・モデルに代わる新規データ・モデルのセクションの名前に置換します。
- `replacementDocUuid='RDU' - RDU`を、新規データ・モデルのセクションが含まれるドキュメントの UUID に置換します。
- `replacementDocVersion='RDV' - RDV`を、新規データ・モデルのセクションが含まれるドキュメントのバージョンに置換します。

新規データ・モデルの作成

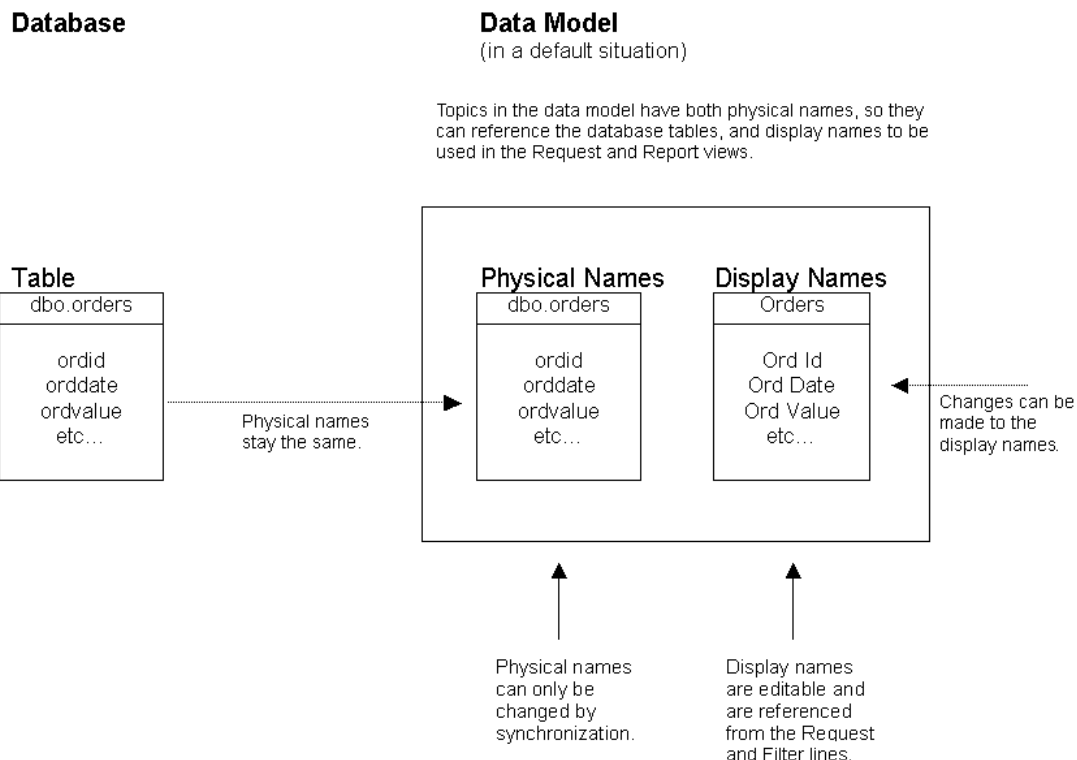
新規データ・モデルを作成し、置換データ・モデルに示されているすべての内部テーブル名と列名を示す必要があります。

テーブルまたは列の名前変更

新規データ・モデルを作成するには、既存のデータ・モデルを再作成するか、新規データベースに対して同期します。次に、新規データ・モデル内のテーブルまたは列の名前を、既存のデータ・モデル内の名前に合わせて変更します。

たとえば、`orders.orddate` 列は `orders.order_date`(物理名)という名前に変更されます。元のデータ・モデルはこの列を `Orders.Orddate`(表示名)という名前に表示していました。新規データ・モデルはこの列に `Orders.Order Date`(表示名)というデフォルト名を割り当てます。元のデータ・モデルを新規データ・モデルに置換するには、列のプロパティを編集し、表示名を `Orders.Orddate` に変更します。物理名と表示名の変更例を [図 1](#) に示します。

図 1 物理名と表示名の例



例: テーブルと列の名前変更

次の手順に示す例では、Microsoft Access データベース・ソフトウェアと Interactive Reporting Studio を使用します。

- ▶ テーブルをコピーして列名を初めて変更するには、次の手順に従います。
 - 1 データベース(この例では MSAccess)で、サンプル・データベースを開きます。
 - 2 テーブルを右クリックしてコピーを選択します。
たとえば PCW_CUSTOMERS を選択します。
 - 3 マウスをもう一度右クリックし、貼付けを選択します。
 - 4 テーブルの貼付けにテーブル名を入力します。
たとえば、「Outlets」と入力します。「テーブル構造とデータ」が選択されていることを確認します。
 - 5 OK をクリックします。
PCW_CUSTOMERS テーブルのコピー「Outlets」が作成されます。
 - 6 Outlets を右クリックし、デザイン・ビューを選択します。
テーブルがデザイン・モードで開きます。
 - 7 フィールド名を上書きして列名を変更します。
たとえば、STORE_ID を outlet_id、STORE を outlet、STORE_TYPE を outlet_type に変更します。

8 Outlets テーブルを閉じ、はいをクリックして変更を保存します。

▶ テーブルの物理名を変更するには、次の手順に従います。

1 Interactive Reporting Studio を開き、Sample.occ を選択して OK をクリックします。

2 Sample.occ の「ホスト・ユーザーとホスト・パスワード」ダイアログ・ボックスで、何もテキストを入力せずに OK をクリックします。

3 カタログ・ペインでテーブルを展開し、トピックをコンテンツ領域にドラッグします。

たとえば PCW_CUSTOMERS を選択します。

4 トピックのヘッダーを右クリックし、プロパティを選択します。

トピックのプロパティが表示されます。

5 物理名に新規名を入力します。

たとえば、PCW_CUSTOMERS を outlets に置換します。

6 OK をクリックします。

▶ データ・モデルをデータベースと同期するには、次の手順に従います。

1 Interactive Reporting Studio で、新規物理名(たとえば Pcw Customers)のトピックを選択し、「データ・モデル」を選択します。次に「データベースと同期」を選択します。

「データ・モデルの同期」が表示されます。「詳細情報の表示」が選択されている場合は、同期によって加えられた変更に関する情報がこのダイアログ・ボックスに表示されます。

2 OK をクリックします。

▶ 列の表示名を変更するには、次の手順に従います。

1 Interactive Reporting Studio でコンテンツ領域のトピックを使用して、列名を右クリックし、プロパティを選択します。

「トピック・アイテムのプロパティ」が表示されます。

2 列名を変更して OK をクリックします。

たとえば、Outlet Id を Store Id に変更します。

3 他の列名も変更するには、手順 1-2 を繰り返します。

たとえば、Outlet を Store に、Outlet Type を Store Type に変更します。

列の表示名が変更されます。

4 オプション: または、次のアクションを行って、表示名を同様に変更することもできます。

1. トピック(たとえば Orders)を Interactive Reporting Studio のコンテンツ領域にドラッグします。

2. 名前を変更した列およびトピックの表示名を変更します。

たとえば、データ・モデルを作成して、Pcw Customers トピックのみ使用する別のデータ・モデルと置換できます。編集したトピックは元のトピックに一致する名前を示し、有効な置換対象です。

正規化されたデータ・モデルと非正規化されたデータ・モデルの使用方法

テーブルを連結または分割するためにデータ・モデルを変更する必要がある場合は、新規データ・モデルの作成時に追加の手順が必要になります。元のテーブル構造のスーパーセットとなるデータ・モデルを作成するには、メタトピックを使用します。メタトピックと列に正しい名前を付ける必要があります。これにより、新規データ・モデルは元のデータ・モデルの真のスーパーセットになります。正しい名前を付けたら、元のデータ・モデルの代わりに新規データ・モデルを使用します。

『Hyperion Interactive Reporting Studio ユーザー・ガイド』の"メタトピック"を参照してください。

列の削除

削除された列は、計算結果アイテムによって定数値に置換されます。たとえば、文字列の列は n/a を戻し、数値の列は 0 を戻すことがあります。これらの置換により、レポートは動作を続行し、削除された列に定数値(n/a など)を表示できます。

注： テーブル全体が削除された場合は、テーブルのすべての列が削除されたものとして処理されます。

次の手順では、計算結果アイテムを作成して列の削除をマスクする方法を示します。計算結果アイテムを作成する前に、テーブルのコピー、名前の変更、データ・モデルの同期などの一連の処理を実行する必要があります。

- ▶ テーブルをコピーして列名を初めて変更するには、次の手順に従います。
 - 1 データベース(この例では MSAccess)で、サンプル・データベースを開きます。
 - 2 テーブルを右クリックしてコピーを選択します。
たとえば、「PCW_Items」を選択します。
 - 3 マウスをもう一度右クリックし、貼付けを選択します。
 - 4 テーブルの貼付けにテーブル名を入力します。
たとえば、「Goods」と入力します。「テーブル構造とデータ」が選択されていることを確認します。
 - 5 OK をクリックします。
PCW_Items テーブルのコピー「Goods」が作成されます。
 - 6 Goods を右クリックし、デザイン・ビューを選択します。
テーブルがデザイン・モードで開きます。
 - 7 行(たとえば Dealer Price)を選択して削除します。
 - 8 データベースを保存して閉じます。

- ▶ テーブルの物理名を変更するには、次の手順に従います。
 - 1 Interactive Reporting Studio を開き、Sample.oce を選択して OK をクリックします。
 - 2 Sample.oce の「ホスト・ユーザーとホスト・パスワード」ダイアログ・ボックスで、何もテキストを入力せずに OK をクリックします。
 - 3 カタログ・ペインでテーブルを展開し、トピックをコンテンツ領域にドラッグします。

たとえば、「PCW_ITEMS」を選択してドラッグします。
 - 4 トピックのヘッダーを右クリックし、プロパティを選択します。

トピックのプロパティが表示されます。
 - 5 物理名に新規名を入力します。

たとえば、物理名として「Goods」と入力します。
 - 6 OK をクリックします。

- ▶ データ・モデルをデータベースと同期するには、次の手順に従います。
 - 1 Interactive Reporting Studio で、トピック(たとえば Pcw Items)を選択し、「データ・モデル」を選択します。次に「データベースと同期」を選択して、同期を実行します。

「データ・モデルの同期」が表示されます。「詳細情報の表示」が選択されている場合は、同期によって加えられた変更に関する情報がこのダイアログ・ボックスに表示されます。たとえば、Dealer Price は Goods トピックから削除されました。
 - 2 OK をクリックします。

- ▶ 計算結果アイテムを使用して削除された列をマスクするには、次の手順に従います。
 - 1 Interactive Reporting Studio で、トピックのヘッダー(たとえば「Pcw Items」)を右クリックし、メタ・トピックにレベルを上げるを選択します。

別のトピックがコンテンツ領域に追加されます。たとえば、Meta Pcw Items という新規トピックが追加されます。
 - 2 元のトピックのヘッダー(たとえば「Pcw Items」)を右クリックし、プロパティを選択します。

トピックのプロパティが表示されます。
 - 3 トピック名を変更し、OK をクリックします。

たとえば、トピック名を「Pcw Items topic」に変更します。これで2つのトピックが表示されます。たとえば、Pcw Items topic と Meta Pcw Items です。
 - 4 トピックのヘッダー(たとえば「Meta Pcw Items」)を右クリックし、プロパティを選択します。

トピックのプロパティが表示されます。
 - 5 トピック名ボックスで「Meta」の部分除去し、OK をクリックします。
 - 6 手順5のトピック(たとえば「Pcw Items」)を選択し、「データ・モデル」を選択します。次に、「メタトピック・アイテムの追加」を選択し、「サーバー」を選択します。

「アイテムの変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 7 名前ボックスに、データベースから削除された行の名前を入力し、定義を入力します。
たとえば、「名前」に「Dealer Price」と入力し、「定義」に 0 を入力します。
- 8 OK をクリックします。
計算結果アイテムがトピックに追加されます。たとえば、Dealer Price が Pcw Items に追加されます。
- 9 計算結果アイテムが追加されたトピック(たとえば Pcw Items)を選択し、「データ・モデル」を選択します。次に、「データ・モデル・ビュー」を選択し、「メタ」を選択します。
選択したトピックがメタ・ビューに表示され、その他のトピックは除去されます。

列のデータ型の変更

データベース・スキーマを変更すると、列のデータ型が変更されることがあります。たとえば、文字列は整数になり、反対に整数は文字列になります。このような場合は、Interactive Reporting ドキュメントを新規スキーマに移行するために、追加のアクションが必要になります。

フィルタがデータ型の変更の影響を受ける場合は、データ・モデル列のデータ型を Interactive Reporting ドキュメントのフィルタに適用します。Interactive Reporting ドキュメントのフィルタ・タイプは、作成時にデータ・モデルからコピーされ、開発者やユーザーはアクセスできません。

データ型を変更しても、アクションが不要な場合や影響を受けない場合があります。次に示す表 9 で「OK」とマークされている変更がこのような変更該当します。「Warn」とマークされている変更は、Interactive Reporting ドキュメントにキャッシュされている値が正しく移行されないことがあるため注意が必要です。

表 9 データ型の変更

データ型						
変更前の型/変更後の型	文字列	整数	実数	日付	時刻	タイム・スタンプ
文字列	OK	Warn	Warn	Warn	Warn	Warn
整数	OK	OK	OK	Warn	Warn	Warn
実数	OK	Warn	OK	Warn	Warn	Warn
日付	Warn	Warn	Warn	OK	Warn	OK
時刻	Warn	Warn	Warn	Warn	OK	Warn
タイム・スタンプ	Warn	Warn	Warn	Warn	Warn	OK

要求ライン・アイテムがデータ型の変更の影響を受ける場合は、アクションは不要です。「アイテム・プロパティ」の「オプション」をクリックして要求アイテムのデータ型にアクセスできるからです。インパクト・マネージャ・モジュールに

よってデータ型が変更される場合、特に戻される列に計算が適用される場合は、結果、テーブル、チャート、ピボットまたはレポートに予期しない影響が及ぶ可能性があります。

互換性のある置換データ・モデルとドキュメント文字セット

データ・モデルを更新する場合は、更新プロセスで定義される両方の Interactive Reporting ドキュメントに、互換性のある文字セットが含まれている必要があります。たとえば、Latin 1 のドキュメントのデータ・モデルを使用して、Latin 1 または Unicode の Interactive Reporting ドキュメントのデータ・モデルを更新できますが、Latin 2 のドキュメントのデータ・モデルは更新できません。Unicode のドキュメントには複数の文字セットを含めることができるため、Unicode ドキュメントのデータ・モデルのみが別の Unicode ドキュメントのデータ・モデルを置換できます。

たとえば、表 10 に示すように、bqy_b と Dm-33 でそれぞれ置換する bqy_a と Dm_1 を検索すると、次のような組合せが考えられます。

表 10 置換データ・モデルと Interactive Reporting ドキュメント

大文字と小文字の区別	検索対象	置換後の文字列	コメント
1	Unicode (U)	Unicode (U)	Unicode の対話型レポートのみ選択対象として表示される
2	Unicode (U)	Code Page 1 (CP1)	Unicode と CP1 の両方の対話型レポートが選択対象として表示される
3	Code Page 1 (CP1)	Code Page 1 (CP1)	Unicode と CP1 の両方の対話型レポートが選択対象として表示される
4	Code Page 2 (CP2)	Code Page 1 (CP1)	エラー・メッセージ: ドキュメントと置換データ・モデルに互換性のある文字セットが含まれている必要があります。
5	Code Page 1 (CP1)	Code Page 2 (CP2)	エラー・メッセージ: ドキュメントと置換データ・モデルに互換性のある文字セットが含まれている必要があります。
6	Code Page 1 (CP1)	Unicode (U)	エラー・メッセージ: ドキュメントと置換データ・モデルに互換性のある文字セッ

大文字と小文字の区別	検索対象	置換後の文字列	コメント
			トが含まれている必要があります。

Interactive Reporting ドキュメントのユーザー名とパスワードの変更

Interactive Reporting ドキュメントをインポートすると、データ・ソースに接続するために使用するクエリーのログイン情報を様々な方法で取得できます。

- ログイン情報は、Interactive Reporting ドキュメントに対して指定されています。
- ログイン情報は、Interactive Reporting データベース接続から取得されます。
- ログイン情報のプロンプトが表示されます。

クエリーのログイン情報を Interactive Reporting データベース接続から取得する場合またはログイン情報のプロンプトが表示される場合は、アクションは必要ありません。置換されたクエリーは、引き続きログイン情報のプロンプトを表示するか、Interactive Reporting データベース接続を参照してログイン情報を取得します。

明示的に構成されたログイン情報は、新規データ・ソースに対して有効でない可能性があるため、これらのログイン情報の変更が必要になることがあります。クエリーを置換 Interactive Reporting ドキュメントにインポートする方法を変更することで、更新された Interactive Reporting ドキュメントでログイン情報を処理する方法を変更できます。表 11 に、明示的なログイン情報(たとえば、ユーザー名"scott"、パスワード"tiger")でデータ・ソースに接続するために、インポートされている Interactive Reporting ドキュメントがどうなるかを示します。

表 11 更新の前後の Interactive Reporting ドキュメント

インポートされた置換 Interactive Reporting ドキュメント	更新後の Interactive Reporting ドキュメント
明示的なログイン情報	新規ログイン情報(ユーザー名"sa"とパスワード"secret")を使用してクエリーをデータ・ソースに接続し、ユーザーに値を確認せず、Interactive Reporting データベース接続のコンテンツに関係なく処理を行う
ユーザーにメッセージを表示	ログオン・ダイアログ・ボックスを表示し、ユーザーは接続するためのユーザー名とパスワードを指定
デフォルト Interactive Reporting データベース接続を使用	接続時に Interactive Reporting データベース接続の定義を使用して、クエリーをデータ・ソースに接続する

サービス構成パラメータ

Oracle Hyperion(R)インパクト・マネージャ・サービスには、構成と監視コンソール(CMC)で変更できるサービス構成パラメータが含まれています。

次のプロパティは、インパクト・マネージャの動作に影響を与えます。

ポーリング間隔

サービスで要求キューをスキャンする頻度を指定します。ユーザーにとって、この間隔はアクションを開始してからサービスによってアクションが開始されるまでの最大限の遅延時間です。

要求ログの最大時間

インパクト・マネージャ・モジュール機能のタスク・ステータス・レポートに影響を与えることがあります。このパラメータの値より古いアクションはリポジトリから削除されます。元に戻す機能では、ログで見つかった情報のみを使用して操作します。したがって、ログ・エントリが削除されたアクションは元に戻すことができません。114 ページの「元に戻す機能の使用法」を参照してください。

注： CMC の詳細は、第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」を参照してください。

変更の影響レポートの使用法

インパクト・マネージャでは、Interactive Reporting ドキュメントを使用して、テーブル、列または階層が変更された場合に影響を受けるドキュメントをレポートします。このレポートは、Interactive Reporting ドキュメントと Web Analysis ドキュメントを識別します。変更の影響レポートは、/Administration/Impact Manager/Impact of Change.bqy ワークスペースに非表示のファイルとして配置されます。EPM Workspace にインポートされたすべての対話型レポートと同様に、レポートでデータ・ソースからメタデータを取得する前に次の 4 つの手順を行う必要があります。

1. EPM Workspace のデータ・アクセス・サービス(DAS)でデータ・ソースを定義します。

構成と監視コンソール(CMC)で、DAS サービスを選択し、「データ・ソース」タブを使用して新規サービスを追加します。

2. DAS のデータ・ソースを参照する接続ファイル(OCE)を作成します。

Interactive Reporting Designer を使用して、DAS データ・ソースのホスト名またはプロバイダを参照する接続ファイルを作成します。

3. EPM Workspace で接続ファイルを発行します。

管理者役割で EPM Workspace にログオンし、接続ファイルを発行します。

4. 変更の影響ダッシュボードのデータ・モデル・セクションを、発行した接続ファイルに関連付けます。

非表示のフォルダとファイルを表示するように表示オプションを設定します。/Administration/Impact Manager に移動し、Impact of Change.bqy を選択します。次に、「Interactive Reporting オプション」を選択し、後でインポー

トされた接続ファイルを使用するようにすべてのクエリーとデータ・モデルを設定します。

注： 変更の影響レポートを簡単に実行できるようにするには、デフォルト・ユーザー ID を使用するように接続を構成し、自動ログオンのパスワードを指定します。自動ログオンが無効になっている場合は、ユーザーがレポートを実行するたびにデータベースのユーザー ID とパスワードを入力する必要があります。

この章の内容

カレンダーの管理	129
タイム・イベントの管理.....	133
パブリック・ジョブ・パラメータの管理.....	135
Interactive Reporting データベース接続の管理	135
ジョブと Interactive Reporting ドキュメントのパススルーの管理	135
ジョブ・キューの管理.....	136
ジョブの並列実行	139


カレンダーの管理

カレンダー・マネージャを使用して、カスタム・カレンダーの作成、変更および削除を行うことができます。カレンダーを作成すると、会計年度またはその他の内部や組織のカレンダーに基づいてジョブをスケジュールできます。カスタム・カレンダーでスケジュールされたジョブは、デフォルト・カレンダーではなくカスタム・カレンダーに指定された四半期ごとの日付および月ごとの日付に基づいて、そのジョブの日付と変動日制限を扱います。

次のトピックでは、カレンダー・マネージャについて説明します。

- 129 ページの「カレンダー・マネージャの表示」
- 130 ページの「カレンダーの作成」
- 130 ページの「カレンダーの削除」
- 130 ページの「カレンダーの変更」
- 131 ページの「カレンダー・マネージャのプロパティ」
- 132 ページの「ジョブ・ログの表示」

カレンダー・マネージャの表示

ジョブ・ユーティリティ・ツールバーの  をクリックして、カレンダー・マネージャを起動します。ジョブ・ユーティリティのログイン画面で、ユーザー名、パスワード、Reporting and Analysis ホストおよびポート番号を入力します。

これらの値がシステムによって確認されると、カレンダー・マネージャが表示されます。カレンダー・マネージャには、デフォルト・カレンダーとカスタム・カレンダーのリストが表示され、各カレンダーの年がサブフォルダに表示されます。カレンダーを変更または削除するには、カレンダー名または年を選択します。

「カレンダー」を選択すると、空白の「カレンダー・プロパティ」タブが表示されます。カレンダー名を選択すると、「カレンダー・プロパティ」タブに選択したカレンダーのレコードが表示されます。年を選択すると、「期」タブと「年」タブに選択したカレンダーと年が表示されます。

カレンダーを作成、変更または削除するには、ジョブ・マネージャの役割が必要です(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照)。


カレンダーの作成

カレンダー・マネージャは標準のグレゴリオ暦を使用し、デフォルトでは休日や週の開始日を除いて変更できません。

- ▶ カレンダーを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 カレンダー・マネージャで、左側のナビゲーション・ペインからカレンダーを選択します。
 - 2 カレンダー名を入力します。
 - 3 必要に応じて情報を入力し、各ダイアログ・ボックスで保存をクリックします。

カレンダーを保存する前に「新しい年」を選択し、年を入力する必要があります。フィールドの詳細は、[131 ページの「カレンダー・マネージャのプロパティ」](#)を参照してください。

カレンダーの削除

- ▶ カレンダー全体または個々の年を削除するには、次の手順に従います。
 - 1 カレンダー・マネージャでカレンダーまたは年に移動します。
 - 2  をクリックします。
 - 3 メッセージが表示されたら、カレンダーまたは年の削除を確認します。

カレンダーの最後の年は削除できません。カレンダーの最後の年を削除するには、カレンダー全体を削除する必要があります。

カレンダーの変更

- ▶ 年を変更したりカレンダーに追加したりするには、次の手順に従います。
 - 1 カレンダー・マネージャでカレンダーに移動します。
 - カレンダーのプロパティを表示するカレンダー名を選択します。
 - 期間または年、および休日を変更する年を選択します。

期間または年を変更する場合は、週や期間の日付が連続していることを確認します。

フィールドの詳細は、131 ページの「[カレンダー・マネージャのプロパティ](#)」を参照してください。

- 2 カレンダーに年を追加するには、新しい年を選択し、プロパティを変更します。
- 3 保存をクリックします。

カレンダー・マネージャのプロパティ

次のトピックでは、カレンダー・マネージャで使用可能なプロパティについて説明します。

- [131 ページの「カレンダーのプロパティ」](#)
- [131 ページの「カスタム・カレンダーの期間および年のプロパティ」](#)
- [131 ページの「カスタム・カレンダーの休日のプロパティ」](#)

カレンダーのプロパティ

- 「**カレンダー名**」 - この名前は保存したら変更できません。
- 「**ユーザー定義の週**」 - 週の開始日を選択できるようにします。デフォルト週は7日間で、他の期間に関連付けられていません。ユーザー定義の週は、期間、四半期または月に関連付けることができますが、複数の期間にまたがる週は定義できません。開始日と終了日が重ならないようにし、終了日には開始日より後の日付を指定する必要があります。
- 「**週の開始**」 - ユーザー定義の週を使用する場合は、週の開始日を選択します。

カスタム・カレンダーの期間および年のプロパティ

- 「**新しい年**」 - 他に定義されている年がない場合は、任意の年を指定できます。すでに定義されている年がある場合は、順序に従った年を入力する必要があります。
- 「**四半期/期間/週**」 - システムによって自動的に四半期に連番が割り当てられます。どのカレンダーにも 12 の期間が含まれます。
- 「**開始日**」と「**終了日**」 - 開始日と終了日の初期値を入力します。残りの期間および開始日と終了日は自動的に移入され、四半期は論理的に割り当てられます。フィールドに値が移入されたら、開始日と終了日を編集できます。開始日と終了日は重ならないようにし、終了日には開始日より後の日付を指定する必要があります。

カスタム・カレンダーの休日のプロパティ


- 「**曜日**」 - 曜日を選択すると、カレンダーが自動的に移入されます。
休日は、日または曜日で選択できます。
- **カレンダー** - カレンダーには、前に選択した週の開始日が反映されます。矢印をクリックすると、カレンダーが 1 か月前後に移動します。平日と休日は、日の選択と選択解除によって 1 日単位で指定します。

ジョブ・ログの表示

カレンダー・マネージャに保管されるテキスト・フォーマットのジョブ・ログには、ジョブ名、開始時間、終了時間、ジョブを実行したユーザーの名前、ジョブが実行された理由、出力が表示されたかどうか、出力が配置されているディレクトリなど、スケジュールの実行に関する情報が格納されます。完了していないジョブには、終了時間の値がありません。

スケジュール済の Interactive Reporting ジョブでは、テキスト・ファイルではなく、HTML ログ・ファイルが生成されます。

- ▶ ジョブ・ログを表示するには、次の手順に従います。

- 1 「ジョブ実行ログ・エントリの表示」  をクリックします。
「ジョブ・ログ取得条件」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 オプション: 開始日と終了日およびユーザー情報を指定します。
すべてのログ・エントリを表示したり、特定の日やユーザーのログ・エントリのみを表示したりできます。132 ページの「ジョブ・ログ取得条件」を参照してください。
- 3 OK をクリックしてログを取得します(132 ページの「ジョブ・ログ・エントリ」を参照)。

ジョブ・ログ取得条件

- ▶ ジョブ・ログ・エントリを制限するには、次の手順に従います。

- 1 開始日または終了日を選択します。
A カレンダーが表示され、日付を選択できます。
開始日を省略すると、カレンダー・マネージャは定義されている終了日のエントリを取得します。その逆も同です。
- 2 すべてのユーザーを選択するか、またはユーザーを選択してユーザー名を入力します。
- 3 OK をクリックします。

ジョブ・ログ・エントリ

「ジョブ・ログ・エントリ」ウィンドウには、スケジュール名、ジョブ名、開始時間、ジョブを実行したユーザー名などのスケジュールの実行に関する情報が表示されます。

ユーザーは、自分のスケジュールに関連するログ・エントリのみを表示できます。管理者は、すべてのログ・エントリを表示できますが、特定のユーザーに関連するログ・エントリのみを表示するように要求することで、ログ・ビューを制限することもできます。

ログ・エントリは、最初はスケジュール名を基準に昇順にソートされます。列(「スケジュール名」、「ジョブ名」、「開始時刻」、「ユーザー」、「削除マーク」)の

見出しを選択すると、その列を基準にログ・エントリをソートできます。列を降順にソートするには、[Shift]キーを押しながら列の見出しをクリックします。

列の表示順序を変更するには、列ヘッダーをクリックして目的の場所までドラッグします。

ジョブ・ログ・エントリの詳細

- ▶ ジョブ・ログ・エントリの詳細を表示するには、ログ・エントリを選択して「詳細」をクリックします。

スケジュール名、ジョブ名、出力アーチファクト、開始時間、終了時間、ユーザー、実行回数などの情報が表示されます。

ジョブ・ログ・エントリの削除

- ▶ ジョブ・ログ・エントリを削除するには、次の手順に従います。
 - 1 ジョブ・ログ・エントリで、ログ・エントリを選択し、削除マークを選択します。
複数のログ・エントリを選択するには、[Shift]キーまたは[Ctrl]キーを使用します。
 - 2 削除を確認するメッセージが表示されたら、はいをクリックします。

削除マークを付けたエントリは、次の EPM Workspace サーバー・サイクル (Reporting and Analysis によって定期メンテナンス・タスクが実行される反復イベント)まで削除されません。

タイム・イベントの管理

パブリック反復タイム・イベントおよび外部でトリガーされるイベントの両方とも、ユーザーが表示およびアクセスできます。ただし、これらのイベントは、スケジュール・マネージャの役割を持つユーザーによってのみ管理されます(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照)。

次のトピックでは、タイム・イベントの管理について説明します。

- [133 ページの「パブリック反復タイム・イベントの管理」](#)
- [134 ページの「外部でトリガーされるイベントの作成」](#)
- [134 ページの「外部でトリガーされるイベントのトリガー」](#)

パブリック反復タイム・イベントの管理

パブリック反復タイム・イベントを作成、変更および削除するには、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』で説明されている個人の反復タイム・イベントの手順に従ってください。

外部でトリガーされるイベントの作成

外部でトリガーされるイベントは非タイム・イベントで、そのイベントに対してジョブがスケジュールされます。外部でトリガーされるイベントに対してスケジュールされたジョブは、イベントのトリガー後に実行されます。

- ▶ 外部でトリガーされるイベントを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」、「スケジュール」、「イベントの管理」の順に選択します。
 - 2 追加から外部でトリガーされるイベントを選択し、実行をクリックします。
 - 3 外部でトリガーされるイベントの作成で次の操作を行います。
 - 1 イベントの一意の名前と説明を入力します。
 - 2 「アクティブ」が選択されていることを確認します。
「アクティブ」オプションが選択されていない場合は、外部でトリガーされるイベントは機能しません。
 - 3 オプション: 発効日および時刻を選択します。
デフォルトでは現在の日付と時間が選択されています。
 - 4 オプション: 「失効日」を選択し、日付と時刻を選択します。
 - 4 役割、ユーザーまたはグループがパブリック反復タイム・イベントを表示および使用できるようにアクセス権を設定します(『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照)。
 - 5 終了をクリックします。

外部でトリガーされるイベントのトリガー

外部でトリガーされるイベントは、スケジュール・モジュールから手動でトリガーされる非タイム・イベントです。外部イベントは、Interactive Reporting SDK の外部でトリガーされるイベント・インタフェースの `triggerETE()` メソッドを使用してプログラムでトリガーできます(『Oracle Enterprise Performance Management Workspace Developer's Guide』を参照)。

- ▶ 外部でトリガーされるイベントをトリガーするには、次の手順に従います。
 - 1 「ナビゲート」、「スケジュール」、「イベントの管理」の順に選択します。
 - 2 イベントの隣にある変更を選択し、トリガーをクリックします。
イベントがトリガーされたことを確認するメッセージが表示されます。
 - 3 OK をクリックして、確認メッセージを閉じます。
 - 4 OK をクリックします。

パブリック・ジョブ・パラメータの管理

パブリック・ジョブ・パラメータは、スケジュール・マネージャの役割を持つユーザーによって管理されます(『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照)。

パブリック・ジョブ・パラメータを作成、変更および削除するには、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』で説明されている個人用ジョブ・パラメータの手順に従います。ただし、パラメータを個人用ではなくパブリックとして保存します。役割、グループおよびユーザーにパブリック・ジョブ・パラメータの使用を許可するようにアクセス権を適用します。

Interactive Reporting データベース接続の管理

Interactive Reporting ドキュメントは、Interactive Reporting データベース接続を使用してデータベースに接続します。Interactive Reporting ドキュメント内のクエリーごとに別の Interactive Reporting データベース接続を指定できます。ドキュメントのインポート時にクエリーに Interactive Reporting データベース接続が指定されていない場合、そのクエリーがローカル結果のみを使用する場合を除き、ユーザーはそのクエリーを処理できません。したがって、Interactive Reporting データベース接続をインポートし、Interactive Reporting ドキュメントをインポートしたユーザーにその接続へのアクセスを許可することが重要です。

SC_ENABLE フラグが TRUE (デフォルト)に設定されている場合、EPM Workspace で Interactive Reporting ドキュメントを処理するのに Interactive Reporting データベース接続への明示的なアクセス権は必要ありません。SC_ENABLE フラグが FALSE に設定されている場合、Interactive Reporting ドキュメントに関連付けられた Interactive Reporting データベース接続にアクセスできるのは、インポート・ユーザーから明示的なアクセス権が与えられたユーザーのみです。詳細は、[第9章「CMCを使用したサービスの構成」](#)を参照してください。

ジョブと Interactive Reporting ドキュメントのパススルーの管理

パススルーを使用すると、ユーザーは EPM Workspace に一度ログオンするのみで、別の認証なしにレポートのデータベースへアクセスできます。

管理者は、パススルーをグローバルに使用可能にすることでフォアグラウンド・ジョブと Interactive Reporting ドキュメント用にデータベースへの透過的なアクセスを提供できます。パススルーをグローバルに使用可能にすると、アイテム所有者はジョブと Interactive Reporting ドキュメントのパススルーを使用可能または使用不可にできます。

パススルーは、ユーザーのログイン情報または「設定」で設定したログイン情報を使用して構成するか、ログイン情報の選択をアイテム所有者に任せることができます(173 ページの「サービス構成プロパティの変更」を参照)。

ジョブ・キューの管理

ジョブ・キューは、ジョブの処理に使用可能なジョブ・サービスがない場合に行われます。管理者は、「ジョブの限度」プロパティと「保持」プロパティを使用してジョブ・サービスの可用性をコントロールできます(156 ページの「ジョブ・サービスの動的プロパティ」を参照)。

次のトピックでは、ジョブのタイプごとにジョブ・キューの動作を説明します。

- 136 ページの「スケジュール済のジョブ」
- 137 ページの「バックグラウンド・ジョブ」
- 137 ページの「フォアグラウンド・ジョブ」
- 137 ページの「ジョブ・サービスの無効化」
- 137 ページの「ジョブの限度」
- 138 ページの「ジョブの取得」
- 138 ページの「ジョブ専用のインテリジェンス・サービス」
- 139 ページの「Interactive Reporting Service の可用性とジョブ」

スケジュール済のジョブ

すべてのジョブ・サービスが定義済の最大数の同時ジョブを処理している場合は、スケジュールされたジョブがキューに追加されます。キューはイベント・サービスによって保持されます。キュー内のスケジュールは、優先度とトリガーされる順序に基づいてソートされます。

スケジュールが処理可能な状態になると、イベント・サービスはジョブを構築してサービス・ブローカに送信します。サービス・ブローカは、ジョブを処理できるすべてのジョブ・サービスのリストを取得し、各ジョブ・サービスが処理している同時ジョブの数に基づいて可用性を確認します。この情報は、各ジョブ・サービスから動的に取得されます。

ジョブを処理できるジョブ・サービスが見つからない場合、サービス・ブローカはジョブの限度に達したことを示す例外を送信します。これにより、イベント・サービスでジョブをキューに追加できるようになります。スケジュールはキューに追加され、ジョブ・サービスを選択するためのジョブ・データ(ジョブ・アプリケーションや実行可能ファイルの情報など)はキャッシュされます。

次のスケジュールが処理可能な状態になると、イベント・サービスはジョブを構築し、キャッシュされたジョブ・データに基づいてそのジョブ・タイプがキューにあるかどうかを確認します。一致するジョブ・タイプがある場合、ジョブはキューに追加されます。一致するジョブ・タイプがない場合、ジョブはサービス・ブローカに送信されて処理されます。

イベント・サービス・キューが使用可能になっている場合、ジョブ・サービスのポーリング・スレッドが初期化され、使用可能なジョブ・サービスがないかどうかチェックされます。使用可能なジョブ・サービスが1つでもある場合は、ジョブ・サービスはイベント・サービスにキャッシュされているジョブ・データに基づいて最初のスケジュールを処理します。スケジュールがジョブ・サービスに送信されると、スケジュールされたジョブのデータはキャッシュから除去されます。

変更されたジョブ・プロパティは、スケジュールがアクティブ化されてキューに追加された後で変更が行われた場合にのみ使用されます。

スケジュールされたジョブは、スケジュール・モジュールで管理されます(『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照)。

バックグラウンド・ジョブ

バックグラウンド・ジョブの処理に使用可能なジョブ・サービスがない場合(つまり、ジョブの限度に達している場合)、コマンドがイベント・サービスに発行され、その時点で実行されるカスタム・イベントのスケジュールが作成されます。このコマンドは、スケジュール情報をデータベースに保持します。スケジュールはバックグラウンド・ジョブに関連付けられたジョブ・パラメータを使用し、イベント・サービスはジョブを他のスケジュールされたジョブと同じように処理します。

フォアグラウンド・ジョブ

フォアグラウンド・ジョブの処理に使用可能なジョブ・サービスがない場合、ジョブ・サービスがビジーであることをユーザーに示す例外が発生します。ユーザーは、次に使用可能なジョブ・サービスで処理するためにジョブをキューに追加できます。ジョブをキューに追加する場合は、その時点で実行されるカスタム・イベントのスケジュールが作成され、イベント・サービスはジョブを他のスケジュールされたジョブと同じように処理します。ジョブがジョブ・サービスに送信されると、スケジュールとイベントは削除されます。

ユーザーは、出力をリポジトリに保持することなく **Production Reporting** フォアグラウンド・ジョブを実行できます。ジョブの実行後、出力はクライアント側の一時領域に保管され、ユーザーが出力を表示すると除去されます。

ジョブ・サービスの無効化

「ジョブ・サービスのプロパティ」ダイアログ・ボックスの新規「動的」タブの「保持」プロパティを使用すると、ユーザーはジョブ・サービスを保留にできます。ジョブ・サービスが保留になっている場合、新規ジョブは処理されませんが、ジョブ・サービスは既に実行されているジョブの処理を続行します。

ジョブの限度

「ジョブ・サービスのプロパティ」ダイアログ・ボックスの新規「動的」タブの **JOB_LIMIT** プロパティを使用すると、管理者はジョブ・サービスで同時に実行できるジョブの数を変更できます。ジョブの限度は実行時に変更できます。ジョブの限度が変更されている場合、ジョブ・サービス・プロパティが名前サービスによって更新されます。名前サービスは、ジョブ・サービスにジョブの限度の変更を通知します。このプロパティは、ジョブ・サービスを再起動することなく変更できます。

ジョブの取得

「ジョブ・サービスのプロパティ」ダイアログ・ボックスの新規「動的」タブに ACQUIRE_ONLY_JOB-ONLY_BI_SERVICES プロパティが追加されました。このプロパティを使用可能にすると、ジョブ・サービスはジョブのみ処理するように構成されたインテリジェンス・サービスを取得します。このプロパティを使用不可にすると、ジョブ・サービスは BQY ジョブと対話型要求(BQY ファイルとジョブの発行、BQY ファイルとジョブの変更など)の両方を処理するインテリジェンス・サービスを取得します。このプロパティは、デフォルトでは使用不可になっています。ジョブ・サービスに対してこのプロパティを使用可能にする場合は、対話型要求を処理できるインテリジェンス・サービスと BQY ジョブのみを処理できるインテリジェンス・サービスがそれぞれ少なくとも 1 つあることを確認してください。

ジョブ専用のインテリジェンス・サービス

JOB_REQUEST_PROCESSOR という値を設定した SERVICE_ROLE プロパティを <BrioPlatform>/etc フォルダの server.xml ファイルに追加することで、BQY ジョブのみを処理するようにインテリジェンス・サービスにフラグを付けることができます。たとえば、次のように入力します。

```
<property
defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110" name="SERVICE_ROLE">JOB_REQUEST_PROCESSORJOB_REQUEST_PROCESSOR</property>
```

SERVICE_ROLE のデフォルト値は GENERAL_REQUEST_PROCESSOR です。

ジョブのみを実行するようにフラグが付けられたインテリジェンス・サービスは、同時に実行する BQY ジョブの数を制限するように構成できます。同時実行の BQY ジョブの数を制限するには、MAX_CONCURRENT_JOB_REQUESTS プロパティを <BrioPlatform>/etc フォルダの server.xml ファイルに追加します。

次の例では、最大 10 個のジョブを同時に実行するようにインテリジェンス・サービスが設定されています。

```
<property
defid="0ad70321-0001-08aa-000000e738090110" name="MAX_CONCURRENT_JOB_REQUESTS">10</property>
```

MAX_CONCURRENT_JOBS プロパティのデフォルト値は 0(ゼロ)です。

BQY ジョブやドキュメントの発行、変更などの対話型要求および .ihhtml クライアントからのすべての要求を処理するには、少なくとも 1 つのインテリジェンス・サービスにデフォルト・サービス役割(GENERAL_REQUEST_PROCESSOR)を構成する必要があります。

インテリジェンス・サービスに JOB_REQUEST_PROCESSOR の役割を使用する場合は、ジョブ・サービスに ACQUIRE_ONLY_JOB-ONLY_BI_SERVICES プロパティを構成する必要があります。

Interactive Reporting Service の可用性とジョブ

同時に処理されている要求の数が指定した最大数未満である限り、Hyperion Interactive Reporting サービスはジョブ・サービス・クライアントからの追加のジョブ処理要求を受け入れます。最大数に達すると、Hyperion Interactive Reporting サービスは少なくとも 1つの実行中のジョブが完了するまではジョブの処理要求を受け入れません。一部のジョブ要求は、同時に処理されているジョブ要求の数が構成済の最大数未満になるまでブロックされます。ブロックされるジョブとそれらのジョブの処理開始が許可されるタイミングは決まっています。

ジョブの並列実行

ジョブ・サイクルを並列で実行できるように、RSC を使用して、ジョブ・サービスの動的プロパティである PARALLEL_CYCLE_LIMIT の値を変更します。

デフォルトで、PARALLEL_CYCLE_LIMIT は 1 に設定されており、ジョブ・サイクルはつぎつぎに連続して実行されます。

実行時間におけるパフォーマンスの改善を活用するには、ジョブ・サービスが PARALLEL_CYCLE_LIMIT 動的パラメータによって必要とされる複数の Hyperion Interactive Reporting サービスを取得できるように、複数の Hyperion Interactive Reporting サービスを実行する必要があります。Interactive Reporting ジョブ(タイプ JOB_ONLY_BI_SERVICE)のみを処理する複数の Hyperion Interactive Reporting サービスは、BIPlus/common/config/irmconfig.xml で指定されます。

PARALLEL_CYCLE_LIMIT の値を、IRJob サービス・タイプの MAX_NUMBER_OF_MANAGED_SERVICES の値と等しいか小さくなるように設定します。IRJob サービス・タイプ MAX_NUMBER_OF_MANAGED_SERVICES = 1 とデフォルト設定されています。

IRJob サービス・タイプの MAX_NUMBER_OF_MANAGED_SERVICES の値を、BI サービス・タイプの値より小さく設定します。BI サービス・タイプ MAX_NUMBER_OF_MANAGED_SERVICES = 2 とデフォルト設定されています。

この章の内容

ユーザー・インタフェースのカスタマイズ	141
アイテムとフォルダの編成.....	143
提供済コンテンツの管理.....	144
個人用ページの管理	144

ユーザー・インタフェースのカスタマイズ

- 141 ページの「デフォルト言語の選択の変更」
- 142 ページの「ログオン・パネル・イメージの置換え」
- 142 ページの「Java クライアント・インストーラへのアクセスの削除」
- 143 ページの「ユーザー・ログオフ後の URL のリダイレクト」

デフォルト言語の選択の変更

EPM Workspace では、ユーザーの Web ブラウザからロケール情報が読み取られ、ブラウザ・ロケール設定に基づいて使用する言語が選択されます。特定の場合において、ユーザーは、ブラウザ・ロケールで決定される以外の言語でコンテンツを表示できます。エンドユーザーは、Web ブラウザ言語オプションに言語を追加し、ブラウザで使用する言語をリストの上部に移動して、ロケールベースの言語の選択を上書きできます。

EPM Workspace では、優先度の順序でサポートされている言語が自動的に選択されます。EPM Workspace では、言語とロケール・コード間で完全に一致する条件を見つけるよう試みます。一致する条件に近いものが見つからない場合、EPM Workspace では、言語コードにのみ基づいて一致が試みられ、国コードは無視されます。

注： EPM Workspace によって選択された設定は Reporting and Analysis と EPM Workspace 内のアプリケーションにも適用されます。

ログオン・パネル・イメージの置換え

- ▶ ログオン・パネルに表示されるイメージを置き換えるには、以下の手順に従います。
 - 1 ピクセルの幅が 298、高さが 423 である `logon_panel.gif` という名のイメージ・ファイルを作成します。
 - 2 `¥BIPlus¥AppServer¥InstalledApps¥workspace_static¥themes¥theme_tadpole¥images_global¥`にある、インストールされたバージョンの `logon_panel.gif` を `logon_panel.gif.original` に名前変更します。手順 1 で作成した `logon_panel.gif` ファイルをこのディレクトリに移動します。
 - 3 `¥BIPlus¥AppServer¥InstalledApps¥WebLogic¥8.1¥Workspace¥applications¥workspace¥themes¥theme_tadpole¥images_global¥`にある、インストールされたバージョンの `logon_panel.gif` を `logon_panel.gif.original` に名前変更します。手順 1 で作成した `手順 1` ファイルをこのディレクトリに移動します。
 - 4 アプリケーションおよび Web サーバーを再起動します。

Java クライアント・インストーラへのアクセスの削除

管理者は、エンドユーザーが Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting Web Client および Smart View をインストールできるようにする、EPM Workspace ツールのメニュー・オプションを非表示にできます。また、Interactive Reporting インストーラのリンクを使用不可にするか、非表示にして、ツール・メニューに Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition を残しておくことができます。

- ▶ ツール・メニューのインストール・オプションを除去するには、次の手順に従います。
 - 1 CMC を使用: 「CMC」、「Web アプリケーション構成」、「ユーザー・インタフェース」、「EPM Workspace のインストーラ・メニュー・アイテムの使用可能」
 - 2 たとえば、次のような `IncludeJavaClientItems` パラメータの値を `FALSE` に変更します。

```
<module
  .....
  .....
  <param name="IncludeJavaClientItems" value="TRUE" />
</module>
```
- ▶ Interactive Reporting クライアントを除去し、Smart View を「ツール」メニューにある状態のままにするには、プロパティ

WebClient.Applications.DAServlet.ZAC から、ファイル<ワークスペースの配置>/WEB-INF/config/ws.conf の値を FALSE に変更します。

ユーザー・ログオフ後の URL のリダイレクト

カスタム・ポータルへの統合を容易にするために、管理者は、ユーザーが EPM Workspace をログオフした後に、Web ブラウザを任意の静的 URL にリダイレクトできます。これは、「CMC」、「Web アプリケーション構成」、「ユーザー・インタフェース」、「ポスト・ログオフ URL」で構成できます。

アイテムとフォルダの編成

EPM Workspace が効率的に機能するようにするには、ユーザーがアイテムに素早く簡単にアクセスできるように構成します。フォルダの階層内で、フォルダ・サイズを階層の深さに対してバランスさせます。フォルダには、多数のアイテム、またはフォルダ階層の過度の数のレベルを含まないようにします。たとえば、共有 Workspace ページなど、特定のフォルダは削除しないでください。詳細は、143 ページの「共有 Workspace ページ・フォルダの保守」を参照してください。

注： コンテンツを頻繁に EPM Workspace にインポートする場合、ルート・フォルダでウイルス・スキャンを定期的に行います。

System という非表示フォルダは、管理者用に設計されたものです。これは管理者にのみ表示され、非表示アイテムを再表示した場合にのみ表示されます。System を使用して、ユーザーに対して表示しないファイル(MIME タイプのアイコン・ファイルなど)を保管します。System フォルダは、名前の変更、削除または移動ができます。管理者は System フォルダには何も追加できません。既存オブジェクトの新規バージョンを作成できます。管理者は SYSTEM フォルダ内のオブジェクトを削除できます。

- ▶ System フォルダを表示するには、エクスプローラで「表示」>「再表示」を選択します。

System フォルダがフォルダ・リストに表示されます。

インポート関数を使用すると、Web Analysis ファイルをリポジトリにインポートできます。Oracle Hyperion(R) Web Analysis Studio を使用する必要があります。

共有 Workspace ページ・フォルダの保守

共有 Workspace ページ・フォルダは削除しないでください。フォルダが不注意に削除された場合、リポジトリのルートに共有 Workspace ページという名前で作成する必要があります。フォルダ名は変更できますが、名前を変更すると、共有ページは表示されません。

提供済コンテンツの管理

コンテンツを提供して、ユーザーのお気に入り追加できます。

たとえば、マーケティング・マネージャの Chris はマーケティング部門の全員がマーケティング・スケジュール・ドキュメントに簡単にアクセスできるようになって欲しいと思っています。Chris は、スケジュールをインポートして、マーケティング・グループにこのアイテムをプッシュします。ここで、マーケティング・グループのメンバーは、ドキュメントを表示するのに、エクスプローラを介してナビゲートする必要はなく、お気に入りからスケジュールを表示できます。

アイテムをプッシュする方法の手順は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

個人用ページの管理

管理者は、作成した個人用ページ、およびユーザーの個人用ページのコンテンツを構成します。個人用ページの使用の詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。個人用ページのサブレットの構成プロパティの詳細は、[第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」](#)を参照してください。

個人用ページの管理に関するタスクは次の通りです。

- [144 ページの「作成した個人用ページの構成」](#)
- [146 ページの「ブロードキャスト・メッセージの概要」](#)
- [147 ページの「任意の個人用ページ・コンテンツのユーザーへの提供」](#)
- [148 ページの「ファイル・コンテンツ・ウィンドウとしての HTML ファイルの表示」](#)
- [148 ページの「ブックマーク用のグラフィックの構成」](#)
- [148 ページの「例外の構成」](#)
- [149 ページの「個人用ページの表示」](#)
- [149 ページの「個人用ページの発行」](#)
- [149 ページの「個人用ページのその他のプロパティの構成」](#)

作成した個人用ページの構成

ユーザーが EPM Workspace にログオンしたらまず、デフォルトの作成した個人用ページはお気に入りにリストされます。このお気に入りは、EPM Workspace でユーザーの個人用ページの一部としてそのページが自動的に作成および保存されたものです。管理者が行う変更は、前にログオンしていたユーザーには影響しません。したがって、ユーザーの作成した個人用ページのそのコンテンツは、そのユーザーが最初にログオンする時点に依存します。

最初にログオンした後、ユーザーは自分の個人用ページを変更します。さらに、追加の個人用ページを作成することもできます。

アクセス権により、作成したページはユーザーごとに異なる場合があります。作成したページ用に使用するファイルのアクセス権を注意深く設定して、作成したページに、たとえば営業部のユーザーには、製造部のユーザーとは異なるコンテンツを表示するよう調整できます。

以下のアイテムは、作成した個人用ページにデフォルトで含まれています。

- /ブロードキャスト・メッセージ内のすべてのアイテムへのリンクを表示する1つのブロードキャスト・メッセージ・コンテンツ・ウィンドウ
- ブロードキャスト・メッセージ内の表示可能な各アイテムに対する1つのブロードキャスト・メッセージ・ファイルのコンテンツ・ウィンドウ
- 最初の2つの定義済フォルダそれぞれに対して1つのコンテンツ・ウィンドウ
- 任意の定義済フォルダ内の最初の(ソート済)表示可能なHTMLアイテム
- 「マイ・ブックマーク」コンテンツ・ウィンドウ
- 「例外ダッシュボード」コンテンツ・ウィンドウ

[189 ページの「個人用ページのプロパティ」](#)の作成した個人用ページを設定して、デフォルトに含まれるアイテムをカスタマイズできます。

▶ インパクト・マネージャ・サービス **Dashboard Development Services** の作成した個人用ページを構成するには、次のこれらのタスクの全部または一部を実行します。

- [189 ページの「個人用ページのプロパティ」](#)の作成した個人用ページを設定します。
- 作成した個人用ページに表示されるリンクの表示不可のアイテムと、表示可能なHTMLファイル、またはコンテンツをそこに表示できる外部リンクの組合せでブロードキャスト・メッセージを移入します。

これらのすべてのアイテムは、リンクとして表示され、ブロードキャスト・メッセージの見出しで1つのコンテンツ・ウィンドウを構成します。表示可能なアイテムによっては、「作成した個人用ページ」プロパティの構成設定に応じて、ファイル・コンテンツ・ウィンドウとして表示できるものもあります。

- ブロードキャスト・メッセージでは、ユーザーが最初にログオンしたときに表示される定義済サブフォルダを作成します。これらのフォルダに表示可能なHTMLアイテムおよび表示不可のアイテムを移入します。各定義済フォルダには、フォルダのすべてのアイテムへのリンクが含まれる対応するコンテンツ・ウィンドウがあります。各表示可能アイテムは、ファイル・コンテンツ・ウィンドウとして表示されます。

ヒント： いずれのコンテンツも同様に、必要なアクセス権のあるユーザーのみがブロードキャスト・メッセージのアイテムとフォルダ、およびその他の定義済フォルダを表示できます。グループに対して作成したページを調整するには、ブロードキャスト・メッセージでこれらのグループを目的にしたフォルダとアイテム、および定義済フォルダを配置し、ターゲットのグループにアクセス権を割り当てます。たとえば、各グループが定義済フォルダの異なるサブセットにアクセスする場合は、各グループのユーザーには、最初にログオンしたときに異なるコンテンツ・ウィンドウが表示されます。

ブロードキャスト・メッセージの概要

「ブロードキャスト・メッセージ」フォルダは、個々のコンテンツのアイテムに与えられるアクセス権によって制約される場合を除き、メッセージをすべてのシステム・ユーザーに拡大します。通知およびドキュメントを広く均等配置するためにこのフォルダに配置します。

「ブロードキャスト・メッセージ・コンテンツ」ウィンドウおよび「ブロードキャスト・メッセージ」という用語は、そのサブフォルダ(構成済フォルダ)のコンテンツを除き、「ブロードキャスト・メッセージ」フォルダ自体のコンテンツのみを参照します。

ブロードキャスト・メッセージには次のウィンドウが含まれています。

- ブロードキャスト・メッセージ内のすべてのアイテムへのリンクを表示する1つのコンテンツ・ウィンドウ
- ブロードキャスト・メッセージ内の表示可能な各アイテムに対するファイル・コンテンツ・ウィンドウ

他のコンテンツ・ウィンドウ・タイプと異なり、ブロードキャスト・メッセージはユーザーの個人用ページから削除できません。

ユーザーが別のページをデフォルトの個人用ページにする場合、ブロードキャスト・メッセージは最初に作成された個人用ページに残ったままになります。ユーザーは、別の個人用ページに「ブロードキャスト・メッセージ」フォルダを追加した場合にのみ、作成したページを削除できます。(ユーザーは、プッシュした個人用ページをコピーして、ブロードキャスト・メッセージを含む複数のページを取得できます)。

ブロードキャスト・メッセージのコンテンツの構成

ブロードキャスト・メッセージは、企業または管理の必要に準じてユーザーに表示するものをカスタマイズする手段です。目的のグループのみがアクセスできるようにするため、様々なグループのコンテンツを含め、各アイテムまたはフォルダにアクセス権を設定することで、ユーザーのブラウザにコンテンツをプッシュします。

定義済フォルダの構成

ブロードキャスト・メッセージ用の定義済フォルダを構成するには、このフォルダを「ブロードキャスト・メッセージ」フォルダに追加します。

- ▶ ブロードキャスト・メッセージにフォルダを追加するには、次の手順に従います。
- 1 エクスプローラでブロードキャスト・メッセージを選択します。

ヒント: 「ブロードキャスト・メッセージ」フォルダを表示するには、「表示」を選択してから「再表示」を選択します。

- 2 「ファイル」、「新規」、「フォルダ」の順に選択します。
- 3 フォルダ名を入力して、OK をクリックします。

作成したフォルダは、エクスプローラのブロードキャスト・メッセージに表示されません。

フォルダのアイテムの構成

- ▶ フォルダのアイテムを構成するには、次の手順に従います。
- 1 エクスプローラでブロードキャスト・メッセージのフォルダを選択します。
- 2 「ファイル」>「インポート」>「アイテム」を選択します。
- 3 「お気に入り」、「個人用ページの管理」の順に選択します。
- 4 個人用ページを選択し、コンテンツのカスタマイズをクリックします。
- 5 ブロードキャスト・メッセージのサブフォルダをコンテンツの選択から個人用ページ・コンテンツに移動し、設定の保存をクリックします。
- 6 「お気に入り」>「個人用ページ」を選択して、追加したコンテンツを表示します。

個人用ページへのコンテンツの追加は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』の指示に従ってください。

ブロードキャスト・メッセージ・フォルダ名の変更

「ブロードキャスト・メッセージ」フォルダの名前を変更する場合、変更したフォルダ名は、「エクスプローラ」およびユーザーの「個人用ページ」のブロードキャスト・メッセージ・コンテンツ・ウィンドウのタイトル・バーに表示されます。システム・プロパティのブロードキャスト・メッセージを含むフォルダは変更した名前が自動的に反映されます。ブロードキャスト・メッセージまたはそのサブフォルダである「個人用ページ・コンテンツ」の名前を変更した後、もう1つのプロパティである「場所」を手動で変更する必要があります。「場所」プロパティは、「個人用ページのプロパティ」セクションにあります(189 ページの「個人用ページのプロパティ」を参照)。

任意の個人用ページ・コンテンツのユーザーへの提供

作成した個人用ページに構成する内容以外に、ユーザーが個人用ページに含める任意のコンテンツについても構成できます。

定義済フォルダはすべて、ユーザーにとってオプションのコンテンツであり、個人用ページに追加するためにユーザーのコンテンツ・ページに表示されます。定義済フォルダは、追加されると、含んでいるアイテムへのリンクと共に、コンテンツ・ウィンドウとして個人用ページに表示されます。

エクスプローラを使用して定義済フォルダにすべてのコンテンツをインポートします(『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照)。

ファイル・コンテンツ・ウィンドウとしての HTML ファイルの表示

EPM Workspace では、ユーザーはファイル・コンテンツ・ウィンドウとして個人用ページ上に HTML ファイルを表示できます。これで、HTML ファイルにリンクを持たせるのではなく、ファイル・コンテンツが個人用ページに表示されるようになります。

デフォルトで、定義済フォルダの最初に表示可能なアイテムが、ファイル・コンテンツ・ウィンドウとして各ユーザーの作成した個人用ページ上に自動的に表示されます。管理者として、必要なアクセス権を持つユーザーが登録を行うと、コンテンツ HTML アイテムが確実に表示されるようにします。

ファイル・コンテンツ・ウィンドウとしての HTML ファイルの表示の詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

ブックマーク用のグラフィックの構成

ユーザーがイメージ・ブックマークに対して使用できるグラフィックを提供するには、サブレット配置ディレクトリの `/media/personalize` にグラフィック・ファイルを配置します。

要求に応じて、ユーザーのカスタマイズされたアイコン・ファイルを追加できます。これらのイメージ・ファイルを `/media`、またはコンテキスト・ルート (`/workspace`) の範囲内のフォルダに追加し、そのファイル (`/wsmedia/sqr/vcr.gif` など) を示す URL をユーザーに指示します。また、カスタム・グラフィックも、リポジトリにインポートし、ブックマーク・ダイアログを使用するカスタム・アイコンとして使用できます。

注： ファイル名またはディレクトリにダブルバイト文字セット (DBCS) の文字が含まれている場合は、アイコンは個人用ページに表示されません。

例外の構成

例外を例外ダッシュボードに追加できるようにするには、エクスプローラを介してインポートするときに詳細オプション「ユーザーがこのファイルを例外ダッシュボードに追加可能」を選択します。

ユーザーが例外ダッシュボードに例外対応のジョブまたはアイテムを追加する方法の詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

ジョブに例外機能を与えるには、`output.properties` ファイルに例外を書き込むように、ジョブ (通常は、Production Reporting プログラム、または Interactive Reporting ジョブ) を設計する必要があります。『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

ジョブの例外をサポートするプログラマ情報は、『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照してください。

個人用ページの表示

エクスプローラで定義したコンテンツは、初めてのユーザー向けに EPM Workspace によって作成された個人用ページに表示されます。

個人用ページの発行

ユーザーが自分の個人用ページにコピーできるように、個人用ページを発行できます。また、個人用ページの発行に使用するデフォルトの発行プロパティを変更できます(第9章「[CMCを使用したサービスの構成](#)」を参照)。

個人用ページが発行されると、ブロードキャスト・メッセージの「個人用ページのコンテンツ」フォルダに追加されます(デフォルト・フォルダの場所は root/Broadcast Messages/Personal Page Content です)。

/個人用ページのコンテンツへのアクセスを変更するユーザーは、個人用ページを発行できます(『Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド』を参照)。

注： 2名のユーザーが発行済ページをコピーできても、同一の結果が保証されないことをユーザーが理解するよう確認します。発行済ページに含まれるアイテムへのアクセス権により、ユーザーに表示される内容が決定されます。

個人用ページのその他のプロパティの構成

次のような個人用ページの構成プロパティを設定するには第9章「[CMCを使用したサービスの構成](#)」を参照してください。

- カラー・スキーム
- 個人用ページの最大数
- コンテンツ・ウィンドウの見出しの可視性(タイトル・バーに似た色の付いたバー)

8

RSCサービスの構成

この章の内容

RSCについて	151
サービスの管理	153
RSC サービス・プロパティの変更.....	153
ホストの管理.....	160
Production Reporting データベース・サーバーの管理	162
ジョブの管理.....	164

RSC について

RSC は、リモート・コード・サービスを管理できるようにするユーティリティです。次の関連トピックも参照してください:

- 151 ページの「RSC の開始」
- 152 ページの「RSC へのログオン」
- 152 ページの「RSC の使用方法」

RSC は、分散された Reporting and Analysis システムのすべてのホストのサービスを構成します。システムのすべてのサーバー・ホストから RSC を実行できます。

RSC を使用すると、サービスの変更に加えて、次のタスクを行えます:


- Production Reporting ジョブ・ファクトリのホストの追加、削除および変更
- データベース・サーバーの追加、削除、および変更

RSC の開始

▶ RSC を開始するには、次の手順に従います。

1 サービス構成ユーティリティを開始します。

- Windows: 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Workspace」、「ユーティリティおよび管理」、「サービス・コンフィグレータ」の順に選択します。または、<Hyperion_Home>%products%\Foundation%\workspace%\bin から ServcieConfig.bat を実行します。
- UNIX: /products/Foundation/workspace/bin にインストールされている ServiceConfigurator.sh を実行します。

- 2 サービス・コンフィグレータ・ツールバーから、「モジュール」、「リモート・サービス・コンフィグレータ」の順に選択するか、をクリックします。








RSC へのログオン

- ▶ RSC にログオンするには、以下の必要な情報を入力します。
- 管理ユーザー名
 - ユーザー名のパスワード
 - 構成するサービスの Reporting and Analysis のホスト
 - サーバー・ホストの Reporting and Analysis のポート番号。デフォルトは 6800 です。

注： ポート番号は、GSM が 6800 でないポート上で実行するようインストール中に構成される場合は、異なる場合があります。

RSC の使用方法

RSC に最初にログオンすると、ログオンするホストにインストール済のサービス、および強調表示されたサービスの基本プロパティが表示されます。「ツールバー」ボタンは、RSC を使用して実行する機能を表します。

RSC ツールバー・ボタン	ツールチップ	説明
	Exit Remote Service Configurator	ユーザーの確認後、RSC を閉じます。
	アイテム・リストのリフレッシュ	サービスのリストや選択したサービスの基本プロパティを更新します。
	Ping service	サービスが存続しているかどうかを調べます。
	Show defined hosts	ホストの定義、削除、変更を行う「Defined Hosts」ウィンドウを表示します。
	Show defined database servers in the system	データベース・サーバーの追加、削除、および変更を「Defined Database Servers」ウィンドウを表示します。
	Show item properties	編集を行うためにサービスのプロパティを表示します。
	Show Help for Remote Service Configurator	RSC のオンライン・ヘルプを表示します。

サービスの管理

RSC を使用して、インストールされている以下のサービスを削除したり、それらのプロパティを変更したりできます。


- イベント・サービス(ES)
- ジョブ・サービス(JF)
- リポジトリ・サービス(RM)
- サービス・ブローカ(SB)

サービスの使用については、[153 ページの「RSC サービスの ping」](#)を参照してください。

[153 ページの「RSC サービス・プロパティの変更」](#)も参照してください。

RSC サービスの ping

サービスが正しく開始しなかった、または適切に操作を停止しなかったために、エラーが発生する場合があります。サービスが利用可能かを簡単にテストする方法は、これを ping することです。すなわち、メッセージを送信して、サービスが応答するかどうか確認します。

- ▶ RSC からサービスを ping するには、サービスを選択し、 をクリックします。

サービスが応答した場合は、次のようなメッセージが表示されます。

```
Service ES1_stardust is alive.
```

サービスが応答しない場合は、ping がサービスに接続できなかったことを示す、次のようなメッセージが表示されます。

```
A Brio.Portal error occurred in Ping:  
ConnectionException: Connection refused: connect
```

これは、サービスが実行していないことを示します。このエラーを受信した場合、サービス・ログ・ファイルを参照し、エラーの発生理由を調査します。

RSC サービス・プロパティの変更

サービスのプロパティを変更すると、そのサービスは変更通知を受信し、即時この構成を更新します。ほとんどのプロパティは、サービスの実行中に使用され、即時影響を受けます。このようなプロパティの例として挙げられるのは、最大接続数、およびロギング・レベルです。


ただし、開始時にのみ使用されるプロパティは、次にサービスが開始されるまで有効ではありません。このようなプロパティには、ホストおよびログ・ファイルが含まれます。

すべてのサービスにプロパティ・グループがすべてあるわけではありません。すべてまたはほとんどの RSC サービスが持つプロパティのグループ、および各サービスのその他のプロパティを、次のトピックで説明します。

- [154 ページの「共通の RSC プロパティ」](#)
- [155 ページの「ジョブ・サービスのプロパティ」](#)

注： この項で特に記述のない RSC サービスは、共通のプロパティのみを持ちます。

▶ サービスのプロパティを表示または変更するには、次の手順に従います。

- 1 サービス名をダブルクリックするか、またはサービス名を選択してをクリックします。

プロパティのページが表示されます。

- 2 プロパティのグループを表示または変更するには、タブを選択します。

たとえば、「Storage」タブを選択して、ビジネス・データの永続的な保存場所を定義するプロパティを変更できます。

共通の RSC プロパティ

すべての RSC サービスには、全般プロパティと詳細設定プロパティがあります。またほとんどのサービスにはストレージ・プロパティがあります。

- [154 ページの「一般 RSC プロパティ」](#)
- [154 ページの「詳細 RSC プロパティ」](#)
- [155 ページの「RSC ストレージのプロパティ」](#)
- [155 ページの「リポジトリ・サービスの動的プロパティ」](#)

一般 RSC プロパティ

すべての RSC サービスの全般プロパティ

- **説明** - サービスの簡単な説明。
- **ホスト** - サービスの存在するホスト。ホストを選択または定義できます。ホストを定義する場合、組織内で簡単にサービスを識別できる名前を入力します。最大 64 文字まで入力できます。[160 ページの「ホストの管理」](#)を参照してください。

詳細 RSC プロパティ

詳細プロパティでは、サービスのロギング・レベルおよびサービスがサポートする最大接続数を説明します。すべてのサービスに詳細プロパティがあります。

- **ログ・レベル** - サービス・エラーが記録されるレベル。[199 ページの「ロギング・レベルの構成」](#)を参照してください。

このプロパティへの変更は、即時反映されます。したがって、エラーが発生し、より多くのデバッグ情報が必要な場合、サービスを再起動しないでロギング・レベルを変更できます。

- **最大接続数** - 許可された最大接続数。許容する接続のメモリーの割当てを検討します。UNIX などの一部のシステムではファイル記述子の最大数を上げる必要があります。

このプロパティへの変更は、即時反映されます。サービスの再起動のない最大接続数設定の変更は、実行時間にサービスを動的に調整するのに役に立ちます。

RSC ストレージのプロパティ

ストレージ・プロパティは、データを保管するデータベースに接続するサービスによって使用されます。これらのサービスは次の独自のデータを保管します。

- **リポジトリ・サービス - Reporting and Analysis** コンテンツ・メタデータ

注意 リポジトリ・サービスを複製する場合、物理ファイルの保管に使用するファイル・システムは、機能するようにシステム間で共有される必要があります。ファイル・システムは、最初のリポジトリ・サービスと共に配置され、リモート・リポジトリ・サービスにはシステムへの読み取り/書き込みアクセスが必要です。

- **イベント・サービス - スケジュールおよび登録**

サービス・ブローカおよびジョブ・サービスにはストレージのプロパティはありません。

ストレージ・プロパティの設定は、あまり変更しないでください。変更を必要とするのは、たとえば、ネットワークにおけるホスト名の割当て、データベース・ユーザー・アカウント(名前またはパスワード)への変更、またはデータベース・タイプへの変更(Oracle から Sybase への変更など)などの場合です。この変更には、外部システム構成への広範囲な変更も必要となります。

リポジトリ・サービスの動的プロパティ

動的プロパティにより、ディスク・スペースが低くなると、リポジトリ・サービスは警告を発行できます。

- **DISK_SPACE_USAGE_LIMIT** - リポジトリ・サービスが、ファイル・システム・ストレージ・ディスク・スペースの限度に関する警告を発行するときを決定します。デフォルトは 90 になっています。
- **DISK_SPACE_NOTIF_EMAIL** - 指定のディスク・スペースの使用限度に達した場合、通知が送信される電子メール・アドレス。複数の電子メールアドレスがある場合は、セミコロン(;)で分けます。

ジョブ・サービスのプロパティ

次のトピックで、ジョブ・サービスに対して一意のプロパティ、およびジョブ・サービスの「プロパティ」ダイアログ・ボックスから開始するその他のタスクについて説明します。

- [156 ページの「ジョブ・サービスの動的プロパティ」](#)

- 157 ページの「ジョブ・サービスのデータベース・プロパティ」
- 157 ページの「ジョブ・サービス Production Reporting プロパティ」
- 157 ページの「ジョブ・サービスのアプリケーション・プロパティ」
- 160 ページの「ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ」

ジョブ・サービスのプロパティを変更する場合、サービスは変更通知を受け取り、その構成を即時更新します。サービスが実行中に使用されるプロパティは即時影響を受けます。このようなプロパティには、データベース、Production Reporting、アプリケーションおよび実行可能タブの、最大接続数、ロギング・レベルおよびすべてのプロパティが含まれます。

ただし、開始時にのみ使用されるプロパティは、次にジョブ・サービスが開始されるまで影響を及ぼしません。これにはログ・ファイル・プロパティが該当します。

ジョブ・サービスの動的プロパティ

動的プロパティによって、ジョブ・サービスがジョブをプロセスする方法についての情報が指定されます。

- **ジョブのみの BI サービスのみの取得** - 専用のジョブ・プロセッサとして、または Interactive Reporting ジョブとインタラクティブ・レポートの両方を処理する対話型プロセッサとして、このジョブ・サービスが実行するかどうかを決定します。
- **BQY のサポート** - ジョブ・サービスが Interactive Reporting ジョブを処理できるかどうかを決定します。

TRUE に設定されている場合は、ジョブ・サービスは、Interactive Reporting ジョブを実行できます。TRUE でない場合、実行できません。ジョブ・サービスが Interactive Reporting サービスとともにインストールされている場合は、このプロパティはデフォルトで TRUE に設定されます。

- **ジョブの限度** - ジョブ・サービスで実行される同時ジョブの最大数。
この値が 0 または -1 である場合、同時ジョブは無制限に実行できます。実行時にジョブの限度を変更できます。ジョブの限度への変更は、ジョブ・サービスにより動的に取得されます。
- **保持** - ジョブ・サービスが、プロセスのためにジョブを受け入れることができるかどうかを決定します。
TRUE に設定すると、ジョブ・サービスは、実行中のジョブのプロセスは続けますが、新規ジョブはプロセスしません。
- **並列サイクル限度** - Interactive Reporting サービスの数が 1 より大きい場合、異なる Interactive Reporting サービスを使用して同時に実行できるジョブ・サイクルの数を決定します。デフォルトは 1 になっています。

すべてのプロパティはジョブ・サービスを再起動しなくても変更できます。

ジョブ・サービスのデータベース・プロパティ

データベースのプロパティによって、ジョブを実行するデータベースにジョブ・サービスを接続するために必要な情報が指定されます。この情報は、データベース・サーバーがあるホストのサーバー名、タイプ、場所などです。

ローカル・データベース・サーバーに接続を追加で設定すると、ジョブ・サービスがローカル・データベースに直接接続するプログラムを実行できるようになります(162 ページの「データベース・サーバーの追加」を参照)。

- ▶ ジョブ・サービスと追加したデータベース間の接続を定義するには、次の手順に従います。

- 1 追加をクリックします。

Reporting and Analysis データベース・サーバーのリストが表示されます。

- 2 データベースを選択し、接続文字列または環境変数を定義します。

- ▶ ジョブ・サービスからデータベースの接続を削除するには、「削除」をクリックします。

- ▶ データベースの接続プロパティを変更するには、次の手順に従います。

- 1 リストからデータベースを選択して、変更をクリックします。

- 2 名前および値を使用して環境変数を変更または作成します。

たとえば、name=ORACLE_SID、value=PAYROLL のように指定します。

注： Production Reporting サーバー・リストと組み合わせたデータベース・サーバー・リストを使用して、Production Reporting ドキュメントをインポートするデータ・ソースを構築します。

ジョブ・サービス Production Reporting プロパティ

Production Reporting ページは、ジョブ・サービスと同じホストで現在定義され、利用可能な Production Reporting サーバーをリストします。Production Reporting プロパティは、Production Reporting ジョブを実行するために使用されるシステムの、Production Reporting サーバーを定義します。

Production Reporting サーバーを追加および削除し、これに対応するボタンをクリックして、Production Reporting サーバーのパスを変更できます。

注： Production Reporting プロパティの変更ではサービスの再起動は必要ではありません。

ジョブ・サービスのアプリケーション・プロパティ

アプリケーション・プロパティでは、ジョブ・サービスによって使用されるアプリケーションを説明します。ジョブ・サービスを構成して、Production Reporting、

Interactive Reporting および汎用の、3つのジョブ・タイプの組合せを実行できません。

- **アプリケーション** - アプリケーション名。アプリケーションを選択するか、またはアプリケーションを追加します。Reporting and Analysis で定義されたすべてのアプリケーションがリストされます。アプリケーションには複数の実行可能ファイルがあり、それぞれがロードを均等配置するための異なるジョブ・サービス上にあります。
- **説明** - アプリケーションの、オプションの読取り専用の説明。「変更」をクリックして説明を変更します。
- **コマンド文字列** - 読取り専用のコマンド文字列であり、実行時にアプリケーションに渡されます。「変更」をクリックしてコマンド文字列を変更します。

ジョブ・サービスにアプリケーションを追加して、関連する実行可能ファイルのないアプリケーションを削除し、対応するボタンをクリックしてアプリケーション・プロパティを変更できます。アプリケーションに対して実行可能ファイルを定義する必要がある場合のみ、「追加」ボタンが使用可能になります(158 ページの「ジョブ・サービスのアプリケーションの追加」を参照)。


アプリケーションを追加後、実行可能プロパティを定義する必要があります(160 ページの「ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ」を参照)。

ジョブ・サービスのアプリケーションの追加

アプリケーションを追加する場合、アプリケーションおよび実行可能ファイルを指定する必要があります。アプリケーションは、複数のホスト上でインストールされる場合があります。アプリケーションの各インストールには、異なる実行可能ファイル、または実行可能ファイル・ページで定義するプログラム・ファイルおよびパスがあります。

たとえば、Oracle Reports(アプリケーション)は、apollo と zeus の2つのホスト上にインストールされる場合があります。apollo と zeus のジョブ・サービスには、同一のアプリケーション・プロパティがありますが、これらの実行可能ファイルは異なります。これは、各ホストに独自の実行可能ファイルがあるためです。実行可能ファイルの詳細は、160 ページの「ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ」を参照してください。

- ▶ アプリケーションを追加するには、次の手順に従います。

- 1  をクリックして、「ジョブ・サービス」アプリケーション・プロパティを表示します。
- 2 追加をクリックして、アプリケーション・プロパティを開きます。
- 3 名前と説明を入力します。
- 4 実行時にアプリケーションに渡すコマンド文字列を入力します。
次のいずれかのメソッドを使用します。
 - 定義済テンプレートを選択します。
 - 表示されているフィールドにコマンド文字列を入力します。
 - コマンド・トークンを使用してコマンド文字列を作成します。

- 5 OK をクリックし、実行可能ファイルタブをクリックして、アプリケーションの実行可能ファイルのプロパティを定義します。

160 ページの「ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ」を参照してください。

コマンド・トークン

コマンド・トークンを使用して、実行時にアプリケーションに渡すコマンド文字列を作成できます。

- \$CMD - 実行可能ファイルのフル・パスおよび名前。
- \$PARAMS - プログラム用に定義したパラメータ。プログラム・プロパティの個人のパラメータについてプロンプトおよびデフォルト値を設定できます。
- \$PROGRAM - 実行するプログラム。プログラムの例には、シェル・スクリプト、SQL スクリプトまたは Oracle Reports があります。
- \$BPROGRAM - 除去されるファイルの拡張子を持つプログラム名。ハードコードされたテキストと組み合わせてプログラム名を使用し、エラー・ファイル、ログ・ファイルまたは別のこのようなファイルの名前を指定します。log=\$BPROGRAM.log がその一例です。
- \$FLAGS - プログラムと関連付けられたフラグ。
- \$EFLAGS - 実行可能ファイル、または実行可能ファイルのインスタンスと関連付けられたフラグ。この実行可能ファイルに関連付けられたすべてのジョブは、これらのフラグを使用します。
- \$DBCONNECT - プログラムに関連付けられたデータベースの接続文字列。設定されると、エンド・ユーザーは、実行時に接続文字列を指定できません。
- \$DBUSERNAME - プログラムに関連付けられたデータベース・ユーザー名。設定されると、エンド・ユーザーは実行時にユーザー名を指定できません。
- \$DBPASSWORD - プログラムに関連付けられたデータベースのパスワード。設定されると、エンド・ユーザーは実行時にパスワードを指定できません。
- \$BPUSERNAME - ユーザー名。ジョブへの入力パラメータとしてユーザー名が必要な場合、このトークンを指定すると、ユーザー名の入力を促すメッセージが表示されるのではなく、システムによりユーザー名がコマンド・ラインに自動的に挿入されます。

コマンド文字列の例

Oracle Reports を実行するコマンド文字列のテンプレートの例:

```
$CMD userid=$DBUSERNAME/$DBPASSWORD@$DBCONNECT report=$PROGRAM  
destype=file desname=$BPROGRAM.html batch=yes errfile=$BPROGRAM.err  
desformat=html
```

上記の Oracle Reports のコマンド文字列のトークンが値で置換されると、ジョブ・サービスで実行されるコマンドは次のようになります。

```
r30run32 userid=scott/tiger@Brio8 report=inventory destype=file  
desname=inventory.html batch=yes errfile=inventory.err desformat=html
```

UNIX 上で実行中のジョブ・サービスでシェル・スクリプトを実行するコマンド文字列のテンプレートの例:

```
$CMD $PROGRAM $PARAMS
```

シェル・スクリプトの実行に使用される上記のコマンド文字列のトークンが値で置換されると、ジョブ・サービスで実行されるコマンドは次のようになります。

```
sh runscript.sh p1 p2 p3
```

Windows システム上で実行中のジョブ・サービスでバッチ・ファイルを実行するコマンド文字列のテンプレートの例:

```
$PROGRAM $PARAMS
```

バッチ・ファイルの実行に使用される上記のコマンド文字列のトークンが値で置換されると、ジョブ・サービスで実行されるコマンドは次のようになります。

```
Runbat.bat p1 p2 p3
```

ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ

実行可能ファイルのプロパティによって、ジョブ・サービスで使用されているアプリケーションを実行するための情報が指定されます。

- **実行可能ファイル** - アプリケーションの実行可能プログラムの場所(フル・パスおよび実行可能ファイル名)。ジョブ・サービスと一緒に配置する必要があります。
- **フラグ** - プログラムに関連付けられたフラグを示す、トークン\$EFLAGS でコマンド・ラインに使用される値。
- **環境変数** - \$PATH、\$ORACLE_HOME など、アプリケーションに関連付けられた環境変数。

実行可能ファイルのプロパティを持つのはジョブ・サービスのみです。

ホストの管理

「定義済ホスト」ダイアログ・ボックスでは、Reporting and Analysis で現在定義されているホストが一覧され、ホスト名およびプラットフォームが識別されます。


次のトピックで、ホストの追加、変更、および削除方法を説明します。

- [160 ページの「ホストの追加」](#)
- [161 ページの「ホストの変更」](#)
- [161 ページの「ホストの削除」](#)

ホストの追加

コンピュータにサービスをインストールした後は、EPM Workspace にコンピュータをホストとして追加する必要があります。

- ▶ ホストを追加するには、次の手順に従います。

- 1  をクリックして、追加をクリックします。
- 2 ホスト名、およびそのホストによって使用されるプラットフォームを入力します。

注意 ホスト名は数字で開始できません。Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスおよび Hyperion Interactive Reporting サービスは、ホスト名が数字で始まる場合は機能しません。

- 3 OK をクリックします。

Reporting and Analysis では、ホストが ping され、ホストがネットワーク上にあることが確認されます。ping できなかった場合、エラー・メッセージが表示されます。

Reporting and Analysis でホストが正常に ping され、ホスト名が検証されたら、Reporting and Analysis ではホストが追加され、「定義済ホスト」ダイアログ・ボックスにリストされます。


- 4 OK をクリックします。

注： ホスト名を変更した場合、Reporting and Analysis サービスおよびジョブ・サービスを再起動して、ホストに認識されるようにします。

ホストの変更

ホストのプラットフォームの指定を変更するにはホストを変更します。


- ▶ ホストを変更するには、次の手順に従います。

- 1  をクリックします。
- 2 リストからホストを選択して、変更をクリックします。
- 3 ホストのプラットフォームを選択して、OK をクリックします。

ホストの削除

サービスがホスト上にインストールされている場合、ホストを削除できません。

- ▶ ホストを削除するには、次の手順に従います。

- 1  をクリックします。
- 2 リストからホストを選択して、削除をクリックします。
- 3 メッセージが表示されたら、ホストを削除するためにはいをクリックして、OK をクリックします。

Production Reporting データベース・サーバーの管理

Reporting and Analysis では、Production Reporting データベースを使用して、アプリケーション・メタデータを保管および管理します。

データベース・サーバーの定義

定義済データベース・サーバー・ダイアログ・ボックスには、現在定義されている Reporting and Analysis Production Reporting データベース・サーバーがリストされ、各データベース・サーバーの名前、タイプおよび場所(ホスト)が示されます。

次のトピックで、RSC を使用してデータベース・サーバーを管理する方法を説明します。


- [162 ページの「データベース・サーバー・プロパティ」](#)
- [162 ページの「データベース・サーバーの追加」](#)
- [163 ページの「ジョブ・サービスのデータベース接続の追加」](#)
- [163 ページの「データベース・サーバーの変更」](#)
- [164 ページの「データベース・サーバーの削除」](#)

データベース・サーバー・プロパティ

「データベースのタイプ」、「ユーザー名」および「パスワード」は、すべてのリポジトリ・データベース・サーバーに設定されるプロパティです。ユーザー名は、データベース・サーバーで Production Reporting プログラムを実行するジョブ・サービスにより(リポジトリにジョブを保存するときにデータベース・ユーザー名とパスワードが提供されない場合に)使用されるデフォルト・ユーザー名です。

データベース・サーバーの追加

▶ データベース・サーバーを追加するには、次の手順に従います。

- 1  をクリックします。
- 2 追加をクリックします。
- 3 次の情報を入力します。
 - **名前** - 追加するデータベース・サーバーの名前(英数字で 5 文字以上)。
 - **データベース・タイプ** - 使用するデータベース・サーバーのタイプ。
 - **ホスト** - データベース・サーバーのあるホスト。
 - **ユーザー名** - データベース・サーバー上で Production Reporting プログラムを実行するジョブ・サービスによって使用されるデフォルト・ユーザー名。任意のジョブをインポートする際に、データベース・ユーザー名とパスワードをジョブの所有者が提供しない場合に使用されます。
 - **パスワード** - ユーザー名に対応する有効なパスワード。
- 4 OK をクリックします。

ジョブ・サービスのデータベース接続の追加


データベースの接続を促進するには、データベース・サーバーを追加した後、データベース・サーバーとジョブ・サービスの関連付けを行う必要があります。そうすることで、ローカル・データベースに直接接続するプログラムを実行して、ジョブ・サービスでネットワーク・トラフィックが削除できます。

複数のジョブ・サービスは、同じデータベースにアクセスできます。たとえば、1つの Reporting and Analysis ドメイン内に3つのジョブ・サービスを定義でき、各ジョブ・サービスは大規模な UNIX サーバーにロードされる任意の XYZ データベースを指し示すことができます。

XYZ データベースでデータを使用する任意のレポートを実行するように求められた場合、サービス・ブローカは、そのデータベースに関連付けられた3つのジョブ・サービスの1つにジョブを送信します。1つのジョブ・サービスをホストするコンピュータが停止した場合、サービス・ブローカは別のジョブ・サービスにそのジョブを自動的に送ります。

▶ データベース・サーバーをジョブ・サービスに関連付けるには、次の手順に従います。

1 データベース・サーバーに関連付けるジョブ・サービスを選択します。

2  をクリックします。

3 データベースタブを選択して、追加をクリックします。

4 ジョブ・サービスに関連付けるデータベース・サーバーを選択して、OK をクリックします。

5 次の情報を入力します。

- **接続情報** - 必要な情報はデータベース・タイプに依存します。たとえば、Oracle データベースには、接続文字列を入力します。


環境変数 - データベースに対して Production Reporting ジョブを実行する場合にのみ必要となります。Production Reporting で必要とされる場合のあるデータベース情報および共有ライブラリ情報を指定するために使用されます。

例: name=ORACLE_SID、value=PAYROLL

6 OK をクリックします。

データベース・サーバーの変更

▶ データベース・サーバーを変更するには、次の手順に従います。


1  をクリックします。

2 リストからデータベース・サーバーを選択して、変更をクリックします。

3 必要に応じて変更を行い(162 ページの「データベース・サーバー・プロパティ」を参照)、OK をクリックします。

データベース・サーバーの削除

▶ データベース・サーバーを削除するには、次の手順に従います。

- 1  をクリックします。
- 2 リストからデータベース・サーバーを選択し、削除をクリックします。
- 3 メッセージが表示されたら、はいをクリックしてデータベースの削除を確認し、OK をクリックします。

ジョブの管理

ジョブ・サービスは、コンテンツ作成プログラムまたはジョブから構成されており、これを実行します。ジョブ・サービスは、EPM Workspace ジョブ要求(スケジューラ・モジュールからユーザーが開始した要求など)をリッスンし、プログラムの実行を管理し、要求者にその結果を戻して、リポジトリにその結果を保管します。

EPM Workspace は、次の 3 つのジョブ・タイプを保管して実行できます。

- **Interactive Reporting** - Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting Studio で作成されるジョブ。
- **Production Reporting** - Production Reporting studio で作成される、保護されたまたは保護されていないジョブ。
- **汎用** - コマンド・ライン・インタフェースを通じて他のアプリケーション(Oracle または Crystal Reports など)を使用して作成されたジョブ。

Interactive Reporting ジョブでは、特別な構成は必要ではありません。すべてのジョブ・サービスは、Interactive Reporting ジョブを実行するために事前に定義されます。

ユーザーが Production Reporting または汎用ジョブを実行するためには、ジョブ・サービスを構成して、レポート・エンジンまたはアプリケーション・プログラムを実行する必要があります。1 つのジョブ・サービスは、各タイプに対して構成されている限り、複数のジョブ・タイプを実行できます(Interactive Reporting は除く)。

次のトピックで、ジョブ・サービスでジョブを実行するように構成する方法を説明します。

- [165 ページの「エンタープライズ・レポーティング・アプリケーションのパフォーマンスの最適化」](#)
- [165 ページの「ジョブ・サービスの追加からジョブの実行へ」](#)

[158 ページの「ジョブ・サービスのアプリケーションの追加」](#) および [160 ページの「ジョブ・サービスの実行可能ファイル・プロパティ」](#) も参照してください。

注： システムでは、実行するすべてのジョブに対してテキストのログ・ファイル(ジョブの下にリストされる)が自動的に作成されます。Java システム・プロパティ、`-Dbqlogfile_isprimary=false` を共通サービス再起動スクリプト

トに追加して、すべてのジョブのログ・ファイルを抑制できます。すべてのサービスを停止して再起動する必要があります。サービスの停止と開始の詳細は、第2章「管理ツールとタスク」を参照してください。

エンタープライズ・レポーティング・アプリケーションのパフォーマンスの最適化

Reporting and Analysis アーキテクチャは、分散された企業の実装向けに設計されています。最適なパフォーマンスを得るためには、次のとおり実行します。

- ジョブ・サービス(複数のコンピュータ上の特定のデータソースに割り当てられた複数のジョブ・サービス)を複製します。これで、一般的な信頼性が向上し、ジョブの処理時間が短縮されます。
- ジョブ・サービスをデータベースと同じコンピュータにインストールします。これで貴重なネットワーク・リソースを節約できます。

注： 一般に、1つの任意のホストには1つのジョブ・サービスがある必要があります。複数のアプリケーションを実行するには、1つのジョブ・サービスを構成します。

ジョブを企業向けアプリケーションに対して実行するには、次のパラメータを構成します。

- **ホスト** - システムにホスト名で識別される物理的なコンピュータ。
- **ジョブ・サービス** - RSC を使用するホスト上のジョブ・サービス。
- **アプリケーション** - バックグラウンドで実行するために設計されたサードパーティ・ベンダーのアプリケーション。アプリケーションの例としては、Production Reporting、Oracle Reports、または PERL などのパブリック・ドメイン・アプリケーション・シェルなどがあります。
- **プログラム** - アプリケーションの起動を推進するために使用されるソース。たとえばユーザーは、ジョブ・サービスを介して任意のホスト上の Production Reporting アプリケーションに売上レポートを作成する Production Reporting プログラムを送信する場合があります。

ジョブ・サービスの追加からジョブの実行へ

このトピックでは、ジョブを実行するための構成プロセスを一連の手順にまとめて、サービスのインストールからジョブの正常なプロセスまでの作業の流れを説明します。

EPM Workspace でジョブを実行するには、次の手順に従います。詳しくは、このドキュメントの他のトピックで説明します。

1. ジョブ・サービスを実行するホスト上のレポート・アプリケーションの実行可能ファイルをインストールします。レポート・アプリケーションに搭載されているインストール・プログラムを使用します。
2. ホスト上で、Reporting and Analysis サービス・インストール DVD からジョブ・サービス・ソフトウェアをインストールします。

3. RSC を使用してジョブ・サービスを構成します。
4. ジョブ・サービスを開始します。
5. 汎用ジョブでは、アプリケーションおよび実行可能ファイルを追加します。
Production Reporting ジョブでは、Production Reporting 実行可能ファイルを追加して、データベース・サーバーおよびデータベース接続プロパティを定義します。Interactive Reporting ジョブには特別な構成は必要ありません。
6. アプリケーションに対して実行するジョブ(レポートまたはプログラム)をインポートします。

これは、Interactive Reporting、Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting または汎用ジョブである場合があります。
7. これでユーザーは「エクスプローラ」からジョブを実行できます。

9

CMCを使用したサービスの構成

この章の内容

CMC について.....	167
CMC の開始.....	168
CMC の使用方法	169
CMC ビュー.....	170
CMC のプロパティの変更.....	172

CMC について

Configuration and Monitoring Console (CMC)により、配置された CMC サービス、Web アプリケーションおよびエージェントのプロパティのモニターおよび構成、サービスの開始および停止、およびサービス・インスタンスの追加または除去が行えます。

CMC を使用すると、様々なボックス全体でサービス、Web アプリケーションおよびエージェントをモニター、構成および保持できます。「Hyperion ホーム」から複数のサービスを実行できます。

構成情報は、Oracle Hyperion Shared Services Registry に保管されます。最初の構成では、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Configurator により、CMC のすべてのプロパティにデフォルトの値で Shared Services Registry が移入されます。

注： CMC を使用してリポジトリ・サービスのデータ・ディレクトリを代替のドライブの文字に移動する場合、そのデータは移動されません。サービスを再起動して、ルート・ディレクトリおよび子のオブジェクトを新規フォルダにコピーする必要があります。たとえば、`c:\¥storage¥root` を `c:\¥repdata¥root` にコピーします。初期設定と同じドライブの文字に移動する場合は、これは該当しません。

次のサービスおよび Web アプリケーションは、CMC を使用して変更できます。

- Analytic Bridge Service (ABS) - Hyperion Interactive Reporting サービスの拡張アクセスとも言われるサービス
- 注釈サービス
- 認証サービス(AN)
- 認可サービス(AZ)

- グローバル・サービス・マネージャ(GSM)
- ハーベスタ・サービス(HAR)
- Hyperion Interactive Reporting サービス(BI)
- Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービス(DAS)
- Hyperion Interactive Reporting ジョブ・サービス(BI)
- ローカル・サービス・マネージャ(LSM)ローカル・サービス・マネージャ LSM
- ロギング・サービス(LS)
- パブリッシャ・サービス(PUB)
- 検索インデックス作成
- キーワード検索プロバイダ
- 検索モニター
- セッション・マネージャ(SM)
- スーパー・サービス(BPS)
- Update(Transformer)Service(TFM)
- 使用追跡サービス(UT)
- Web Analysis Web アプリケーション
- Workspace Web アプリケーション

CMC の開始

CMC は、CMC エージェントおよび CMC UI から構成されています。

- ▶ UNIX で CMC を開始するには、次の手順に従います。

- 1 次のディレクトリに移動します。

```
Hyperion Home/common/workspacert/9.5.0.0/bin
```

- 2 startAgent.sh を実行して、CMC エージェントを開始します。

- 3 startUI.sh を実行して、CMC UI を開始します。

- ▶ Windows で CMC を開始するには、次の手順に従います。

- 1 次のうち 1 つを実行して CMC エージェントを開始します。

- Hyperion Home/common/workspacert/9.5.0.0/bin にある startAgent.bat を実行します。
- 「サービス・コントロール・パネル」で「Hyperion Workspace - エージェント・サービス」をクリックします。

- 2 次のうち 1 つを実行して CMC UI を開始します。

- Hyperion Home/common/workspacert/9.5.0.0/bin にある startUI.bat を実行します。



- 「サービス・コントロール・パネル」で「Hyperion Workspace - UI サービス」をクリックします。
- ▶ Workspace から CMC を開始するには、「ナビゲート」>「管理」>「構成コンソール」を選択します。

注： startAgent.bat/startAgent.sh は、使用可能なすべてのサービスを開始します。stopAgent.bat/stopAgent.sh は、実行中のすべてのサービスを停止します。1 度エージェントが起動して実行を開始したら、CMC UI を使用して、個々のサービスの停止、開始および再起動を行うことができます。

CMC の使用方法

- ▶ CMC を使用するには、次の手順に従います。
- 1 ビューを選択します(170 ページの「CMC ビュー」を参照)。
 - 2 サービス、Web アプリケーションまたはエージェントを選択します。
 - 3 次のいずれかのアクションを行います。
 - サービス、Web アプリケーションまたはエージェントを右クリックして、メニューからオプションを選択します。
 - ツールバー・ボタンをクリックします。

CMC ツールバー・ボタン	メニュー・オプション	説明
	開始	サービスの開始
	停止	サービスまたはエージェントの停止
	再起動	停止後のサービスの再起動
	コピー	サービスの新規構成へのコピー
	削除	サービス構成の削除(デフォルトでない構成のみ削除可能)
	構成の使用可能	現在の構成の使用可能
	構成の使用不可	現在の構成の使用不可
	現在のビューのリフレッシュ	現在のビューのリフレッシュ
	プロパティ	選択したサービス、Web アプリケーションまたはエージェントのプロパティの表示

CMC ツールバー・ボタン	メニュー・オプション	説明
	ログオフ	CMC のログオフ
	ヘルプ	CMC のオンライン・ヘルプの表示

注： 選択したサービス、Web アプリケーションまたはエージェントの有効なアクションを表すツールバー・ボタンおよびメニュー・オプションのみが使用可能になります。

注： ビューのすべてのサービスまたはエージェントに適用されるグローバル・アクションを実行するには、「アクション」メニューからオプションを選択します。

CMC ビュー

CMC には次の 3 つのビューがあります。

- サービス構成ビュー
- Web アプリケーション構成ビュー
- エージェント構成ビュー

注： ビューをリフレッシュするには、「ビュー」>「リフレッシュ」を選択します。

サービス構成ビュー

「サービス構成ビュー」では、Shared Services Registry で登録されたすべてのサービスが表示されます。

表 12 サービス構成情報

フィールド	説明
エージェント	サービスがインストールされるホスト
サービス・タイプ	サービスのタイプ。次のサービスがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ● EPM Workspace ● Interactive Reporting ログ・サービス ● Interactive Reporting インテリジェンス・サービス ● Interactive Reporting ジョブ・サービス ● Interactive Reporting Data Access Service ● 注釈サービス
構成名	サービス構成の名前

フィールド	説明
使用可能	サービスが現在使用可能かどうか
ステータス	サービスが現在開始または停止しているかどうか


サービス構成ビューで、次のアクションを実行できます。

- サービスの開始
- サービスの停止
- サービスの再起動
- サービスの削除
- サービスの使用可能
- サービスの使用不可
- サービス・プロパティのレビュー
- ログ構成のリフレッシュ
- すべてのサービスの停止
- すべてのサービスの再起動
- 残りのサービスの開始
- サービスの複製(サービスの複製を参照)

サービスの複製

CMC を使用して、サービスのコピーまたはサービスのグループを作成できます (たとえば、ワークスペース共通サービス)。

▶ サービスを複製するには、次の手順に従います。

- 1 「サービス構成ビュー」で、サービスを選択し、 をクリックします。
- 2 表示されるダイアログ・ボックスで、新規構成の名前およびポートの範囲を入力します。
- 3 サービスを開始します。

注： 1つの注釈サービスのみがボックスにつき許可されます。デフォルトの構成は削除できませんが、単に使用不可にできます。

Web アプリケーション構成ビュー

Web アプリケーション構成ビューには、Shared Services Registry で登録されたすべての Web アプリケーションが表示されます。

表 13 Web アプリケーション構成情報

フィールド	説明
名前	Web アプリケーション名
タイプ	Web アプリケーションのタイプ。次の Web アプリケーションがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ● EPM Workspace Web アプリケーション ● WebAnalysis Web アプリケーション

- ▶ Web アプリケーションのプロパティをレビューするには、Web アプリケーションを右クリックして、「プロパティ」を選択します。

注： CMC では Web アプリケーションを開始および停止できません。

エージェント構成ビュー

エージェント構成ビューには、Oracle Hyperion Shared Services Registry に登録されているすべてのエージェントが表示されます。

表 14 エージェント構成情報

フィールド	説明
エージェント	エージェントがインストールされるホスト
使用可能	エージェントが現在使用可能かどうか
ステータス	エージェントが現在開始または停止しているかどうか


サービス構成ビューで、次のアクションを実行できます。

- エージェントを使用可能にする
- エージェントを使用不可にする
- エージェントのプロパティをレビューする
- 個別のエージェントを停止する
- すべてのエージェントを停止する

注： CMC のエージェントは開始または再起動できません。エージェントを開始または再起動するには、Hyperionホームの/common/workspacert/9.5.0.0/binにある startAgent.bat/startAgent.sh を使用します。

CMC のプロパティの変更

- ▶ CMC のプロパティを変更するには、以下の手順に従います。
 - 1 ビューを選択します(170 ページの「CMC ビュー」を参照)。

- 2 サービス、Web アプリケーションまたはエージェントを選択して、 をクリックします。
- 3 希望するプロパティを変更して、「OK」をクリックします。

プロパティを変更するには、プロパティ値をクリックし、新規の値を入力するか、または表示されているドロップダウン・リストから値を選択する、のいずれかを行います。

プロパティを選択すると、プロパティの説明は、ダイアログ・ボックスの「説明」セクションに表示されます。

注： プロパティを変更する場合、変更内容が反映されるようにサービスを再起動する必要があります。また、データ・アクセス・サービス DSN では、データ・アクセス・サービスを再起動して、DSN への変更を取得します。

注： ログ構成の値を変更し、カスタム・ログ構成を追加する場合、ログ構成をリフレッシュして(右クリックして、「ログ構成のリフレッシュ」を選択します)、変更内容をサービスに適用します。ログ構成の変更を反映させるために、サービスを再起動する必要はありません。

サービス構成プロパティの変更

サービス構成プロパティには次のプロパティがあります。

- [全般サービス構成プロパティ](#)
- [サービス・プロパティ](#)
- [データ・ソース・プロパティ](#)
- [ログ](#)

どのサービスにもすべてのプロパティがあるわけではありません。表示されるプロパティは選択したサービスによって異なります。

全般サービス構成プロパティ

表 15 全般サービス構成プロパティの説明

プロパティ	説明
モジュール・プロパティ	<ul style="list-style-type: none"> ● 名前 - サービス構成の名前(デフォルトの構成は除去できません。) ● 使用可能 - サービスが使用可能かどうか ● ファイアウォール・ポート - ワークスペース・サービスで使用されるファイアウォール・ポート ● ポートの範囲 - Interactive Reporting サービスで使用されるポートの範囲 ● 使用可能 - Interactive Reporting ログ・サービスがその他のサービスで開始されるかどうか ● ログ・レベル - サービスのロギング・レベル ● 一時的な場所 - 一時的なデータの保管用ディレクトリ

プロパティ	説明
管理	<ul style="list-style-type: none"> ● マネージ・カウント - 管理する Interactive Reporting サービス・プロセスの数 ● モニター間隔 - IRM でプロセスを ping またはモニターする IRM の間隔(秒) ● モニター・タイムアウト - IRM でプロセスが到達できないことを宣言する間隔(秒) ● ハード・シャットダウン・タイムアウト - ハードウェア強制終了までのタイム・サービスの存続期間(秒) ● 段階的なシャットダウン・タイムアウト - 段階的なシャットダウン状態でのタイム・サービスの存続期間(秒) ● 起動待機時間 - 新規サービス・インスタンスの開始までの時間 ● IPC 待機時間 - プロセス間通信プロトコルの待ち時間 ● IPC 数 - エージェントとエージェント・モジュール・プロセス間で開始する通信ハンドシェイクを待機する時間(ミリ秒) ● Xms (MB) - (EPM Workspace サービスのみ)Workspace サービスの初期メモリー・ヒープ・サイズ ● Xmx (MB) - (EPM Workspace サービスのみ)Workspace サービスの最大メモリー・ヒープ・サイズ ● Xrs - (EPM Workspace サービスのみ)Workspace サービスで Java/VM によるオペレーティング・システム・シグナルの使用頻度を少なくするかどうか ● JAVA_OPTS - EPM Workspace サービスのみ)EPM Workspace サービスの JVM オプションのあるシステム・プロパティ名 ● コマンドの引数 - 追加サービス・コマンド・ラインの引数 ● 環境変数 - 処理する環境変数 ● ライブラリ・パス - ランタイム・ライブラリ・パス ● 動的サービスのプロパティ - 動的サービスのプロパティ <p>注： スクリーン・リーダー設定がアクティブでないときは、キーボード・ナビゲーションを使用不可にできます。キーボード・ナビゲーションを使用不可にするには、動的サービスのプロパティでパラメータ <code>DISABLE_KEYBOARD_NAV_IN_NON_508_MODE=true</code> を Hyperion Interactive Reporting Service (BI)に追加します。</p>
LSM	<ul style="list-style-type: none"> ● GSM 同期時刻 - LSM が LSM の情報を GSM の情報と同期化する頻度(秒) ● サービス・テスト間隔 - LSM がサービスの実行を確認する頻度(分) ● サービス登録間隔 - LSM が GSM でサービスを登録する頻度(分)
エバ グリー ン	<p>Interactive Reporting サービスのみ</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスが使用可能かどうか ● 稼働時間の最大しきい値 - サービス・プロセスが新規サービス・プロセスに置き換えられるまでの時間(分) ● 指定シャットダウン時刻 - サービス・プロセスが、SHUTDOWN_REQUEST モードになり、新規プロセスに置き換えられるまでの時刻(午前 0 時からの分数) ● 猶予期間 - 指定シャットダウン時刻を実施している時間表示(分) ● ドキュメント数の最大しきい値 - 開かれるドキュメントの最大数。この数を超えると、サービス・プロセスが新規プロセスに置き換えられます ● ジョブ数の最大しきい値 - 実行されるジョブの最大数。この数を超えると、サービス・プロセスが新規プロセスに置き換えられます ● リレーショナル・プロセス数の最大しきい値 - リレーショナル・データ・クエリーの最大数。この数を超えると、サービス・プロセスが置き換えられます

プロパティ	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ● MDD プロセスの最大しきい値 - MDD データ・ソース(Essbase、MSOLAP、SAP など)への要求数。この数を超えると、サービス・プロセスが新規プロセスに置き換えられます ● リレーショナルの他の最大しきい値 - リレーショナル・データ・ソース(Oracle、SQL Server、Sybase、DB2 など)への要求数。ストアド・プロシージャの呼出し、関数リストの取得などの要求も含まれます。この数を超えると、サービス・プロセスが新規プロセスに置き換えられます ● MDD の他の最大しきい値 - MDD データ・ソース(Essbase、MSOLAP、SAP など)への要求数。アウトラインの作成、メンバーの取得、値の表示などの要求も含まれます。この数を超えると、サービス・プロセスが新規プロセスに置き換えられます

サービス・プロパティ

サービス・プロパティに含まれるものは次のとおりです。

- [EPM Workspace サービス・プロパティ](#)
- [Interactive Reporting インテリジェンスおよび Interactive Reporting ジョブ・サービス・プロパティ](#)
- [Interactive Reporting データ・アクセス・サービス・プロパティ](#)

EPM Workspace サービス・プロパティ

表 16 EPM Workspace サービス・プロパティの説明

EPM Workspace サービス	プロパティの説明
GSM、サービス・ブローカ、SQR ジョブ・ファクトリ、イベント・サービス、およびリポジトリ	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか ● ポート - サービスで使用される通信ポート ● ホーム・ディレクトリ - 内部データを保管するディレクトリ
使用方法、ロギング	● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか
セッション・マネージャ	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか ● セッションのアイドル時間 - ユーザーがアイドル状態である場合、セッションが閉じられる期間(秒)
パブリッシャ、認証、認可および Analytic Bridge	● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか
ハーベスタおよびトランスフォーマ	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか ● 要求ログの最大時間 - インパクト・マネージャ変換の要求ログ・エントリを保持する最大時間(時間)。主にインパクト・マネージャの元に戻す

EPM Workspace サービス	プロパティの説明
	<p>タスクに使用されます。デフォルト値の 336 時間は、2 週間です。そのため、2 週間は変換を元に戻すことができます。その後、ログは削除されるので、変換を元に戻すことはできなくなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● スレッド・プール・サイズ - サービスで使用されるスレッドの数 ● ポーリング間隔 - ポーリング・スレッドが次のポーリングまでにスリープする時間(秒) ● キューの最大ロック時間 - ワーカー・スレッドがロックを保持できる最大時間(秒)。以後、ロックは無効とみなされます。この時間を過ぎると、ロックは強制的に解放され、別のワーカー・スレッドが要求を処理できるようになります。
検索インデックス作成	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか ● マージ係数 - この数は、検索可能インデックスのセグメント・サイズに作用します。有効な値は 2-10 です。 ● 最適化の最大時間 - 検索可能インデックスが再度最適化されるまでの最大時間(秒)。インデックスの最適化は、ファイル・システムの最適化と考え方が似ています。 ● バッファに入力されるドキュメントの最大数 - メモリーにキャッシュされるドキュメントの最大数。この数を超えると、ドキュメントはディスクにフラッシュされます ● ホーム・ディレクトリ - 内部データを保管するサービス・ホーム・ディレクトリ
キーワード検索プロバイダ	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか ● ワーカー数 - サービスで使用されるスレッドの数 ● ワーカーのポーリング期間 - インデックス作成要求キューをポーリングする期間(秒)。これには最長時間を定義します。この時間を過ぎると、検索によって新規または更新済ドキュメントのインデックスが作成または再作成されます。
検索モニター	<ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能 - サービスがその他のサービスで始まるかどうか ● ポーリング期間 - 検索可能ソースをモニターするポーリング間隔(秒) ● 検索構成 XML - 検索サービス 成ファイルの場所

Interactive Reporting インテリジェンスおよび Interactive Reporting ジョブ・サービス・プロパティ

表 17 Interactive Reporting インテリジェンスおよび Interactive Reporting ジョブ・サービスプロパティの説明

プロパティ	説明
使用可能	サービスがその他のサービスで始まるかどうか
キャッシュの場所	サービスの一時ファイルの保管先ディレクトリ
同時ジョブ要求の最大数	実行する同時ジョブの最大数。他のすべてのジョブはブロックされます
同時要求の最大数	(IR ジョブのみ)このサービスがサポートする同時要求の最大数。他のすべての要求はブロックされます。

プロパティ	説明
最小ディスク・スペース	新規要求をサービスするのに必要な最小空きディスク・スペース(MB)
ドキュメント・アンロード・タイムアウト	非アクティブな時間(秒)。この時間を過ぎると、リソースを節約するためにドキュメントがメモリーからアンロードされます
ドキュメント・アンロードのしきい値	開かれたドキュメント数がこの値を超えると、ドキュメント・アンロード・メカニズムがアクティブにされます
ポーリング間隔	ポーリング・スレッドが次のポーリングまでにスリープする時間(秒)

Interactive Reporting データ・アクセス・サービス・プロパティ

表 18 Interactive Reporting データ・アクセス・サービス・プロパティの説明

プロパティ	説明
使用可能	サービスがその他のサービスで始まるかどうか
リレーショナルの部分的结果セル数	Interactive Reporting データ・アクセス・サービスからクライアントへの送信時に、クエリーからの一連の結果データが含むことのできるリレーショナル・データ・テーブル・セルの最大数
多次元の部分的结果行カウント	Interactive Reporting データ・アクセス・サービスからクライアントへの送信時に、クエリーからの一連の結果データが含むことのできる多次元データ・テーブル行の最大数
結果のリープ間隔	要求クライアントが切断されていると見られる場合に、Interactive Reporting データ・アクセス・サービスがメモリーからクエリー・データを消去する頻度(秒)
結果の最小アイドル時間	クライアントとの接続が切断されていると想定する前に、クライアント取得のためにクエリー・データをメモリーに保存しておく最短時間(秒)
接続リープ間隔	使用されていないデータベース接続のチェックの頻度

データ・ソース・プロパティ

データ・ソース・プロパティは、Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービス(DAS)のデータ・ソースに適用されます。これらのプロパティを使用して、Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのパフォーマンスを微調整できます。

- ▶ 新規データ・ソースを DAS に追加するには、「**新規**」をクリックします
- ▶ DAS の既存のデータ・ソースのプロパティを変更するには、「**変更**」をクリックします。

注： 接続タイプ、データベースのタイプおよびデータ・ソース名は、Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスに要求を送るためにのみ使用されます。要求されたデータベースに接続するデータベース・クライアント・ソフトウェアは、データベース・アクセスの送信された要求を受け入れるために Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスが構成される各ホスト上にインストールされ、適切に構成される必要があります。

表 19 データソースのプロパティ

プロパティ	説明
接続タイプ	データ・ソース・データベース・ドライバ。Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのホスト上にインストールされる必要があります。
データベースのタイプ	データ・ソースのデータベースのタイプ
データ・ソース名	データ・ソースの名前。
プール内の最大接続数	データベース・ユーザー名と Interactive Reporting データベース接続の組合せに対して開いたままにする、使用されていない最大データベース接続数
最大キュー・サイズ	データベース・サーバーへの接続を同時に待機する最大要求数
最大アイドル時間	使用されていないデータベース接続を開いたままにする最大時間(秒)
リープ間隔	使用されていないデータベース接続をチェックして閉じる頻度(秒)
プールの最大アイドル時間	データベース・ユーザー名と Interactive Reporting データベース接続の組合せで使用されていない接続をメモリーに保持する最大時間(秒)
プロキシ・セッションの使用	<p>Oracle データベースにのみ適用されます。 Oracle プロキシ認証を使用するかどうか。</p> <p>Oracle プロキシ認証を使用する場合、ユーザーは Oracle データベースによって認証されません。プロキシ・ユーザーがユーザーの代理で行動します。この機能は、EPM Workspace のパススルー認証と併せて使用できるため、ユーザーは EPM Workspace への認証のみが必要であり、Oracle データベースに接続できます。接続は、効率を上げるために、Oracle データベース接続ソフトウェアによって接続プールに保持されます。</p> <p>プロキシ・セッションを使用する場合、次の情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● プロキシ・ユーザー名 - Oracle データベース・プロキシ・ユーザー・アカウントのユーザー名 ● プロキシ・パスワード - Oracle データベース・プロキシ・ユーザー・アカウントのパスワード

プロパティ	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ● Oracle のプロキシ・プールの最小値 - Oracle 接続プールで利用可能なデータベース接続の最小値 ● Oracle のプロキシ・プールの増分 - 接続が必要な場合に作成される追加で接続される数。プールにある既存の接続がすべて使用され、接続の最大値には到達していないものです ● Oracle のプロキシ・プールの最大値 - データ・ソースを使用して開くことができる接続の最大値 <p>ノート: この機能を使用するにはまず、ユーザー・アカウントと、Oracle データベース・サーバーで Oracle プロキシ認証を使用するために Oracle プロキシ・ユーザー・アカウントを構成する必要があります。</p>

ログ

次のロギング・レベルが使用可能です。

- すべて
 - 常時
 - デバッグ
 - 情報
 - Warn
 - 致命的
 - OFF
 - 継承済
- ▶ ログレベルを変更するには、既存のロギング・レベルをクリックし、ドロップダウン・リストから新規のレベルを選択します。

注: それぞれ固有のロギング・レベルの詳細は、[199 ページの「ロギング・レベルの構成」](#)を参照してください。

Web アプリケーション構成プロパティの変更

Web アプリケーション構成プロパティには、次のプロパティがあります。

- [Web Analysis Web アプリケーション・プロパティ](#)
- [Workspace Web アプリケーション・プロパティ](#)

Web Analysis Web アプリケーション・プロパティ

Web Analysis Web アプリケーション・プロパティには、次のプロパティがあります。

- [デバッグ構成プロパティ](#)
- [Java プラグイン構成プロパティ](#)
- [結果セット構成プロパティ](#)

- Essbase 構成プロパティ
- Shared Services 構成プロパティ
- 関連コンテンツ構成プロパティ
- その他の Web Analysis プロパティ

デバッグ構成プロパティ

表 20 デバッグ構成プロパティ

プロパティ	説明
レベルの設定	Web Analysis のロギング・レベル
disableConfigServlet	コンフィグレーション・サーブレットを使用不可にするかどうか
デバッグ情報トレース	追加のデバッグ情報およびスタック・トレースを表示するかどうか

Java プラグイン構成プロパティ

表 21 Java プラグイン構成プロパティ

プロパティ	説明
JRE バージョン	JRE バージョン番号
JRE ClassID	JRE クラス ID。アプレットで使用する JRE を指定します。
JRECodeBaseVersion	JRE install.exe file
restrictJre16	JRE 16 を制限するかどうか

結果セット構成プロパティ

表 22 結果セット構成プロパティ

プロパティ	説明
MaxDataCellLimit	OLAP データベース接続クエリーの結果セットのサイズ
MaxJdbcCellCount	リレーショナル・データベース接続クエリーの結果セットのサイズ
MaxChartRowsLimit	チャート最大のシリーズ
MaxMemberQuerySize	次元ブラウザで Essbase カーソルをサポートする際に、1 度取得するメンバーの数 これは、一部のアウトラインで 1 つのレベルにメンバーがたくさんありすぎる場合があるとき、ノードの展開時に次元ブラウザのパフォーマンスが遅い場合に有効です。 パフォーマンスを向上させるには、このプロパティを妥当な値に設定して、各呼出しで子の数を制限できます。より多くの子が使用可能な場合、"..."の記号が表示されます。

プロパティ	説明
	最適なパフォーマンスを得るには、500 より大きい値を設定しないでください。この機能を使用不可にしてすべての子を取得するには、値を -1 に設定します。
FetchMemberSize	1 つのメタデータ・クエリーで取得されるメンバー数
MaxMemberQueryLimit	メンバー・クエリーおよび次元ブラウザのプレビュー選択により戻される最大のメンバー数
MaxSubscriptionControlSize	登録コントロールおよびプレビュー選択の呼出しにより戻される最大のメンバー数

Essbase 構成プロパティ

表 23 Essbase 構成プロパティ

プロパティ	説明
HFMPluginSupported	HFM クライアントなしで接続するのにネイティブ・ドライバを使用するかどうか
EESPluginSupported	Essbase 実行クライアントなしで接続するのにネイティブ・ドライバを使用するかどうか <ul style="list-style-type: none"> ● 「はい」の場合、ADM は Essbase 配置サービスを使用して Essbase にアクセスします。 ● 「いいえ」の場合、ADM はデフォルトの JNDI ドライバを使用します。
EESEmbeddedMode	埋込みモードで(3 層モードと比較)Essbase 配置サービスを使用するかどうか
EESDriverName	ADM への Essbase 配置サービス・ドライバ
EESServerName	Essbase 配置サービスを実行中のサーバー
EESLocale	Essbase 配置サービスのロケール
EESDomain	Essbase 配置サービスのドメイン(変更しない)
EESORBType	Essbase 配置サービスの ORB タイプ(TCPIP のみがサポートされる)
EESPort	Essbase 配置サービス通信ポート
EESUseConnPool EESConnPerOp	Essbase 配置サービス接続プールで使用するメソッド。 接続プールは、Essbase 配置サービスから Essbase サーバーへのログイン・セッションの一式です。Essbase 配置サービスは、接続プールを使用して、Essbase サービスの要求を処理します。 これらのプロパティには次の 3 つの組合せがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ● EESUseConnPool=no および EESConnPerOp=no である場合、接続プールは使用されません。 ● EESUseConnPool=yes および EESConnPerOp=no である場合、接続プールが使用され、キューブ・ビューが開いている時間から閉じるまで、接続は保持されます。

プロパティ	説明
	<ul style="list-style-type: none"> EESUseConnPool=yes および EESConnPerOp=yes である場合、接続プールが使用され、接続は、各操作の直後に解放されます。
EESUseCluster	Essbase 配置サービスのクラスタを使用するかどうか
EESUseReportOption	Essbase レポート・オプションを使用するかどうか。 Microsoft の Java 仮想マシンを使用している場合のみ「はい」に設定します。
RemoveLink	ADM が生成したレポート・スクリプトに<リンク>コマンドを挿入するかどうか
FastSearchDisabled	検索機能がどのように検索する子孫を取得するかどうか
EnabledAliasOnDataQuery	Web Analysis がメンバー名/ID と、データ・クエリー中の別名の両方を取得するかどうか
DimBrowserChildIndicators	次元ブラウザに Essbase パススルーを使用するかどうか。パススルーでは、次元ブラウザの子インディケータに hasChildren へのアクセスが許可されません。
DisableNonUniqueNames	一意でないメンバーを持つ Essbase データ・ソースをクエリーするかどうか
UseUnicodeAdmConnection	ユニコードが使用可能な Essbase データ・ソースに接続するかどうか
ResolveDimSetAliases	次元セットの別名を解決するかどうか
FilterRestrictToSingleMember	レポート・オブジェクト・フィルタに複数のメンバーを選択できるかどうか。 単一メンバーに制約されない場合、次元ブラウザの右クリック・メニュー・オプションは、「ツリーの検索」および「検索」に限定されます。一度に1つのメンバーのみを選択できる場合、追加の選択はどれも前の選択を上書きします。
SSASImpersonate	SQL Server Analysis Services (SSAS) 2000 の認証を構成します。 <ul style="list-style-type: none"> 「はい」の場合、どのユーザーもデータ・ソースにログインできます。 「いいえ」の場合、Web Analysis はネイティブ MSAS 認証を使用します。
ReturnToDrillSource	ドリル・リンク・レポートで、ターゲットのレポート(ソース・レポートにドリル・リンクするときに開いていたレポート)が閉じた後に行うこと。 <ul style="list-style-type: none"> 「はい」の場合、オリジナルのソース・レポートが開きます。 「いいえ」の場合、その順序の次のレポートが開きます。
PreloadADM	Web Analysis が、WAS 6.x 構成の OS Linux 4 AS で実行中の場合、Essbase 接続を作成するかどうか

Shared Services 構成プロパティ

表 24 Shared Services 構成プロパティ

プロパティ	説明
Shared.Global.Conn.UserName	Shared Services ユーザー名を指定しない場合、ユーザーは、暗号化された旧パスワードを使用してレポートを開く/インポートの試みをする、パスワードを尋ねられます。
Shared.Global.Conn.Password	Shared Services 接続パスワード
Shared.Global.Conn.Hostname	Shared Services 接続ホスト
Shared.Global.Conn.password-encrypted	Shared Services 接続の暗号化されたパスワードを使用するかどうか
Shared.Global.Conn.Port	Shared Services 接続ポート

関連コンテンツ構成プロパティ

表 25 関連コンテンツ構成プロパティ

プロパティ	説明
RelatedContent.Server.Name.0	「関連コンテンツの追加」ダイアログ・ボックスで表示される文字列の値
RelatedContent.Server.Description.0	ブラウザ・タイトルに表示される説明
RelatedContent.Server.URL.0	統合アプリケーションの起動に使用される URL。次の例のとおりです。 http://<host:port>/<webAppURL>?<アプリケーション固有のパラメータ>
RelatedContent.Server.Version.0	関連コンテンツのバージョン
RelatedContent.Alias.Name.0	関連コンテンツの名前(「関連コンテンツ」ダイアログ・ボックスに表示)
RelatedContent.Alias.Protocol.0	関連コンテンツのプロトコル(「関連コンテンツ」ダイアログ・ボックスに表示)
RelatedContent.Alias.HostName.0	関連コンテンツのホスト名(「関連コンテンツ」ダイアログ・ボックスに表示)
RelatedContent.Alias.Port.0	関連コンテンツのポート(「関連コンテンツ」ダイアログ・ボックスに表示)

その他の Web Analysis プロパティ

表 26 その他の Web Analysis プロパティ

プロパティ	説明
MailServer	メール・サーバーが配置されているローカル・ホスト

プロパティ	説明
ThinClientPrintDefault	<p>EPM Workspace における印刷タイプ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ThinClientPrintDefault=PDF は、Web Analysis ドキュメントまたは Adobe Reader に埋め込まれたレポート・オブジェクトの出力と共に、ブラウザ・インスタンスを起動します。 ● ThinClientPrintDefault=HTML は、選択したオブジェクトを表示する別々のブラウザ・インスタンスを起動します。
WASStudioMenuControl	<p>ユーザーに表示されるショートカット・メニュー・オプションをコントロールする XML ファイル定義の場所。</p> <p>たとえば次のとおりです。WASStudioMenuControl=c:/Hyperion/Analyzer/conf/WAMenu.xml。</p>
ModuleName	<p>WASStudioMenuControl で定義された XML ファイルの適用先のモジュール。デフォルトは WebAnalysisStudio です。</p>
ShowSelectLayout	<p>「レイアウト」ダイアログ・ボックスが新規ドキュメントの作成中に表示されるかどうか。</p>
UseSecurityAgentTokenWithoutDomain	<p>HYAURLParamHandler.getSecurityAgentTokenParam が、完全に指定したユーザー・ログイン ID でドメイン名を削除するかどうか</p>
SSOProviderSessionCookieID	<p>SSO クッキー名。次の値が可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● SMSESSION (SiteMinder) ● OHS<正式なホスト名><ポート> (Oracle SSO) ● PD-S-SESSION-ID/PD-H-SESSION-ID (WebSeal)
UseRemoteUser	<p>セキュリティ・エージェント・トークン(アプレット・パラメータ)を取得するために、HTTP 要求 REMOTE_USER ヘッダーの削減元を検索するかどうか</p> <p>ノート: Oracle AS SSO には「はい」を設定する必要があります</p>
NativeAppServerSSLSupport	<p>SSL 構成を使用して WebLogic サーバー上の Web Analysis アプリケーション・サーバーを開始するかどうか</p>
SessionScopeTimeout	<p>Java セッションのタイムアウト(秒)</p>
FastResolveEssbaseSubscriptions	<p>登録コントロールの次元メンバー・リストを生成する方法。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「はい」の場合、パススルー・メソッドが使用され、ハイブリッド分析を実施していない限り、Web Analysis パフォーマンスが改善されます ● 「いいえ」の場合、標準 Essbase の解決メンバー・メソッドが使用され、登録コントロールの次元メンバー・リストを生成します。
ExcelPath	<p>Web Analysis が Microsoft Excel 実行可能ファイルを検索するパス。例は次のとおりです。</p> <p>ExcelPath=c:/my_excel_path/excel.exe。</p>

プロパティ	説明
FormatToolTips	<p>データ値ツールチップのフォーマットをコントロールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「はい」の場合、ツールチップは未フォーマットの指数の表記にデータ値を表示します ● 「いいえ」の場合、ツールチップはスプレッドシートのグリッドに一致するフォーマットでデータ値を表示します
LogQueries	<p>ADM によって作成された ALE クエリー・レポートおよび Essbase レポートの仕様を Web Analysis 出力ログにリダイレクトするかどうか。この値を「なし」に設定すると、記録される情報量を最小限に抑えられます。</p>
LoadAllData	<p>現在のページだけでなく、すべてのページのデータを要求するかどうか</p>
ExportDataFullPrecision	<p>データ値をデータ・ソースから Microsoft Excel(クライアントベースのフォーマットを持つデータ値のかわり)にエクスポートするかどうか</p>
SuppressSharedDuplicatesInSearch	<p>次元ブラウザの検索が共有(重複)メンバーを戻すかどうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「いいえ」の場合、重複メンバーは、戻されて、選択したメンバー・ペインにリストされます。 ● 「はい」の場合、重複メンバーは次元ブラウザに表示されません。
DisableSparseForSuppressMissing	<p>SupressMissing が選択されている場合、sparse extractor を使用不可にするかどうか</p>
SQLGrid_DrillOnRow	<p>グリッドでの行のドリル動作。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「はい」の場合、SQL グリッド(リレーショナル OLAP ではない)からのドリル・リンク中に、ドリルが、マッピングされたすべての列の行全体で行われます。 ● 「いいえ」の場合、ドリルは、選択したセルまたはセルの領域では実行されません。
AnalyzerBaseURL	<p>Web Analysis の基本 URL。次に例を挙げます。</p> <p>AnalyzerBaseURL=http://myserver.hyperion.com:19000/WebAnalysis</p>
XLSeparateColumns	<p>さまざまな OLAP スプレッドシートの生成が、フォーマットされた Excel へのエクスポート中に、さまざまな列に表示される必要があるかどうか。これで、Excel にエクスポートされる際にスプレッドシートの列が形成されるデフォルトの方法が変更されます。</p>
クラスタ	<p>追加のサーバーが初期化されるように、Web Analysis がクラスタで機能するかどうか</p>
atf.messaging.provider-url	<p>JMS プロバイダを次のように明示的に指定します: protocol://host:port (例: t3://example.com:16000).</p>
atf.messaging.context-factory	<p>(オプション)クラスタで使用される JMS の初期のコンテキスト・ファクトリ・クラス名</p>

プロパティ	説明
atf.event.broker.idle-time	同期化イベントが Web Analysis 非同期プロセッサでチェックされる頻度。最小値は 1001 です。
WordPath	Web Analysis が Microsoft Word 実行可能ファイルを検索するパス。例は次のとおりです。 WordPath=c:/my_word_path/winword.exe。
PPTPath	Web Analysis が Microsoft PowerPoint 実行可能ファイルを検索するパス。例は次のとおりです。 PPTPath=c:/my_ppt_path/powerpnt.exe。
DecryptOldPasswords	旧パスワードが読み取れないように、古い論理を無視するかどうか。 <ul style="list-style-type: none"> ● 「はい」の場合、旧パスワードは新規アルゴリズムで再暗号化されます。 ● 「いいえ」の場合、ユーザーは、古い暗号化されたパスワードでレポートを開く/インポートの試みを行うときに、パスワードを尋ねられます。
HISPagingBarHide	AIS ドリルスルー・レポート・ページングが使用不可にされるかどうか
SQLPagingBarHide	結果設定ページングが SQL に対して使用不可にされるかどうか
HISPagingBarRowsPerPage	AIS ドリルスルー・レポートの 1 ページ当たりの行数
SQLPagingBarRowsPerPage	SQL スプレッドシートの 1 ページ当たりの行数:
DisableQuickDrillUp	処理が簡単であると期待される特定のドリルアップの使用事例一式について、クイックまたはヒュウリスティックなドリルアップの実行の試みを使用不可にします
ExcelExportMaxRows	Excel にエクスポートされる Web Analysis ドキュメントの最大行数。
ExcelExportMaxColumns	Excel にエクスポートされる Web Analysis ドキュメントの最大列数。
EnableExpectContinue	Oracle Hyperion(R) Web Analysis アプレットに「期待: 100 回連続」サポートを使用可能にします。この接続の調整オプションはデフォルトで使用可能になっています

Workspace Web アプリケーション・プロパティ

EPM Workspace Web アプリケーションには、次のプロパティがあります。

- [全般 Workspace Web アプリケーション・プロパティ](#)
- [アプリケーションのプロパティ](#)
- [キャッシュのプロパティ](#)
- [内部プロパティ](#)
- [個人用ページのプロパティ](#)
- [ユーザー・インタフェースのプロパティ](#)

全般 Workspace Web アプリケーション・プロパティ

表 27 全般 EPM Workspace Web アプリケーション・プロパティの説明

プロパティ	説明
サポートされているロケール	EPM Workspace でサポートされているロケール。 ダブルクリックして「値リスト」ダイアログ・ボックスにアクセスします。ここで、「使用できる値」と「割り当てられている値」間のサポートされているロケールを特定の EPM Workspace 構成に移動できます。
デフォルト・ロケール	ユーザー要求のロケールをロードできない場合のアプリケーションのデフォルトのフォールバック・ロケール
クライアント・デバッグの使用可能	ブラウザ側の BPMUI デバッグ機能を非表示にするかどうか
セッションがタイムアウトになる	アイドル状態のユーザーがクライアント側の EPM Workspace から強制的にログアウトされるまでの積分時間(分)
キーブライブ間隔	HTTP セッションを維持するために、開かれている各コンテキストへの EPM Workspace の ping 間の積分時間(分)
ネイティブ・ユーザーのパスワード変更可能	ユーザーがネイティブの認証システムへのアクセスがあるかどうか。「はい」の場合、EPM Workspace プリファレンスで「認証」タブを使用してパスワードを変更できます。

アプリケーションのプロパティ

表 28 アプリケーションのプロパティの説明

アプリケーション	プロパティの説明
iHTML	<ul style="list-style-type: none"> ● ディスク・キャッシュを消去するまでの時間 - iHTML ドキュメントのディスク・キャッシュを消去するまでの時間(秒) ● アイドル状態の iHTML セッションを終了するまでの時間 - アイドル状態の iHTML セッションが終了するまでの時間(秒) ● iHTML ポーリング期間 - iHTML ポーリング期間における時間(秒)
データ・アクセス・サーバー	<ul style="list-style-type: none"> ● DAS 応答のタイムアウト - データ・アクセス・サーバーがタイムアウトになるまでの時間(秒) ● Zero Administration の使用可能 - Zero Administration を使用可能にするかどうか ● Hyperion Intelligence クライアント・ポーリング時間 - Hyperion Intelligence クライアントのポーリングの時間(秒)

アプリケーション	プロパティの説明
	<ul style="list-style-type: none"> ● Interactive Reporting Web Client の複数のブラウザ・ウィンドウを使用できるようにする - Interactive Reporting Web Client に複数のブラウザ・ウィンドウを使用できるようにするかどうか

キャッシュのプロパティ

表 29 キャッシュのプロパティの説明

キャッシュ・タイプ	プロパティの説明
オブジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ● キャッシュするフォルダの数 - キャッシュするフォルダの数 ● フォルダのキャッシュ時間 - フォルダをキャッシュする時間(秒) ● 検索のキャッシュ時間 - 検索をキャッシュする時間(秒) ● ジョブのキャッシュ時間 - ジョブをキャッシュする時間(秒) ● パラメータ・リストのキャッシュ時間 - パラメータ・リストをキャッシュする時間(秒) ● 発行済個人用ページのキャッシュ時間 - 発行済個人用ページをキャッシュする時間(秒) ● 個人用ページのコンテンツ・ウィンドウのキャッシュ時間 - 個人用ページのコンテンツ・ウィンドウをキャッシュする時間(秒) ● 変更中のコンテンツ・ウィンドウのキャッシュ時間 - キャッシュ・コンテンツ・ウィンドウを変更する時間(秒) ● リスト・アイテムのキャッシュ時間 - リスト・アイテムをキャッシュする時間(秒) ● リスト作成キャッシュの最大アイテム数 - リスト作成でキャッシュする最大アイテム数
システム	<ul style="list-style-type: none"> ● システム・プロパティのキャッシュ時間 - システム・プロパティをキャッシュする時間(秒)
通知	<ul style="list-style-type: none"> ● 通知のリフレッシュ間隔 - 通知をリフレッシュするまでの時間(秒)
ブラウザ	<ul style="list-style-type: none"> ● 変更用にリストする IR ジョブの出力の最大数 - 変更用にリストする Interactive Reporting ジョブの出力の最大数

内部プロパティ

表 30 内部プロパティの説明

プロパティ・タイプ	プロパティの説明
全般	<ul style="list-style-type: none"> ● ファイルのかわりにストリームを使用してデータを転送する - サービスと Web アプリケーション間でデータを転送する方法を変更する ● 発行するファイルの最大サイズ - 発行で許可されるファイルの最大サイズ(メガバイト)

プロパティ・タイプ	プロパティの説明
	<ul style="list-style-type: none"> ● 一時的な場所 - EPM Workspace Web アプリケーションの一時ディレクトリ ● ロギング構成 - ロギング構成ファイル
リダイレクト	<ul style="list-style-type: none"> ● URL のリダイレクト方法 - ブラウザを別ページにリダイレクトする方法をコントロールする
Cookie	<ul style="list-style-type: none"> ● Cookie を別のセッションでも維持する - Cookie を別のセッションでも維持するかどうか ● Cookie を暗号化する - Cookie の暗号化を使用可能にするかどうか

個人用ページのプロパティ

表 31 個人用ページのプロパティの説明

個人用ページのプロパティ	プロパティの説明
全般	<ul style="list-style-type: none"> ● ユーザー当たりの最大個人用ページ数 - システムですべてのユーザーに許可された最大個人用ページ数 ● 初期に発行された個人用ページの最大数 - システムのすべてのユーザーに対して初期に発行された個人用ページの最大数 ● 個人用ページのコンテンツ・ウィンドウ見出しの表示 - 個人用ページのコンテンツ・ウィンドウ見出しを表示するかどうか
発行	<ul style="list-style-type: none"> ● 場所 - 個人用ページのコンテンツが発行されるディレクトリ
作成した個人用ページ	<ul style="list-style-type: none"> ● マイ・ブックマークの表示 - 作成した個人用ページにブックマークを表示するかどうか ● 例外ダッシュボードの表示 - 作成した個人用ページに例外ダッシュボードを表示するかどうか ● フォルダの数 - 作成した個人用ページに表示されるフォルダの数 ● ファイルのコンテンツ・ウィンドウの数 - 作成した個人用ページに表示されるファイルのコンテンツ・ウィンドウの数 ● デフォルト・カラー・スキーム - 作成した個人用ページに表示されるデフォルトのカラー・スキーム(カラー・スキームは次に定義されています)
カラー・スキーム	<ul style="list-style-type: none"> ● 名前 - カラー・スキームを識別する名前 ● 見出しの色 - 個人用ページの見出しに表示される色 ● 背景色 - 個人用ページのバックグラウンドとして表示される色 ● テキストの色 - 個人用ページのテキストの色 ● リンクの色 - 個人用ページのリンクの色 ● ブロードキャスト・メッセージの色 - 個人用ページに表示されるブロードキャスト・メッセージの色 ● 見出しの背景色 - 個人用ページの見出しの背景色 ● フッターの背景色 - 個人用ページのフッターに表示される色 ● 左の列の背景色 - 個人用ページの左の列の背景色

個人用ページのプロパティ	プロパティの説明
	● 右の列の背景色 - 個人用ページの右の列の背景色

ユーザー・インタフェースのプロパティ

表 32 ユーザー・インタフェースのプロパティの説明

ユーザー・インタフェースの要素	プロパティの説明
ログイン	<ul style="list-style-type: none"> ● \$CUSTOM_LOGINS\$の LoginPolicy クラス - LoginPolicy インタフェースを実装するクラスの名前(.class の拡張子のない完全にパッケージ化された修飾名)。カスタムのログオン実装を使用する場合のみ定義します。 ● カスタム・ユーザー名ポリシー - ポリシーには次の値があります。 <ul style="list-style-type: none"> ○ \$CUSTOM_LOGIN\$ - カスタムのポリシー。ユーザー名の値にカスタムの実装を使用する場合のみ使用します。 ○ \$HTTP_USER\$ ○ \$REMOTE_USER\$ ○ \$SECURITY_AGENT\$ - \$SECURITY_AGENT\$に設定した場合は、「カスタム・パスワード・ポリシー」を\$TRUSTEDPASS\$に設定する必要があります。 ○ \$NONE\$ - カスタムのログオンを実装していない場合や、または透過のログオンを構成していない場合に限り、\$NONE\$を設定します。\$NONE\$でない値に設定されている場合、指定したユーザー名のポリシーを使用して、Workspace サブレットにログオン中のすべてのユーザーのユーザー名を取得します。 ● カスタム・パスワード・ポリシー - ポリシーには次の値があります。 <ul style="list-style-type: none"> ○ \$CUSTOM_LOGIN\$ - カスタムのポリシー。ユーザー名の値にカスタムの実装を使用する場合のみ使用します。 ○ \$HTTP_PASSWORD\$ ○ \$REMOTE_USER\$ ○ \$TRUSTEDPASS\$ - カスタム・ユーザー名ポリシーが\$SECURITYAGENT\$に設定されているときに使用されます。 ○ \$NONE\$ - カスタム・ログオンを実装しない場合、または透過ログオンを構成しない場合は、\$NONE\$に設定します。\$NONE\$以外の値に設定する場合、指定したパスワード名のポリシーを使用して、EPM Workspace サブレットにログインするすべてのユーザーのユーザー名を取得します。 ● 「カスタム・ログイン失敗時のログインを許可」 - カスタム・ログインに失敗した場合、ユーザーはログイン情報を明示的に入力できます。 ● デフォルト認証システム - デフォルト認証システムを設定します ● ログオフ後の URL - ユーザーがログオフした後の UI のリダイレクト先 URL。WebSEAL および SiteMinder などのシングル・サインオン環境で使用します。
構成	<ul style="list-style-type: none"> ● 代替 HSS での URL の起動 - Shared Services を登録するために使用する URL とは異なる(および Shared Services にアクセスするための EPM Workspace によって使用される URL とは異なる)URL を使用して、EPM Workspace から Shared

ユーザー・インタフェースの要素	プロパティの説明
	<p>Services を起動します。これは、セキュリティの機密性の高い通信の、HTTP 接続(https:)を保護するのに役立ちます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Microsoft レポート・サーバー統合の使用可能 - エクスプローラ・モジュールで「Microsoft レポートのインポート」メニューを表示するかどうか ● Workspace のインストーラ・メニュー・アイテムの使用可能 - EPM Workspace でインストーラ・メニュー・アイテムを使用可能にするかどうか
ローカライズ	<ul style="list-style-type: none"> ● 時刻フォーマットの表記 - 12 時間(am/pm)フォーマットと 24 時間フォーマット(6:30 pm を 18:30 と表示)のどちらで時間フィールドを表示するかどうか ● 日付の表示順 - 日付を月/日/年の順序(例: 5 月 1 日、2008 年)と、日/月/年の順序(例: 1 日 5 月、2008 年)のどちらで表示するかどうか ● 時刻の表示順 - システムの時刻の表示順 ● デフォルトのローカル言語コード - 最も一般的に使用される言語の小文字の 2 文字のコード(例: 英語は en、フランス語は fr)。起動時に読み取るテンプレートの一式を判別し、ページを表示する言語を判別するために国コードおよびローカル変数と共に使用されます。 ● デフォルトのローカル国コード - 国の大文字の 2 文字のコード(例: 米国は US、カナダは CA)。ユーザーのデータを取得して表示するために言語コードおよびローカル変数と共に使用されます。 ● デフォルトのローカル変数 - 言語と国コードを一致させたユーザー用のオプションのローカライズ・プロパティ。たとえば、西海岸の変数は特別なデータを提供します(ローカル・タイム・ゾーンの時刻など)。「デフォルトのローカル国コード」がデフォルトに設定されていない場合のみ使用します。
EPM Workspace ページ	<ul style="list-style-type: none"> ● フォルダ - EPM Workspace ページを保管するリポジトリの場所 <p>注： リポジトリ内の共有 EPM Workspace ページ・フォルダの削除、または名前変更をしないでください。</p>
サブスクリプション	<ul style="list-style-type: none"> ● サブスクリプション機能の使用可能 - サブスクリプション機能を使用可能にするかどうか。「いいえ」に設定されている場合、ユーザーはアイテムが変更されても通知を受け取れません。
ジョブの出力	<ul style="list-style-type: none"> ● HTML Production Reporting ジョブの出力の表示 - ページをリストする際、SQL Production Reporting ジョブの出力を表示する場合に HTML アイコンを表示するかどうか ● SPF Production Reporting ジョブの出力の表示 - ページをリストする際、SQL Production Reporting ジョブの出力を表示する場合に SPF アイコンを表示するかどうか ● Production Reporting ジョブの出力フォーマット - SQL Production Reporting ジョブの実行後に表示する出力フォーマット
スマート・カット	<ul style="list-style-type: none"> ● スマート・カットをリンクとして表示する - スマート・カットをリンクとして表示するかどうか
メイン・フレーム	<ul style="list-style-type: none"> ● メイン・フレーム背景色 - メイン・フレームの背景色。個人用ページには適用されません。空白のままである場合、ユーザーのプラットフォームのデフォルトの背景色が使用されます。 ● 個人用ページ・ウィザード背景色 - 個人用ページ・ウィザードの背景色。個人用ページ・ウィザードは、ユーザーが新規個人用ページを選択した後に表示される一連のページです。

ユーザー・インタフェースの要素	プロパティの説明
	<ul style="list-style-type: none"> ● 個人用ページ・ウィザード枠線の色 - 個人用ページ・ウィザードの枠線の色 ● タイトル下線の色 - 下線タイトルを表示する色 ● 通常のテキストの色 - ユーザー・インタフェースの通常のテキストの色 ● リンクのテキストの色 - ユーザー・インタフェースのリンクの色

エージェント構成プロパティの変更

エージェント構成プロパティには次のプロパティがあります。

- **名前** - エージェント名。
- **使用可能** - エージェントが使用可能かどうか
- **ポート** - 通信で使用されるエージェント・サービス・ポート。クライアント (CMC UI)はこのポートを介してエージェントと通信します。ファイアウォールを設定する場合、このポートは、マシンの外からエージェントにアクセスする場合、開いている必要があります。
- **RMI ポート** - RMI レジストリを開始するために使用されるポート。RMI レジストリは、エージェント・サービスの検索サービスです。ファイアウォールの設定では、このポートはマシンの外からエージェントにアクセスする場合、開かれている必要があります。

この章の内容

概要	193
ロギング・アーキテクチャ.....	193
ログ・ファイルの基礎.....	195
トラブルシューティングのためのログ・プロパティの構成.....	198
ログ・ファイルの分析.....	204
カスタマ・サポートで必要な情報.....	207

概要

管理者は、Reporting and Analysis 全体を通じてログ・ファイルを生成し、技術者がシステムまたは環境の問題を識別したり、開発者がレポートまたは API の問題をデバッグするのに役立てることができます。

GSM および Oracle Hyperion(R) Shared Services 情報を含む、EPM Workspace のインストールのすべての構成情報は、次の URL で使用可能です。

`http://hostname:port/workspace/browse/configInfo`

ここでは、hostname は、EPM Workspace サーバーの名前であり、port は、アプリケーション・サーバーがリスニングする TCP ポートです。

IIS を Web サーバーとして使用する場合、EPM Workspace はその Web サーバーのポートを介して提供され、そのデフォルトは 80 です。EPM Workspace のデフォルト・ポートは、Apache Web サーバーを使用中の場合、19000 です。

ロギング・アーキテクチャ

すべてのログ・メッセージは、ロギング・サービスを介してルーティングされ、`HYPERION_HOME¥logs¥BIPlus` および `¥hyperion¥products¥Foundation ¥workspace¥logs` に保管されます。デフォルトで、ロギング・サービスは、EPM Workspace エージェント・サービスと同じコンピュータ上で実行します。ロギング・サービスは、ビューアを使用して読み取れる、1 つ以上のファイルにログ・メッセージを書き込みます。

Log4j (リリース 1.2) は、ロギング・フレームワークおよび構成ファイルの基準として使用されます。ログ管理ヘルパーは、log4j フレームワークおよびロギング・サービスと併せて、C++ サービス(Hyperion Interactive Reporting サービスおよび

Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービス)によって使用されま
す。

Reporting and Analysis には、定義済のロガーおよびアペンダが搭載されています。
ロガーは、ログ・メッセージが作られたコード(クラス)の領域に一致します。ア
ペンダは、ログ・メッセージの出力宛先に一致します。ロガーのロギング・レベ
ルを設定して、システム・コンポーネントをトラブルシューティングできます。

Log4j

log4j パッケージでは、ロギング・ステートメントを、高いパフォーマンス・コス
トを発生させることなく、出荷コードのままにしておくことができます。ジャカ
ルタ・プロジェクトの一部として、log4j は、オープン・ソース・イニシアチブに
よって認定された出回っているオープン・ソース・ライセンスである Apache ソフ
トウェア・ライセンスで流通します。ロギングの動作は、実行時間に XML 構成
ファイルを通じてコントロールされます。構成ファイルでは、ログ・ステートメ
ントは、サービスまたはクラス(ロガーを介して)別にオン/オフにでき、各ロガー
のロギング・レベルを設定できます。これで、クラス・レベルまで問題を診断で
きるようになります。複数の宛先は、各ロガーに対して構成できます。

log4j のメイン・コンポーネント

- **ロガー** - ロギング・ステートメントの使用可能または使用不可をコントロール
します。ロガーは、レベルをすべて、デバッグ、情報、警告、エラー、致命的ま
たは継承に割り当てることができます。
- **アペンダ** - フォーマット済出力を宛先に送信します。

www.apache.org を確認するか、または Ceki Gülcü による The complete log4j
manual(QOS.ch 発行、2003 年)を参照してください。

ロギング・サービス

すべてのログ・メッセージは、ロギング・サービスを介してルーティングされ、
HYPERION_HOME¥logs¥BIplus および ¥hyperion¥products¥Foundation
¥workspace¥logs に保管されます。デフォルトで、ロギング・サービスは、EPM
Workspace エージェント・サービスと同じコンピュータ上で実行します。ロギン
グ・サービスが利用可能でない場合、ログ・メッセージがバックアップのログ・
ファイルに送信されます。ロギング・サービスが回復されると、ログ・ファイル
にこれらを保管し、バックアップ・ファイルのメッセージは、バックアップ・フ
ァイルを削除するロギング・サービスに自動的に送信されます。

ロギング・サービスは複製できません。

ログ管理ヘルパー

ログ管理ヘルパー(LMH)は、Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サー
ビスまたは Hyperion Interactive Reporting サービスからのすべてのログを集計し、
これらをロギング・サービスに送信します。

1つのLMHプロセスが、Install Home ごとに Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスおよび Hyperion Interactive Reporting サービスに対して存在します。

ログイン・サービスは、Reporting and Analysis ごとに Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスおよび Hyperion Interactive Reporting サービスに対して、別々のログ・ファイルですべてのログ・メッセージを集計します。

サーバーの同期

ログ・ファイルが、タイムスタンプされ、年代順に書き込まれるため、サーバー同士の時刻同期が重要になります。これは、管理者の責任で行います。サーバー・クロックの同期管理のために多くの製品が、無料版または市販版で使用可能です。

ログ・ファイルの基礎

次のトピックで、トラブルシューティングでのログ・ファイルの使用について説明します。

- [195 ページの「ログ・ファイルの場所」](#)
- [196 ページの「ログ・ファイルの命名規則」](#)
- [197 ページの「ログ・メッセージのファイル・フォーマット」](#)

ログ・ファイルの場所

すべてのログ・ファイルが、ログイン・サービスが実行中のコンピュータ上の `HYPERION_HOME¥logs¥BIPlus` および `hyperion¥products¥Foundation ¥workspace¥logs` にあります。デフォルトで、ログイン・サービスは、EPM Workspace エージェント・サービスと同じコンピュータ上で実行します。

サービス、サーブレット、プロセス・モニター、および Web サービスは、ログイン・サービスを使用してログ・メッセージを1か所に記録します。

CMC、RSC およびカレンダー・マネージャはメッセージをローカルで記録します。

Hyperion Interactive Reporting サービスおよび Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのローカル・ログ・ファイル

Hyperion Interactive Reporting サービスおよび Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスは、`¥BIPlus¥logs`(ここでこれらのサービスがログイン・サービスに接続する前にログ・メッセージを収集する)に保管される追加のログ・ファイルを持っています。これらのファイルにあるのログ・メッセージは、ログイン・サービスのログ・ファイルにルーティングされません。始動の問題は、`BISStartup.log` および `DASStartup.log` に収集されます。

ログ・ファイルの命名規則

各サービスまたはサーブレットには、独自のログ・ファイルがあります。複数の Install Home のインストールでは、1つのタイプのすべてのサービスがこれらのメッセージを1つのファイルに記録します。別々のログ・ファイルが、ライセンス情報、構成または環境情報、あるいはその両方、および stdout メッセージに対して生成されます。

サービスとサーブレットのログ・ファイル名のフォーマットは次の通りです。

`server_messages_OriginatorType.log`

ここで、

OriginatorType は、次のコンポーネントの1つになります。

- サーブレット
 - BrowseServlet
 - AdministrationServlet
 - PersonalPagesServlet
 - DataAccessServlet
 - iHTMLServlet
- サービス:
 - AnalyticBridgeService
 - AuthenticationService
 - 認可サービス
 - CommonServices
 - DataAccessService
 - EventService
 - GSM
 - HarvesterService
 - IntelligenceService
 - IRJobService
 - IRServiceHelper
 - JobService
 - LSM
 - NameService
 - PublisherService
 - RepositoryService
 - セッション・マネージャ
 - ServiceBroker
 - TransformerService

- 使用追跡サービス
- その他
 - CalendarManager
 - WebService
 - SDK
 - EventComponent
 - LocalServiceConfigurator
 - RemoteServiceConfigurator
 - インストーラ

次に特別なログ・ファイルを示します。

- `license_messages.log` - ライセンス情報が含まれます。
- `configuration_messages.log` - 基本環境および構成情報が含まれます。
- `name_backupMessages_host_domain_port.log`(ここで、`name` はプロセス名) - ログイン・サービスが使用不可の場合にログイン・メッセージが含まれます (例: `BI_PM_sla1_backupMessages_myserver_hyperion_com_6800.log`)。
- `stdout_console.log` - `stdout` および `stderr` に送信されるメッセージが含まれます。

ログ・メッセージのファイル・フォーマット

すべてのログ・メッセージには、次の情報が以下に示す順で含まれています。

- **ロガー** - ログイン・メッセージを生成したロガーの名前。
- **タイム・スタンプ** - 協定世界時(coordinated universal time:UTC)のタイム・スタンプ。異なるタイム・ゾーンからのメッセージが確実に相関されるようにします。
サーバー間の時刻の同期は、管理者が行います。
- **レベル** - ログイン・レベル
- **スレッド** - スレッドの名前
- **シーケンス番号** - 一致するタイム・スタンプを持つメッセージを識別する一意の番号
- **時刻** - ログ・メッセージが生成された時刻
- **コンテキスト** - ログ・メッセージを生成したコンポーネント情報
 - 件名 - ユーザー名
 - セッション ID - セッションの UUID
 - 作成者タイプ - コンポーネント・タイプ名
 - 作成者名 - コンポーネント名
 - ホスト - ホスト名
- **メッセージ** - ログ・メッセージ

- **スロー可能** - スロー可能なエラーのスタック・トレース

バックアップ・ログ・ファイルのフォーマットは、通常のログ・ファイルのフォーマットと一致します。

構成ログ

基本構成情報は、Foundation/Workspace/logs の configuration_messages.log に記録されます。そのファイル・フォーマットはサービスおよびサブレットのログ・ファイル・フォーマットと一致します。

このログ・ファイルは、Java のシステム・プロパティ情報、JAR ファイルのバージョン情報およびデータベース情報を含みます。

トラブルシューティングのためのログ・プロパティの構成

Reporting and Analysis をトラブルシューティングするには、これらのロギング・プロパティを構成できます。

- ロギング・レベル
- ロガー
- アペンダ
- ログのローテーション

ロガー、ロギング・レベルおよびアペンダ r は、XML ファイルで構成されます。ログ回転プロパティは、Java システム・プロパティであり、startcommonservlets.bat で構成されます。CMC サービス、RSC サービスおよびルート・ロガーのロギング・レベルは、CMC および RSC を使用して構成されます。その他のすべての構成変更は、XML ファイルを編集して行われます。

構成ファイル

構成ファイル・タイプは、メインであり、インポートされます。インポートしたファイルはメイン・ファイルで使用され、ロガーおよびアペンダを別々の XML ファイルに整理します。

メインの構成ファイル:

- serviceLog4jConfig.xml - サービスのメインの構成ファイル。¥BIPlus ¥common¥config¥log4j にあります。CMC の EPM Workspace オプションを使用して構成する方法の詳細は、[第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」](#)を参照してください。
- remoteServiceLog4jConfig.xml - Hyperion Interactive Reporting サービスおよび Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのメインの構成ファイル、およびリモートで開始した場合の RSC サービスのメインの構成ファイルであり、¥BIPlus ¥common ¥config ¥log4j にあります。Interactive Reporting および Hyperion Interactive Reporting データ・アクセス・サービスの一部とし

て CMC を使用した構成方法の詳細は、第 9 章「CMC を使用したサービスの構成」を参照してください。

- adminLog4jConfig.xml - RSC およびカレンダー・マネージャのメイン構成ファイル
- servletLog4JConfig.xml - サーブレットのメイン構成ファイルであり、サーブレット・エンジンが配置されている¥WEB-INF¥config にあります。

注： serviceLog4jConfig.xml または remoteServiceLog4jConfig.xml の場所を変更する場合、server.xml に保管されているパス情報を更新する必要があります。servletLog4jConfig.xml の場所を変更する場合、ws.conf のパス情報を更新する必要があります。

インポートされた構成ファイル:

- appenders.xml - serviceLog4jConfig.xml、servletLog4JConfig.xml および remoteServiceLog4jConfig.xml によってインポートされます。

アペンダは、<appender-ref>要素を使用して、<logger>および<root>要素でそれらを参照して追加できます。

- serviceloggers.xml - serviceLog4jConfig.xml および remoteServiceLog4jConfig.xml によってインポートされ、CMC を介して構成します。
- debugLoggers.xml - サービスにおける問題をデバッグするために使用可能にできるロガーの定義が含まれます。serviceLog4jConfig.xml ファイルおよび remoteServiceLog4jConfig.xml によってインポートされ、¥BIPlus¥common¥config¥log4 にあります。
- debugLoggers.xml - サーブレットにおける問題をデバッグするために使用可能にできるロガーの定義が含まれます。servletLog4jConfig.xml によってインポートされ、サーブレット・エンジンが配置されている ¥WEB-INF¥config フォルダにあります。

ロギング・レベルの構成

ロギング・レベルは、ログ・ファイルに書き込む情報の量およびタイプを指定します。継承レベルを除き、表 33 のレベルは、最冗長から簡略までリストされ、ロギング・レベルは累積されます。ルートで設定されるデフォルト・ロギング・レベルは、警告、であるため、そのレベル以下のメッセージ(エラー、致命的)がログに表示されます。このデフォルト設定はシステム全体で、またはサービスやサーブレットごとに変更できます。任意のロガーがレベルを割り当てられていない(またはそのレベルが継承に設定されている)場合、割り当てられているレベルで最も近い祖先からレベルを継承します。ルート・ロガーは、ロガー階層の最上位にあり、常に割り当てられたレベルを持っています。

表 33 ロギング・レベル

レベル	説明
INHERIT	割り当てられたレベルに最も近い祖先に設定されたロギング・レベルを使用します。ルート・レベルでは使用不可です。

レベル	説明
ALL	すべてのメッセージ・レベル
DEBUG	比較的重要ではなく頻繁に発生する正常なイベントです。トラブルシューティングでのみ使用します。
INFO	アプリケーションの正常で重要なイベントです。
WARN	アプリケーション外部の要因によって発生した比較的重要ではない問題です。
ERROR	通常、アプリケーションがクラッシュするとは限らないJava例外です。アプリケーションが後続の要求への対応を続行できる場合もあります。
FATAL	アプリケーションまたは関連コンポーネントが今にもクラッシュすることを意味します。めったに使用されません。

ロガーの構成

RSC を使用して、データベースに保管されている RSC サービス・ロギング・レベルを構成します(154 ページの「[詳細 RSC プロパティ](#)」を参照)。

CMC を使用して、CMC サービス・ロギング・レベル(serviceLoggers.xml に保管されている)およびルート・ロガーを構成します(179 ページの「[ログ](#)」を参照)。

servletLog4JConfig.xml にサーブレット・ルート・ロガー・レベルを構成します。サーブレット・デバッグ構成ファイル(debugLoggers.xml)でその他のサーブレット・ロガーを構成します。

- ▶ サーブレットのルート・ロガーを構成するには、次の手順に従います。

- 1 `¥WEB_INF¥config¥servletLog4JConfig.xml` を開きます。
- 2 ファイルの最後までスクロールして、ルートのロギング・レベルを変更します。

たとえば、WARN を INFO に変更します。

```
<root>
<level value="WARN" />
<appender-ref ref="LOG_REMOTELY" />
</root>
```

- 3 ファイルを保存します。

デバッグのロガーの構成

デバッグ・ロガーは、継承済からデバッグへとロギング・レベルを変更することでアクティブになります。これらのロガーは、オラクル社カスタマ・サポート・センターの支援を受けて使用してください。

注： `print_config`、`print_query debug` および `echo` などの一部の Java プロパティは、`¥BIPlus¥common¥config¥log4j¥debugLoggers.xml` でロガーをデバッグするためにマッピングされます。

アペンダの構成

appenders.xml で定義されているアペンダをロガーに追加することにより、ログ・メッセージを複数の宛先に送ることができます。

- ▶ ロガーにアペンダを追加するには、次の手順に従います。
 - 1 appenders.xml でアペンダを探し、名前をコピーします。
 - 2 このアペンダを追加するロガーの XML ファイルを開きます。
 - 3 このアペンダを追加するロガーで <appender-ref ref= の後にアペンダの名前を貼り付けます。

例:

```
<appender-ref ref="LOG_LOCALLY_BY_LOGGING_SERVICE" />
```

- 4 ファイルを保存します。

同期メッセージまたは非同期メッセージの構成

ログ・メッセージは、同期(デフォルト)でまたは非同期で送信できます。非同期モードの利点は、パフォーマンスがいいことですが、同期モードは、すべてのメッセージが記録されると言う信頼性が得られます。BufferSize パラメータを変更してメッセージの損失を阻止できます。

- ▶ 非同期メッセージを使用可能にするには、次の手順に従います。

- 1 appenders.xml を開いて非同期のアペンダを見つけます。

```
<appender name="SEND_TO_LOGGING_SERVICE_ASYNC"  
class="org.apache.log4j.AsyncAppender">
```

- 2 オプション: BufferSize を変更します。

```
<param name="BufferSize" value="128" />
```

- 3 アペンダ名、SEND_TO_LOGGING_SERVICE_ASYNC をコピーします。

- 4 ルート・ロガーを探します。

XML ファイルで、サービスまたはサブレット・ルート・ロガーのデフォルト・アペンダを変更できます。

- 5 デフォルト・アペンダ名 LOG_LOCALLY_BY_LOGGING_SERVICE を、非同期のアペンダ名 SEND_TO_LOGGING_SERVICE_ASYNC に置き換えます。

- 6 ファイルを保存します。

ルート・レベル・アペンダの構成

サービス・メイン構成ファイル serviceLog4jconfig.xml で、ルート・レベルのデフォルト・アペンダは、ロギング・サービスによりローカルで記録します。サーバーにロギング・サービスが含まれていない場合、アペンダ LOG_REMOTELY は、非コメント化されます。また、2 番目のアペンダ LOG_LOCALLY を非コメント化して、リモートおよびローカルでメッセージを記録できます。

serviceLog4jconfig.xml のこのコードは、次のルート・レベル・アペンダを示します。

```
<!-- The following appender should be enabled if the server does not
contain the logging service -->
  <!-- <appender-ref ref="LOG_REMOTELY"/> -->
  <!-- The following appender can be enabled in conjunction with the
remote appender to also send log messages locally -->
  <!-- <appender-ref ref="LOG_LOCALLY"/> -->
  <!-- The following appender should only be enabled if the server
contains the logging service -->
  <appender-ref ref="LOG_LOCALLY_BY_LOGGING_SERVICE"/>
```

ログのローテーションの構成

間隔またはファイル・サイズ別に、ログ・ファイルをローテーションおよび削除できます。ファイル・サイズ・ログの回転は、CompositeRollingAppender によってコントロールされます。間隔ログ回転は、CompositeRollingAppender、および共通のサービス開始ファイルの Java プロパティによってコントロールされます。

appenders.xml で RollingStyle=2 がデフォルトで指定されている場合、最も古いログ・ファイルは削除されません。ログ・ファイルは、作成者タイプに基づいて作成および削除されます(196 ページの「ログ・ファイルの命名規則」を参照)。

XML 構成ファイルのすべてのアペンダは、CompositeRollingAppender にデフォルト値を使用するように構成されます。各アペンダに対して別々に CompositeRollingAppender プロパティを構成できます。

注： 一致する条件を使用してすべてのログ・ファイルを回転させる場合は、両方の appenders.xml ファイルに定義されたそれぞれの CompositeRollingAppender の構成を変更します。

- ▶ ログのローテーションの設定を変更するには、次の手順に従います。
- 1 ¥BIPlus¥common¥config¥log4j (サービスの場合)または¥WEB-INF¥config (サーブレットの場合)にある appenders.xml を開きます。
- 2 CompositeRollingAppender の定義を探し、プロパティを変更します。

Composite Rolling Appender	説明
RollingStyle	以下の 3 つのローテーション・スタイルがあります。 <ul style="list-style-type: none">● 1:サイズによりログのローテーションを行います。● 2:時間によりログのローテーションを行います。● 3:サイズと時間によりログのローテーションを行います。 RollingStyle 3 では、時間とサイズによりローテーションが行われたそれぞれのログの命名規則が異なるために混乱した結果をもたらす可能性があります。また、削除カウンタは別々にローテーションが行われたログと一緒にカウントしません。

Composite Rolling Appender	説明
DatePattern 値	RollingStyle が 2 または 3 の場合は、ログ・メッセージを別のログ・ファイルに書き込む間隔を設定します。 yyyy-MM-dd-mm の文字列を使用して Date Pattern の値を設定します。たとえば、yyyy-MM-dd-mm は 60 分ごと、yyyy-MM-dd-a は 12 時間ごと、yyyy-mm-dd は 24 時間ごとを意味します。デフォルトは 12 時間ごとです。
MaxFileSize	RollingStyle が 1 または 3 である場合、最大ファイル・サイズに達したら、ログ・メッセージは別のファイルに書き込まれます。デフォルトは 5MB です。KB(キロバイト)、MB(メガバイト)または GB(ギガバイト)を使用できます。
MaxSizeRollBackups	RollingStyle が 1 または 3 である場合、作成者タイプ(現行のファイルの場合 1 つプラス)ごとに最大ファイル数に達したら、最も古いファイルが削除されます。デフォルトは 5 です。時刻でローテーションされるログ・ファイルは、この設定で影響を受けることはありません。

サーバーおよびサーブレットの `appenders.xml` ファイルは、別のログ・ファイルを作成する時刻、対象の 2 つのパラメータをサーバーに通知します。ベスト・プラクティスの `rolling style` は 3 であり、時刻またはサイズ別にログ・ファイルを切り替えます。デフォルトの 5MB のログ・ファイルのサイズは、電子メールおよび Web サーバーなどのソフトウェア・パッケージのデフォルトです。

注： ベスト・プラクティスでは、すべてのエントリの `RollingStyle` は 3 に設定し、デフォルト・ログ・ファイルのサイズは 1MB に設定するように推奨されています。1MB を超えるログ・ファイルは、サーバーの応答が遅くなり、ログで 25MB を超えたら、停止する可能性があります(サービスが強制終了になるか、再起動の必要性が発生する)。大きいログ・ファイルは、Notepad または vi などのテキスト・エディターで開くのが困難になる場合があります。

次に、`CompositeRollingAppender` 定義の例を示します。

```
<appender name="BACKUP_MESSAGES_FILE"
class="org.apache.log4j.CompositeRollingAppender">
<param name="File" value="${directory}/log/${name}_backupMessages.log"/>
<!-- Select rolling style (default is 2): 1=rolling by size, 2=rolling
by time, 3=rolling by size and time. -->
<param name="RollingStyle" value="1"/>
<!-- If rolling style is set to 2 then by default log file will be
rolled every 12 hours. -->
<param name="DatePattern" value="'. 'yyyy-MM-dd-a"/>
<!-- If rolling style is set to 1 then by default log file will be
rolled when it reaches size of 5MB. -->
<param name="MaxFileSize" value="5MB"/>
<!-- This is log file rotation number. This only works for log files
rolled by size-->
<param name="MaxSizeRollBackups" value="5"/>
<layout class="com.brio.one.mgmt.logging.xml.XMLFileLayout">
</layout>
</appender>
```

- 3 RollingStyle が 2 または 3 である場合、/BIPlus/bin/startcommonservices.bat で最大ログ・ローテーション数を設定します。

```
set BP_ROTATIONNUM=-Dlog_rotation_num=5
```

ログ・ファイルの分析

ここでは、ログ・ファイルの表示方法、常に生成されるログ・ファイル、トラブルシューティングで調査するログ・ファイルについて説明します。

Shared Services、ユーザー、グループまたは役割の情報は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

ログ・ファイルの表示

ログ・ファイルで直接、またはログ・ビューアを使用して、ログ・メッセージを表示できます。このバージョンの Oracle Hyperion Reporting and Analysis には、log4j ビューア、およびログ・メッセージをフィルタリングしてソートする方法を提供する LogFactor5 が含まれています。

- ▶ LogFactor5 を使用するには、次の手順に従います。

- 1 LogFactor5 のアペンダ名、<appender-ref ref="LF5APPENDER"/>をコピーします。
- 2 コピーされたコードを LogFactor5 を使用するロガーに貼付けます。

```
<root>  
<level value="WARN"/>  
<appender-ref ref="LF5APPENDER"/>  
<appender-ref ref="LOG_REMOTELY"/>  
</root>
```

LogFactor5 は、アペンダの追加先のコンポーネントが開始すると自動的に開始します。そのコンポーネントが進行中である場合、LogFactor5 は 30 秒で開始します。LogFactor5 の画面はロギングが初期化するときに表示されます。ログ・メッセージは転記されるときに表示されます。

標準のコンソール・ログ・ファイル

stdout_console.log は、実行される操作またはロギング・レベルを問わず、常に生成され、標準出力および標準エラー(コンソール出力)を表します。アプリケーションで発生する一部のエラーは、起動失敗時にここに記録されます。

一般のコンテンツのインポートのためのログ

ファイルまたはフォルダを作成、変更、削除するときは、次のログを使用してエラーを分析します。

- サーバー・ログ

- server_messages_PublisherService.log
- server_messages_RepositoryService.log
- server_messages_ServiceBroker.log
- クライアント・ログ - server_messages_BrowseServlet.log

Interactive Reporting コンテンツをインポートするログ

Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting ドキュメントまたはジョブを作成、変更、削除するときは、次のログを使用してエラーを分析します。

- 一般のコンテンツのインポートのためのログ
- サーバー・ログ
 - hostname_DAS1_LSM.log
 - N_BIService.log
 - N_das.log
 - N_IRJob.log
 - N_bi_stderr.txt
 - N_bi_stout.txt
 - N_bijobs_sterr.txt
 - N_bijobs_stout.txt
 - N_das_sterr.txt
 - N_das_stout.txt
 - N_logutil_sterr.txt
 - N_logutil_stout.txt
 - server_DataAccessService.log
 - server_IntelligenceService.log
- クライアント・ログ
 - server_messages_DataAccessServlet.log
 - server_messages_iHTMLServlet.log

ジョブ実行のためのログ

ジョブ・サービスは、直接またはイベント・サービスを介してジョブを実行します。これらのジョブを使用してエラーを分析します。

- サーバー・ログ
 - server_messages_EventService.log
 - server_messages_JobService.log
 - server_messages_ServiceBoker.log

- server_messages_DataAccessService.log
- server_messages_IntelligenceService.log
- server_messages_IRJobService.log
- クライアント・ログ
 - server_messages_BrowseServlet.log
 - server_messages_JobManager.log

ログオンおよびログオフのエラーのログ

ユーザー・ログオン・インスタンスでは、システムの複数領域からの情報が必要です。その各領域ではエラーが発生し、ログオンの試みが失敗する可能性があります。これらのログを使用して、ログオンおよびログオフのエラーを分析します。

- サーバー・ログ
 - server_messages_SessionManager.log
 - server_messages_GSM.log
 - server_messages_LSM.log
 - server_messages_Authentication.log
 - server_messages_Authorization.log
 - server_messages_Publisher.log
 - server_messages_ServiceBroker.log
 - server_messages_RepositoryService.log
- クライアント・ログ(サーブレット)
 - server_messages_BrowseServlet.log
 - server_messages_AdministrationServlet.log
 - server_messages_PersonalPagesServlet.log

アクセス・コントロール用のログ

アクセス・コントロールは、認可サービスによって保持されます。これらのログを使用して、アクセス権のエラーを分析します。

- サーバー・ログ
 - server_messages_Authorization.log
 - 実行中の操作に関連したサービスのログ
- クライアント・ログ(サーブレット)
 - server_messages_BrowseServlet.log
 - server_messages_AdministrationServlet.log
 - server_messages_PersonalPagesServlet.log

構成用のログ

RSC サービスの構成エラーは、`stdout_console.log` または `server_messages_NameService.log` の起動時に示されます。`configuration_messages.log` は役に立つ場合があります。

カスタマ・サポートで必要な情報

問題が発生し、オラクル社カスタマ・サポート・センターの支援が必要な場合、使用されているインスタンスのすべてのアプリケーション・サーバーのログを送ってください。必要に応じて、ログ・ディレクトリを圧縮してください。

サービスおよびサブレットの場合、`¥Foundation¥Workspace¥logs` のすべてのログを圧縮して送ってください。

11

Ghostscriptカスタム・パラメータ

この章の内容

実装の概要.....	209
Ghostscript ドキュメント.....	209
デフォルトの動作.....	210
Postscript から PDF への変換.....	210
Postscript から JPEG への変換.....	211
カスタム・パラメータの指定.....	211

実装の概要

Financial Reporting 印刷サーバーでは、レポートの出力を Postscript (PS)ファイルから Portable Document Format (PDF)またはイメージ・フォーマット(JPG)に変換するために Ghostscript が使用されます。Ghostscript には、変換プロセスの多数のオプション(パラメータ)が用意されています。Financial Reporting では、前はこれらのパラメータを直接 Ghostscript に渡していました。このため、ユーザーはカスタム・パラメータを変更または指定できませんでしたが、現在ではカスタム Ghostscript パラメータを指定できるようになりました。

Ghostscript を使用して Postscript 出力を Portable Document Format または JPG に変換する必要があるときは、Financial Reporting プリント・サーバーにより Windows レジストリにクエリーが発行されます。特定のエン트리が見つかった場合、デフォルト・パラメータではなく、ユーザーが指定したレジストリの Ghostscript パラメータを使用して PDF (Portable Document Format)または JPG が生成されます。ユーザーは、レジストリ・エントリを変更するだけで必要な出力を得ることができます。これには、高い解像度の出力、カスタム変換デバイスの使用、デフォルト用紙サイズの変更などが含まれます。

既存の Financial Reporting インストールは、この変更の影響を受けません。ユーザーは、Ghostscript 全般と、特に Ghostscript により使用されるパラメータについてよく知っておく必要があります。これは高度な機能であるため、正しく実装されないと Portable Document Format または JPG 出力が失敗したり破損したりする可能性があります。

Ghostscript ドキュメント

Financial Reporting でカスタム Ghostscript パラメータ機能を使用する方法について理解するには、説明されている様々なパラメータと、それらが出力に与える影響

をよく知ることが重要です。次のリンクに、関連性の高いドキュメントを示します:

- **Ghostscript の使用方法:** <http://pages.cs.wisc.edu/~ghost/doc/cvs/Use.htm>。このリンクでは、一般的な Ghostscript パラメータについて総合的に説明されています。
- **PostScript から PDF へのコンバータ:** <http://pages.cs.wisc.edu/~ghost/doc/cvs/Ps2pdf.htm>。このリンクでは、PostScript から PDF への変換に固有のパラメータについて説明しています。
- **Ghostscript 出力デバイス(JPEG):** <http://pages.cs.wisc.edu/~ghost/doc/cvs/Devices.htm>。このリンクでは、PostScript から JPG への変換に固有のパラメータについて説明しています。このリンクには、他のイメージ出力フォーマットの詳細も含まれています。
- **Ghostscript の概要(メイン・ページ):** <http://pages.cs.wisc.edu/~ghost/doc/cvs/Readme.htm>

デフォルトの動作

カスタム Ghostscript パラメータの新機能はデフォルトでは使用可能になっていません。インストールと構成ツールは、この機能を使用可能にするレジストリ・エントリを追加しません。この機能を使用可能にするには、管理者が適切なレジストリ・エントリを手動で追加する必要があります(後述)。

次の 2 項では、レポートの Postscript から PDF と JPG を生成するために現在使用されているデフォルト Ghostscript パラメータについて説明します。

Postscript から PDF への変換

Ghostscript を使用して Postscript 出力を PDF に変換するルーチンでは、次の 12 のパラメータを使用します

1. ps2pdf (GSインスタンスの名前は常に無視されます)
2. -dNOPAUSE
3. -dBATCH
4. -dSAFER
5. -sDEVICE=pdfwrite
6. -dAutoFilterColorImages=false
7. -dColorImageFilter=/FlateEncode
8. -sOutputFile=[postscript file path]
9. -c
10. setpdfwrite
11. -f
12. [PDF output file path]

ここで、

- [postscript file path]は Postscript ファイルのパスです。
- [PDF output file path]は PDF 出力ファイルのパスです。

前述のパラメータの詳細は、Ghostscript の使用方法に関するドキュメントを参照してください。

Postscript から JPEG への変換

Ghostscript を使用して Postscript 出力を JPEG に変換するルーチンでは、次の7つのパラメータを使用します:

1. ps2jpg (Ghostscript インスタンスの名前は常に無視されます)
2. -dNOPAUSE
3. -r200 (200 ppiのデフォルト解像度)
4. -dJPEGQ=75 (jpeg品質レベル)
5. -sDEVICE=jpeg
6. -sOutputFile=[postscript file path]
7. [PDF output file path]

ここで、

- [postscript file path]は Postscript ファイルのパスです。
- [PDF output file path]は PDF 出力ファイルのパスです。

レポートを横長方向に設定した場合は、次のパラメータも含まれます:

1. -c
2. <</Orientation 3>> setpagedevice
3. -f

前述のパラメータの詳細は、Ghostscript の使用方法と JPEG ファイル・フォーマットに関するドキュメントを参照してください。

カスタム・パラメータの指定

管理者がデフォルト Ghostscript パラメータを上書きするには、値がカスタム・パラメータを表すレジストリ・キーを追加する必要があります。管理者は、適切なレジストリ・キーを追加して、パラメータにより必要な結果が生成されることを確認する必要があります。

次の副項では、カスタム・パラメータを追加するプロセスについて説明します。

Postscript から PDF への変換のカスタム・パラメータ

Postscript から PDF への変換ルーチンでカスタム・パラメータを使用可能にするには、次の手順に従います。

1. Windows レジストリ・エディタ(regedit.exe)を実行します。
2. 次のレジストリ・キーに移動します: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Hyperion Solutions¥Hyperion Reports¥HyS9FRPrint。
3. GSPDFOptions という名前の新規複数行文字列値(REG_MULTI_SZ)を追加します。
4. 新規の値をダブル・クリックするか、メニューから編集、変更の順に選択し、複数行文字列の編集ダイアログを表示します。
5. 1 行に 1 つのパラメータを追加します。同じ行に複数のパラメータを入力しないでください。
6. OK をクリックします。

注: カスタム・パラメータを読み取るために、Financial Reporting 印刷サーバーを再起動する必要はありません。Financial Reporting 印刷サーバーは、Postscript 変換ルーチンが実行されるたびにレジストリ・キーから最新の情報を読み取ります。

Postscript から JPEG への変換のカスタム・パラメータ

Postscript から JPEG への変換ルーチンでカスタム・パラメータを使用可能にするには、次の手順に従います。

1. Windows レジストリ・エディタ(regedit.exe)を実行します。
2. 次のレジストリ・キーに移動します: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Hyperion Solutions¥Hyperion Reports¥HyS9FRPrint
3. GSImageOptions という名前の新規複数行文字列値(REG_MULTI_SZ など)を追加します。
4. 新規の値をダブル・クリックするか、メニューから編集、変更の順に選択し、複数行文字列の編集ダイアログを表示します。
5. 1 行に 1 つのパラメータを追加します。同じ行に複数のパラメータを追加しないでください。
6. OK をクリックします。

注: カスタム・パラメータを読み取るために、Financial Reporting 印刷サーバーを再起動する必要はありません。Financial Reporting 印刷サーバーは、Postscript 変換ルーチンが実行されるたびにレジストリ・キーから最新の情報を読み取ります。

必須パラメータ

Ghostscript 変換ルーチンでは、特定のパラメータが必要になります。レジストリにクエリーを発行してそれらのパラメータが見つからない場合、必ず **Financial Reporting** により追加されます。ただし、カスタム Ghostscript パラメータを使用するときは、次のパラメータを指定することをお勧めします:

- `-dNOPAUSE`: このパラメータは、Ghostscript のプロンプトと一時停止を使用不可にします。Financial Reporting 印刷サーバーは、ユーザー操作がまったく必要ないサービスであるためです。
- `-dBATCH`: このパラメータは、PostScript (PS) から Portable Document Format (PDF) への変換にのみ使用されます。-dNOPAUSE パラメータが優先されます。
- `-sDEVICE=`: デバイスを指定する必要があります。このパラメータが見つからない場合、PostScript (PS) から Portable Document Format (PDF) への変換では `pdfwrite` がデフォルトとなり、PostScript (PS) から JPEG への変換では `jpeg` がデフォルトとなります。
- `-c <</Orientation 3>> setpagedevice -f`: これらのパラメータは、レポートが横長方向の印刷に設定されると PostScript から JPEG への変換に使用されます。GSImageOptions レジストリ・エントリには、これらのパラメータを追加しないことをお勧めします。

一般的なガイドライン

カスタム Ghostscript パラメータ機能を使用するときは、次のガイドラインについて考慮してください:

- `-sOutputFile` パラメータは使用しないでください。このパラメータは、Financial Reporting 変換ルーチンにより必ず追加されます。出力ファイルは、Financial Reporting 印刷サーバーにより動的に生成されるため、ハードコードできません。
- パフォーマンス対品質: 変換された出力を生成するパフォーマンスと品質の高さのメリットを比較検討することが重要です。出力品質に影響を与える可能性がある Ghostscript パラメータはいくつかありますが、`-r###`(解像度)パラメータが最もよく使用されます。一般に、解像度が高くなればなるほど、Ghostscript により出力が生成される時間が長くなり、出力ファイルが大きくなります。たとえば、180KB の PostScript ファイルで `-r200` を使用すると 204KB の jpeg ファイルが生成され、`-r400`(同じ PostScript ファイル)を使用すると 563KB の jpeg ファイルが生成されます。
- `-c` パラメータを使用する場合、`-f` パラメータで閉じる必要があります。これを行わないと、Postscript ファイル名が間違っって解釈されることがあります。
- `-c` パラメータとその後の PS コマンドは、他のすべてのパラメータの末尾に入力する必要があります(`-f` を除く)。
- JPEG と Portable Document Format (PDF)の両方のカスタム・パラメータを追加する必要はありません。ユーザーは、いずれかまたは両方を指定することも、何も指定しないこともできます。

カスタム・パラメータをオフにする

カスタム Ghostscript パラメータをオフにするには、レジストリ・エントリ (GSPDFOptions または GSImageOptions) の名前を変更します。たとえば、GSPDFOptions を `_GSPDFOptions` に変更すると、PostScript(PS)から Portable Document Format (PDF)へのルーチンでデフォルト・パラメータが使用されます。

または、レジストリ名をそのまま保持して、その値を空にできます。Ghostscript 変換ルーチンでレジストリ・エントリが見つかって、エントリが空の場合はデフォルト・パラメータが使用されます。

例

次の項では、レジストリからカスタム GS パラメータを使用する有効な例を説明します。

デフォルト・パラメータの模倣

レジストリを使用してデフォルト Ghostscript パラメータを模倣するには、次のパラメータを入力します:

GSPDFOptions のデフォルト・エントリは次のとおりです:

```
-dNOPAUSE
-dBATCH
-dSAFER
-sDEVICE=pdfwrite
-dAutoFilterColorImages=false
-dColorImageFilter=/FlateEncode
-c
.setpdfwrite
-f
```

GSImageOptions のデフォルト・エントリは次のとおりです:

```
-dNOPAUSE
-r200
-dJPEGQ=75
-sDEVICE=jpeg
```

DSC コメントをオフにする

横長ページを回転すると、DSC コメントによりエラーが発生することがあります。DSC コメントをオフにするには、レジストリで次のパラメータを使用します。

DSC コメントをオフにする **GSPDFOptions** レジストリ値は次のとおりです:

```
-dNOPAUSE  
-dBATCH  
-dSAFER  
-sDEVICE=pdfwrite  
-dAutoFilterColorImages=false  
-dParseDSCComments=false  
-dColorImageFilter=/FlateEncode  
-c  
.setpdfwrite  
-f
```

イメージ出力の解像度の変更

Word/PowerPoint へのエクスポート機能のデフォルトのイメージ解像度は 200 ppi に設定されています。この解像度はレジストリのパラメータを使用して変更できます。

注： 警告: 解像度を大きな値に変更すると、イメージ・ファイルのサイズが大きくなり、変換プロセスのパフォーマンスが低下します。

解像度を 400 ppi に上げる **GSIImageOptions** レジストリ値は次のとおりです:

```
-dNOPAUSE  
-r400  
-dJPEGQ=75  
-sDEVICE=jpeg
```


A

EPM Workspace アイテムへの アクセス権の確認

この付録の内容

概要	217
アイテムのアクセス権チェック	217
サービスのアクセス権チェック	218
アクセスの拒否	219
追加のアクセス権チェックの例	220

概要

ユーザー、ドキュメント、ジョブおよびプリンタは、すべて EPM Workspace 内のアイテムです。ユーザーが EPM Workspace にログオンすると、これらのアイテムに対するユーザーのアクセス権が確認されます。EPM Workspace では、ユーザーは指定されたレベルでドキュメントやジョブにアクセスできます。たとえば、変更権限がある場合はアイテムを変更でき、フル・コントロール権限がある場合はアイテムを削除できます。リソースやアイテムに対するユーザーのアクセス権を確認するために、EPM Workspace は、この項で説明するアクセス権の確認ルーチンを実行します。このプロセスは、ログイン時に EPM Workspace の各アイテムについて実行されます。

注： ユーザー、グループおよび役割の管理の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

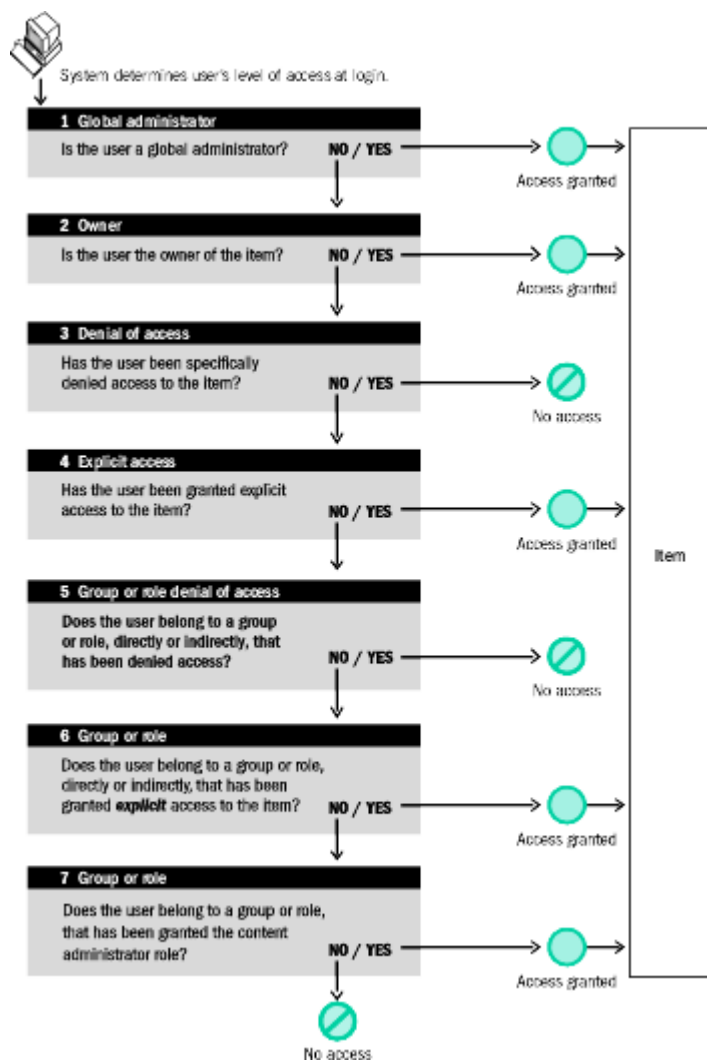
アイテムのアクセス権チェック

ユーザーは、ユーザーがメンバーであるグループの一式、またはそのユーザーに割り当てられた役割の一式を介してアイテムへのアクセス権を取得します。アイテムへのアクセス権のチェックは、次の順序で実装されます。

1. ユーザーにグローバル管理者の役割があるか? 答えがはいである場合、アクセス権が与えられ、チェックを停止します。
2. ユーザーはアイテムの所有者であるか? 答えがはいである場合、アクセス権が与えられ、チェックを停止します。
3. ユーザーはアイテムへのアクセスが拒否されているか? 答えがはいである場合、アクセス権は拒否され、チェックを停止します。

4. ユーザーはアイテムへの特定のアクセス権が与えられているか? 答えがはいである場合、アクセス権は与えられ、チェックを停止します。
5. ユーザーはアクセスを拒否されたグループまたは役割に属しているか? 答えがはいの場合、アクセス権は拒否され、チェックを停止します。
6. ユーザーはアイテムへのアクセス権を与えられたグループまたは役割に属しているか? 答えがはいの場合、アクセス権が与えられ、チェックを停止します。
7. ユーザーはコンテンツ管理者の役割を与えられたグループまたは役割に属しているか? 答えがはいの場合、アクセス権が与えられ、チェックを停止します。

ステップ 4 と 6 では、与えられているアクセス権が必要条件と同レベル以上である場合に、アクセス権が与えられます。



サービスのアクセス権チェック

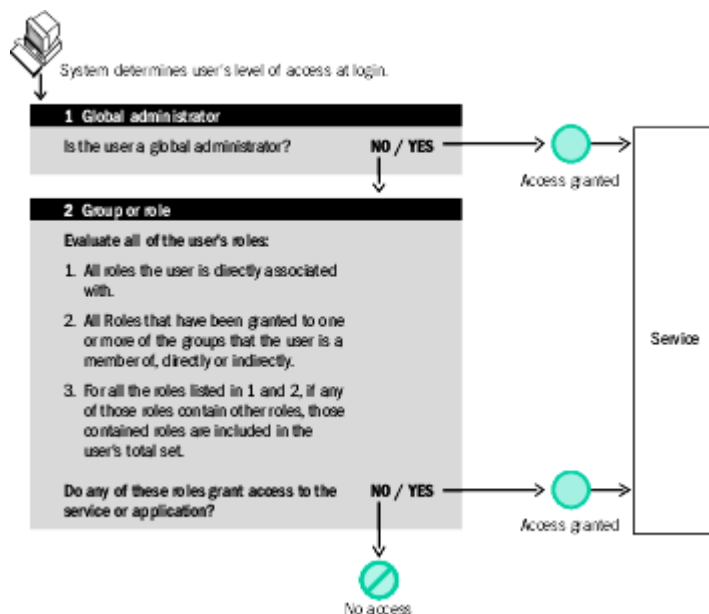
サービスへのアクセスのアクセス権チェックは、次の順序で実装されます。

1. グローバル管理者の役割があるか?

2. 割り当てられた役割を介して直接または間接的に与えられるアクセス権。すなわち、ユーザーが直接役割を与えられるか、またはユーザーが属するグループがその役割を直接または間接的に割り当てられるか?

回答が、

- はいの場合、アクセス権が与えられ、チェックを停止します。
- 1 番目の質問にいいえの場合、チェックを続行します。
- 2 番目の質問にいいえの場合、アクセス権は拒否されます。



アクセスの拒否

EPM Workspace では、アイテムへのフル・コントロール権を持つグローバル管理者、アイテム所有者、またはユーザーは、そのアイテムへのアクセスなしを割り当てることで、アイテムへのアクセスを拒否できます。アクセスなしは、ユーザー、グループ、または役割およびワーカーに適用されます。たとえば、Bob は、Jane と John の所属する販売グループ別に表示するドキュメントを発行する必要があります。Jane は契約社員であるため、そのドキュメントを表示できないようにする必要があります。John は、販売グループの管理アシスタントであるため、そのアイテムを変更する必要がある場合があります。Bob は、次のアクセス権を持つドキュメントを発行します。

- 販売グループは表示アクセスが可能
- Jane はアクセスなし
- John は変更アクセスが可能

前述の例では、Jane がグローバル管理者の役割があるか、またはドキュメントの所有者であった場合、Bob が Jane にアクセスなし、と設定しても、Jane はドキュメントへのフル・コントロール・アクセスができます。

Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition では、次のルールを使用してアクセスなし、を判別します。

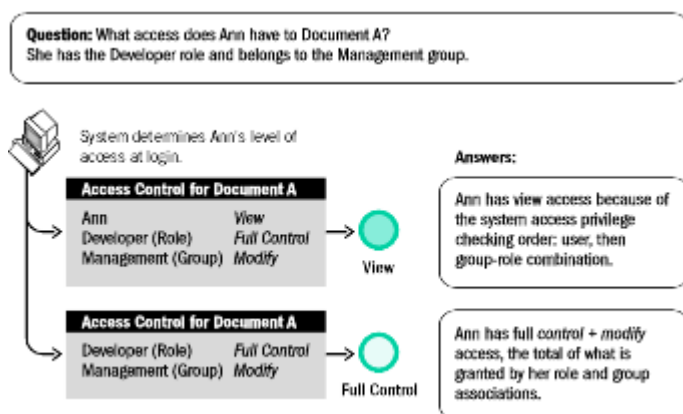
1. ユーザー個人がアクセスを拒否された場合は、ユーザーは、所有者またはグローバル管理者でない限り、どんな方法をとってもアイテムにアクセスできません
2. アクセスなし、がグループまたは役割に割り当てられる場合、そのグループに属するユーザーは、次のいずれかの場合、アイテムにアクセスできます。
 1. ユーザーがアイテムの所有者である。
 2. ユーザーがユーザー・レベルでアイテムへのアクセス権を与えられる。
 3. ユーザーがグローバル管理者の役割を持つ。

追加のアクセス権チェックの例

アクセス権チェックが機能する様子を深く理解するために、次の例を見ていきます。

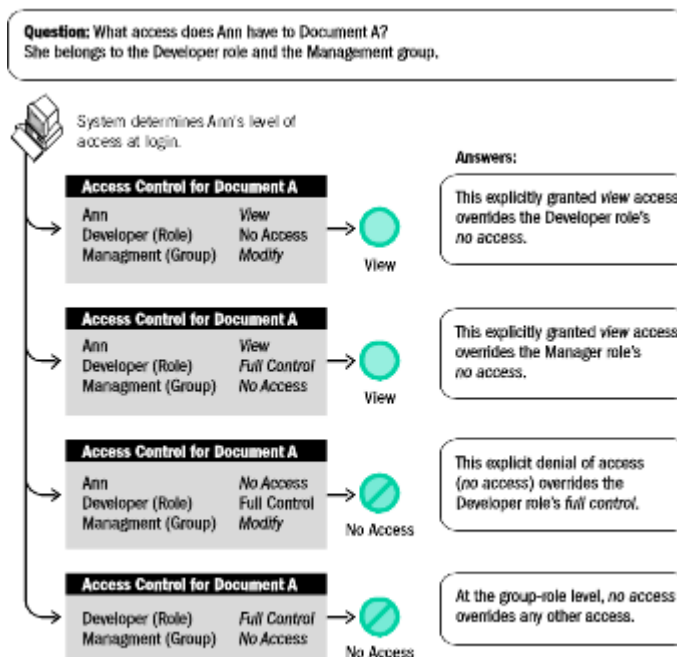
例: 役割の優先権

次の図では、Ann の持っているアクセス権を、アクセス権チェックの順序、および役割とグループの関連付けの全てを考慮して説明しています。Ann が開発者の役割を持ち、管理グループに属している場合、ドキュメント A に対して Ann はどんなアクセスができるか?



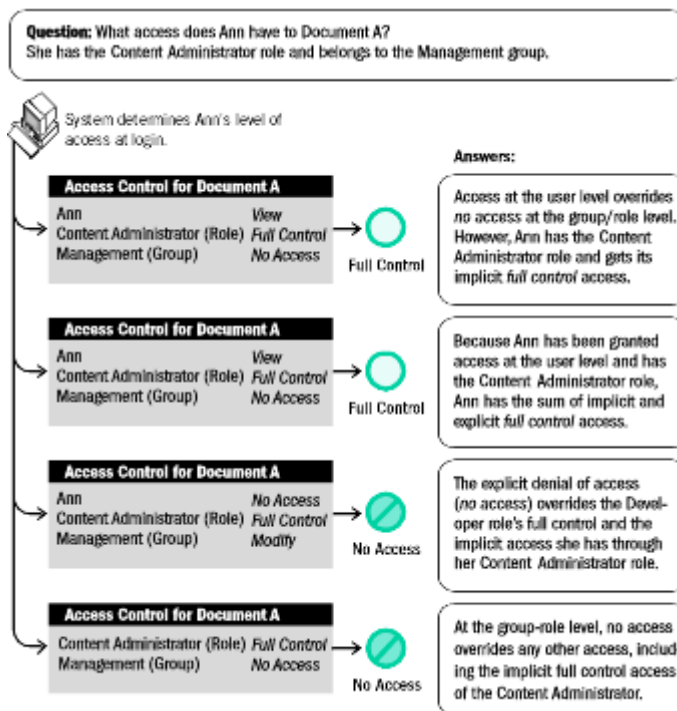
例: 与えられたアクセス権の上書き

次の図では、アクセス権の上書きがどのように機能するかの例を説明しています。Ann が開発者の役割を持ち、管理グループに属している場合、ドキュメント A に対して Ann はどんなアクセスができるか?



例: フル・コントロールおよびアクセスなしの上書き

次の図では、フル・コントロールアクセス権およびアクセスなしの上書きの例を説明しています。Ann がコンテンツ管理者の役割を持ち、管理グループに属している場合、ドキュメント A に対して Ann はどんなアクセスができるか？



用語集

! 感嘆符(!)(bang character(!))を参照してください。

#MISSING 欠落データ(#MISSING)(missing data(#MISSING))を参照してください。

2 パス(two-pass) 他のメンバーの計算済の値に依存するメンバーを再計算するために使用される、Essbaseのプロパティです。2パスのメンバーは、2番目のパスの間にアウトラインから計算されます。

Calculation Manager Planning, Financial Management および Essbase のユーザーがグラフィカルな環境でビジネス・ルールを設計、検証および管理するために使用する計算モジュールです。

CDF カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function(CDF))を参照してください。

CDM カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro(CDM))を参照してください。

Cookie Web サイトによってコンピュータ上に配置されたデータのセグメントです。

essbase.cfg Essbase のオプションの構成ファイルです。管理者は、このファイルを編集して Essbase サーバー機能をカスタマイズできます。一部の構成は、Essbase クライアントで使用することにより、Essbase サーバーの設定を上書きできます。

EssCell 特定の Essbase データベース・メンバーの交差を示す値を取得するために、Essbase スプレッドシート・アドインのセルに入力する関数です。

ESSCMD Essbase の操作を対話的に実行したり、バッチ・スクリプト・ファイルから実行したりするための、コマンドライン・インタフェースです。

ESSLANG テキスト文字を解釈するために使用されるエンコード方式を定義する Essbase 環境変数です。**エンコード方式(encoding)**も参照してください。

ESSMSH MaxL シェル(MaxL Shell)を参照してください。

Extensible Markup Language(XML) データに属性を割り当てるタグのセットで構成される言語です。スキーマに基づいて、複数のアプリケーションの間で解釈可能です。

Extract-Transform-Load(ETL) データを抽出してアプリケーションに移行するための、データ・ソース固有のプログラムです。

GUI グラフィカル・ユーザー・インタフェースです。

ID(identity) 外部認証におけるユーザーまたはグループの一意の ID です。

Install_Home EPM System 製品がインストールされるディレクトリを示す変数です。同じコンピュータに複数のアプリケーションがインストールされている場合は、EPM System 製品の1つのインスタンスを指します。

Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)(Interactive Reporting connection file(.oce)) データベース API(ODBC、SQL*Net、など)、データベース・ソフトウェア、データベース・サーバーのネットワーク・アドレス、データベース・ユーザー名などのデータベース接続情報を含むファイルです。管理者は、Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)を作成して発行します。

Java データベース接続(JDBC)(Java Database Connectivity(JDBC)) Java クライアントとリレーショナル・データベースにより使用されるクライアントとサーバー間の通信プロトコルです。JDBC インタフェースにより、SQL データベースのアクセスのための呼出しレベル API が提供されます。

JSP Java Server Page です。

KeyContacts ガジェット(KeyContacts gadget) Smart Space ユーザーのグループを含み、Smart Space Collaborator へのアクセスを提供します。たとえば、マーケティング・チームおよび開発チーム向けに個別の KeyContacts ガジェットを使用できます。

LRO リンク・レポート・オブジェクト(LRO)(linked reporting object(LRO))を参照してください。

MaxL Essbase で使用される多次元データベース向けアクセス言語です。データ定義の言語(MaxL DDL)とデータ操作の言語(MaxL DML)から構成されます。[MaxL DDL](#)、[MaxL DML](#)、および [MaxL シェル\(MaxL Shell\)](#)も参照してください。

MaxL DDL Essbase で、バッチまたは対話的なシステム管理のタスクに使用されるデータ定義の言語です。

MaxL DML Essbase で、データのクエリーと抽出に使用されるデータ操作の言語です。

MaxL DML の計算済メンバー(calculated member in MaxL DML)
分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

MaxL DML の計算済メンバー(calculated member in MaxL DML)
分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

MaxL Perl モジュール(MaxL Perl Module) Essbase MaxL DDL の一部である Perl モジュール(essbase.pm)です。このモジュールを Perl パッケージに追加すると、Perl プログラムから Essbase データベースにアクセスできます。

MaxL シェル(MaxL Shell) MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すためのインタフェースです。MaxL シェルの実行可能ファイル(UNIX は essmsh、Windows は essmsh.exe)は、Essbase の bin ディレクトリに格納されています。

MaxL スクリプト・エディタ(MaxL Script Editor) 管理サービス・コンソールのスクリプト開発環境です。MaxL スクリプトで Essbase を管理するとき、テキスト・エディタと MaxL シェルの代替として MaxL スクリプト・エディタを使用できます。

MDX(多次元式)(MDX(multidimensional expression)) リレーショナル・データベースで SQL を使用する際に、OLAP 準拠のデータベース向けに OLE DB に命令する言語です。「OLAPQuery」セクションのアウトライナを構築するとき、Interactive Reporting クライアントは要求を MDX の命令に変換します。ユーザーがクエリーを処理するとき、MDX がデータベース・サーバーに送信され、サーバーはクエリーの結果となるレコードを戻します。[SQL スプレッドシート\(SQL spreadsheet\)](#)も参照してください。

MIME タイプ(MIME Type) 多目的インターネットメール拡張仕様(Multipurpose Internet Mail Extension)です。アイテムのデータ・フォーマットを示す属性により、システムはオブジェクトを開くアプリケーションを判断します。ファイルの MIME タイプはファイル拡張子または HTTP ヘッダーにより判別されず。プラグインはブラウザに対して、サポートされる MIME タイプ、および各 MIME タイプに対応するファイル拡張子を通知します。

NULL 値(null value) データのない値です。NULL 値はゼロに等しくありません。

ODBC Open Database Connectivity の略です。データベース管理システム(database management system: DBMS)の情報処理方法に関係なく、あらゆるアプリケーションにより使用されるデータベース・アクセスのメソッドです。

「OK」ステータス(OK status) 集計ステータスの 1 つです。エンティティが集計済であり、組織階層の下にあるデータが変更されていないことを示します。

OLAP メタデータ・カタログ(OLAP Metadata Catalog)
Integration Services で、リレーショナル・データ・ソースから取り出されるデータの特性、ソース、場所およびタイプを記述したメタデータが含まれているリレーショナル・データベースです。

OLAP モデル(OLAP model) Integration Services で、リレーショナル・データベースのテーブルおよび列から作成される論理モデル(スター・スキーマ)です。OLAP モデルは多次元データベースの構造を生成するために使用されます。

Open Database Connectivity(ODBC) 標準のアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)です。これにより、アプリケーションから複数のサードパーティ・データベースにアクセスできます。

PL 勘定(P&L)(P&L accounts(P&L)) 損益勘定です。通常、会社の損益計算書を構成する費用勘定と収益勘定の集合を指します。

POV(視点)(POV(point of view)) 行、列、またはページ軸に割り当てられていないメンバーを選択することにより、データ・フォーカスを設定する機能です。たとえば、FDM での POV の選択項目には、場所、期間、カテゴリ、およびターゲット・カテゴリが含まれる可能性があります。また、Smart View で POV をフィルタとして使用すると、Currency 次元を POV に割り当て、Euro メンバーを選択できます。データ・フォームで POV を選択すると、ユーロ建でデータが表示されます。

Production Reporting [SQR Production Reporting](#) を参照してください。

PVA 期別価額メソッド(PVA)(periodic value method(PVA))を参照してください。

root メンバー(root member) 次元分岐における最上位のメンバーです。

RSC サービス(RSC services) リモート・サービス・コンフィグレータで構成されるサービスです。リポジトリ・サービス、サービス・ブローカ、名前サービス、イベント・サービス、およびジョブ・サービスを含みます。

Shared Services レジストリ(Shared Services Registry) Shared Services データベースの一部です。Shared Services レジストリでは、インストールされたほとんどの EPM System 製品の情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、配置設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を保管および再利用します。

Smart Space Collaborator ユーザーまたはシステムがメッセージを送信したり、Reporting and Analysis リポジトリのコンテンツを共有したりするためのサービスです。メッセージには、インスタント・メッセージのスタイル、ディスカッション、ミーティング、トースト・メッセージなどの様々な形態を使用できます。

Smart Space クライアント・ソフトウェア(Smart Space client software) クライアントのコンピュータ上で実行し、ガジェット、即時コラボレーション、および Reporting and Analysis リポジトリへのアクセスを提供します。Smart Space のワークフレームとガジェットから構成されます。

SmartBook ガジェット(SmartBook gadget) Reporting and Analysis リポジトリまたは URL からのドキュメントを含みます。SmartBook が開くとすべてのドキュメントがロードされるので、あらゆるコンテンツへのアクセスを即座に実行できます。

SPF ファイル(SPF files) SQR Production Reporting サーバーで作成される、プリンタに依存しないファイルです。フォント、間隔、ヘッダー、フッターなど、フォーマットされた実際のレポート出力を表します。

SQL スプレッドシート(SQL spreadsheet) SQL クエリーの結果セットを表示するデータ・オブジェクトです。

SQR Production Reporting データ・アクセス、データ操作、および SQR Production Reporting ドキュメント作成のための専用プログラミング言語です。

Structured Query Language(SQL) リレーショナル・データベースに対する指示を処理するために使用される言語です。

TCP/IP Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP)を参照してください。

Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP) 異なるオペレーティング・システムおよび内部アーキテクチャを持つコンピュータをリンクする標準的な通信プロトコルのセットです。TCP/IP を使用すると、LAN および WAN に接続する多様なコンピュータとの間でのファイルの交換、メールの送信、およびデータの保管が可能です。

Unicode モードのアプリケーション(Unicode-mode application) 文字テキストが UTF-8 でエンコードされている Essbase アプリケーションです。様々な言語に設定されているコンピュータを使用するユーザーが、アプリケーション・データを共有できます。

Uniform Resource Locator(URL) インターネットまたはイントラネット上のリソースのアドレスです。

Web サーバー(Web server) イントラネットまたはインターネットの Web ページや Web アプリケーションをホストするソフトウェアやハードウェアです。

WITH セクション(WITH section) MaxL DML で、オプションで使用できるクエリーのセクションです。メンバーのセットを定義する再利用可能な論理を作成するために使用されます。WITH セクションでセット(カスタム・メンバー)を一度定義すると、クエリー中に複数回参照できます。

Workspace ページ(Workspace Page) 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用できます。

ws.conf Windows プラットフォーム用の構成ファイルです。

wsconf_platform UNIX プラットフォーム用の構成ファイルです。

XML Extensible Markup Language(XML)を参照してください。

XOLAP アウトラインのメタデータのみを保管し、クエリー時にリレーショナル・データベースからすべてデータを取得する、Essbase の多次元データベースです。XOLAP は、集約ストレージ・データベースおよび重複メンバー名を含むアプリケーションをサポートします。

Y 軸スケール(Y axis scale) 「調査」セクションに表示される、チャートの Y 軸上の値の範囲です。たとえば、各チャートについて一意の Y 軸スケールを使用したり、すべての詳細チャートに同一の Y 軸スケールを使用したり、または列内のすべてのチャートに同一の Y 軸スケールを使用することが可能です。多くの場合、共通の Y 軸スケールを使用すると、一目でチャートを比較できるようになります。

Zero Administration サーバー上のプラグインの最新バージョン番号を識別するソフトウェア・ツールです。

アウトライン(outline) 多次元データベースのデータベース構造です。すべての次元、メンバー、タグ、タイプ、集計、および算術的關係を含みます。データは、アウトラインに定義された構造に応じてデータベースに保管されます。

アウトライン同期(outline synchronization) パーティション・データベースで、データベースのアウトラインの変更を他のデータベースに伝播するプロセスです。

アクセサ(accessor) データ・マイニング・アルゴリズムに関する入出力データ仕様です。

アクセス権(access permissions) リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

アクティビティ・レベルの承認(activity-level authorization) 操作対象のデータに依存せず、アプリケーションへのユーザー・アクセス、およびアプリケーションで実行できるアクティビティのタイプを定義します。

アクティブ・サービス(active service) 実行タイプが保留ではなく開始に設定されているサービスです。

アセンブリ(assemblies) EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

値次元(value dimension) 入力値、換算値、および連結の詳細を定義するために使用されます。

アダプタ(adapter) ターゲットおよびソース・システムのデータやメタデータにプログラムを統合するためのソフトウェアです。

アップグレード(upgrade) 以前のソフトウェア・リリースを現在のリリースに置換するプロセス、またはある製品を別の製品に置換するプロセスです。

宛先(destination) (1) Business Rules および Calculation Manager の場合、割り当てられた値が保管されるデータベース内の交差です。(2) Profitability and Cost Management の割当てでは、割り当てられた値を受け取るポイントです。

アドホック・レポート(ad hoc report) エンド・ユーザーがその場で作成するオンライン分析クエリーです。

アプリケーション(application) (1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。(2)必要とされる特定の分析およびレポートに対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

アプリケーションの通貨(application currency) アプリケーションのデフォルトのレポート用通貨です。

アペンダ(appender) 宛先を意味する Log4j の用語です。

安全率(Risk Free Rate) より安全な投資から期待される利回りです(米国の長期国債など)。

暗黙の共有(implied share) メンバーが1つ以上の子を持ち、集計されている子は1つのみである場合、親と子が値を共有します。

アーチファクト(artifact) 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

移行(migration) アプリケーション、アーチファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から実稼働環境にコピーします。

移行監査レポート(migration audit report) 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

移行スナップショット(migration snapshot) アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

移行定義ファイル(.mdf)(migration definition file(.mdf)) アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

移行ログ(migration log) アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

依存エンティティ(dependent entity) 組織内の他のエンティティに属するエンティティです。

一意でないメンバー名(non-unique member name) [重複メンバー名\(duplicate member name\)](#)を参照してください。

一意のメンバー名(unique member name) データベース・アウトライン内に一度のみ存在する、共有されないメンバーの名前です。

一意メンバーのアウトライン(unique member outline) 重複メンバー名を使用できないデータベース・アウトラインです。

イメージ・ブックマーク(image bookmarks) Web ページやリポジトリ・アイテムへのグラフィック・リンクです。

因果関係マップ(cause and effect map) 企業戦略を形成する要素の関連、およびこれらの要素が組織の戦略目標を達成するためにどのように連動するかを示します。因果関係マップのタブは、各戦略マップについて自動的に作成されます。

インデックス(index) (1)疎データの組合せによりブロック・ストレージ・データベースでデータを取得するメソッドです。(2)インデックス・ファイルを指します。

インデックス・キャッシュ(index cache) インデックス・ページを含むバッファです。

インデックス項目(index entry) 疎次元の交差へのポインタです。インデックス・エントリはディスク上のデータ・ブロックをポイントし、オフセットを使用してセルを検索します。

インデックス・ファイル(index file) ブロック・ストレージのデータ取得情報を格納する Essbase ファイルです。ディスクに常駐し、インデックス・ページを含みます。

インデックス・ページ(index page) インデックス・ファイルの下位区分です。データ・ブロックを指すポインタを含みます。

イントロスペクション(introspection) データベース固有の関係に基づいて階層を判断するために、データ・ソースを詳細に検査することを指します。[スクレーピング\(scraping\)](#)と対比してください。

インポート・フォーマット(import format) FDM で、ソース・ファイルの構造を定義します。これにより、ソース・データ・ファイルを FDM データのロード位置にロードできます。

「影響」ステータス(IMPACTED status) 親エンティティに集計する子エンティティの変更を示します。

円グラフ(pie chart) 1つのデータ・セットを扇形に分割された円形で示すグラフです。

エンコード方式(encoding) テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングするメソッドの1つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。[コード・ページ\(code page\)](#)および[ロケール\(locale\)](#)も参照してください。

エンタープライズ・ビュー(Enterprise View)

Administration Services の機能の1つです。グラフィカルなツリー・ビューを使用して Essbase 環境を管理できます。エンタープライズ・ビューを使用すると、Essbase アーチファクトを直接操作できます。

エンティティ(entity) 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。

エージェント(agent) アプリケーションやデータベースの開始と停止、ユーザー接続の管理、ユーザー・アクセスのセキュリティ対策を行う Essbase サーバー・プロセスです。このエージェントは、ESSBASE.EXE と呼ばれます。

お気に入りガジェット(Favorites gadget) Reporting and Analysis ドキュメントへのリンクと URL を含みません。

親(parents) 直接レポートする依存エンティティを1つ以上含むエンティティです。親はエンティティであると同時に少なくとも1つのノードに関連しているため、エンティティ、ノード、および親の情報が関連付けられています。

親の調整(parent adjustments) 親に関連して子に転記される仕訳エントリです。

折れ線グラフ(line chart) データ・セットを最大50個表示できるグラフです。各データ・セットは線で示されます。折れ線グラフで絶対値やパーセントを表す際に、前の線の上に次の線を重ねていく形で表示することも可能です。

オンライン分析プロセス(OLAP)(online analytical processing(OLAP)) 複数ユーザーによりクライアントとサーバー間の計算を行える多次元的环境です。連結された企業データをリアル・タイムで分析するユーザーが使用します。OLAP システムの機能には、ドリルダウン、データのピボット、複素数計算、トレンド分析、およびモデリングが含まれます。

会社間照合(intercompany matching) アプリケーション内の会社間勘定科目の対の残高を比較するプロセスです。会社間の受取勘定科目は、対応する会社間の支払い勘定科目と比較されます。一致する勘定科目は、組織の集計合計から会社間のトランザクションを消去するために使用されます。

会社間照合レポート(intercompany matching report) 内部取引勘定科目の残高を比較して、勘定の収支が合っているかどうかを示すレポートです。

拡張リレーショナル・アクセス(Advanced Relational Access) リレーショナル・データベースと Essbase 多次元データベースの統合を指します。これにより、すべてのデータがリレーショナル・データベースに保持され、Essbase データベースに存在する要約レベルのデータにマッピングされます。

確認レベル(review level) プロセス管理の確認ステータス・インディケータの1つです。「開始していません」、「第1パス」、「提出済」、「承認済」、「発行済」など、プロセス単位のレベルを示します。

加重(weight) スコアカードの項目に割り当てられた値です。スコアボード全体のスコアの計算において、その項目の相対的な重要性を示します。スコアカードのすべての項目の加重を総計すると100%になります。たとえば、ある製品について新機能を開発する重要性を認めるため、開発者のスコアカード上の New Features Coded のメジャーに Number of Minor Defect Fixes のメジャーよりも大きな加重が割り当てられる可能性があります。

カスケード(cascade) メンバー値のサブセットに対して複数のレポートを作成するプロセスです。

カスタム・カレンダー(custom calendar) システム管理者が作成したカレンダーです。

カスタム次元(custom dimension) ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。

カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function(CDF)) Java で開発され、MaxL により Essbase の標準計算スクリプト言語に追加された、Essbase 計算関数です。**カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro(CDM))** も参照してください。

カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro(CDM)) Essbase のマクロです。Essbase 計算機の関数および専用マクロ関数を使用して記述されます。カスタム定義マクロが使用する Essbase の内部マクロ言語により、計算関数を組み合わせることが可能となり、複数の入力パラメータが処理されます。**カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function(CDF))** も参照してください。

カスタム・プロパティ(custom property) ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

カスタム・レポート(custom report) 設計レポート・モジュールで作成する複雑なレポートです。コンポーネントの様々な組合せによって構成されます。

型付きメジャー(typed measure) Essbase で、メジャーが示されている次元で Text または Date というタグが付けられたメンバーです。セルの値は事前定義されたテキストまたは日付として表示されます。

カタログ・ペイン(Catalog pane) アクティブ・セクションで使用可能な要素のリストを表示します。クエリーがアクティブ・セクションの場合はデータベース・テーブルのリストが表示されます。ピボットがアクティブ・セクションの場合は結果列のリストが表示されます。ダッシュボードがアクティブ・セクションの場合は埋込み可能セクションのリスト、グラフィック・ツール、およびコントロール・ツールが表示されます。

カテゴリ(categories) データ編成に使用するグループです(月など)。

株式ベータ(Equity Beta) 株のリスクを指します。その株の収益と市場利益率の差異により測定され、ベータと呼ばれるインデックスで示されます。たとえば、市場利益率が1%変動するのに伴って株の収益が通常1.2%変動するのであれば、その株のベータ値は1.2です。

可変属性(varying attribute) 1つ以上の次元で変化する属性の関連付けです。これらの次元との関連で値を追跡するために使用できます。たとえば、Product次元に関連付けられているSales Representativeという可変属性を使用すると、複数の販売員によるCustomer Salesの値を時間次元との関連で追跡できます。また、5月に特定の販売員が担当した製品を検索するといった場合にも、可変属性をメンバー選択で使用できます。

カレンダー(calendar) ユーザー定義の期間、およびその関係です。暦年または会計年度は、Q1、Q2、Q3、およびQ4から構成されます。

為替レート(exchange rate) ある通貨から別の通貨に変換する際に使用する数値です。たとえば、1米ドルをユーロに変換する場合、為替レートの0.8936に米ドルを乗じます。これにより、1米ドルに相当するユーロは0.8936と算出されます。

為替レート・タイプ(exchange rate type) 為替レートの識別子です。異なるレートのタイプが使用されるのは、一定期間および年間について複数のレートが存在することがあるためです。従来より、期末時点でのレートを当期の平均レートおよび期末レートとして定義します。その他、ヒストリカル・レート、予算レート、予測レートなどのレート・タイプがあります。レート・タイプは特定の時点に適用されません。

換算(translation) **通貨換算(currency conversion)**を参照してください。

換算レート(conversion rate) **為替レート(exchange rate)**を参照してください。

勘定科目次元(accounts dimension) 高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。

勘定科目の種別(account type) 時間の経過に伴う勘定科目の値のフロー、およびその符号の振る舞いを示します。勘定科目の種別のオプションには、支出、収益、資産、負債、および資本が含まれます。

勘定科目の消去(account eliminations) 集計時に集計ファイル内で値がゼロに設定された勘定科目です。

勘定科目のブロック(account blocking) 集計ファイルで勘定科目が入力データを受け入れるプロセスです。ブロックされた勘定科目は加算集計プロセスで値を受け取りません。

関数(function) 値またはデータベース・メンバーを戻すルーチンです。

感嘆符(!)(bang character(!)) 一連のレポート・コマンドを終了して、データベースからの情報を要求する文字です。レポート・スクリプトは感嘆符を使用して終了する必要があります。レポート・スクリプト内では複数の感嘆符を使用できます。

管理対象サーバー(managed server) 内蔵されたJava仮想マシン(Java Virtual Machine: JVM)で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

関連勘定科目(Related Accounts) 勘定科目の構造体では、すべてのメイン勘定科目および関連勘定科目は同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。メイン勘定科目と関連勘定科目は、勘定科目番号の最初の接尾辞により区別されます。

外部でトリガーされるイベント(externally triggered events) ジョブの実行をスケジュールするための、時間ベースでないイベントです。

外部認証(external authentication) OracleのHyperionアプリケーションの外部に保管されたユーザー情報を使用して、アプリケーションにログオンすること指します。ユーザー情報の保管場所は、通常はMSADやNTLMなどの企業ディレクトリとなります。

ガジェット(gadget) EPMのコンテンツを容易に表示し、Reporting and Analysisのコア機能にアクセスできる、軽量で単純な専用アプリケーションです。

期別価額メソッド(PVA)(periodic value method(PVA)) 通貨換算方法の1つです。一定期間における期別の為替レート値を適用して通貨を算出します。

基本エンティティ(base entity) 組織の構造の一番下に位置し、他のエンティティを持たないエンティティです。

基本次元(base dimension) 1つ以上の属性次元に関連付けられている標準次元です。たとえば、製品に香りがあるとすると、Product次元がFlavors属性次元の基本次元となります。

基本通貨(base currency) 日常の業務取引が行われる通貨です。

期末(ending period) チャートの日付範囲を調整できる期間です。たとえば、月の期末の場合、当月末までの情報がチャートに表示されます。

キャッシュ(cache) データを一時的に保持する、メモリー内のバッファです。

キューブ(cube) 3つ以上の次元を含むデータのブロックです。Essbase データベースはキューブです。

キューブ・スキーマ(cube schema) Essbase Studio におけるメジャーおよび階層などのメタデータ要素です。キューブの論理モデルを指します。

キューブ配置(cube deployment) Essbase Studio で、アウトラインを構築してデータを Essbase アプリケーションおよびデータベースにロードするために、モデルのロード・オプションを設定するプロセスです。

兄弟(sibling) 他の子メンバーと同じ世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

共有 Workspace ページ(Shared Workspace Page) 専用のシステム・フォルダに保管され、組織全体で共有する Workspace ページです。権限を持つユーザーは、共有 Workspace ページの「ナビゲート」メニューからアクセスできます。

共有メンバー(shared member) ストレージ・スペースを別の同名メンバーとの間で共有するメンバーです。Essbase アウトラインに複数回現れるメンバーが重複して計算されることを防ぎます。

行の抑制(suppress rows) 欠落値を含む行を除外し、スプレッドシート・レポートからの文字にアンダースコアを付けます。

クエリー(query) データ・プロバイダからの情報の要求です。リレーショナル・データ・ソースにアクセスする場合などに使用されます。

クエリー・ガバナー(query governor) Essbase Integration Server のパラメータまたは Essbase サーバーの構成設定です。データ・ソースに対して実行されるクエリーの時間とサイズを制御します。

クラスタ(cluster) 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

クラスタ棒グラフ(clustered bar charts) カテゴリを横に並べたグラフです。並列カテゴリの分析に便利です。垂直棒グラフでのみ使用されます。

繰返し(iteration) 同じバージョンのデータを修正して移行する予算またはプランニング・サイクルのパスです。

クリーン・ブロック(clean block) 計算スクリプトによってすべての次元が一度に計算された場合、または計算スクリプトで SET CLEARUPDATESTATUS コマンドが使用された場合の、データベース全体の計算が完了しているデータ・ブロックを指します。

クロス連結レポート(crosstab reporting) テーブル・フォーマットでデータの分類および集計を行うことです。テーブルのセルには、交差する分類に合致するデータの集計結果が保管されています。たとえば、製品販売情報のクロス集計レポートに、列見出しとして Small や Large などのサイズ属性、行見出しとして Blue や Yellow などの色属性を表示できます。テーブルの中で Large と Blue が交差するセルには、サイズが Large のすべての Blue 製品の総売上げが表示されます。

グリッドの POV(grid POV) 行、列、またはページの交差に次元を配置せずに、グリッド上で次元メンバーを指定する手段です。レポート・デザインはグリッド・レベルで POV の値を設定し、ユーザーの POV がグリッドに影響を与えないように防ぐことができます。次元に含まれるグリッドの値が1つのとき、その次元は行、列、またはページではなくグリッドの POV に配置します。

グループ(group) 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

グローバル・レポート・コマンド(global report command) 別のグローバル・コマンドに置き換えられるか、またはファイルが終了するまで実行し続けるレポート・スクリプトのコマンドです。

計算(calculation) データを集約したり、データベースで計算スクリプトを実行したりするプロセスです。

計算結果アイテム(computed item) データベースやキューブに物理的に保管される列に対して、仮想の列を指します。クエリー実行時にデータベースにより、または Interactive Reporting Studio の「結果」セクションで計算されます。計算結果アイテムは、関数、データ項目、およびダイアログ・ボックスで提供される演算子に基づくデータ計算であり、レポートに含まれたり他のデータの計算に再利用されることがあります。

計算スクリプト(calc script) データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。

系統データ(genealogy data) 割当ての計算後にオプションで生成される追加データです。このデータにより、すべての割当てでステップにわたるコストまたは収益のフローについてレポートを作成できます。

系列(lineage) 異なるメタデータ要素間の関係です。メタデータ要素が他のメタデータ要素からどのように導き出されるかを示し、メタデータ要素を物理ソースまでトレースします。Essbase Studio では、この関係を系列ビューでグラフィカルに表示できます。[トレーサビリティ\(traceability\)](#)も参照してください。

結合(join) 特定の列または行の共通のコンテンツに基づく2つのリレーショナル・データベース・テーブルまたはトピックの間のリンクです。通常、異なるテーブルまたはトピック内の同一または類似するアイテムの間で結合が起きます。たとえば、Customer テーブルと Orders テーブルで Customer ID の値が同一である場合、Customer テーブル内のレコードが Orders 内のレコードに結合します。

欠落データ(#MISSING)(missing data(#MISSING)) ラベル付けされた場所のデータが存在しないか、値が含まれていないか、データが入力されていないかまたはロードされていないことを示すマーカーです。たとえば、勘定科目に当期ではなく過去または将来の期間のデータが含まれている場合は、欠落データが存在します。

権限(permission) データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

検索ガジェット(Search gadget) Reporting and Analysis のリポジトリを検索します。検索ガジェットは、ドキュメントをインポートしたときに設定されたドキュメントのキーワードや説明で一致を探します。

検証(validation) アウトラインに対してビジネス・ルール、レポート・スクリプト、またはパーティション定義をチェックして、チェック対象のオブジェクトが有効であることを確認するプロセスです。たとえば、FDM の検証ルールにより、FDM からターゲット・アプリケーションにデータがロードされた後で特定の条件が満たされているかどうかを確認されます。

限界税率(Marginal Tax Rate) 税引き後の負債コストを計算するために使用されます。最近計上された所得に適用される税率(所得額に適用される最高の税率区分の税率)を示し、連邦税、州税、および地方税を含みます。課税対象所得と税率区分の現在のレベルに基づいて、限界税率を予測できます。

現地通貨(local currency) 入力通貨タイプです。入力通貨タイプが指定されていない場合は、現地通貨がエンティティの基本通貨に一致します。

原点(origin) 2つの軸の交差です。

子(child) データベース・アウトライン内で親を持つメンバーです。

高機能計算(intelligent calculation) 最後に実行された計算以降に更新されたデータ・ブロックを追跡する計算メソッドです。

交差(intersection) 多次元データベース内の次元の交差を表すデータの単位です。ワークシートのセルです。

構成ファイル(configuration file) セキュリティ・プラットフォームでは、XML ドキュメントの構成を製品の管理者やインストール・プログラムに依存しています。XML ドキュメントは有意義なプロパティの値を示し、企業の認証シナリオに関連する場所と属性を指定するように変更する必要があります。

構造ビュー(structure view) トピックをコンポーネントのデータ項目の単純なリストとして表示します。

構築メソッド(build method) データベース・アウトラインを変更するために使用するメソッドの一種です。データ・ソール・ファイルのデータ・フォーマットに基づいて構築メソッドを選択します。

個人の反復タイム・イベント(personal recurring time events) 再利用可能なタイム・イベントです。作成したユーザーのみがアクセスできます。

個人用変数(personal variable) 複雑なメンバー選択の特定の選択ステートメントです。

個人用ページ(personal pages) リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。

コミット・アクセス(committed access) Essbase のトランザクションの処理方法に影響する Essbase カーネルの分離レベルです。コミット・アクセスでは、同時トランザクションは書き込みロックを長期間保持し、予測可能な結果を生成します。

コンテキスト変数(context variable) タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

コンテンツ(content) リポジトリに保管されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

コンテンツ・ブラウザ(content browser) コンテンツを選択して Workspace ページに配置するために使用できるコンポーネントです。

コントリビューション(contribution) 子エンティティから親に追加される値です。それぞれの子は親に対するコントリビューションを持ちます。

コントロール・グループ(controls group) 証明書および評価の情報を維持および整理するために FDM で使用されます。サーベンス・オクスリ(Sarbanes-Oxley)法の規定に準拠する上で特に役立ちます。

コード・ページ(code page) 一連のテキスト文字へのビット組合せのマッピングです。コード・ページは、それぞれ異なる文字セットをサポートします。各コンピュータには、ユーザーが必要とする言語の文字セットについてのコード・ページ設定が含まれます。このドキュメントでは、コード・ページは非 Unicode のエンコードのビット組合せに文字をマッピングします。[エンコード方式\(encoding\)](#)も参照してください。

差異(variance) プラン値と実績値などの 2 つの値の差です。

サイクル・スルー(cycle through) データベース内で複数パスを実行し、同時に計算することを指します。

再構成 URL(reconfigure URL) ユーザーが Workspace にログオンしているときに、サブレット構成設定を動的に再ロードするための URL です。

再構築(restructure) データベース・インデックス、また場合によってはデータ・ファイルの再生成もしくは再構築を行う操作です。

最新(latest) 最新の期間として定義されたメンバーからデータ値を取得するために使用される、スプレッドシートのキー・ワードです。

最上位メンバー(top-level member) 次元のアウトラインで、階層ツリーの一番上に位置する次元メンバーです。次元メンバー間に階層の関係がない場合は、ソート順で最初のメンバーを指します。階層の関係がある場合、最上位メンバーの名前が次元名と同一となるのが一般的です。

サブ勘定科目のナンバリング(Subaccount Numbering) 不連続の整数を使用してサブ勘定科目のナンバリングを行うためのシステムです。

サブスクライブ(subscribe) 項目またはフォルダが更新されるときに自動的に通知を受け取るように、項目またはフォルダにフラグを付けることを指します。

サポート詳細(supporting detail) セルの値を算出した計算および仮定です。

三角換算法(triangulation) 第 3 の共通通貨を介して、ある通貨から別の通貨に残高を変換する手段です。欧州の場合はユーロが共通通貨として使用されます。たとえば、フランス・フランからイタリア・リラに変換する場合、ユーロが共通通貨として定義されます。したがって、フランの残高をリラに変換するには、フランからユーロに変換してから、ユーロからリラに変換します。

算出ステータス(calculation status) 一部の値または式の計算が変更されたことを示す集計ステータスです。影響を受けるエンティティについて正しい値を取得するには、再集計する必要があります。

算術演算子(mathematical operator) 式およびアウトラインでのデータの計算方法を定義する記号です。標準的な算術演算子またはブール演算子が使用されます(+、-、*、/、%など)。

算術データ・ロード(arithmetic data load) データベース内の値に対して演算(たとえば各値に 10 を加算するなど)を実行するデータ・ロードです。

サンプリング(sampling) エンティティの特性を判別するためにエンティティの代表的な部分を選択するプロセスです。[メタデータのサンプリング\(metadata sampling\)](#)も参照してください。

サービス(services) ビジネス・アイテムを取得、変更、追加、および削除するためのリソースです(権限付与、認可など)。

サーブレット(servlet) Web サーバーが実行可能なコンパイルされたコードです。

残高勘定科目(balance account) 特定の時点の符号なしの値を保管する勘定科目の種別です。

式(formula) データベース・メンバーを計算する演算子、関数、次元およびメンバー名、および定数の組み合わせです。

式の保存(preserve formulas) データ取得中にワークシート内に保持される、ユーザーが作成した式です。

資産勘定科目(asset account) 勘定科目の1つです。会社の資産の値を保管します。

支出勘定科目(expense account) 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は、純利益が減ります。

市場リスク割増額(Market Risk Premium) 国債よりもリスクの高い投資を投資家に呼びかけるための、安全率に追加して支払われる利回りです。予測される市場利回りから安全率を差し引いて計算されます。この数字が示すモデルは将来の市況に近いものとなる必要があります。

システム抽出(system extract) データをアプリケーションのメタデータから ASCII ファイルに転送します。

子孫(descendant) データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

シナリオ(scenario) データを分類するための次元です(Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。

支配比率(percent control) 所属するグループ内でエンティティが受ける支配の程度です。

収益勘定科目(income account) 期別の値と年次累計値を格納する勘定科目です。値が正の場合は純利益が増えます。

集計ファイル(*.cns)(consolidation file(*.cns)) 集計ファイルは、集計のプロセスでチャートまたはツリー・ビューを使用して Strategic Finance ファイルを追加、削除、移動するためのグラフィカル・インタフェースです。集計ファイルを使用して、集計を定義したり変更したりすることも可能です。

集計ファイル(親)(consolidated file(Parent)) 事業部門のすべてのファイルが集計されたファイルです。集計の定義を含みます。

集計ルール(consolidation rule) 階層のノードを集計する際に実行されるルールを特定します。親の残高が正しく集計されるように、顧客固有の適切な式を含めることができます。消去プロセスは、集計ルール内でコントロールできます。

修飾名(qualified name) 定まったフォーマットのメンバー名です。重複メンバーのアウトラインにおいて、重複メンバー名を区別します([Market].[East].[State].[New York]、[Market].[East].[City].[New York]など)。

集約(aggregation) 集約ストレージ・データベースの値をロール・アップおよび保管するプロセスです。または集約プロセスによって保管された結果を指します。

集約関数(aggregate function) 関数の一種です。合計、平均の計算など、データの要約や分析を実行します。

集約スクリプト(aggregation script) 集約を構築するための集約ビューの選択を定義するファイルです。集約ストレージ・データベースのみで使用されます。

集約ストレージ・データベース(aggregate storage database) 潜在的に大きな多数の次元に分類される疎に分散した大規模なデータをサポートするように設計されたデータベースのストレージ・モデルです。上位のメンバーと式は動的に計算され、選択されたデータ値は集約、保管されます。通常、集約の合計所要時間が改善されます。

集約制約(aggregate limit) 集約要求ライン・アイテムや集約メタトピック・アイテムに設定する制約です。

集約セル(aggregate cell) 複数のセルから構成されるセルです。たとえば、Children(Year)を使用するデータ・セルは、Quarter 1、Quarter 2、Quarter 3、および Quarter 4 のデータを含む 4 つのセルに展開されます。

集約ビュー(aggregate view) 各次元内のメンバーのレベルに基づく集約セルの集合です。計算時間を短縮するため、値は事前に集約されて集約ビューとして保管されています。取得は集約ビューの合計から開始され、合計に追加されます。

出資比率(percent ownership) エンティティが親によって所有される程度です。

手動ステージ(manual stage) 完了するためにユーザーが操作する必要があるステージです。

消去(elimination) 組織内のエンティティ間での取引をゼロに設定(消去)するプロセスです。

消去済勘定科目(Eliminated Account) 集計ファイルに表示されない勘定科目です。

詳細チャート(detail chart) 要約チャートで、詳細な情報を提供するチャートです。詳細チャートは要約チャートの下にある「調査」セクションに列で表示されます。要約チャートに円グラフが表示される場合、その下の詳細チャートには円の各区分が示されます。

使用済ブロック(dirty block) 最後に計算された後に変更されたセルを含むデータ・ブロックです。子ブロックが使用済である(つまり更新されている)場合、上位のブロックにも使用済のマークが付けられます。

シリアル計算(serial calculation) デフォルト計算設定です。1つの計算を複数のタスクに分割して、一度に1つのタスクを計算します。

仕訳(JE)(journal entry(JE)) シナリオと期間の残高勘定科目の借方または貸方に計上する調整の集合です。

シングル・サインオン(single sign-on) 外部のログイン情報を使用するシングル・ログインにより、複数のEPM System 製品にアクセスできる機能です。

信頼できるパスワード(trusted password) ある製品について認証されたユーザーが、パスワードを再入力せずに他の製品にもアクセスできるようにするパスワードです。

信頼できるユーザー(trusted user) 認証されたユーザーです。

時間次元(time dimension) データが示す期間を定義します(会計期間、暦時間など)。

軸(axis) (1)測定と分類に使用されるグラフィックを貫通する直線です。(2)多次元のデータを整理および関連付けるために使用されるレポートのアスペクトです(フィルタ、ページ、行、列など)。たとえば、Simple Basic でデータ・クエリーを実行する場合、軸では Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 の値の列を定義できます。Market と Product の階層による合計が行データとして取得されます。

時系列レポート作成(time series reporting) カレンダーの日付(年、四半期、月、週など)に基づくデータのレポート作成プロセスです。

次元(dimension) ビジネス・データを整理して値の抽出や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。通常、次元には関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、Year 次元は多くの場合四半期、月などの期間の単位ごとのメンバーが含まれます。

次元間の無関係性(interdimensional irrelevance) 次元が他の次元と交差しない状況を指します。次元に含まれるデータは、交差しない次元はアクセスできないため、交差しない次元は無関係となります。

次元構築(dimension build) Essbase アウトラインに次元およびメンバーを追加するプロセスです。

次元構築のルール(dimension build rules) データ・ロードのルールに似た仕様です。Essbase でアウトラインを変更するために使用されます。変更は外部データ・ソース・ファイルのデータに基づきます。

次元性(dimensionality) MaxL DML において、セットで示された次元およびその順序です。たとえば、{(West, Feb), (East, Mar)} というセットの場合は、含まれている2つのタプルはいずれも次元(Region, Year)を反映しているため、同一の次元性であることとなります。

次元タイプ(dimension type) 定義済の機能を使用可能にする次元のプロパティです。時間のタグが付けられた次元は、定義済のカレンダー機能を持ちます。

次元タブ(dimension tab) 「ピボット」セクションで、行と列の間でデータのピボットを実行するためのタブです。

次元テーブル(dimension table) (1)特定のビジネス・プロセスに関する多数の属性を含むテーブルです。(2)Essbase 統合サービスでは、Essbase の潜在的な次元を定義する1つ以上のリレーショナル・テーブルのための、OLAP モデルのコンテナを指します。

事前計算(precaculation) ユーザーが取得する前にデータベースで計算を実行することです。

持続性(persistence) Essbase の操作や設定に対する継続的または長期的な影響です。たとえば、ユーザー名やパスワードの有効性について、Essbase 管理者がその持続性を制限することがあります。

実行時プロンプト(runtime prompt) ビジネス・ルールが実行される前にユーザーが入力または選択する変数です。

実績の頻度(result frequency) 日付のセットを作成して結果を収集および表示するために使用されるアルゴリズムです。

自動逆仕訳(auto-reversing journal) 次期に逆仕訳する調整を入力するための仕訳です。

自動ステージ(automated stage) ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

従業員(employee) 特定のビジネス・オブジェクトに対して責任を負う(または関与する)ユーザーです。従業員は組織に勤めている必要はありません(コンサルタントなど)。従業員は、認可のためにユーザー・アカウントに関連付けられている必要があります。

重要事業領域(CBA)(critical business area(CBA)) 部門、地域、工場、コスト・センター、プロフィット・センター、プロジェクト・チーム、またはプロセスに編成された個人またはグループです。責任チームまたはビジネス領域とも呼ばれます。

重要成功要因(CSF)(critical success factor(CSF)) 戦略目標を達成するために確立および維持する必要のある能力です。戦略目標または重要プロセスにより所有され、1つ以上のアクションに対する親となります。

上位レベル・ブロック(upper-level block) 少なくとも1つの疎メンバーが親レベルのメンバーになっているデータ・ブロックです。

冗長データ(redundant data) 重複データ・ブロックです。Essbase で更新されたブロックがコミットされるまで、取引の間保持されます。

ジョブ(jobs) 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含めることができます。

ジョブの出力(job output) ジョブの実行によって生成されたファイルやレポートです。

数値属性範囲(numeric attribute range) 基本次元メンバーに関連付けるために使用される機能です。メンバーは個別の数値を含み、値の範囲を示す属性を持ちます。たとえば、顧客を年齢別に分類する場合、Age Group 属性次元に 0-20、21-40、41-60、および 61-80 という年齢範囲に該当するメンバーを含めることができます。各 Customer 次元メンバーは Age Group 範囲に関連付けられます。データを取得する際は、個別の年齢の値ではなく年齢範囲に基づいて処理されます。

スクレーピング(scraping) データ・ソースを検査して、最も基本的なメタデータ要素を得ることを指します。イントロスペクション(introspection)と対比してください。

スケーリング(scaling) スケーリングによって値の表示方法を判別します(整数、十単位、百単位、千単位、百万単位など)。

スコア(score) ターゲットを達成するレベルです。通常はターゲットのパーセンテージとして表されます。

スコアカード(scorecard) 目標を達成する上での、従業員、戦略要素、または責任要素の進行状況を示すビジネス・オブジェクトです。スコアカードに追加された各メジャーおよび子スコアカードについて収集されるデータに基づいて、進行状況が確認されます。

スコープ(scope) Essbase の操作または設定により包含されるデータ領域です(セキュリティ設定により影響を受けるデータ領域など)。通常、スコープには粒度が3レベルあり、上位レベルが下位レベルを包含します。これらのレベルは上位から下位の順で、システム全体(Essbase サーバー)、Essbase サーバー上のアプリケーション、Essbase サーバー・アプリケーション内のデータベースとなります。持続性(persistence)も参照してください。

ステージ(stage) 通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の1つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の2つのタイプがあります。

ステージ・アクション(stage action) 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

ステージ後割当て(post stage assignment) 割当てモデルにおける割当てです。後に続くモデル・ステージの場所に割り当てられます。

ステージ内割当て(Intrastage assignment) 財務フローの割当てです。同じステージ内のオブジェクトに対して割り当てられます。

ステージング領域(staging area) 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステータス・バー(Status bar) 画面下部のステータス・バーには、コマンド、勘定科目、およびデータ・ファイルの現在のステータスに関する有用な情報が表示されます。

スナップショット(snapshot) 特定の時点の読取り専用データです。

スポットライタ(Spotlighter) 選択された条件に基づくカラー・コーディングを可能にするツールです。

スマート・カット(SmartCut) URL フォームのリポジトリ項目へのリンクです。

スマート・スライス(smart slice) Smart View で、データ・ソースの再利用可能なパースペクティブです。次元または次元メンバーの限定的なセットを含みます。

スマート・タグ(smart tags) Microsoft Office アプリケーションでのキーワードです。スマート・タグのメニューから利用可能な定義済アクションに関連付けられています。EPM System 製品でも、スマート・タグを使用して Reporting and Analysis のコンテンツのインポートや Financial Management および Essbase の機能へのアクセスが可能です。

スーパー・サービス(super service) RSC サービスを開始するために startCommonServices スクリプトによって使用される専用のサービスです。

スーパーバイザ(supervisor) サーバーのすべてのアプリケーション、データベース、関連ファイル、セキュリティ機構にフル・アクセスできるユーザーです。

ズーム(zoom) レポートの倍率を設定します。たとえば、ページ全体またはページ幅に合わせて倍率を変更したり、100%を基準としてパーセントで倍率を指定したりできます。

ズームチャート(ZoomChart) チャートを拡大することにより詳細情報を表示するために使用されます。チャートに表示されるメトリックについて数値情報を詳細に表示できます。

精度(precision) 数値に表示される小数点以下の桁数です。

製品(product) Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

セカンダリ・メジャー(secondary measure) プライマリ・メジャーよりも優先度の低いメジャーです。セカンダリ・メジャーにはパフォーマンス・レポートがありませんが、スコアカードで使用したり、次元メジャーのテンプレートを作成するために使用できます。

責任マップ(accountability map) 組織内の責任チーム(重要事業領域とも呼ばれます)の責任、報告、および依存関係の構造を視覚的、階層的に示します。

セキュリティ・エージェント(security agent) Web アクセス管理プロバイダ(Netegrity SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

セキュリティ・プラットフォーム(security platform) EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

世代(generation) データベースでのメンバー関係を定義する階層ツリー内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

設計レポート(Design Report) コンポーネント・ライブラリを使ってカスタム・レポートを作成するための Web Analysis Studio のインターフェースです。

接続ファイル(connection file) [Interactive Reporting 接続ファイル\(.oce\)](#)([Interactive Reporting connection file\(.oce\)](#))を参照してください。

セル(cell) (1)多次元データベースの次元の交差を表すデータ値です。ワークシート上の行および列の交差を指します。(2)管理ドメインに属するノードの論理グループです。

セル・ノート(cell note) Essbase データベースでセルに付けられるテキスト注釈です。セル・ノートは LRO の一種です。

選択リスト(choice list) レポート・デザイナーがレポートの視点(POV)を定義する際に各次元に指定するメンバーのリストです。定義されたメンバー・リストに指定されたメンバーを選択するか、または動的リストの関数に定義された条件に一致するメンバーを選択するだけで、選択リストを使用して次元の POV を変更できます。

戦略マップ(Strategic map) 上位レベルのミッションおよびビジョンのステートメントを、組織が、構成要素である下位レベルの戦略的達成目標に組入れる方法を示します。

戦略目標(SO)(strategic objective(SO)) 測定可能な結果によって定義された長期目標です。各戦略目標は、アプリケーション内の1つのパースペクティブに関連付けられ、1つの親(エンティティ)を持ち、重要成功要因または他の戦略目標の親になります。

税金の初期残高(Taxes - Initial Balances) Strategic Finance では、損失の初期残高、収益の初期残高、および納税の初期残高のエントリは、Strategic Finance の最初の期間に先立つ期間に発生していることを前提とします。

関連サブクエリー(correlated subqueries) 親クエリーの各行で一度評価されるサブクエリーです。サブクエリーのトピック・アイテムを親クエリーのトピックに結合することにより作成されます。

相互割当て(reciprocal assignment) 財務フローの割当ての一種です。宛先の1つとしてソースが含まれます。

組織(organization) 各エンティティ、およびその関係を定義するエンティティの階層です。

疎次元(sparse dimension) ブロック・ストレージ・データベースで、他の次元と比較した際に、すべてのメンバーの組合せについてのデータを含んでいる可能性が低い次元です。たとえば、すべての製品についてのデータがすべての顧客に含まれているわけではありません。**密次元(dense dimension)**と対比してください。

祖先(ancestor) その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

属性(attribute) 次元メンバーの特性です。たとえば、Employee 次元のメンバーは名前、年齢、住所といった属性を持ち、Product 次元のメンバーはサイズ、味などの複数の属性を持つ可能性があります。

属性計算次元(Attribute Calculations dimension) メンバーのグループに対して、合計、カウント、平均、最小、および最大を計算するシステム定義の次元です。この次元は動的に計算され、データベース・アウトラインでは表示されません。たとえば、メンバー Avg を使用すると、製品 Red についてニューヨークでの1月の平均売上の値を計算できます。

属性次元(attribute dimension) 次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。

属性タイプ(attribute type) 様々な関数(データのグループ化、選択、または計算)を使用可能にするためのテキスト、数値、ブール値、日付、またはリンク属性タイプです。たとえば、Ounces 属性次元は数値タイプを持つので、各製品の属性として指定されるオンス数を使用して当該製品のオンス当たりの収益を計算できます。

属性の関連付け(attribute association) データベース・アウトラインでの関係です。これにより、属性次元のメンバーが基本次元のメンバーの特性を表します。たとえば、製品 100-10 がグレープ味である場合、製品 100-10 は Flavor 属性の関連付けがグレープになります。したがって、Product 次元のメンバー 100-10 は Flavor 属性次元のメンバー Grape に関連付けられることになります。

属性レポート(attribute reporting) 基本次元メンバーの属性に基づくレポート作成プロセスです。**基本次元(base dimension)**も参照してください。

貸借一致の仕訳(balanced journal) 借方の合計と貸方の合計が等しい仕訳です。

対称型マルチプロセッシング(SMP)(symmetric multiprocessing(SMP)) マルチプロセッシングとマルチスレッディングを使用可能にするサーバーのアーキテクチャです。多数のユーザーが単一のインスタンスに同時に接続した場合でも、パフォーマンスが大きく低下することはありません。

タイトル・バー(Title bar) Strategic Finance 名、ファイル名、およびシナリオ名のバージョン・ボックスを表示します。

タイム・イベント(time events) ジョブを実行するトリガーです。

タイム・スケール(time scale) 指定された期間別(毎月、四半期ごとなど)にメトリックを表示します。

タイム・ライン・ビューア(time line viewer) 特定の場所について、完了したプロセス・フロー・ステップの日時を表示するための FDM の機能です。

多次元データベース(multidimensional database) 3 つ以上の次元でデータを整理、格納、および参照するメソッドです。次元のセットが交差するポイントが個別の値となります。[リレーショナル・データベース\(relational database\)](#) と対比してください。

タスクフロー(taskflow) ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

タスクフロー・インスタンス(taskflow instance) タスクフローの単一のインスタンスを示します。タスクフローの状態と関連データが含まれます。

タスクフロー管理システム(taskflow management system) タスクフローの定義および作成し、その実行を管理します。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

タスクフロー参加者(taskflow participant) 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

タスクフロー定義(taskflow definition) タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスを示します。ステージとステージ間の関係のネットワークから構成され、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)が含まれます。

タスク・リスト(task list) 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

タブ(tabs) Strategic Finance で、勘定科目とレポートのナビゲーションを行うことができるビューです。

タプル(tuple) MDX 構文の要素です。セルは、各次元からのメンバーの交差として参照されます。次元が削除されている場合、最上位のメンバーが示されます。たとえば、(Jan)、(Jan, Sales)、([Jan], [Sales]), [Cola], [Texas], [Actual]) といったタプルがあります。

単項演算子(unary operator) アウトラインのメンバーに関連付けられている算術インディケータ(+、-、*、/、%)です。単項演算子では、データベースのロールアップ中のメンバーの計算方法が指定されません。

代替階層(alternate hierarchy) 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

ダッシュボード(dashboard) 業務の要約を対話的に示すメトリックと指標の集まりです。ダッシュボードにより分析アプリケーションを構築して配置できます。

置換(replace) データ・ロードのオプションの 1 つです。データ・ロード・ファイルに指定された期間のすべての勘定科目からの既存の値を消去し、データ・ロード・ファイルからの値をロードします。ロード・ファイルに勘定科目が指定されていない場合、指定された期間に該当する値が消去されます。

チャート(chart) スプレッドシート・データをグラフィカルに表したものです。視覚的な表示により、分析、カラー・コーディング、および比較の手助けとなるビジュアル・キューの効率が上がります。

チャート・テンプレート(chart template) ワークスペース・チャートに表示するメトリックを定義するテンプレートです。

抽出コマンド(extraction command) Essbase レポート作成コマンドの 1 つです。データベースから抽出される RAW データの選択、向き、グループ分け、および配列を処理します。小なり記号(<)から始まるコマンドです。

調査(Investigation) [ドリルスルー\(drill-through\)](#) を参照してください。

調整(adjustment) [仕訳\(JE\)\(journal entry\(JE\)\)](#) を参照してください。

調整勘定科目(plug account) 会社間勘定科目の消去プロセスで均衡しない差額が保管される勘定科目です。

重複する別名(duplicate alias name) 別名テーブルに複数存在し、データベース・アウトラインの複数メンバーに関連付けられている可能性のある名前です。重複する別名は、重複メンバーのアウトラインでのみ使用できます。

重複メンバーのアウトライン(duplicate member outline) 重複メンバー名を格納しているデータベース・アウトラインです。

重複メンバー名(duplicate member name) データベース内に異なるメンバーを表して重複して存在する同一のメンバー名です。たとえば、ニューヨーク州を示すメンバーとニューヨーク市を示すメンバーが存在する場合、データベースに New York という名前のメンバーが2つ含まれることがあります。

直接レート(direct rate) 為替レート・テーブルに入力する通貨レートです。直接レートは通貨換算に使用されます。たとえば、残高を日本円から米ドルに変換する場合、変換元通貨を日本円、変換先通貨を米ドルとして、為替レート・テーブルに期間またはシナリオのレートを入力します。

通貨(monetary) 金銭的な値です。

通貨換算(currency conversion) データベースの通貨の値を別の通貨に変換するプロセスです。たとえば、1米ドルをユーロに変換するには、ドルに為替レート(たとえば、0.923702)を乗じます(1*0.923702)。変換後のユーロの額は0.92になります。

通貨の上書き(Currency Overrides) 入力期間で、選択した入力メソッドを上書きして、デフォルト通貨/アイテムとして該当期間の値を入力できます。入力メソッドを上書きするには、数値の前または後にシャープ(#)を入力します。

通貨パーティション(currency partition) アプリケーションでの定義に従って、基本通貨から現地通貨メンバーを隔離する次元タイプです。通貨タイプ(実績、予算、予測など)を特定します。

通常仕訳(regular journal) 特定の期間に一度かぎりの調整を入力するための機能です。貸借一致、エンティティごとに貸借一致、貸借不一致のいずれかになります。

通知ガジェット(Notifications gadget) 他のユーザーやシステムから受け取った通知メッセージの履歴を表示します。

定義済ドリル・パス(predefined drill paths) データ・モデルでの定義に従って次の詳細レベルにドリルするために使用されるパスです。

適応状態(adaptive states) Interactive Reporting Web Client の権限レベルです。

テキスト・メジャー(text measure) メジャーの値をテキストとして表現できるデータ型です。Essbase では、メジャーが示されている次元で Text としてタグ付けされたメンバーを指します。セルの値は定義済テキストとして表示されます。たとえば、Satisfaction Index というテキスト・メジャーについては、Low、Medium、および High という値を含めることがあります。**型付きメジャー(typed measure)**、**テキスト・リスト(text list)**、および**導出テキスト・メジャー(derived text measure)**も参照してください。

テキスト・リスト(text list) Essbase で、数値の識別子にマッピングされたテキストの値を保管するオブジェクトです。テキスト・リストではテキスト・メジャーを使用できます。

テンプレート(template) 特定のデータを一貫して取得するように設計された定義済のフォーマットです。

デフォルト通貨単位(Default Currency Units) データの単位スケールを定義します。たとえば、千単位で分析を定義するように選択して10を入力すると、10,000と解釈されます。

データ関数(data function) データを集約する関数です。データの平均、最大値、カウントを求めたり、他の統計値によりデータのグループを集計します。

データ・キャッシュ(data cache) 非圧縮データ・ブロックを保持するメモリー内のバッファです。

データ・セル(data cell) [セル\(cell\)](#)を参照してください。

データ値(data value) [セル\(cell\)](#)を参照してください。

「データなし」ステータス(NO DATA status) 連結ステータスの一つです。特定の期間と勘定科目のデータがこのエンティティに含まれていないことを示します。

データ・ファイル・キャッシュ(data file cache) 圧縮データ(PAG)ファイルを保持する、メモリー内のバッファです。

データ・フォーム(data form) Web ブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。

データベース接続(database connection) データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

データ・マイニング(data mining) Essbase データベースを検索して、大量のデータの中から隠れた関係やパターンを見つけるプロセスです。

データ・モデル(data model) データベース・テーブルのサブセットを示します。

データ・ロック(data lock) 指定された基準(期間、シナリオなど)に従ってデータの変更を防ぎます。

データ・ロード位置(data load location) FDM で、ソース・データをターゲット・システムに送信する報告単位です。通常、ターゲット・システムにロードされる各ソース・ファイルに対して FDM のデータ・ロード位置が 1 つあります。

データ・ロードのルール(data load rules) テキストベース・ファイル、スプレッドシート、またはリレーショナル・データ・セットからのデータをデータベースにロードする方法を判別する一連の基準です。

透過パーティション(transparent partition) ローカルのデータベースの一部であるかのように、リモート・データベースのデータにアクセスして変更できるようにする共有パーティションです。

透過ログイン(transparent login) ログイン画面を起動せずに認証されたユーザーをログインさせます。

統合(integration) Shared Services を使用して EPM System 製品間でデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付け、およびスケジュールが決定されます。

トップ・ラベルとサイド・ラベル(top and side labels) 列と行の見出しです。ピボット・レポートの上部とサイドにそれぞれ表示されます。

トラフィック・ライト(traffic lighting) 2 つの次元メンバーの比較、または一定の制限値に基づいて、レポートのセルまたはピンを色分けする機能です。

トリガー(triggers) ユーザーが指定した基準に従ってデータを監視するための、Essbase の機能の 1 つです。基準に一致すると、Essbase はユーザーまたはシステム管理者にアラートを送信します。

トレーサビリティ(traceability) メタデータ要素を物理ソースまで追跡する機能です。たとえば Essbase Studio の場合、キューブ・スキーマをそれ自体の階層およびメジャー階層から次元要素、日付/時間要素、メジャー、そして最終的には物理ソースまで追跡できます。

トレース・レベル(trace level) ログ・ファイルで捕捉された詳細のレベルを定義します。

トレース割当て(trace allocations) Profitability and Cost Management の機能の 1 つです。財務データのフローに対する視覚的な追跡を可能にします。この追跡は単一の交差から、モデル内の前方または後方に実行できます。

トークン(token) 外部認証システム上の 1 つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された ID です。

トースト・メッセージ(toast message) 画面右下の隅に表示され、現れたり消えたりするメッセージです。

同期(sync) Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

同期済(synchronized) モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。[モデル\(model\)](#) も参照してください。

導出テキスト・メジャー(derived text measure) Essbase Studio で、範囲として表現された定義済ルールによって管理される値を持つテキスト・メジャーです。たとえば、Sales メジャーに基づき、High、Medium、および Low という値を含む Sales Performance Index という導出テキスト・メジャーの場合、対応する売上が該当する範囲に応じて High、Medium、および Low が表示されるように定義されます。[テキスト・メジャー\(text measure\)](#) も参照してください。

動的階層(dynamic hierarchy) 集約ストレージ・データベースのアウトラインに限定して、取得時に値が計算されるメンバーの階層です。

動的計算(dynamic calculation) Essbase で、動的計算メンバー、または動的計算および保管メンバーとしてタグ付けされているメンバーについてデータを取得する場合にのみ実行される計算です。メンバーの値は、バッチ計算で事前に計算されるのではなく、取得時に計算されます。

動的計算および保管メンバー(Dynamic Calc and Store members) ブロック・ストレージ・アウトラインで、値を最初に取得したときにのみ計算が行われるメンバーです。計算された値はデータベースに保管され、2回目以降の取得では計算を実行する必要がありません。

動的計算メンバー(Dynamic Calc members) ブロック・ストレージ・アウトラインで、取得時にのみ計算が行われるメンバーです。取得要求の処理が完了すると、計算された値は破棄されます。

動的参照(dynamic reference) データ・ソース内のヘッダー・レコードを指すルール・ファイル内のポインタです。

動的時系列(Dynamic Time Series) ブロック・ストレージ・データベースで、期間累計のレポート作成を実行するプロセスです。

動的ビュー勘定科目(dynamic view account) 勘定科目の種類の1つです。勘定科目の値は、表示されているデータから動的に計算されます。

動的メンバー・リスト(dynamic member list) システムにより作成される名前付きメンバー・セットです。ユーザーが定義した基準が使用されます。アプリケーションでリストが参照されるとき、リストは自動的にリフレッシュされます。次元メンバーの増減に応じて基準が自動的にリストに適用され、変更内容が反映されます。

動的レポート(dynamic report) レポートを実行するときに更新されるデータを含むレポートです。

ドメイン(domain) データ・マイニングにおいて、データ内での移動の範囲を表す変数です。

ドライバ(driver) ドライバは割当てメソッドの一種です。ドライバを利用する複数ソース間の数学的關係、およびこれらのソースがコストや収益を割り当てる宛先を示します。

ドリルスルー(drill-through) あるデータ・ソースの値から別のソースの対応するデータに移動することです。

ドリルダウン(drill-down) 次元の階層を使用してクエリ結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパースペクティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層関係、または四半期と月の階層関係が明らかになります。

内部取引消去(Intercompany elimination) 消去(elimination) を参照してください。

名前付きセット(named set) MaxL DML で、MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションに定義された論理を使用するセットです。名前付きセットはクエリー内で複数回参照することが可能です。

入力データ(input data) 計算されるのではなくソースからロードされるデータです。

認証(authentication) 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

認証サービス(authentication service) 単一の認証システムを管理するコア・サービスです。

ネイティブ認証(native authentication) サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

ネスト列見出し(nested column headings) 複数の次元からのデータを表示するレポート列の列見出しのフォーマットです。たとえば、Year と Scenario のメンバーが含まれる列見出しはネスト列です。ネスト列見出しでは、見出しの一番上の行の Q1(Year 次元)が、見出しの一番下の行の Actual および Budget(Scenario 次元)で修飾されます。

ノート(note) ボックス、メジャー、スコアカード、またはマップ要素に関連する補足情報です。

ハイパーテキスト・マークアップ言語(HTML)(Hypertext Markup Language(HTML)) Web ブラウザでのデータ表示を指定するプログラミング言語です。

ハイパーリンク(hyperlink) ファイル、Web ページ、またはイントラネット HTML ページへのリンクです。

ハイブリッド分析(Hybrid Analysis) リレーショナル・データベースに保管された下位のデータを、Essbase に保管された要約レベルのデータにマッピングする分析です。リレーショナル・システムの大規模スケーラビリティと多次元データを組み合わせます。

ハイライト(highlighting) 構成に応じて、チャートのセルまたはズームチャートの詳細がハイライトされ、値のステータス(赤色は不正、黄色は警告、緑色は良好)が示されます。

範囲(range) 上限と下限、およびその間に含まれる値のセットです。数字、金額、または日付を含むことが可能です。

反復タイム・イベント(recurring time event) ジョブの実行開始点と実行頻度を指定するイベントです。

反復テンプレート(recurring template) 各期間に対して同一の調整を行うための仕訳テンプレートです。

汎用ジョブ(generic jobs) SQR Production Reporting または Interactive Reporting 以外のジョブを指します。

凡例ボックス(legend box) 次元のデータ・カテゴリを特定するためのラベルを含むボックスです。

バックアップ(backup) アプリケーション・インスタンスの複製コピーです。

バッチ POV(batch POV) ユーザーの POV において、バッチに含まれる各レポートおよびブックのすべての次元の集合です。バッチのスケジュールを立てる際は、バッチ POV で選択されたメンバーを設定できます。

バッチ計算(batch calculation) データベースにおいてバッチで実行される計算です(計算スクリプト、すべてのデータベース計算など)。動的計算はバッチ計算とはみなされません。

バッチ処理モード(batch processing mode) サーバー管理や診断のルーチン・タスクを自動化するために使用できるバッチやスクリプト・ファイルを記述するために、ESSCMD を使用するメソッドです。ESSCMD スクリプト・ファイルは複数のコマンドを実行でき、オペレーティング・システムのコマンド・ラインから実行したり、オペレーティング・システムのバッチ・ファイルから実行したりすることが可能です。バッチ・ファイルを使用すると、複数の ESSCMD スクリプトを呼び出したり、ESSCMD の複数インスタンスを実行したりできます。

バッチ・ファイル(batch file) 複数の ESSCMD スクリプトを呼び出して複数の ESSCMD セッションを実行できるオペレーティング・システム・ファイルです。Windows システムの場合、バッチ・ファイルには BAT というファイル拡張子が付けられます。UNIX の場合、バッチ・ファイルはシェル・スクリプトとして記述されます。

バッチ・ローダー(batch loader) 複数ファイルの処理を可能にする FDM コンポーネントです。

バージョン(version) データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。

パターン照合(pattern matching) 条件として入力される項目の一部またはすべての文字と値を照合する機能です。欠落文字は、疑問符(?)またはアスタリスク(*)などのワイルド・カード値で表すことができます。たとえば、「Find all instances of apple」では apple が戻されるのに対して、「Find all instances of apple*」では apple、applesauce、applecranberry などが戻されます。

パフォーマンス・インディケータ(performance indicator) ユーザーが指定した範囲に基づくメジャーおよびスコアカード・パフォーマンスを示すために使用されるイメージ・ファイルです。ステータス記号とも呼ばれます。デフォルト・パフォーマンス・インディケータを使用することもできますが、無制限に独自のパフォーマンス・インディケータを作成することも可能です。

パブリック・ジョブ・パラメータ(public job parameters) 管理者が作成する再利用可能な名前付きジョブ・パラメータです。必要なアクセス権を持つユーザーがアクセスできます。

パブリック反復タイム・イベント(public recurring time events) 管理者が作成する再利用可能なタイム・イベントです。アクセス・コントロール・システムからアクセスできます。

パレット(palette) JASC に準拠し、.PAL 拡張子を持つファイルです。各パレットには相互に補完し合う 16 色が含まれ、ダッシュボードの色要素の設定に使用することが可能です。

パースペクティブ(perspective) スコアカードのメジャーやアプリケーションにおける戦略目標をグループ化するために使用されるカテゴリです。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示すことができます。

パーティション化(partitioning) データ・モデルの間で共有またはリンクされるデータの領域を定義するプロセスです。パーティション化は Essbase アプリケーションのパフォーマンスとスケーラビリティに影響することがあります。

パーティション領域(partition area) データベース内のサブ・キューブです。パーティションは、データベースの一部からの1つ以上のセル領域から構成されます。複製パーティションおよび透過パーティションの場合、2つのパーティションが同じ形状となるために、領域内のセルの数がデータ・ソースとターゲットで同一となる必要があります。データ・ソース領域に18個のセルが含まれる場合、データ・ターゲット領域にも対応する18個のセルが含まれていなければいけません。

「非アクティブ」ステータス(INACTIVE status) エンティティの当期の集計が非アクティブにされていることを示します。

非アクティブ・グループ(inactive group) 管理者によりシステムへのアクセスが非アクティブにされているグループです。

非アクティブ・サービス(inactive service) 稼動が一時停止しているサービスです。

非アクティブ・ユーザー(inactive user) 管理者によりアカウントが非アクティブにされているユーザーです。

非次元モデル(non-dimensional model) Shared Services のモデル・タイプの1つです。セキュリティ・ファイル、メンバー・リスト、計算スクリプト、Web フォームなどのアプリケーション・オブジェクトが含まれます。

日付メジャー(date measure) Essbase で、メジャーが示されている次元で「日付」のタグが付けられているメンバーです。セルの値はフォーマット済の日付として表示されます。メジャーとしての日付は時間次元を使用して示すことが困難なタイプの分析に役立つことがあります。たとえば、一連の固定資産の取得日をアプリケーションで追跡する必要がある場合、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。**型付きメジャー(typed measure)**も参照してください。

表示タイプ(display type) リポジトリに保存された3種類の Web Analysis フォーマット(スプレッドシート、チャート、ピンボード)のいずれかを指します。

標準仕訳テンプレート(standard journal template) 各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。

標準次元(standard dimension) 属性次元以外の次元です。

ビジネス・プロセス(business process) 集合的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

ビジネス・ルール(business rules) 期待される一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

ビジュアル・キュー(visual cue) 特定のタイプのデータ値をハイライトする、フォントや色などのフォーマットが設定されたスタイルです。データ値は、次元メンバー、親メンバー、子メンバー、共有メンバー、動的計算、式を含むメンバー、読取り専用データ・セル、読取りおよび書込みデータ・セル、またはリンク・オブジェクトのいずれかになります。

ビュー(view) 年次累計または期別のデータを示すものです。

ピボット(pivot) 取得したデータのパーспекティブを変更する機能です。Essbase では、まず次元が取得され、データが行に展開されます。その後、データのピボット(並べ替え)を行うことにより、異なる視点を得ることができます。

ピン(pins) ピンボードと呼ばれるグラフィック・レポート上に配置される対話型アイコンです。ピンは、基盤となるデータ値や分析ツールの基準に基づいて、イメージやグラフィック・ライトの色を変更できます。

ピンボード(pinboard) 3種類のデータ・オブジェクトの表示タイプの1つです。ピンボードは、背景およびピンと呼ばれる対話型アイコンから成るグラフィックです。ピンボードを使用するにはグラフィック・ライトを定義する必要があります。

ファイルの区切り文字(file delimiter) データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

ファクト・テーブル(fact table) スター結合スキーマの中心のテーブルです。外部キー、および次元テーブルから取得した要素により特徴付けられます。通常、このテーブルにはスキーマの他のすべてのテーブルに関連する数値データが含まれます。

フィルタ(filter) データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスを制御したりする場合に使用されます。

フィールド(field) データ・ソース・ファイル内の項目です。Essbase データベースにロードされます。

フォルダ(folder) 他のファイルを含んで階層を形成するファイルです。

フォーマット(format) ドキュメントやレポート・オブジェクトの視覚的な特性です。

フォーマット文字列(format string) Essbase で、セルの値の表示を変換するメソッドです。

復元(restore) データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

複製パーティション(replicated partition) パーティション・マネージャにより定義されるデータベースの一部です。あるサイトで管理されるデータの更新を別のサイトで保管されているデータのコピーに伝播するために使用されます。ユーザーは、ローカルのデータベースと同じようにデータにアクセスできます。

負債勘定科目(liability account) 一定時点における会社の負債残高を保管する勘定科目タイプです。未払費用、買掛金勘定、長期借入金などが負債勘定科目に含まれます。

フッター(footer) レポート・ページ下部に表示されるテキストまたはイメージです。ページ番号、日付、ロゴ、タイトル、ファイル名、作成者名など、動的な関数や静的なテキストが含まれます。

フリーフォーム・グリッド(free-form grid) 動的計算のために、複数のソースからのデータを提示、入力、および統合するためのオブジェクトです。

フリーフォーム・レポート作成(free-form reporting) ワークシートに次元メンバーまたはレポート・スクリプト・コマンドを入力することにより、レポートを作成することを指します。

フレーム(frame) デスクトップ上の領域です。ナビゲーション・フレームと Workspace フレームが 2 つの主要な領域となります。

フロー勘定科目(flow account) 期別と年次累計の符号なしの値を保管する勘定科目です。

ブック(book) 類似する Financial Reporting ドキュメントのグループを含むコンテナです。ブックには、次元セクションまたは次元の変更が指定されていることがあります。

ブックの POV(book POV) ブックが実行される次元のメンバーです。

ブックマーク(bookmark) ユーザー個人のページに表示されるレポート・ドキュメントまたは Web サイトへのリンクです。ブックマークには、マイ・ブックマークとイメージ・ブックマークの 2 つのタイプがあります。

ブロック(block) プライマリ・ストレージ・ユニットです。多次元配列であり、すべての密次元のセルを表します。

ブロックされた勘定科目(Blocked Account) 手動で入力する必要があるために集計ファイルの計算に含めない勘定科目です。

ブロック・ストレージ・データベース(block storage database) 疎次元に定義されたデータ値の密度に基づいてデータを分類および保管する、Essbase のデータベース・ストレージ・モデルです。データ値はブロック単位で保管され、ブロックは値を含む疎次元メンバーについてのみ存在します。

ブロードキャスト・メッセージ(broadcast message) Planning アプリケーションにログオンしているユーザーに対して管理者が提出する単純なテキスト・メッセージです。メッセージには、システムの可用性、アプリケーション・リフレッシュの通知、アプリケーションのバックアップなどのユーザー向けの情報が表示されます。

分離レベル(isolation level) データベース操作のロックとコミットの動作(コミット・アクセスまたはアンコミット・アクセス)を決定する Essbase カーネルの設定です。

プライマリ・メジャー(primary measure) 企業および事業のニーズにとって重要な、優先度の高いメジャーです。コンテンツ・フレームに表示されます。

プランナ(planner) プランナは、大多数のユーザーから構成されます。データの入力と送信、他のプランナが作成したレポートの使用、ビジネス・ルールの実行、タスク・リストの使用、電子メール通知の使用、および Smart View の使用が可能です。

プランニング・ユニット(planning unit) シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。

プレゼンテーション(presentation) Web Analysis ドキュメントのプレイリストです。レポートの分類、整理、並べ替え、配布、および確認を行うことができます。リポジトリ内のレポートを参照するポインタを含みます。

プロキシ・サーバー(proxy server) セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

プロジェクト(project) 実装でグループ化された EPM System 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

プロセス監視レポート(process monitor report) FDM データ変換プロセスにおける、場所のリストとその位置を表示します。プロセス監視レポートを使用して、決算手続のステータスを監視できます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされた場所を判別するために使用できます。

プロット領域(plot area) X 軸、Y 軸、および Z 軸で囲まれている領域です。円グラフの場合は、その周りに表示される長方形の領域です。

プロパティ(property) アーチファクトの特性です(サイズ、タイプ、処理手順など)。

プロビジョニング(provisioning) ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権を付与するプロセスです。

並列エクスポート(parallel export) Essbase データを複数のファイルにエクスポートする機能です。並列エクスポートは、1つのファイルにエクスポートした場合に比べて時間を短縮できます。また、1つのデータ・ファイルでサイズが大きくなりすぎた場合の、オペレーティング・システムでの操作上の問題を解決できます。

並列計算(parallel calculation) 計算オプションの1つです。Essbase では計算がタスクに分割され、一部のタスクは同時に計算されます。

並列データ・ロード(parallel data load) Essbase で、複数プロセスのスレッドによりデータ・ロードのステージを同時に実行することを指します。

ヘッド・アップ・ディスプレイ(head up display) Windows デスクトップの上に、背景イメージを含むロード済 Smart Space デスクトップを表示するモードです。

変換(transformation) (1)アプリケーションの移行後も宛先環境で正しく機能するように、アーチファクトを変換します。(2)データ・マイニングで、キューブおよびアルゴリズムのセルの間で(双方向に)流れるデータを変更します。

変換先通貨(destination currency) 残高の変換後の通貨です。為替レートを入力して、変換元通貨から変換先通貨に変換します。たとえばユーロから米ドルに変換する場合、変換先の通貨は米ドルです。

変換元通貨(source currency) 為替レートを使用して変換先通貨に変換される前の、値の元の通貨です。

「変更済」ステータス(CHANGED status) 集計ステータスの1つです。エンティティのデータが変更されたことを示します。

別名(alias) 代替名です。たとえば、列をより簡単に特定する記述子として、メンバー名のかわりに別名を表示できます。

別名テーブル(alias table) メンバーの代替名を含むテーブルです。

ページ(page) グリッドまたはテーブルでの情報表示の一種です。しばしば Z 軸により示されます。ページには、1つのフィールドからのデータ、計算により得られるデータ、またはテキストを含めることができます。

ページ・ファイル(page file) Essbase のデータ・ファイルです。

ページ見出し(page heading) レポートの現在のページで表示されているメンバーをリストした、レポート見出しの一種です。ページ上のすべてのデータ値には、ページ見出し内のメンバーが共通属性として適用されています。

ページ・メンバー(page member) ページ軸を判別するメンバーです。

保管階層(stored hierarchy) 集約ストレージ・データベースのアウトラインのみで使用される用語です。アウトラインの構造に従ってメンバーが集約される階層を指します。保管階層のメンバーには、式を含むことができないなどの一定の制限があります。

ホスト(host) アプリケーションとサービスがインストールされているサーバーです。

ホスト・プロパティ(host properties) ホストに関するプロパティです。ホストに複数の Install_Home が含まれる場合は、いずれかの Install_Home に関するプロパティとなります。ホスト・プロパティは CMC から構成されます。

保存された仮定(saved assumptions) ビジネス上の主要な計算を推進するための、Planning でのユーザー定義の仮定です(事業所の床面積 1 平方フィート当たりのコストなど)。

棒グラフ(bar chart) 1-50 のデータ・セットを含むことができるグラフです。各データ・セットには任意の数の値を割り当てることができます。データ・セットは、対応する棒のグループ、上下に積み上げた棒、または別々の行に個別の棒として表示されます。

マイ Workspace ページ(My Workspace Page) 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用できます。

マイニング属性(mining attribute) データ・マイニングにおいて、一連のデータを分析する際の係数として使用する値のクラスです。

マスター・データ・モデル(master data model) 複数のクエリーによりソースとして参照される独立するデータ・モデルです。このモデルが使用される場合は、「クエリー」セクションのコンテンツ・ペインに「ロック済データ・モデル」と表示されます。データ・モデルは「データ・モデル」セクションに表示されるマスター・データ・モデルにリンクされています(管理者によって非表示になっていることがあります)。

マップ・ナビゲータ(Map Navigator) 戦略、責任、および因果関係の各マップに現在の位置を示す機能です。赤色のアウトラインで示されます。

マップ・ファイル(Map File) 外部データベースとの間でのデータの送信や取得のための定義を保管するために使用されます。マップ・ファイルの拡張子は、データ送信用が.mps、データ取得用が.mpr となります。

マルチロード(multiload) 複数の期間、カテゴリ、および場所を同時にロードすることを可能にする FDM の機能です。

マージ(merge) データ・ロード・オプションの 1 つです。データ・ロード・ファイルで指定された勘定科目の値のみを消去し、データ・ロード・ファイルの値で置換します。

密次元(dense dimension) ブロック・ストレージ・データベースで、次元メンバーのすべての組合せのデータを含んでいる可能性のある次元です。たとえば、時間次元はすべてのメンバーのあらゆる組合せを含んでいる可能性があるために、しばしば密な次元となっています。疎次元(sparse dimension)と対比してください。

ミニスキーマ(minischema) データ・ソースからのテーブルのサブセットをグラフィカルに示したものです。データ・モデリングのコンテキストを表します。

ミニレポート(minireport) レポートのコンポーネントの 1 つです。レイアウト、コンテンツ、ハイパーリンク、およびレポートのロード用の 1 つ以上のクエリーを含みます。各レポートには、1 つ以上のミニレポートを含めることができます。

耳折れ(dog-ear) 折り曲げられたページの角です。チャートのヘッダー領域の右上の隅に表示されます。

メジャー(measures) OLAP データベースのキューブに含まれる数値で、分析に使用されます。メジャーには、利益幅、売上原価、売上数量、予算などがあります。ファクト・テーブル(fact table)も参照してください。

メタアウトライン(metaoutline) Integration Services で、OLAP モデルから Essbase のアウトラインを作成するための規則と構造を含んだテンプレートです。

メタデータ(metadata) データベースに保管された、またはアプリケーションにより使用されるデータの属性と属性を定義および説明するデータ・セットです。メタデータには、次元名、メンバー名、プロパティ、期間、およびセキュリティなどが含まれます。

メタデータ・セキュリティ(metadata security) ユーザーにより特定のアウトライン・メンバーへのアクセスを制限するための、メンバー・レベルのセキュリティ・セットです。

メタデータのサンプリング(metadata sampling) ドリルダウン操作で次元に含まれるメンバーのサンプルを取得するプロセスです。

メタデータ要素(metadata elements) データ・ソースから算出されるメタデータ、および Essbase Studio で使用するために保管され、カタログが作成されるおよびその他のメタデータです。

メトリック(metric) ビジネス・データから計算される数値測定単位です。業績評価や企業トレンド分析に役立ちます。

メンバー(member) 次元内の個別のコンポーネントです。メンバーにより、類似する単位の集まりが個別に特定および区別されます。たとえば、時間次元には Jan、Feb、および Qtr1 などのメンバーが含まれることがあります。

メンバー選択レポート・コマンド(member selection report command) 兄弟、世代、レベルなどのアウトラインの関係に基づいて、メンバーの範囲を選択するレポート・ライター・コマンドの一種です。

メンバー専用レポート・コマンド(member-specific report command) レポート・ライターのフォーマット・コマンドの1つです。レポート・スクリプトで現れると実行されます。このコマンドは関連するメンバーにのみ影響し、メンバーを処理する前にフォーマット・コマンドを実行します。

メンバー・リスト(member list) 次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます。

メンバー・ロード(member load) Integration Services で、次元およびメンバー(データを含まない)を Essbase のアウトラインに追加するプロセスです。

目標(target) 指定された期間(日、四半期など)についてメジャーに期待される結果です。

持株会社(holding company) 法的エンティティ・グループの一部であるエンティティです。グループ内のすべてのエンティティに対して直接的または間接的に投資しています。

モデル(model) (1)データ・マイニングで、アルゴリズムにより検査されたデータに関する情報の集合です。より広範なデータ・セットにモデルを適用することにより、データに関する有用な情報を生成できます。(2)アプリケーション固有の方法で示したデータが含まれるファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという2つの主要なタイプがあります。(3)Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたボックス・ネットワークです。

役割(role) リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

ユーザー定義属性(UDA)(user-defined attribute(UDA)) アウトラインのメンバーに関連付けられ、メンバーの特性を説明します。UDA を使用すると、指定された UDA が関連付けられているメンバーのリストが戻されます。

ユーザー定義メンバー・リスト(user-defined member list) ユーザー定義による、特定の次元に含まれるメンバーの静的なセットです。

ユーザー・ディレクトリ(user directory) ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所です。リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。

ユーザー変数(user variable) ユーザーのメンバー選択に基づいて、データ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示します。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。

要約チャート(Summary chart) 「調査」セクションで、同じ列内で下に表示される詳細チャートをロール・アップし、各チャート列最上位の要約レベルにメトリックを描画します。

予算管理者(budget administrator) アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

ライトバック(write-back) 取得を行うスプレッドシートなどのクライアントが、データベースの値を更新する機能です。

ライフ・サイクル管理(life cycle management) アプリケーション情報をライフサイクルの最初から最後まで通して管理するプロセスです。

ライフサイクル管理ユーティリティ(Lifecycle Management Utility) アプリケーションとアーチファクトの移行に使用されるコマンドラインユーティリティです。

ライン・アイテムの詳細(line item detail) 勘定科目で最も下位の詳細レベルです。

リソース(resources) システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

リポジトリ(repository) ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマット、および注釈の情報を保管します。

領域(area) メンバーおよび値の定義済みのセットであり、パーティションを構成します。

履歴平均(Historical Average) 多数の履歴期間にわたる勘定科目の平均です。

リレーショナル・データベース(relational database) 関連する2次元テーブルにデータを保管するデータベースです。**多次元データベース(multidimensional database)**と対比してください。

リンク(link) (1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカットなどの参照に使用できます。(2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

リンク条件(link condition) タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

リンク・データ・モデル(linked data model) リポジトリのマスター・コピーにリンクされたドキュメントです。

リンク・パーティション(linked partition) データ・セルを使用して2つのデータベースをリンクするための共有パーティションです。ワークシートのリンク・セルをクリックすると、リンク・データベースの次元を示す新規シートが開きます。これにより、表示される次元をドリルダウンできます。

リンク・レポート・オブジェクト(LRO)(linked reporting object(LRO)) セル・ノート、URL、テキスト、オーディオ、映像、画像を含むファイルなどの外部ファイルへのセルベースのリンクです。Financial Reporting では、Essbase LRO 向けにサポートされるのはセル・ノートのみです。**ローカル・レポート・オブジェクト(local report object)**と対比してください。

隣接する四角形(bounding rectangle) Interactive Reporting ドキュメントのセクションを個人用ページに埋め込む場合に、Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツをカプセル化する必須のパラメータです。高さと幅を表すピクセル、または1ページ当たりの行数により指定されます。

レイアウト領域(layout area) Workspace ページで、コンテンツを配置可能な領域を指定するために使用されます。

例外(exceptions) 事前定義済みの条件を満たす値です。フォーマット・インディケータを定義したり、例外が生成されたときに登録ユーザーに通知したりできます。

レイヤー(layer) (1)階層構造内で横並びにメンバーを含む場所です。世代(上から下へ)またはレベル(下から上へ)により指定されます。(2)他のオブジェクトに対して相対的なオブジェクトの場所です。たとえば、Sample Basic データベースでは Qtr1 と Qtr4 は同じ年に含まれるので、世代が同一であることとなります。しかし、不均衡階層を含むデータベースの場合、Qtr1 と Qtr4 は同一世代であっても同じレイヤーに位置しないことがあります。

レコード(record) データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

列(column) グリッドまたはテーブルで縦方向に表示される情報です。列には、特定のフィールドからのデータ、計算により得られたデータ、またはテキストの情報が含まれます。

レベル(level) 階層ツリー構造において、データベース・メンバーの関係を定義するレイヤーです。レベルは一番下の次元メンバー(レベル0)から上位の親メンバーへと並べられます。

レベル0のブロック(level 0 block) 疎のレベル0メンバーの組合せに使用されるデータ・ブロックです。

レベル 0 のメンバー(level 0 member) 子の存在しないメンバーです。

レポート・エクストラクタ(Report Extractor) スクリプトの実行時に、Essbase データベースからのレポート・データを取得する Essbase コンポーネントです。

レポート・オブジェクト(report object) レポートの設計において、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどの動作や外観を定義するプロパティを持つ基本要素です。

レポート・スクリプト(report script) 1 つ以上の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。

レポートの通貨(reporting currency) 財務諸表を準備するために使用される通貨です。現地通貨からレポートの通貨に変換されます。

レポート・ビューア(Report Viewer) レポート・スクリプトの実行後に完全なレポートを表示する Essbase コンポーネントです。

連結(consolidation) 従属するエンティティからのデータを親エンティティに集約するプロセスです。たとえば、次元 Year に Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 というメンバーが含まれている場合、この集計は Year になります。

連結比率(percent consolidation) 親に連結された子の値の割合です。

ログ・アナライザ(Log Analyzer) Essbase ログのフィルタ、検索、および分析を行うための Administration Services の機能です。

ロケーション別名(location alias) データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで管理サービス・コンソール、ESSCMD、または API を使用して設定されます。

ロケール(locale) コンピュータで使用される言語、通貨、および日付フォーマット、データのソート順、文字セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。[エンコード方式\(encoding\)](#) および [ESSLANG](#) も参照してください。

ロケール・ヘッダー・レコード(locale header record) スクリプトなど、一部の非 Unicode でエンコードされたテキスト・ファイルの先頭で、エンコード・ロケールを特定するテキスト・レコードです。

ロック済(locked) ユーザーやプロセスがデータを変更するのを防ぐために、ユーザーが呼び出すプロセスです。

「ロック済」ステータス(LOCKED status) 連結ステータスの一つです。変更できないデータがエンティティに含まれていることを示します。

ロック済データ・モデル(locked data model) ユーザーが変更できないデータ・モデルです。

論理グループ(logic group) FDM で、ソース・ファイルが FDM にロードされた後に生成される 1 つ以上の論理勘定を含みます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ローカル結果(local results) データ・モデルのクエリー結果です。ローカルの結合で結果を使用する場合は、結果をデータ・モデルにドラッグして挿入できます。ローカル結果を要求すると、カタログに表示されます。

ローカル・レポート・オブジェクト(local report object) Explorer で Financial Reporting レポート・オブジェクトにリンクされていないレポート・オブジェクトです。[リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)](#) ([linked reporting object\(LRO\)](#)) と対比してください。

ロールアップ(roll-up) [連結\(consolidation\)](#) を参照してください。

ワイルド・カード(wild card) 検索文字列で、任意の 1 文字または文字グループを示す文字(*)です。

割当て(assignment) 割当てでモデルでのソースと宛先の関連付けです。Profitability and Cost Management で、割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

ワーク・フロー(work flow) FDM でデータを最初から最後まで処理するために必要なステップです。ワークフローは、インポート(GL ファイルからのデータ・ロード)、検証(すべてのメンバーが有効なアカウントにマッピングされていることの確認)、エクスポート(マッピングされたメンバーのターゲット・アプリケーションへのロード)、およびチェック(ユーザー定義の検証ルールを使用してデータを処理することにより、データの精度を確認)から構成されます。

ワークブック(workbook) 多数のワークシートを含むスプレッドシート・ファイル全体です。

索引

A - Z

Apache, [194](#)

API

イベントのトリガー, [134](#)

例外, [59](#)

CMC

Web アプリケーション構成ビュー, [171](#)

Web アプリケーション構成プロパティ, [179](#)

エージェント構成ビュー, [172](#)

エージェント構成プロパティ, [192](#)

開始, [168](#)

サービス, [167](#)

サービス構成ビュー, [170](#)

サービス構成プロパティ, [173](#)

使用, [169](#)

情報, [167](#)

説明済, [28](#)

プロパティの変更, [172](#)

CMC サービス

定義済, [16](#)

configInfo.jsp, [25](#), [193](#)

Dashboard Studio インспекタ・ユーティリティ(高度なスクリプト)

Document Object Model コレクション, [103](#)

Document Object Model の詳細, [102](#)

Document Object Model のプロパティへのアクセス, [103](#)

Document Object Model プロパティ・タイプ, [103](#)

Document Object Model

xpath スタイルの検索, [100](#)

構造の詳細、インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [102](#)

コレクション

Impact Management Services、EPM Workspace, [103](#)

Interactive Reporting Studio, [103](#)

相違、Interactive Reporting Studio, [102](#)

相違、インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [102](#)

走査, [99](#)

ツリー構造, [98](#)

ドキュメント変換方式, [99](#)

プロパティ・タイプ

Interactive Reporting Studio, [103](#)

インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [103](#)

プロパティへのアクセス

Interactive Reporting Studio, [103](#)

インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [103](#)

DOM

xpath スタイルの検索, [100](#)

構造の詳細、インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [102](#)

コレクション

Interactive Reporting Studio, [103](#)

インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [103](#)

相違、Interactive Reporting Studio, [102](#)

相違、インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [102](#)

走査, [99](#)

ツリー構造, [98](#)

ドキュメント変換方式, [99](#)

プロパティ・タイプ

Interactive Reporting Studio, [103](#)

インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [103](#)

プロパティへのアクセス

Interactive Reporting Studio, [103](#)

インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, [103](#)

EPM Workspace 構成情報, [25](#), [193](#)

Essbase 構成プロパティ, [181](#)

Financial Reporting サーバー、定義, [18](#)

GSM

- 定義済, 16
- HTML ファイル
 - 個人用ページ上の表示, 148
 - 作成した個人用ページのカスタマイズ, 145
- HTTPS プロトコル, 60
- HTTP プロトコル、電子メール通知のスマート・カット, 60
- Hyperion Interactive Reporting サービス
 - 定義済, 18
 - 物理リソースおよび, 53
- Hyperion Interactive Reporting サービスの拡張アクセス, 18
- Hyperion Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービス
 - 構成, 109
 - 定義済, 18
- Hyperion ホーム, 23
- IncludeJavaClientItems パラメータ, 142
- Install Home, 23, 28
- Interactive Reporting データベース接続
 - インポート, 110
 - 管理, 135
 - 作成, 110
 - 対話型レポートとの関連付け, 111
 - 明示的なアクセス・プロパティ, 135
- Interactive Reporting データベース接続のインポート, 110
- Interactive Reporting ドキュメント、ユーザー名とパスワードの変更, 126
- IP ポート。「ポート。」を参照
- JavaScript の更新, 87
 - 確認, 91
 - スケジュール・オプション, 89
 - 制御モードの選択, 88
 - パラメータ, 89
 - ワークフロー, 78
- Java クライアント・インストーラ、アクセスの除去, 142
- Java プラグイン構成プロパティ, 180
- Log4j, 194
- logon_panel.gif, 142
- LSM, 16
- MIME タイプ
 - 再アクティブ化, 56
 - 削除, 57
 - 作成, 56
 - 取扱い, 55
- 非アクティブ化, 56
- 変更, 56
- MIME タイプ・アイコン、変更, 56
- MIME タイプの再アクティブ化, 56
- OCE。「Interactive Reporting データベース接続。」を参照
- Oracle Reports、コマンド文字列の例, 159
- output.properties ファイル, 59
- Production Reporting
 - 環境変数, 163
 - サーバー・プロパティ, 157
 - ジョブ、データ・ソース, 157
 - ジョブの出力の保持, 137
- RDBMS
 - 開始, 29
- RDBMS の開始, 29
- RMServlet8.properties ファイル, 33
- RSC
 - 機能, 151
 - サービスの ping, 153
 - 説明済, 28
- RSC サービス
 - 構成, 28
- Shared Services 構成プロパティ, 183
- start_BIPlus スクリプト, 30
- startCommonServices スクリプト, 30
- System フォルダ
 - 管理者のみ、説明, 143
 - 表示, 143
- Unicode、データ・モデル、文字セット、置換, 125
- UNIX システム
 - 強制終了コマンドおよび, 32
 - サービス・コンフィグレータの開始, 151
 - ファイル記述子の最大数, 155
- UNIX の開始, 30
- URL、ユーザー・ログオフ後のリダイレクト, 143
- URL の構成、使用不可, 37
- URL のリダイレクト、ユーザー・ログ・オフ後, 143
- Web Analysis Web アプリケーション・プロパティ, 179
- Web Analysis プロパティ, 183
- Web アプリケーション
 - 構成, 171

Workspace Web アプリケーション・プロパティ, 186
 Workspace サービス・プロパティ, 175

あ行

アイコン
 DBCS および, 148
 MIME タイプおよび, 56
 MIME タイプの変更, 56
 ファイル, 143
 例外ダッシュボード, 59

アイテム
 作成した個人用ページおよび, 145
 フォルダの編成, 143, 147
 見出し, 149

アイテムとフォルダの編成, 143

アイテムのタイトル, 149

アクションの表示、元に戻す, 114

アクセス権、物理リソースおよび, 53

アクセス権:確認, 217

アプリケーション
 エンタープライズ・アプリケーションに対するジョブの実行, 165
 エンタープライズ・レポートイング, 165
 コマンド文字列, 160

アプリケーションのコマンド文字列
 説明済, 160
 例, 159

アプリケーションのプロパティ, 187

アペンダ, 194

一覧
 env メソッド, 105
 ドキュメント, 108
 ノード・メソッド, 107
 メソッドとプロパティ, 105
 リポジトリ・メソッド, 106
 リポジトリ・メソッド、EPM Workspace 固有, 107

イベント
 API を使用したトリガー, 134
 外部でトリガー、作成, 134
 タイム、管理, 133
 追跡, 63
 トリガー, 134

イベント・サービス
 イベント・ログ, 45
 定義済, 17

イベントのトリガー, 134
 イベントのロギング, 132
 今すぐ実行、同期, 82

イメージ
 ブックマーク、設定, 148
 ログオン・パネルの置換え, 142

インストール
 インストール済サービス, 29
 インストール済システム, 44
 コンポーネントの場所, 151
 新規のホスト, 160

インストール済サービス
 Interactive Reporting サービス, 32
 RSC ツールバー, 152
 ジョブ・サービスの推奨, 165
 ジョブ・サービスの複製, 165
 ホストの削除, 161

インストール・プログラム, 41

インパクト・マネージャ更新サービス, 77
 実行, 80

インパクト・マネージャ・サービス
 アクセス, 81
 情報, 76
 変更の影響レポート, 127

インパクト・マネージャ更新サービス
 スクリプト・ロギング・レベル, 80

インパクト・マネージャ・ハーベスタ, 76

インパクト・マネージャ評価サービス, 76

インパクト・マネージャ評価サービス、メタデータ, 76

インパクト・マネージャ・メタデータ, 76

I インパクト・マネージャ・モジュール、サイズおよび時間に関するガイドライン, 79

ウィルス保護, 143

エージェント
 構成, 172

か行

確認のダイアログ・ボックス, 87

カスタマイズ、ユーザー・インタフェース, 141

カスタム更新, 91
 確認, 95
 スクリプトの選択, 92
 スケジュール・オプション, 93
 データ・モデル・トピックのソート・スクリプト, 91

- パラメータ, 93
- パラメータ・ファイルの作成, 93
- ワークフロー, 79
- カスタム・スクリプト環境、EPM Workspace, 95
- カラー・スキーム
 - 個人用ページのカスタマイズ, 149
- カレンダー
 - 期間および年, 131
 - 管理, 129
 - 休日, 131
 - 削除, 130
 - 作成, 130
 - 週の開始, 131
 - 終了日, 132
 - プロパティ, 131
 - 変更, 130
 - ユーザー定義の週, 131
- カレンダー・マネージャ、起動, 129
- 関数サービス, 17
- 管理
 - Interactive Reporting データベース接続, 135
 - タイム・イベント, 133
- 管理サービス, 17
- 管理モジュール, 43
 - BI Presentation Services, 66
 - 共通タスク, 40
 - 導入, 27
 - 優先度設定, 45
- 関連コンテンツ構成プロパティ, 183
- ガイドライン、サイズおよび時間、インパクト・マネージャ・モジュール, 79
- 外部でトリガーされるイベント
 - 作成, 134
- キャッシュのプロパティ, 188
- 強制終了コマンド, 32
- 行レベルのセキュリティ, 61
- クライアント側デバッグ・モード、使用不可, 37
- グラフィック。「イメージ。」を参照
- グループ・プリファレンス、デフォルト、割当て, 46
- グローバル・サービス・マネージャ。「GSM。」を参照
- 結果セット構成プロパティ, 180
- 検索サービス
 - Google OneBox の構成, 70
 - ID プラグインの構成, 68
 - OneBox モジュールの構成, 72
 - OneBox モジュール・パラメータ, 72
 - OneBox モジュールを呼び出す構成, 70
 - SES の構成, 67
 - 外部アプリケーションとの統合, 67
 - コネクタ・プラグインの構成, 68
 - 情報, 67
 - 必要な jar ファイルの配置, 68
 - 言語、デフォルト選択の変更, 141
 - コア・サービス, 16
 - 更新、JavaScript, 87
 - 更新、データ・モデル, 83
 - 構成情報, 25, 193
 - 構成ファイル
 - output.properties, 59
 - RMServices.properties, 33
 - 高度なスクリプト
 - Document Object Model
 - Dashboard Studio インспекタ・ユーティリティ, 102
 - xpath スタイルの検索, 100
 - インパクト・マネージャ・サービス、EPM Workspace, 102
 - コレクション, 103
 - 説明済, 98
 - 相違, 102
 - 走査, 99
 - ドキュメント変換方式, 99
 - プロパティ・タイプ, 103
 - プロパティへのアクセス, 103
 - インパクト・マネージャ・モジュール, 95
 - Java コード, 104
 - 一覧
 - env メソッド, 105
 - ドキュメント, 108
 - ノード・メソッド, 107
 - メソッドとプロパティ, 105
 - リポジトリ・メソッド, 106
 - リポジトリ・メソッド、EPM Workspace 固有, 107
 - カスタム・スクリプト環境、EPM Workspace, 95
 - スクリプト環境, 97
 - スクリプト・パラメータ, 96
 - バッチ入力ファイル, 104
 - ファイル・システムへのアクセス, 104

- ロギング, 80
- 個人用ページ
 - インポート, 149
 - オプションのコンテンツ、ユーザーへの提供, 147
 - カスタマイズされたグラフィック, 148
 - グラフィック・ファイル, 148
 - 構成ツール, 149
 - 作成
 - カスタマイズ, 145
 - 設定, 144
 - 新規ユーザーの表示, 149
 - 他のページのインポート, 149
 - デフォルト, 146
 - フォルダのアイテムの設定, 147
 - 複数, 146
 - ブロードキャスト・メッセージ, 146
 - プロパティ、構成, 149
- 個人用ページ上の HTML ファイルの表示, 148
- 個人用ページのコピー, 149
- 個人用ページの発行, 149
- 個人用ページのプロパティ, 189
- コンソールの構成およびモニター。「CMC。」を参照
- コンテンツ、オプション、個人用ページ、ユーザーへの提供, 147
- コンテンツ・ウィンドウ、見出し, 149
- コンテンツのプッシュ。「ブロードキャスト・メッセージ。」を参照

- さ行**
- サイズに関するガイドライン, 79
- 削除
 - MIME タイプ, 57
- 作成
 - Interactive Reporting データベース接続, 110
 - データ・モデル, 119
- 「サブスクライブ」 ページ, 59
- サブスクリプションおよび通知, 57, 58
- サーバー側のソフトウェア・コンポーネント。「サービス。」を参照
- サービス
 - ping, 153
 - UNIX の開始, 30
 - Windows の開始, 30
 - 関数, 17
 - 共通タスク, 40
 - コア, 16
 - 構成, 170
 - サブセットの開始, 31
 - 実行タイプ・プロパティ, 31
 - 定義済, 17
 - 停止、スクリプト, 32
 - 複製, 155, 171
 - プロパティ
 - 詳細, 154
 - 全般, 154
 - プロパティの表示, 154
 - プロパティの変更, 153
 - 別々のプロセスとしての実行, 33
 - 要約, 20
 - サービス構成パラメータ、インパクト・マネージャ・モジュールと, 126
 - サービスの ping, 153
 - サービスのシャット・ダウン, 32
 - サービスの実行タイプ・プロパティ, 31
 - サービスの複製, 171
 - サービス・ブローカ
 - 定義済, 17
 - サービス・ポートの割当て、変更, 33
 - システム構成情報, 25, 193
 - システムの使用状況, 62
 - システム・プロパティ
 - 管理モジュール, 45
 - システムまたはコンポーネントの開始
 - 管理ツール
 - CMC, 168
 - RSC, 151
 - サービス
 - UNIX の開始, 30
 - Windows の開始, 30
 - サブセットの開始, 31
 - 従属関係, 33
 - サーブレット, 33
 - 出力ディレクトリ
 - 削除, 54
 - 追加, 53
 - 変更, 54
 - 目的, 53
 - 使用追跡
 - 組織タブへのアクセス, 63
 - プロパティ, 63
 - 使用追跡サービス
 - 管理, 62

定義済, 17, 62
 レポート, 64
 時間に関するガイドライン, 79
 ジョブ
 ジョブ・ログ, 132
 電子メールの添付ファイル, 59
 ジョブ・サービス
 SQR Production Reporting ジョブ実行のユーザー名, 61
 アプリケーション
 構成, 157
 追加, 158
 プロパティ, 157
 アプリケーションの実行可能ファイル, 158
 エンタープライズ・アプリケーションに対するジョブの実行, 165
 定義済, 17
 プロパティ
 Production Reporting, 157
 アプリケーション, 157
 実行可能ファイル, 160
 データベース, 157
 ジョブの実行、ジョブ・プロセスの説明, 165
 ジョブ・パラメータ、パブリック、管理, 135
 ジョブ・ログ
 エントリの削除, 133
 エントリの削除マーク, 133
 開始日と開始時間, 132
 サポート, 164
 ソート, 132
 日付, 132
 ユーザー表示, 132
 列, 132
 スクリプト
 Java コード, 104
 start_BIPlus, 30
 startCommon サービス, 30
 サービスの停止, 32
 データ・モデル・トピックのソート, 91
 バッチ入力ファイル, 104
 スクリプト、高度, 95
 スクリプト環境
 EPM Workspace, 97
 Interactive Reporting Studio, 97
 スクリプト内の Java コード, 104
 スクリプトの開始, 30
 スクリプト・パラメータ、EPM Workspace, 96

スクリプト・ロギング・レベル, 80
 スケジュール、同期, 82
 スマート・カット
 システム・プロパティ, 60
 通知, 59
 電子メール通知, 44, 60
 スマート・カットのプロトコル, 60
 セッション・マネージャ・サービス, 17
 設定、優先度, 45
 接続、データベース・サーバーの定義, 163

た行

タイムアウトの設定
 EPM Workspace, 26
 タイム・イベント、管理, 133
 対話型レポート、接続, 109
 対話型レポートと Interactive Reporting データベース接続の関連付け, 111
 タスク・ステータスの表示
 UTC オフセット, 113
 対話型レポート, 111
 「タスク・ステータスの表示」対話型レポートの UTC オフセット・オプション, 113
 タスク・リストの管理、対話型レポート, 113
 元に戻す, 114
 元に戻す、アクションの表示, 114
 追跡
 イベント, 63
 ドキュメント, 64
 通知およびサブスクリプション
 その他, 58
 タイプ, 58
 添付ファイル, 59
 電子メール
 添付ファイルの使用可能, 59
 トリガーするイベント, 58
 有効期限, 60
 理解, 57
 ツールバー
 サービス・コンフィグレータ, 152
 ツールバー・ボタン
 RSC, 152
 定義済フォルダ、設定, 146
 添付ファイル
 最大サイズ, 60
 使用可能, 59
 テーブル、名前変更, 119

ディレクトリ。「出力ディレクトリ。」を参照
 デバッグ構成プロパティ, 180
 デフォルト言語の選択、変更, 141
 デフォルトの個人用ページ、変更, 146
 デフォルト・プリファレンス、ユーザーおよび
 グループの割当て, 46
 データ・アクセス・サービス・プロパティ,
 177
 データ・ソース
 名前, 61
 データ・ソース・プロパティ, 177
 データベース
 接続, 61
 タイプ, 61
 データベース・サーバー
 Production Reporting の環境変数, 163
 管理, 162
 削除, 164
 ジョブ・サービスとの関連付け, 163
 追加, 162
 データ・モデル
 作成, 119
 正規化と非正規化, 122
 データ・モデル、文字セット、置換、Unicode,
 125
 データ・モデルの更新
 更新対象のデータ・モデルの表示, 85
 スケジュール・オプション, 86
 データ・モデルとクエリーのリンク, 77
 データ・モデルの指定, 84
 変換, 77
 ワークフロー, 78
 トラブルシューティング, 193
 トラブルシューティング・コード、使用不可,
 37
 トランスフォーマ・プロパティ, 175
 ドキュメント、追跡, 64

な行

内部プロパティ, 188
 認可サービス、定義, 16
 認証サービス、定義, 16
 ネイティブ・ユーザー・パスワード・プロパ
 ティ, 187

は行

ハーベスタ・プロパティ, 175

バッチ入力ファイル
 使用, 104
 スクリプト, 104
 バッチ・ファイル、およびアプリケーション・
 コマンド文字列, 160
 パススルー
 定義済, 135
 ログイン情報, 135
 パスワード
 Interactive Reporting、変更, 126
 ジョブ・サービス、SQR Production Reporting
 ジョブ実行, 62
 ネイティブ・ユーザーのパスワード変更の使
 用可能, 187
 パブリック・ジョブ・パラメータの管理, 135
 パブリッシュャ・サービス、定義, 16
 パラメータ、ジョブ、パブリック、管理, 135
 パラメータ・ファイルの生成、変更の影響の表
 示、対話型レポート, 118
 非アクティブ化
 MIME タイプ, 56
 表示可能アイテム。「ファイル・コンテンツ・
 ウィンドウ。」を参照
 ビュー・マネージャ、プッシュ済コンテンツ,
 144
 ファイル
 電子メールの添付ファイル, 59
 フォルダへの追加, 147
 ファイル・コンテンツ・ウィンドウ, 148
 ファイル・サイズ、電子メールの添付ファ
 イル, 60
 ファイル・システム
 スクリプト内からのアクセス, 104
 ファイル・システムへのアクセス、スクリ
 プト, 104
 フォアグラウンド・ジョブ, 137
 フォルダ
 アイテムのインポート, 147
 管理者のみ System フォルダ, 143
 定義済, 146
 ブロードキャスト・メッセージ, 44
 編成, 143
 不明なファイルのタイプ, 57
 ブックマーク
 グラフィックの設定, 148
 作成した個人用ページおよび, 145
 物理リソース
 アクセス権, 53, 54

削除, 54
 追加, 53
 変更, 54
 ブラウズ・サブレット
 Web アプリケーションの配置名, 60
 個人用ページの構成, 144, 145
 ブロードキャスト・メッセージ
 カテゴリの指定, 44
 概要, 146
 作成した個人用ページおよび, 145
 サブフォルダ, 145
 デフォルトの個人用ページの変更および, 146
 フォルダの名前変更, 44
 フォルダ名の変更, 147
 プッシュ済コンテンツ, 146
 理解, 146
 ブロードキャスト・メッセージ・フォルダ名の変更, 147
 プッシュ済コンテンツ, 144, 146
 プリンタ
 削除, 54
 追加, 53
 プロパティ, 54
 変更, 54
 目的, 53
 プログラム、エンタープライズ・アプリケーションに対するジョブの実行, 165
 プロパティ
 CMC の変更, 172
 DAS プロパティ, 177
 Essbase 構成プロパティ, 181
 「Interactive Reporting Intelligence」プロパティ, 176
 IR ジョブ・サービス・プロパティ, 176
 Java プラグイン構成プロパティ, 180
 Shared Services 構成プロパティ, 183
 Web Analysis Web アプリケーション・プロパティ, 179
 Web Analysis プロパティ, 183
 Workspace Web アプリケーション・プロパティ, 186, 187
 Workspace サービス・プロパティ, 175
 アプリケーションのプロパティ, 187
 エージェント構成プロパティ, 192
 関連コンテンツ構成プロパティ, 183
 キャッシュのプロパティ, 188

結果セット構成プロパティ, 180
 個人用ページの構成, 149
 個人用ページのプロパティ, 189
 作成した個人用ページ, 145
 サービス構成プロパティ, 173
 サービス・プロパティ, 175
 ジョブ・サービス, 155
 全般サービス構成プロパティ, 173
 デバッグ構成プロパティ, 180
 データ・ソース・プロパティ, 177
 内部プロパティ, 188
 ユーザー・インタフェースのプロパティ, 190
 プロビジョニング・マネージャ Shared Services の役割, 46
 変更の影響の表示
 対話型レポート, 117
 パラメータ・ファイルの生成, 118
 ホスト
 管理, 160, 161
 削除, 161
 追加, 160
 変更, 161
 ボタン、ツールバー
 ジョブ実行ログ・エントリの表示, 132
 ポート、ブラウズ・サブレット, 60
 ポートの割当て、サービス、変更, 33

ま行

見出し(個人用ページ内), 149
 メソッドとプロパティの一覧
 env メソッド, 105
 ドキュメント, 108
 ノード・メソッド, 107
 リポジトリ・メソッド, 106
 リポジトリ・メソッド、EPM Workspace 固有, 107
 メタデータの同期, 81
 今すぐ実行, 82
 スケジュール, 82
 モジュール
 インパクト・マネージャ, 28, 79
 管理, 43
 元に戻す
 アクションの表示, 114
 タスク・リストの管理、対話型レポート, 114

や行

有効期限, 60

優先度設定、管理モジュール, 45

ユーザー

共通タスク, 40

ジョブ・ログの表示, 132

ユーザー・インタフェースのカスタマイズ,

141

ユーザー・インタフェースのプロパティ, 190

ユーザー・プリファレンス、デフォルト、割当て, 46

ユーザー名、Interactive Reporting、変更, 126

場所, 195

ファイル・フォーマット, 197

分析, 204

命名ルール, 196

ロケール・ベースの言語の選択、上書き, 141

わ行

ワークスペース・テスト・モジュール、使用不可, 37

ら行

ライフサイクル管理, 37

リポジトリ・サービス

定義済, 16

停止, 33

複製, 155

リポジトリ・サービスの複製, 155

ルート・ディレクトリ, 60

例外

構成, 148

説明済, 59

例外ダッシュボード

作成した個人用ページおよび, 145

説明済, 59

列

削除, 122

データ型の変更, 124

名前変更, 119

列のデータ型の変更, 124

ロガー, 194

ロギング

EPM Workspace, 80

Interactive Reporting Studio, 80

ロギング・サービス

構成, 198

使用, 194

定義済, 17

ロギング・レベル, 199

ログオン・パネル、イメージの置換え, 142

ログ管理ヘルパー, 194

ログ・ファイル

構成, 198

構成ログ, 198

通知ログ, 60

A-Z あ行 か行 さ行 た行 な行 は行 ま行 や行 ら行 わ行